

# 紀 要 第 37 号

- (論文)
- 東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物 (3) 1~26  
金子 昭彦
- 岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究 (2) 27~56  
- 東北地方北部の赤彩土器を探る - 米田 寛・高橋 静歩・河本 純一
- 江戸の南部屋敷 (1) 57~88  
- 盛岡藩南部家江戸上屋敷の研究 - 中村 隼人・滝尻 侑貴・野田 尚志
- (研究ノート)
- 荒川台型細石刃剥離技術の検討 89~98  
村木 敬
- 県内出土の縄文土器胎土について (4) 99~108  
河本 純一
- 岩手県沿岸北部における遺跡の層序学的検討 109~124  
趙 哲済・佐瀬 隆・濱田 宏・長橋 良隆
- 竪穴建物に伴う外延溝 (2) 125~140  
- 古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡域の在り方 - 山川 純一
- (書評)
- 畠山 剛著『炭焼きの二十世紀 - 書置きとしての歴史から未来へ -』(彩流社 2003年) 141~146  
阿部 勝則

平成30年3月

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

## 序

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また、これら資料の活用を図るため普及啓蒙事業や考古学関連分野の調査研究にも努めております。昭和56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行してまいりましたが、このたび第37号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等8編を取録いたしました。これらは、職員が野外の発掘調査や室内整理、報告書作成などの諸業務の合間に、個々の研究成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や社会教育の資料として広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野洋樹

## 例 言

- 1 この紀要は、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。
- 2 本紀要には、論文3編、研究ノート4編、書評1編を収録している。
- 3 引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。
- 4 本年度の編集委員の構成は、次のとおりである。

編集委員 文化財専門員 菊池 貴 広

編集委員 文化財専門員 米 田 寛

## 東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（3）

金子 昭彦

東北地方・縄文時代晩期における土偶関連遺物のデータ・ベース化の続きである。今回は、関連遺物を多出する遺跡を取り上げたが、混同する恐れのある、後期初頭～後葉にも多出する遺跡は次回に回した。前回、晩期初頭、晩期前葉、晩期中～後葉、弥生時代前期末を画期として、僅少多様→岩版主体→土版主体→動物形突起のように関連遺物の時期組成が変化するとしたが、晩期中～後葉では、岩版を主体とし続ける遺跡もあることがわかった。また、晩期中葉の岩手県では、正中線中空土版と美々4型中空動物形土製品が多めに出土するらしい。全掘された青森県川原平(1)遺跡（第6表644～822）、土面が多出した青森県二枚橋(2)遺跡（第6表845～883）が目される。

### 1. はじめに

本稿は、土偶関連遺物として、“顔・人体らしきものを持つ遺物”、具体的には、土面、人体・人面付土器、岩偶、岩版・線刻礫、土版、正中線中空土版、美々4型中空動物形土製品、動物形土製品、動物形突起を悉皆的に収集することを目的とし、（1）は、『岩手県立博物館研究報告』第33号（2016年）に掲載したが、（2）以降は本誌に掲載していただいている。予算削減により印刷できなくなったためである。

前回まで、短期で時期の特定しやすい遺跡を扱ってきたが、あまりに資料が少なく、時期組成について十分な見通しを得ることができなかったため、今回は、「関連遺物」多数出土遺跡を取り扱うことにする。関連遺物の出土数も概ね出土土器の量に比例する場合が多いので、ある程度時期の判断はつき時期組成の傾向を探ることはできるのではないかと考えたからである。ただし、本稿の収集対象である縄文時代後期末～弥生時代から離れた時期の資料を収集しても意味がないので、この時期以外の土器多出時期を含む遺跡は、割愛したい。今回の検討で、時期についてさらに見通しを付けることができると思われるので、これらについては次回収集したいと考える。

しかし、実際のところ、本稿で扱う「関連遺物」に限れば、縄文時代中期以前のものとは容易に区別できる場合がほとんどで、混同する恐れがあるのは、後期初頭～後葉のものにほぼ限られる。そこで、次回に回すのは、後期初頭～後葉にも多出している遺跡のみにした。

これまで明示していなかったが、線刻礫の取り扱いについて付言しておく。第2表298（前々回）のような人体が線刻されたものを典型例として、岩版に含めて良いか迷うもので取りこぼしをなくそうとして拾遺したものが線刻礫である、実は装身具にも似たものがあり、これらについてはできる限り排除したが（大きさ、貫通孔の有無など）、破片だと判断が難しいものがあり、取り扱いが一貫していない場合があることをお断りしておく。

また、正中線中空土版については、その後若干検討したので（金子 2017c）、その成果も織り込んだ。

### 2. 表の見方（補足）

収集要領、記載要綱は、(1)、(2)と同じである。前稿で扱わなかった点を中心に補足しておく。

“★”は、特筆すべきものを示す。

番号（No.）は、第1表からの通し番号である。表内の遺跡は、概ね北～南に並べている。

時期の欄。アルファベットは、土器型式名の略記である。晩期は、“初”、“前葉”等で示し、他

の時期は、“後末”（後期末の意）、“弥中”（弥生時代中期の意）のように二文字の組み合わせで示している。“～〇〇”は“〇〇までの時期”、“〇〇～”は“〇〇以降の時期”である。

残存率は、分数で示していても大雑把で、参考程度にお考えいただきたい。概ね1/10以下を小片、それより小さなものを細片としている。完形時の状態（大きさ）を推測できないものは、“欠損”か“破片”で示している。

接合の欄。同一個体片が出土している場合は、“同”と記すことにした。この場合の残存率は、全て足したものとなる。接合欄の記号。△は、詳細は不明だが、接合していると思われるもの。○は、すぐそばの破片が接合したのではなく、廃棄後に割れたとは考えられないもの。◎は、それが3片以上接合したもの。●は、接合によって完形に近く復元されたもの。★は、遠距離（20m以上）接合。■は、以上が複合した特筆すべき接合で、詳細は備考欄に記した。

付着物の欄。表面に塗布する赤色付着物は、痕跡的なもの（不明含む）を○、多いものを◎、全面塗布のものを●とし、漆とされているものなど特別な場合は★で記した。黒色付着物は、塗布箇所が割口か否かに注意した。

出土位置。原則として遺構出土の場合のみ記し、捨場や遺物包含層は基本的に割愛したが、大芦I遺跡のように、層位的に取り上げられていて時期を推定できるものは記入した。遺構出土でも、混入の可能性が高いと判断されたものは割愛したことがある。竪穴住居跡の床の場合は、“住床”、覆土は“住覆”、不明の場合はただ“住居”、石囲炉は“石炉”などと略した。

遺跡の立地は、河岸段丘を“段”と略し、高位、中位、低位を、それぞれ“高”、“中”、“低”と略し、“高段”などと称す。海岸段丘は“海段”とした。扇状地は“扇状”、自然堤防は“堤防”である。

遺跡の評価・分類は、拠点、小規模（“小規”と略）、遺物散布地（“散布”）の三つに分けたが、多量の遺物が出土するが時期が限られる場合は、半拠点（“半拠”）とした。“拠？”は、“拠点？”、“小？”は“小規模？”の略である。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年（西暦）で示しているが、発行年は下二桁のみを記し、発行機関は、次のように略称している。〇〇県の教育委員会→県教、〇〇県の埋蔵文化財センター→県埋、〇〇県立博物館（青森県立郷土館含む）→県博、〇〇市町村の教育委員会→〇〇（市町村名）、二文字以上の市町村教育委員会、それ以外の機関→機関名の最初の二文字（財団法人等は除いて）。例えば、浄法寺町→浄法である。ただし、八戸遺跡調査会は八調と略した。

図番号は、通しで示されている場合には、「○図△」の「○図」は原則として省略し、そうでなくても枠をはみ出す場合は略記した。備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿(1)～の表番号である。

### 3. 「関連遺物」多出遺跡(1)―後期初頭～後葉に多ししない遺跡―

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡（第6表644～647）（青森県教育委員会 2006）

津軽ダム建設に伴って調査され、明記されているわけではないが、範囲内容確認（トレンチ）調査に相当するようである。掲載土器は、後期後葉（瘤付土器第Ⅱ段階）～晩期後葉だが、大洞A1式は1点で、大洞C2式はないようである。7点出土した土偶は、後期後葉～晩期初頭が主体を占めるが、晩期中葉の小型遮光器？土偶、後葉の大型中空土偶も出土している。岩版5点？（無文4）（報告書：p.37）、土版1点、石剣類14点、円盤状石製品16点、土背耳飾は12点出土しているようで（報告書：p.34）、掲載品は、後期後葉～晩期初頭、その中でも無文環状耳飾がほとんどであるが、大洞C1～A1式期と推測される蓋状系列が1点出土している（報告書：図19の4）（金子 2009a）。後

期後葉の可能性が高い花卉丸玉（金子 2011b）が1点掲載されている（報告書：図19の12）。その他にも、装身具類が掲載されているが、土製品は、文様装飾から後期後葉～末が主体であると推測される。その他、スプーン状土製品が1点あり、円盤状石製品は16点出土したそうである（報告書：p.37）。

「獣面付土器」とされている土器片（報告書：図10-2）については、類例がなく、その構成要素は土器の装飾要素の域を出ておらず抽象的なため、一つの解釈を超える物ではないと判断して本稿では割愛した。また、報告書本文では触れていないが、人面突起らしいものが掲載されている（報告書：図10-4）。顔の表現が古的様相を呈しており、土器も後期後葉を下るものではないと判断して同じく割愛した。

#### ・青森県西目屋村川原平(1)遺跡

津軽ダム建設によって水没するため、上記結果に基づき遺跡範囲全体を本調査したものである。大分になるため以下のように地点別に報告された。残念なのは、遺物の種類ごとの出土点数が基本的に書かれていないことである。総括編（青森県教育委員会 2017e）に書かれていないのではないかと期待したが、円盤状石製品のみであった。読者が掲載点数を数えようにも、報告書では、出土遺物を、さらに地点別・層別に細かく分けて報告している場合も多くて捜しづらく、全体像が極めて掴みにくい。過酷な整理作業の経緯を知らないわけではないが、出土点数は最も重要な情報ではないだろうか。また、口に出しにくいのが、関連遺物に関しては、今後使いにくい実測図の多いことも残念である。

#### ・青森県西目屋村川原平(1)遺跡（第6表648～667）（青森県教育委員会 2016a）

遺跡南端に相当するC区の平成23、25年度（一部）調査区の報告で、捨て場を主体とするが、土器埋設遺構や石棺墓なども検出された。僅かに、縄文時代前期末、中期後葉、後期前葉（十腰内Ⅰ式）、後葉（十腰内Ⅳ式）、弥生土器？、土師器も出土しているが、ほとんどが縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晚期後葉（大洞A1式）の土器である。後期末～大洞B1式が多数を占め、次いで大洞C1式で、それ以外の時期は少なく、特に大洞BC2式がほとんどないことは特筆すべきである。こうした消長は、一般的な晩期の拠点集落と逆で（金子 2017b：p.330）、山間にあるという立地の特殊性に起因するものであろうか。

土偶は39点掲載され、時期は出土土器の傾向にはほぼ合致する。人面付土器が多く、6点以上出土している（本稿第1図7）。なお、表の人面付土器の残存率は、土器全体のものである。岩版約6点（以上）、石剣類約43点、円盤状石製品64点掲載されている。出土時期の傾向から、やはり土製耳飾の出土は多く、34点掲載され、無文環状のものが多く、報告書遺物図191-10は、ネジ前系列である（金子 2010c：p.135、2009a）。報告書遺物図204-5は、石製耳飾（耳栓）であろう。土製花卉丸玉は5点掲載され、やはりⅡa～b段階がほとんどだが（瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階）、遺物図195-9は第Ⅲ段階（大洞B2～C1式期）の可能性はある（金子 2011b）。第三段階（大洞C1式期）の弧状土製品（金子 2009b）1点、イモガイ殻頂部様の装身具1点掲載され、その他、赤色小型土製玉が8点（勾玉2、丸玉6）、小型石製丸玉類7点（ヒスイ2点）、その他の石製装身具類数点、木製櫛3点などが掲載され、コハクの出土が報告されている。

遺物図117-7は、人面付深鉢かとされているが（報告書第1分冊：p.182）、遺跡内で他に例のない深鉢であり、目の表現が省略されているのも異質で、単なる隆帯の貼付とみなすこともできるので今回は割愛した。遺物図33-2、61-5は、獣面突起とされており（報告書第1分冊：p.182）、確かに顔表現が頻出する場所ではあるが、この二例は、顔には見えにくく単なる突起と見做すことも十分可能なので今回は割愛することにした。遺物図195-9には、パンツ状区画らしきものが見え、非馬淵川型の

岩偶かと思われるが、報告書ではそうした取り扱いはされておらず (p.161)、写真も掲載されていないので、割愛した。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡 (第6表668～670) (青森県教育委員会 2016b)

平成25年度調査区 (遺跡のある台地の北西隅) の報告で、縄文時代中期後半の集落跡のほか、当該期では、後期末～晩期前半の墓域、晩期後半の盛土遺構が検出されている。これまでと同様、縄文時代後期末 (瘤付土器第Ⅲ段階) ～晩期後葉 (大洞A1式) の土器が掲載されているが、大洞A1式が最も多く、後期末～晩期初頭、大洞C1式は少なく、大洞BC2式、C2式は比較的多いといえようか。聖山式が出土している。出土量が比較的少ないせい、土・石製品の出土も少ない。

6点出土した土偶は、3点以上が大洞A1式期であり、報告書図183-1は、「刺突文土偶」とされているが結髪土偶である。大洞BC2式期の大型遮光器土偶の破片が点在して出土している。岩版1点 (大洞A1式期)、正中線中空土版1点 (瘤付土器第Ⅳ段階)、石剣類10点、円盤状石製品53点が出土した。土製花卉丸玉1点は、第Ⅲ段階か (金子 2011b)。石製玉は、配石土坑墓を中心に37点、土製丸玉が1点出土している。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡 (第6表671～685) (青森県教育委員会 2017a)

平成25～27年度調査区のうち遺跡の中央に相当する平場地区・クラック地区の報告である (4,258㎡)。平場地区では、後期末～晩期後葉の建物跡や盛土遺構が検出された。クラック地区は、平場地区の北側に隣接し、溝状の落ち込み部分に後期後葉～晩期前葉の捨て場が形成されている。一連の報告は、出土地点・層位別に遺物を掲載し、原典である報告書としては一つの見識だとは思いますが、読みづらく探しづらいことは否めない。特に本書の場合は、遺物の種類ごとのまとめがないため、例えば円盤状石製品が何点出土したかわからないのである (表から数え上げるしかない)。異種類の遺物のセット関係が見通せていない現状では、たとえ良好な層位的出土資料であっても、まず遺物の種類ごと (土器、土製品など) に分けてから地点・層位別に並べた方が利用しやすいと考える。

掲載土器は、これまで同様後期末～晩期後葉だが、後期後葉まで遡りそうな瘤が多く貼付される土器が見える (報告書: 図211の写真図版147-13)。ただし、報告書の図や写真では文様が良く見えず、中門亮太氏の編年では、5期相当資料に瘤が比較的多用される資料も含まれており、若干の懸念も残る (中門 2013: 第15図1)。平場地区は、小片が主体のため不明瞭だが、大洞A1式がほとんどで、後期末～晩期初頭も非常に少ない。これに対し、クラック地区は、後期末～晩期初頭がほとんどを占め、大洞B2式も見られるが、それ以外は非常に少なく、中期後半土器も僅かに出土している。

土偶は、8点掲載され、出土土器と同じく、後期末と晩期後葉が主体を占める。報告書図157-2は、天地逆に掲載されているが、結髪土偶の胴部であろう。人面付土器は約5点、岩版は7点以上で晩期後葉が主体を占める。以下、数え間違いがあると思われるので不正確だが、石剣類約15点、円盤状石製品約174点、独銚石3点 (「青竜刀形石器」とされる写真105-7含む)、図147-1は、石冠であろうか。これを含めて石冠は2点か (図146-3)。クラック地点では、時期によるものか、土製耳飾が9点出土し、石製丸玉も2点掲載されている。

写134-10の人面付土器は、遠距離接合の例で、既に報告されているので (第6表649) 割愛した。写98-35 (図155-4) は、岩版とされるが (報告書: p.142)、不整形でそれらしくないので割愛した。写94-16は図がないので割愛した。図142-3は、亀形土製品あるいは中空土製品とされているが、理解できないので割愛した。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡 (第6表686～726) (青森県教育委員会 2017b)

遺跡の東端に存在する、東捨て場、北東捨て場地区の報告である。掲載土器は比較的少ないが、こ

れまでと同様、縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A1式）の土器が見られ、大洞C1式、次いで後期末～晩期初頭が比較的多い。本報告書も出土点数が記されておらず、また写真掲載が基本のため、以下数え間違いが多いと思われる。41点？掲載された土偶は、土器の傾向をある程度は反映しているが、大洞C2式期が意外に多いようである。人面付土器2点以上、岩版20点以上（礫石器と区別しがたいものがある）、石剣類27点、円盤状石製品多数（数百点）掲載されている。その他、約7点掲載された土製耳飾は、後期末～晩期初頭が主体だが、晩期中～後葉の蓋状系列（金子 2009a）も出土している（報告書：図98-15）。その他、「ケムシ形土製品」とされた第三段階？の弧状土製品（金子 2009b）の欠損品が1点（報告書：図97-13）、第Ⅲ段階（大洞B2～C1式期）の土製花卉丸玉1点（報告書：図97-8）、土製勾玉？1点、石製勾玉2点、第Ⅲa段階（大洞C1式期）？のボタン状石製品1点（報告書：図49-12）などが掲載され、漆塗櫛などが出土している。

報告書図28の写36-3の突起は、片面人面、片面獣面とあるが、理解できないので割愛した。写129-8の動物突起は、図がなく詳細不明で、また晩期ではないので割愛することにした。図34-39は土版とされているが、理解できないので割愛した。写62-2の岩版は、図がないので省略した。写62-4の岩版も、同様で割愛したが、比較的残りの良い正中線を持つ3類のようである（赤色付着物）。報告書で「線刻礫」とされたものの多くは、線刻というより擦痕であり砥石などと考えられ、割愛した。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡（第6表727～740）（青森県教育委員会 2017c）

遺跡北端にある北捨場地区の報告である。掲載土器は、これまでとほぼ同じで、僅かな中期後葉があり、大洞BC2式が少なく、大洞C2式も少ないが、それ以外の後期末～晩期後葉は、ほぼ同じくらい出土している印象を受ける（報告書：p.34）。今回は、明確に後期後葉土器が出土している（報告書：写真108-12）。「土偶は36点が出土した」とあるが（報告書：p.51）、それ以上掲載され、掲載土器の傾向を概ね反映している。岩版は4点以上出土し、石剣類は約38点、石冠1点、土冠1点（施文されているが、不鮮明で時期不明）掲載されている。11点出土した土製耳飾は、やはり後期末～晩期前葉が主体だが、それ以降のものも出土している（報告書：図27-45、47、50）（金子 2009a）。報告書図27-58の土製装身具は、おそらく猪牙製の組み合わせ型腕輪（金子 2016b：第3図10、11）を模倣したものと推測され、興味深い。その他、スプーン状土製品1点、円盤状石製品600点以上出土しているようである。なお、完形および接合により完形に復された石剣類について紹介されている（報告書：p.116）。

写真図版178-4の岩版（2類小片）、写真図版178-5の岩版？（線刻のみ）は、図がないので割愛した。図27-55・56は「動物形土製品」、62・63は「土版」とされているが、理解できないので割愛した。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡（第6表741～818）（青森県教育委員会 2017d）

遺跡の西端に位置する西捨場の報告である。段丘崖に位置し、下部は湧水を伴い、有機質遺物も多量に出土している。掲載土器は、これまでと同様、僅かな中期（報告書：p.237）、後期後葉のほかは、後期末～晩期後葉だが、大洞B2～C1式が多く、大洞A1式は少ない。

157点出土した土偶（「亀形土偶」除く）は、土器の出土傾向を反映し、遮光器土偶が多い。土面1点（本稿第1図1）、人面付土器1点（第1図8）、正中線中空土版1点？、美々4型中空動物形土製品1点？ 33点以上掲載された岩版は、土器の出土傾向と異なり5類も比較的多い。石剣類約35点、石冠2点？、独鈷石2点？掲載され、円盤状石製品は約4,000点出土しているようである（報告書：p.151）。

土製耳飾りは、約30点出土し、後期末～晩期後葉まで満遍なくある。花卉丸玉は、7点掲載され（報告書：図93-196、199、201、204～207）、第Ⅱ～Ⅲ段階に相当し（金子 2011b）、土器の出土



傾向に合致する。弧型（大洞C1～C2式古期）の三角玉（金子 2011a）1点も掲載されている（報告書：図94-221）。陰刻2b類（大洞C1式新期）の鐔形土製品（金子 2011a）が1点掲載され、鐔形製品は、漆製品（報告書：写279-5）、鹿角製品（図186-11、12）も出土している。土製品の編年が当てはまるか不明だが、漆製品は張り出し形突起類（大洞BC1式期）、鹿角製品は、張り出し形突起類（大洞BC1式期）と中間類（大洞BC2式古期）の可能性がある。長菱形（大洞B2～C1式期）の菱形環状石製品1点（報告書：図145-18）、Ⅱa段階（大洞BC1式期）とⅢa段階（大洞C1式期）のボタン状石製品が掲載されている（報告書：図146-11、15）。石製玉は多く、30点以上掲載され、孔の開けられた装身具と推測される石製品も多い。その他、漆耳飾2点、漆櫛38点、漆腕輪38点出土し、骨角牙製の装身具も数点掲載されている。

図132-4の岩版？、図135-2は、図ではよくわからず、写真もないようなので割愛した。図135-4～6、図136-9、図137-1、図142-6は、磨石等の礫石器との違いが不明瞭なので、図136-11は垂飾品の未成品と考えて、割愛した。図138-11も同様で、厚さも不均質で磨石等の礫石器との違いが不明瞭なので割愛した。図138-2は、写真も観察表もなく、不整形で岩版らしくないので割愛した。図138-6は、激しい擦痕が認められるが、不整形で部厚いので割愛した。図139-4は、擦痕のみの破片のため割愛した。図138-9、図140-7、8、11～13は、“岩版？”としたものほとんど違いはないが、岩版にしては小さく（概ね5cm以下）、装身具の未成品の可能性も高いので割愛した。図141以降の該当例についても同様である。図143-4は、5cm以上あるが、円形で厚く岩版とするのには違和感があるので割愛した。「写真257の人の身体、横顔、足、二枚貝などを模したもの」（報告書：p.151）は、写真を見る限り、「そのようにも見える」域を超えないので割愛した。図94-223、224は、「土版」とされているが理解できないので割愛した。図95-230～234は、「亀形土偶」（土製品）とされているが、細片のため、図と写真ではよくわからず割愛した。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡（第6表669）（青森県教育委員会 2017e）

自然科学分析、補遺、総括編である。第1号盛土遺構の遺漏資料である土版1点が掲載され、表では本来の部分に挿入した。なお、Pit144出土のC2ネジ形土製耳飾も掲載されている。

総括編だが、出土点数が総括されたのは、円盤状石製品のみ（約6,800点）で、残念である。なお、掲載された遠距離接合例の一覧表と分布図は、非常に有意義である。

・青森県西目屋村川原平(4)遺跡（第6表819～822）（青森県教育委員会 2016）

川原平(1)遺跡の東側に隣接するB地区の報告で、便宜的に別の遺跡とされているが（間に沢があるため？）、報告者も述べており（p.195）、川原平(1)遺跡の続きであることは明白なので、遺跡としての関連遺物の出土数は少ないが、本稿で扱った。縄文時代中期の集落跡も検出されている。

掲載土器は、後期末は川原平（1）遺跡とあまり変わらないが、大洞B1～C2式が少なく、大洞A1式が多く、川原平（1）遺跡に見られなかった、大洞A2式～A'新式がある。土偶3点、岩版2点以上、石剣類16点、独鈷石3点、円盤状石製品266点出土している。167出土した石製玉のうち、155点が土坑から出土しており、そのうち29点がヒスイ製である。

・青森県弘前市薬師遺跡（第6表823～836）（青森県教育委員会 2014）

農道整備に伴って1,900m<sup>2</sup>調査された。縄文時代前期末の集落跡、晩期～弥生時代中期前葉の集落跡が主として検出され、後者には、晩期の土壙墓群、遺物包含層（3層＝大洞B2～C1式主）、晩期後葉～弥生時代の捨て場、削平盛り土、弥生中期前葉を主体とする包含層などがある。捨て場、削平盛り土では、大洞A1式がほとんどを占める。掲載土器は、大洞A1式が非常に多く、次いで弥生時代中期前葉、大洞C1式、晩期前葉で、大洞C2式、晩期末～弥生時代前期は少なく、晩期初頭は見

えない。縄文時代後期前、中、後葉土器片も出土している。報告書の掲載が、出土位置（層）ごとに行われ、種類ごとにまとめられていないため、出土点数が不明で、以下数え間違いがある可能性があるが、その傾向は大きく動かないと思われる。土偶84点（大洞A1式主）（金子 2015）、岩版6点？、土版6点、石剣類27点、独鈷石1点、石冠2？点、「土面」と報告されているもの2点のほか、装身具には、土製耳栓16点（C2ネジ形主だが、その前のものも）（金子 2009a、2010c）、ボタン状石製品1点など、石製丸玉93点（未成品含まず。緑色凝灰岩主）、勾玉1点、瓢箪小玉（金子 2006）1点で、石製管玉5点、土製花卉平玉（金子 2011b）3点は、弥生時代の可能性が高い。ボタン状石製品は、文章中に「○点図示した」という記載が頻繁に見られるので、数えた62点以上出土している可能性が高い。その他スプーン状土製品が1点掲載されている。なお、報告書の図151-24は、晩期の三角玉ではなく、後期前葉のV字形土製品と判断した（金子 2011a）。

津軽地方によく見られるように、本遺跡も晩期（大洞A1式期？）の攻玉（緑色凝灰岩製丸玉）遺跡である。そのため、玉及び未成品は多く出土しているが、その他の土・石製品は、土偶を除けば、土器の量に比して少ない。

・青森県弘前市野脇遺跡（第6表837～844）（青森県教育委員会 1993）

河川改修に伴って3,533㎡調査された。縄文土器は大量に出土しているが、中近世に大きく改変されている。出土土器は、僅かな縄文時代後期、弥生時代中期、平安時代を除けば、ほとんどが晩期である。縄文時代後期後葉も僅かに出土しているが、後期末～晩期末で、大洞BC2式が最も多く、次いで大洞A1式（津軽系）である。

14点出土した土偶は、小片ばかりだが多時期にわたる。岩版6点、土版1点は、晩期前葉に偏る。石剣類は、細片が多く個体数は明確でないようだが（報告書：p.158）、24点掲載されている。円盤状石製品は23点出土した。1点出土した土製耳飾は、C2ネジ形の角型で大洞A1式期と思われる。1点出土したボタン状石製品は、第Ⅱa～b段階で大洞BC1～2式期である（金子 2010a）。石製玉は未成品を含み14点出土し、ヒスイは3点で、土玉は1点、その他装身具と推測されるT字形の土製品が1点ある。

報告書第126図7は、図では美々4型中空動物形土製品に似ているが、石製品であり割愛した。

・青森県旧大畑町二枚橋(2)遺跡（第6表845～883）（大畑町教育委員会 2001）

町の運動公園に係る事前調査で（6,449㎡）、縄文時代中期中葉、晩期中～後葉の集落跡が主として検出された。掲載土器は、他に後期前葉、僅かに早期中葉、前期、中期前葉があるが、大部分は、大洞C2～A1式で、大洞A1式が特に多い。ところが、土偶（金子 2015：pp.8～10）や土版（本稿：第6表880）には、大洞A1式古期以降と推測されるものが認められ、大洞A1式以降の土器も存在する可能性が高い。

土偶は約156点（金子 2015：pp.8～10）、土面約20点、岩版6点以上、土版約7点、「亀形土製品」1点、石剣類約100点、石冠約2点、土冠4点、独鈷石約2点、スプーン状土製品数点、円盤状石製品数点掲載されている。装身具では、土製耳飾約8点（ほとんどC2ネジ形）（金子 2009a）、土製花卉丸玉（金子 2011b）約3点、石製、土製丸玉約40点掲載されている。

なお、表の記載で、土面については、藤沼ほか（2002）を参考にした。

・青森県八戸市八幡遺跡（第6表884～911）（八戸市教育委員会 1988）

橋架け替えに伴う道路工事で2,000㎡調査され、縄文時代晩期を中心とした集落跡、古代の集落跡、中世城館に伴う施設が検出された。後世の改変（宅地等）により縄文集落の残りは良くない。出土した縄文・弥生土器は、僅かな早、前期、弥生時代後期のほかは、後期後葉（瘤付土器第Ⅰ段階）

～弥生時代前期末（大洞A<sup>1</sup>式新期？）だが、大洞A2式は見当たらないようである。また、そのほとんどは捨て場から出土した大洞B2～BC2式土器である。僅かだが後期後葉土器も見られ、スタンブ状土製品も出土しているが、その比率は僅かなため本稿で扱った。

18点出土した土偶は、やはり晩期前葉が多いが、大洞C2式期以降も意外に多い。岩偶2点？（本稿第1図10）、岩版12点以上、土版1点、石剣類27点、円盤状石製品3点、内面渦状土製品1点、スプーン状土製品1点出土している。岩版は、出土土器の割に、明らかに晩期前葉の1～2類に該当するものは少ない。9点出土した土製耳飾には、晩期と特定できるものはほとんどない。その他の装身具として、土玉7点（勾玉5）、石製玉2点（勾玉、丸玉）、晩期前葉の菱形環状石製品（金子2010b）2点（報告書：第77図1、2）などが出土している。

八幡遺跡は何度も調査されているが（八戸市教育委員会 2017ほか）、晩期土器が出土しても主体は古代集落の場合がほとんどで、本稿で対象とする関連遺物が出土したのは、上記報告のみのようである。平成2年度の調査では、弥生時代前期末の竪穴住居跡が検出され、土偶や石剣類も出土し、平成23年度の調査でも土偶は出土しているが（青森県教育委員会 2013）、関連遺物はない（八戸市教育委員会 1992）。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表912～913）（八戸市教育委員会 1983）

道路改良工事612m<sup>2</sup>の調査である。「出土土器は、縄文時代早期中葉～晩期まで出土したが、本報告書では後期末葉と晩期の土器を中心に掲載」「整理用平箱で30箱分出土」（報告書：p.5）、「後期末葉の十腰内V群と晩期中葉の大洞C1～C2式に相当する土器が最も多く出土した」（同：p.28）。「自然の谷（沢）に立地するため、遺物は流れ込みによる影響が大きいものとみられ」（同）。

出土土偶は2点とされるが、1点は後期後葉、もう1点（報告書：第9図32）は深鉢形土器の口縁部突起と考える（天地逆）。石剣類10点、その他、円盤状石製品27点、石製（ヒスイ）勾玉1点などが出土している。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表914～921）（八戸市教育委員会 1999）

八戸市縄文学習館建設に伴い約700m<sup>2</sup>調査し、土坑墓群が検出された部分は設計変更により保存した。縄文時代後期後葉～晩期後葉の集落跡が検出されている。併せて、「特殊泥炭層」の確認及び遺存状況把握のため、トレンチ調査をし、木組み遺構などが検出された。第6表919～921はトレンチ調査によるものである。

発掘調査区・保存地区では、掲載土器は、後期後葉～晩期後葉を主体としながらも（後期が特に多く、次いで晩期後葉である）、早、前期、中期、後期初頭土器片も比較的多く出土している。また、草創期土器片も出土したとされる（報告書：図33-1）。土偶6点、岩版？5点、土版1点、石剣類11点、その他、円盤状石製品2点、石製玉2点などが出土している。円盤状石製品には不掲載品があるようである（報告書：p.42）。また、詳細は不明だが、近世陶磁器、古銭も出土したそうである（報告書：p.42）。

確認（トレンチ）調査区では、掲載土器は、後期後葉～晩期後葉を主体としながらも（晩期前葉が多い）、前期、中期、後期初頭、晩期末？土器片も出土している。土偶10点、岩版？3点、石剣類（未成品）1点、その他、円盤状石製品30点、菱形環状石製品（未成品）（金子2010b）1点など装身具数点が出土している。なお、報告書で「土版」とされた図44の307は、細長いことと文様から土偶胴部と判断した。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表922～929）（八戸市教育委員会 2002）

遺跡整備に係る調査であり、特殊泥炭層に隣接した地点で（C、D区）、410㎡を調査し、捨て場が検出された。沢に形成されているため、木製品や「堅果層」等植物質遺物が多く出土している。掲載土器は、縄文時代後期末～晩期前葉が主で、僅かながら後期後葉、晩期中葉土器も見られる。

土偶3点、岩版8点、石剣類5点、その他、円盤状石製品60点、菱形環状石製品（金子 2010b：I b～d類？）1点ほかの石製・土製装身具類数点、木製腕輪4点、木製櫛2点、木製耳飾り1点も出土している。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表930～933）（八戸市教育委員会 2004）

遺跡整備に係る調査である。特殊泥炭層の範囲・内容確認のためC区隣接地を調査し（F区140㎡）、さらに捨て場が形成されている沢の立ち上がりを確認するためF区北西側を調査（I区150㎡）、遺跡の西側の範囲内容を確認するため試掘トレンチを3本入れている（J地点40㎡）。関連遺物が出土したのはF区のみで、以下F区について記載する。

F区掲載土器は、大洞B1～A1式だが、大洞B1、C1式は非常に少なく、大洞B2式が多い印象を受ける。土偶3点（大型遮光器）、岩版4点、石剣類9点、円盤状石製品41点、装身具として、石製勾玉（ヒスイ）1点、「棒状土製品」（文様は弧状土製品に似る）（金子 2009b）1点、その他土鈴1点、赤漆塗弓、籃胎漆器などが出土している。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表934～936）（八戸市教育委員会 2006）

遺跡整備に係る調査である。台地部分（A・B・J・K・N・P区）と、南側の低湿地部分（O・Q区）の遺跡範囲・内容確認調査だが、関連遺物は、J区とN区のみから出土している。

J区（調査面積145㎡）では、近世以降の整地が認められ、掲載遺物も全てカクラン出土である。土器は、前期、中期のほか、晩期は、大洞B1～A1式が掲載されている。晩期中～後葉の土偶2点出土している。

N区（調査面積286㎡）は、近現代の整地により改変を受けている。掲載土器は、前、中期土器片以外は、大洞C1式～大洞A'式新期である。土版2点のほか、円盤状石製品が1点出土している。なお、土版の番号が、図と表で反対になっているが、図を優先した。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表937～946）（八戸遺跡調査会 2002）

遺跡整備に係る調査で、遺跡の北端に相当する沢部分（長沢地区）の範囲・内容確認のため、三箇所トレンチを入れ、西端（斜面下方）の1区（288㎡）から関連遺物が出土した。

1区は低湿地で、鋼矢板で囲んで調査が行われ、堅果類、獣骨、木製品（耳栓等）、編布も出土した。掲載土器は、弥生土器もあるが、晩期の土器がほとんどで、大洞B2～A1式が見られ、大洞C2式が多く、大洞C1式は少ない。土偶18点、岩版12点、土版1点、石剣類30点、円盤状石製品87点、内面渦状土製品1点、その他装身具類として、石製玉8点（勾玉1、ヒスイ5）、土玉3点、ボタン状土製品1点、弧状土製品1点などが出土している。報告書第69図101は、「線刻礫」として扱われているが、その形状、大きさ、薄さ、文様装飾から装身具と見做した方が良いと考え割愛した。なお、縄文時代中期の土器は掲載されていないが、斧状土製品が1点出土している（報告書第54図15）。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第6表947～949）（八戸遺跡調査会 2004）

遺跡整備に係る調査で、遺跡の中央に相当する台地平坦部の範囲・内容確認のため、三箇所の調査区を設定し（G・L・M区）、そのうちのG、L区から関連遺物が出土している。

G区（2,002㎡）では、弥生時代前～中期の集落跡が主として検出、縄文時代中期の土坑、古代集落跡も検出されたが、近世近代に改変を受けている。検出が主で、遺構の調査は最小限に留めている。異形石器は、今回基本的に収集してこなかったが、平面形が非常に整えられて「石偶」として良

い仕上がりだったため含めた（本稿第1図11）。遺構外で掲載されている土器は、大洞A'式以降で、異形石器1点の他に、土偶4点（報告書第21図13は土偶でない判断）、石剣類4点、独鈷石1点、装身具類では、ボタン状に似た石製品1点、石製玉6点（管玉1、琥珀玉1）出土している。

L区（630㎡）では、縄文時代後期後葉の集落跡、後期末～晩期の土壌墓群が検出されている。動物付土器と土版は、遺構外から出土し、遺構外掲載土器は、少ないが、早期、前期、中期、後期初頭、弥生時代中期のほかに、瘤付土器第Ⅳ段階～大洞BC2式、大洞C2式、大洞A'式新期が見られ、土偶6点、土版1点、石剣類2点、土製耳飾1点出土している。報告書第47図10、11は、「動物形土製品」とされているが、詳細な記載がなく、よくわからない。10は、イノシシの鼻に非常によく似ているので、動物付土器としたが、11は割愛した。

・岩手県旧浄法寺町上杉沢遺跡（第6表950～956）（浄法寺町教育委員会 2001）

掲載土器は、縄文時代中期や後期末も見られるが、晩期前葉（大洞BC2式）～弥生時代前期末（青木畑式）がほとんどである。出土遺物の記載が表のみで文章記載がなく、いきなり「出土遺物に関する考察」に飛んでいるため、不明な点がある。考察編から判断すると（報告書：p.169）、全点掲載されているわけではないようで、それによれば、調査では、土偶42点、岩偶11点、岩版7点、土版8点、動物形土製品3点、石剣類16点以下、石冠1点が出土しており、その他に、円盤状石製品11点、菱形環状石製品（金子 2010b）1点、弧状土製品（腕飾り）（金子 2009b）1点、装飾品数点があるようである。報告書第91図96は、表で「石錘か」とされているが（p.217）、独鈷石ではなかろうか。土偶は9点、岩偶は2点しか掲載されていないので、特に掲載数との乖離が大きい。掲載土偶は晩期後半のもので、中葉の小型遮光器土偶が目立つが、結髪土偶もある。側面に三叉文が向かい合って施され、そこに赤く着色（水銀朱）した石剣類が注目される。その他、遠賀川系の壺、太型蛤刃石斧などが出土している。

・岩手県旧浄法寺町上杉沢遺跡（第6表957）（浄法寺町教育委員会 2003）

上記で保存が決定し、本書は、その後平成13、14年度に行われた確認調査の結果報告である。トレンチ式による広範囲の確認調査なので、出土組成については割愛するが、土・石製品の傾向に特別な違いは認められない。掲載土器は、少ないので傾向を云々するのは問題があるが、上記報告書と異なり、大洞B2式が比較的多く認められ、瘤付土器第Ⅰ、Ⅲ段階が見られる。

・岩手県一戸町山井遺跡（第6表958～983）（一戸町教育委員会 1995）

川に面した崖に形成され、増水で消滅する恐れのある遺物包含層の全域（約500㎡）を調査したものである（報告書：p.212）。掲載土器は、後期末（瘤付土器第Ⅳ段階）～晩期中葉（大洞C2式前半）で、平安時代の土師器もある。主体は、大洞BC2～C1式で、後期末は僅か、大洞C2式も少ない。

土偶は69点出土しているが、1点後期前葉のものがあり（報告書：第52図63）、土器に比して、x字形土偶など大洞C2式期のもも多く、大洞A1式期らしいものもある（報告書：第48図10、第51図47）。土面1点、岩偶1点（岩偶形土偶2点）、岩版・線刻礫16点？（報告書：p.124）、土版3点、正中線中空土版4点、美々4型中空動物形土製品4点、その他、石剣類47点、独鈷石2点、石冠3点、円盤状石製品201点、スプーン状土製品2点？、内面渦状土製品1点、弧状土製品（金子 2009b）1点、土製耳飾5点（ほとんど鼓状系列）（金子 2009a）、石製（ヒスイ）玉8点、土製玉2点などが出土している。

・岩手県久慈市大芦Ⅰ遺跡（第6表984～987）（久慈市教育委員会 1985）

報告書では「大芦遺跡」となっているが、久慈市教育委員会による調査地点は、県埋蔵文化財センターの調査区に含まれ、同じ遺跡なので、後に改められた「大芦Ⅰ遺跡」に統一する。報告書に

遺物の写真図版がなく、確認できない点がある。道路法面復旧工事に伴う調査で、面積は120㎡、「道路法面上の遺物取り上げと遺物包含層の観察及び遺構の有無の確認」を目的とした調査である(p.3)。掲載土器は、大洞C1式がほとんどを占める。

土偶4点(大型遮光器土偶3)、岩版2点、「正中線中空土版」1点、美々4型中空動物形土製品1点、石剣類4点、円盤状石製品1点、その他、内面渦状土製品1点が出土している。

・岩手県久慈市大芦Ⅰ遺跡(第6表988~1002)(助岩手県文化振興事業団 1998)

表中遺構欄に「捨場」と入っているものは、層的に取り上げられていて時期の検討が可能な資料である。

上述の道路の改良工事に伴う調査で、3,120㎡調査し、確認されていた捨ても、道路範囲内は全面調査されることになった。掲載された縄文~弥生土器は、大洞BC2式~C2式古期がほとんどを占め、縄文時代中期末、後期中葉~BC1式、大洞C2式中期土器も見られ、縄文時代早期中葉、前期初頭、中期前葉、後期前葉、弥生時代中期、後期土器も散見される。C区捨場出土で「不明土製品」とされたもののうち(報告書p.109)、1128、1130は耳飾、1135は大洞C2式古期大型遮光器系列土偶と判断し、以下の集計に含めた。報告者は、1131~1133も土偶の可能性を指摘するが(同上)、不明瞭なので今回は割愛した。遺構外出土土製品のうち「その他の土製品」に一括された土偶も(報告書p.130)、調査前の出土土偶4点(報告書p.19)も、以下の集計に含める。

土偶は、掲載土器に比して後期(特に後半)の例が非常に多く、60点のうち23点は後期である。正中線中空土版3点?、美々4型中空動物型土製品2点?、岩版6点、線刻礫4点?、石剣類30点、内面渦状土製品4点、土製耳飾11点(晩期4?)、ボタン状石製品2点、土製玉類2点?、円盤状石製品2点、異形石器?1点、スプーン状土製品4点の出土で、土製耳飾を除いて晩期がほとんどと思われる。

・岩手県旧玉山村宇登遺跡(第6表1003~1018)(玉山村教育委員会 2004)

農道の建設で1,800㎡調査され、晩期しか出土していないようである。掲載土器は、大洞B2~A1式で、僅かに大洞B1式が見られる(報告書:第26図125)。大洞C2式古期がほとんどを占め、拠点集落とするか悩むが、その他の時期も一定程度完形に近い土器が出土していることから、調査範囲が狭いため、遺物包含層の一部しか調査していないことによるものと判断した。

土偶は58点出土したそうだが(報告書:p.89)、54点のみの掲載で、時期は土器の出土傾向を反映している。報告書第72図1033は、土器口縁部突起(人面)かもしれない。土面1点(本稿第1図2)、岩偶1点、土版13点、正中線中空土版1点出土し、石剣類は12点、円盤状石製品は2点しか掲載されていない。土製耳飾は6点出土し、晩期初頭が主体を占めているようだ(金子 2009a、2010c)。報告書第77図1140は、耳飾でないかもしれない。その他、スプーン状土製品が1点出土している。

・岩手県盛岡市上平Ⅱ遺跡(第6表1019~1031)(盛岡市教育委員会 1990、1995)

隣接する第4次調査(421㎡)、第6次調査(420㎡)の報告である。概報のため、詳細な記載や写真図版がなく、表は正確でないかもしれない。遺物包含層の上層(A、B層)で縄文時代晩期の集落跡、下層(C、D層)で縄文時代中期の集落跡が検出されているが、C層では混在し、また混入もある。中期の土偶や球状耳飾も出土しているが、円盤状土製品以外の当該期の土・石製品はほぼ区別できると思う。出土土器は、縄文時代後期末~晩期後葉が多く、次いで中期前~後葉で、早期前半は少なく、前期初頭は僅かである。掲載された後期末~晩期後葉では、瘤付土器第Ⅲ段階から徐々に増えていき、大洞B2~BC2式でピークを向かえ、大洞C1式で減少、大洞C2式古期で激減し、大洞A2式まで続くが、大洞A'式古期は1点しか掲載されていない。大洞A'式古期より新しい土器は出土

していないようだが、報告書（1995）の第101図1の土器は、弥生時代前期末にも見える。

土偶は、中期のものを除いて56点掲載されている。土器の時期を反映して大洞B2～BC2式期の遮光器土偶が多いが、ほぼ全ての時期が満遍なく出土している。ただし、土器に反して、大洞C1式期は少なく、大洞C2式期のものがより多い。岩版6点、土版2点、正中線中空土版2点、美々4型中空動物形土製品約3点、石剣類40点、独銚石2点？、石冠2点？、円盤状石製品35点、土器の時期に比して土製耳飾は比較的多く10点、第二段階（大洞BC1～BC2式期）の弧状土製品（金子 2009b）1点、第Ⅱ段階（大洞C2式古期）の菱形環状石製品（金子 2010b）1点掲載されている。

・岩手県旧前沢町川岸場Ⅱ遺跡（第6表1032～1040）（財団法人岩手県文化振興事業団 2000）

出土土器は、僅かな縄文時代中期後葉、古代以降を除けば、縄文時代後期中葉末～弥生時代中期中葉がほとんどである。ところが、近世以降の改変を受けているためか、掲載土器は細片が主体で、多寡の変遷がギクシャクしている。比較的多いのは大洞A1式で、次いで大洞C2式古期、大洞BC2式、大洞C1式、大洞A'式古期の順であり、後期は非常に少ない。

68点出土した土偶は、概ね掲載土器の時期を反映しているが、弥生時代前期の割合が多目とも言えるかもしれない（金子 2015）。岩版は2点掲載され、土版は3点出土し、晩期末の正中線中空土版の可能性のあるもの1点掲載、動物形突起3点、石剣類118点、独銚石4点、円盤状石製品131点出土した。土製耳飾は、報告書第82図1282（大洞A1式期）を含めて10点出土し、C2ネジ形（金子 2009a）も2点ある。スプーン状土製品？1点（報告書：第129図252）、石製玉類11（ヒスイ4）点出土している。明確に後期と言えるのは、報告書第128図245だけで、時期の特徴として多めに出土する、後期末～晩期初頭の土製耳飾、晩期末～弥生時代前期の土偶を考慮すれば、掲載土器の傾向に合致していると言える。

南側に隣接する川岸場Ⅰ遺跡の前沢町教育委員会（2004）による調査では、189㎡という狭い調査範囲ながら、やはり、僅かな縄文時代中期後葉に、縄文時代後期中葉末以降の土器が出土しているが、弥生時代前期末大洞A'式新期までで、弥生時代中期は出土していない。関連遺物の出土はなく、23点掲載された土偶は、後期末～晩期初頭と晩期後葉～末の結髪土偶がほとんどである。土製耳飾は46点掲載され（報告書第50図44も含む）、後期末～晩期初頭の環状のものが8割以上を占めるが、大洞C2～A1式期のC2ネジ形も2点、鼓状系列も1点見られる（金子 2009a）。第四段階（大洞C2式期前半）の弧状土製品1点も掲載されている（報告書：第48図18）（金子 2009b）。石剣類は45点、円盤状石製品は26点出土している。

・宮城県大崎市北小松遺跡（第6表1041～1042）（宮城県教育委員会 2011）

ほ場整備に伴う調査で、水路、農道予定地を主体としているため、トレンチ状の調査区が長く続く形になっている。したがって、年度ごとに報告されているが、各報告書にまとまりは少ない。

平成20年度E-25区で、岩版1点、土版1点出土した。掲載土器は、大洞A1式～A'式古期が主で、大洞BC2式、C2式も見られ、瘤付土器第Ⅰ段階も僅かに出土している。土偶が8点以上、環状石斧未成品1点、円盤状石製品5点、土製耳飾2点？、石製勾玉未成品1点、土玉2点、木製櫛1、骨角製装身具数点出土している。

・宮城県大崎市北小松遺跡（第6表1043～1066）（宮城県教育委員会 2014）

上記の続きで、平成21年度調査の報告である。上述のとおりトレンチ調査の集成報告だが、今回は類似した立地の比較的隣接した地域なので一括して扱った。出土土器は、後期後葉以前も僅かにあるが、後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～弥生時代前期末（青木畑式）で、特に大洞C2式以降が多い。最も多いのは大洞C2式古期～A1式と思われ、大洞C2式以前は少ないが、大洞BC2式は比較的多く

出土している。

土偶は約33点出土しており、やはり大洞C2式～A1式期が多いが、後期末～晩期初頭もある（報告書：第130図2、3ほか）。土面1点も、このころと思われる。岩偶？1点、岩版3点以上出土。13点出土した土版は、土器の出土傾向に合致する。石剣類190点（本稿第1図3）、石冠6点、独鈷石11点、円盤状石製品60点出土した（報告書：第14表に追加）。土製耳飾は19点出土し（報告書第235図4は除外）、大洞C2～A1式期のC2ネジ形（金子 2009a）も多いが（報告書：第237図11、12、19）、後期末～晩期初頭と思われる環状品が2/3を占める。ただし、報告書では大洞BC2式期を示唆する（p.347）。報告書第236図9は、「動物形土製品（イモムシ）」とされているが、腕飾りの部品（弧状土製品）と思われ（金子 2009b）、第四段階（大洞C2式前半）の可能性はある。内面渦状石製品が1点、装飾性の高い円盤状の土製品（貫通孔）が2点見られ（報告書：第237図9、18）、石製玉3（ヒスイ1）点（報告書：第14表）、土玉4点、木製櫛2点、骨角製の装身具十数点出土している。

・宮城県大和町摺萩遺跡（第6表1067～1077）（宮城県教育委員会 1990）

ダム建設に伴う土捨て場になるため調査された。東地区9,000㎡が晩期の集落跡で、「調査後の協議の結果、4箇所（遺物包含層のうち2箇所については工事区域から除外し、保存を計ることになった」（報告書：p.1）ため、全掘したわけではない（報告書：p.921）。縄文時代中期後半の集落跡と重複している。出土土器は、僅かな早期末～前期前葉、前述の中期を除くと、後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A1式）だが、時期による多寡が大きく、最も多いのは大洞C2式古期、次いで大洞A1式、瘤付土器第Ⅳ段階～大洞B1式古期、大洞BC2式で、大洞C1式は少ない。

24点出土した土偶は、出土土器の傾向を概ね反映しているが、後期末～晩期初頭は少ない。土面2点（本稿第1図4、5）、岩版2点以上、土版5点、石剣類25点？、石冠1点（報告書：第592図9）、土冠1点、独鈷石1点、円盤状石製品106点？出土した。5点出土した土製耳飾は、土器の出土傾向と同じで、後期末～晩期初頭（報告書：第580図1、2、5）と大洞C2～A1式期（報告書：第580図3、4）に分かれる（金子 2010c：第2表）。典型的なボタン状石製品は1点のみだが（報告書：第593図8）（第Ⅲb段階＝大洞C2式古期）（金子 2010a）、類似の石製品が数点出土している。土坑墓から出土した42点の土製小玉は、大洞C2～A1式期に特有のものである（金子 2006）。

・山形県村山市宮の前遺跡第2次調査（第6表1078～1107）（山形県埋蔵文化財センター 1995）

第1次調査（36㎡）では関連遺物は出土していない（山形県教育委員会 1977）。第2次調査は、ほ場整備を原因として、遺跡推定範囲30,000㎡のうち4,500㎡行われた。掲載土器は、僅かな縄文時代早期、前期、中期、後期中葉、後期後葉、平安時代を除き、縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A2式）で、大洞C2式古期～A1式が最も多く、次いで瘤付土器第Ⅳ段階～大洞B1式新期で、大洞A2式は僅かである。安行2式土器片、製塩土器なども出土している。

約50点出土した土偶のうち掲載された42点は、上記土器出土傾向に符合し、多出時期は東北地方北部に遜色がないが、晩期前葉の大型遮光器系列土偶は見劣りがする（報告書：第107図24）。人面付土器は、後期後葉を含め2点掲載されている（本稿第1図6）。岩偶は1点以上（第1図9）、岩版は10点以上掲載され、定型化する以前の「初期岩版」が2点認められる（第2図10）。土版は、6点以上掲載され、岩版・土版に5類が多いのはともかく6類も顕著に認められるのは、1～6類が「大洞諸型式の流れとおおよそ対応するもの」（稲野 1983：註3）なら、土器の出土傾向に合致しない。第6表1101は、土版が円盤状土製品に利用されたものであろう（第2図15）。第6表1106は、正



中線中空土版、1107は動物形突起の可能性がある。石剣類は138点、円盤状石製品は131点出土したようである（報告書：表18～19、21～22）。独銚石は1点出土した。石冠は3点、土冠は1点掲載されている。内面渦状石製品は1点出土し（報告書：第125図18）、浅皿形（大洞C2式期）であろう（金子 2011a）。

土製耳飾は、17点掲載され、出土土器の傾向に合致している（金子 2009a、2010c）。1点掲載された弧状土製品（報告書：第111図67）は、第四段階（大洞C2式前半）の可能性もある（金子 2009b）。石製玉（勾玉）は、5点掲載され（ヒスイ2点）、土坑墓から出土したものもある。装身具を主体とすると思われる土・石製品が、その他にも多数出土している。

写真がないので不明だが、線刻礫とされたもののうち、報告書第125図20、21、23は、他の製品の破片の可能性が高く、22、24は、単純な平行線で砥石等の可能性も考えられるので、割愛した。第6表1078の時期は、後期後葉で、本稿の収集対象外だが、他にも人面付土器が出土しているので参考として資料に含めた。

・山形県村山市宮の前遺跡第3次調査（第6表1108～1109）（財山形県埋蔵文化財センター 1999）

国道改良に伴って1,320㎡調査され、第2次調査区の東側に隣接する。掲載土器は、縄文時代後期後葉が目立つ程度で、第2次調査とほぼ同じか。18点出土した土偶も、同様の傾向を示す。岩版2点、独銚石1点掲載され、石剣類は86点、円盤状石製品194点出土した。土製耳飾は、2点のみのせいか、土器の出土傾向を反映しない。その他、5cm以上のサメ歯化石、玉類数点などが掲載されている。

報告書第122図19、20、26は、第2次調査で出土した初期岩版に相当する可能性もあるが、文様を当該期とする確信が持てず割愛した。

・山形県村山市作野遺跡（第6表1110～1113）（山形県教育委員会 1984）

水道管理設に伴って幅4.5mのトレンチ状に約1,080㎡調査された。掲載土器は、僅かな縄文時代前、中期を除いて、後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A1式）で、大洞C2式古～中期が大部分であり、他はあまり多くない。

10点（後述）出土した土偶は、土器と同様大洞C2式がほとんどだが、晩期前葉の在り土偶も2点見られる（後述）。岩偶？1点、岩版1点、美々4型中空動物形土製品1点、石剣類は23点掲載されている。弧状土製品（報告書：第45図17）は、第四段階（大洞C2式前半）か（金子 2009b）。晩期初頭と思われる土製耳飾1点掲載されている（報告書：第44図7）。その他、装身具と思われる石製品2点が掲載されている（報告書：第46図27、第47図30）。

報告書第44図1、2は、板状のため「土版」とされているが、一般的な土版とかけ離れており、晩期前葉在りの土偶と考えた方が良いと思われる。第44図5のミニチュア土器とされたものは、図ではクラゲ状土製耳飾の天地逆に見えるが、写真ではやはり土器のように見える。

・山形県村山市作野遺跡第2次調査（第6表1114～1115）（財山形県埋蔵文化財センター 2011）

道路改良により1,400㎡調査され、これまでの調査区より上方に位置する。掲載土器は、僅かな縄文時代前、中期、平安時代のほかは、縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～弥生時代前期末（青木畑式）だが、後期末（瘤付土器第Ⅳ段階）～晩期初頭（大洞B1式新期）と晩期後葉（大洞A2式）～弥生時代前期（青木畑式）がほとんどであり、大洞B2、BC2式は僅かで、大洞C1～A1式は非常に少ない。

掲載土偶1点は、縄文時代後期末というより後葉まで遡る可能性がある。岩版1点、石剣類6点掲載され、円盤状石製品は2点出土したようである（報告書：表17）。

・山形県村山市作野遺跡第3次調査（第6表1116）（財山形県埋蔵文化財センター 2012）

第2次調査の道路に接続する市道建設に伴って250㎡調査された。より標高の低い箇所に相当する。掲載土器は、僅かな縄文時代中期、後期後葉～末、大洞B2式、大洞BC2式、平安時代を除き、ほとんど全て大洞C2式古期～大洞A1式である。

6点出土した土偶、岩版1点は、土器の時期に符合する。土冠2点のうち1点も同様に、もう1点は無文だが、この時期の可能性が高いであろう。石剣類は22点以上（報告書：p.44）、円盤状石製品は3点以上出土したそうである（報告書：p.45）。石製玉は2点掲載されている（勾玉と丸玉）。

・福島県三島町荒屋敷遺跡（第6表1117～1124）（三島町教育委員会 1990）

国道改良に伴って約2,800㎡調査された。出土土器は、僅かな縄文時代中期、少ない後期初頭～後葉と弥生時代中期中葉を除けば、晩期中葉～弥生時代前期であり、大洞A～A'式が多くを占めるようで、大洞C1式、弥生時代中期は極僅かである。17点掲載された土偶は、東北北部のものとは異なり時期を推測しにくいだが、大洞A式期が主体を占めるようにも思われる（金子 2016a：第10表）。土版は3点以上、石剣類は24点、独鈷石は6点、石冠は2点掲載され、円盤状石製品は出土していないようである。1点掲載された内面渦状石製品（報告書：第280図5）は、浅皿形（大洞C2式期）であろう（金子 2011a）。土製耳飾は約6点、漆塗櫛3点掲載され、石製玉は18点出土している（報告書：p.548）。なお、1次調査（832㎡）の報告書（三島町教育委員会 1975）は今回閲覧できなかった。

#### 4. 小括

今回（第6表）、山形、福島県の遺跡が少ないのは、後期にも多出する遺跡が多いからである。東北地方北部と違って、多時期あるいは長期にわたって占拠される場合が多いのは、当時の環境、社会の違いを反映している可能性がある。なお、秋田県がないのは、第1表で既に扱っているからである。

これまでの検討（前回(2)）で、晩期初頭、晩期前葉、晩期中～後葉、弥生時代前期末の間を画期として、「関連遺物」が僅少多様→岩版主体→土版主体→動物形突起のように組成が変化することがわかった。この傾向が今回も当てはまるか、出土土器の時期的傾向を手がかりに検討してみたところ、概ね妥当だが、山形県宮の前、作野遺跡がやや異なっている。両遺跡とも、掲載土器は大洞C2～A1式あたりを主体としながら、岩版が比較的多く、作野遺跡では、本来この時期に多いはずの土版が出土していない。この時期を主体としながら岩版が多いのは、岩手県の大橋遺跡でも認められ、数が少ないので不明瞭だが、青森県今津、明戸、秋田県前通遺跡も、その可能性がある（前々回第3表）。土版が多い遺跡も確かにあるので、遺跡によって異なることになり、今後注視する必要がある。

正中線中空土版と美々4型中空動物形土製品が、大洞C1～2式期の岩手県南部に多いとした地域性は、南部に限らず岩手県に多く、ここを中心としてその周囲に点在すると捉え直した方が良さそうである。

大洞C2～A1式を主体とする青森県二枚橋(2)遺跡では、土版あるいは岩版が多いはずである。確かに両方とも出土しているが、なぜか土面を主体とする。遺跡の性格を考える上で重要であろう。

残念ながら、関連遺物の組成等の時期的特徴および地域性について、これ以上の新たな知見は得られなかったため、以下、その他の特記事項について記す。

岩版・土版の文様には、地域性もあり、特に南部（宮城、山形、福島県）には北部と異なる文様構成が顕著に認められた（例えば第2図12）。ただし、北部と共通するものもあり（第2図13）、どのように捉えたら良いか。

青森県川原平(1)遺跡の報告書では、遠距離接合に特に注意しており（報告書Ⅷなど）、岩版についても認められている（第6表820）。宮城県北小松遺跡、山形県宮の前遺跡では、円盤状土製品に利

用された土版が見られた（第2図14、15）。これらの事象は、岩版・土版の意義を考える上で考慮する必要がある。

今回特筆すべきなのは、やはり川原平(1)遺跡である。ダム建設に伴って全掘され、報告書が刊行されている。刊行までの日程が厳しく、遺物の種類ごとの出土点数が不明など問題点もあるが、遺跡の全容を見通せるという点で貴重な調査例である。ただし、地点差があるとは言え、通常の出土遺跡に比べ、大洞BC2式、C2式が少なめであるという点で特異である可能性は留意すべきだろう。関連遺物は、後期末～晩期初頭が多いという点で人面付土器が、大洞C1、A1式が多いという点で岩版が多く出土している。頁岩製の岩版が目される（第2図1）。なお、筆者が鏝形土製品（金子2011a）と呼んでいる装身具の一種と考えられるものに、土製、木製、鹿角製の三種があるのも興味深い（報告書Ⅶ）。

#### 註

- (1)文様は「鋭い工具で何度もなぞるように施されている」（報告書:p.37）。裏面の図がないが、「裏面には整形時の擦痕が残る」とある（同上）。厚さ1.9cm。
- (2)側面多重平行線。表裏剥落摩耗。平行四辺形に近い長方形。厚さ2cm。
- (3)同グリッド・同層接合。パンツ状区画と正中線盲孔重複している。厚さ1.8cm。
- (4)厚さ1.7cm。重さ78g。
- (5)裏無文。厚さ1.2cm。
- (6)施文途上のようにも見え非KO類か。厚さ1.3cm。62g。
- (7)パンツ状区画の上、×の上横線引いたような記号。側面断続沈線。厚さ1.4cm。30g。
- (8)人面突起以外は、通常の大洞B2式の注口土器。人面は遮光器眼でない。人面頭頂部突起列。
- (9)表裏中央敲打痕？
- (10)写真図版230-5が正しい位置とすると、表には脚あるいはパンツ状表現と正中線を挟んで左右対称の腹筋状の表現があると見做すこともできる。裏面、入組文の周囲に渦巻文。厚さ0.8cm。26g。
- (11)★下端右に穿孔途中の孔あり。正中線挟んで（）文。厚さ3.2cm。
- (12)多重弧線、表三段、裏二段。厚さ1cm。20g。
- (13)表裏多重弧線認められるが、4類からの漸移的意匠文様も。厚さ2.1cm。258g。
- (14)裏面の多重線は一部にとどまる（正中線なし）。側面の沈線は一周する。多重線は重ね描き。全面研磨調整。厚さ2.9cm。383g。
- (15)格付けが難しい。晩期前葉の土器が出土していないわけではなく、弥生土器も多く出土しているが、関連遺物が見られる晩期で多くを占めるのは大洞C1～A式、それも大洞C2式は少なく大洞A1式がほとんどを占め、多数出土した土偶も同様である。この時期の半拠点集落と捉えるべきか。
- (16)厚さ1.2cm。表面摩耗顕著。
- (17)「正面中央部が粘土で盛り上げられている」（報告書p.193）。磨滅。厚さ1.7cm。49.5g。
- (18)盲孔の下に弧線。厚さ1.7cm。
- (19)表裏両端細かい刺突充填。側面沈線。厚さ1.2cm。重さ35.6g。
- (20)軟質で風化著しい。顔？は、平行線による目？ ★下の盲孔の周囲二重円。厚さ1.7cm。
- (21)報告書第287図6が、同一個体左目片である。藤沼ほか（2002）によると、「横幅は約17cmと推定され、土製仮面としては最大級のものとなる」（p.131）。
- (22)頂部裏面にある横長の瘤状突起に横方向の貫通孔。
- (23)眉鼻Y字貼付。口貼付、周囲入れ墨状細線。貼付眼横線上下刻目列。129g。
- (24)側面にも文様展開。大きさの割りに厚く1.5cm。11g。
- (25)下端両端突出？ 側面沈線。厚さ3cm。215g。
- (26)表裏側面線刻（意匠不明）。厚さ1cm。7g。
- (27)表裏刺突充填。側面一周？沈線。厚さ1.1cm。23g。
- (28)側面一周沈線。裏面半分以上無文。厚さ1cm。17g。
- (29)いわゆる亀形土製品だが、正中線中空土版と美々4型中空動物形土製品のどちらに該当するか分からない。美々4型の晩期中葉以降の点数が少なく、動向が不明であることが大きい（金子2017a：第2図）。また、下北半島には、これまで、どちらの類例もほとんど見られなかったこともある（金子2017c：第6～8図）。正中線中空土版の大洞C2式期以降に円形基調のものが多いことや頭部が大きめであることなどから、美々4型の可能性が高いと思われるが、決め手はない。

- (30)文様構成及び文様は、東北地方南部～北陸地方の晩期初頭岩版に似る（稲野 2004）。
- (31)片端側面に円形沈線。s字文、c字文。厚さ1.9cm。64 g。
- (32)片面～側面工字文系三叉文。
- (33)側面2個1対の刻目が二つ。厚さ1.5cm。
- (34)正中線挟んで対称に連続S字入組文。片面中央に菱形文、周囲下描き状沈線。厚さ2.7cm。重さ225.9 g。
- (35)片面渦巻状S字文。厚さ1.6cm。
- (36)大雑把には類例が存在するが（金子 2004：図2）、全く同じようなものはない。本例は鼻の孔が長く刺突されている点が特徴で、「サル」というより馬に近い。
- (37)大雑把には類例が存在するが（金子 2004：図2）、全く同じようなものはない。両目を連続して細長く貼付し、両目を刺突で表現。耳？は、両端に貫通。口は開いた状態で表現。
- (38)雲形文様の連続入組C字文。厚さ2.6cm。★「左右上端は意図的に打ち欠いている」（報告書 p.125）。正中線は太い。
- (39)「裏面は摩滅激しく文様は観察できない。無文の可能性もある」（報告書 p.125）。
- (40)多重C字文間にI字状陰刻。厚さ2.1cm。
- (41)「脆い砂岩を偏平な三角形に整形した製品。断面カマボコ形の上面に文様を描いている。厚さ1.9cm。「線刻は断面広いV字状で幅3mm程である」。文様は、長い線の両脇から枝を出す矢羽根状あるいは樹木状でほぼ全面に描かれている。「全体の図形は上部、中部、下部と3つの部位に分けて捉えることが可能である」。一部の「文様は後期後葉段階の土器文様との共通性を窺わせる」。「下部が被熱で一部黒色化している」。以上、引用は報告書 p.133 から。
- (42)二箇所から分かれて出土。「厚さ5～7mm程度の粘土板を2枚貼り合わせた構造で」側面突出部を接合面とする。「内面は指で抑えた痕跡が顕著」、正中線隆帯の「剥落面には刺突痕が見える」（以上、報告書：p.109）。二重（）状の沈線による女性器表現。貼付による顔部表現。
- (43)報告書の記載では、正中線でなく箱形の角と捉えている（p.109）。
- (44)頭突起状前方突出。正中沈線、上端未貫通孔。29 g。
- (45)側面沈線。厚さ1.8cm。
- (46)厚さも不均質。厚さ2.2cm。58 g。
- (47)片面正中線端に円形沈線。厚さ1.4cm。
- (48)正中線に沿って刺突列。表面片端刻目隆帯。厚さ1.2cm。
- (49)胸の貫通孔と表裏下端にある貫通孔で開口。「割れ口に漆附着」（報告書：p.267）。
- (50)裏面は浅く窪み、ミガキによって平滑に仕上げられている。眉は頬から5mmの高さ。孔が穿たれる目の近くに沈線。突起状の耳には中央に切り込みが入れている。流類型土面で耳を持つものは、岩手県貝島貝塚に類例がある（花泉町教育委員会 1971：図39-1）。本例も、1067と同様、報告書では出土層から大洞C2式旧段階と考えられている。
- (51)側面1条沈線めぐる。厚さ1.4cm。中央厚く、端薄め。
- (52)片面片端に刺突列二段。厚さ1.6cm。
- (53)表採品である。表C字入組文。側面沈線一周？に直交する刻目列。厚さ2.9cm。KO系列に類似するが、文様が異なる。

#### 参考文献

- 青森県教育委員会 1993『野脇遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集  
 2006『川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集  
 2013『八幡遺跡 千石屋敷遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第524集  
 2014『上新岡館 薬師遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第545集  
 2016a『川原平(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第564集  
 2016b『川原平(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第565集  
 2016『川原平(4)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第566集  
 2017a『川原平(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第576集  
 2017b『川原平(1)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第577集  
 2017c『川原平(1)遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第578集  
 2017d『川原平(1)遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第579集  
 2017e『川原平(1)遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集
- 一戸町教育委員会 1995『山井遺跡』一戸町文化財調査報告書第36集
- 稲野彰子 1983「岩版」『縄文文化の研究第9巻 縄文人の精神文化』雄山閣
- 稲野彰子 2004「岩版の周辺」『慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集 時空をこえた対話』六一書房
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第306集  
 2000『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集

- 大畑町教育委員会 2001『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』
- 金子昭彦 2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史4 同成社
- 金子昭彦 2004「東北地方の動物形土製品」『考古学ジャーナル』No.515 ニューサイエンス社
- 金子昭彦 2006「東北地方北部における縄文晩期の『装飾品』(1)」『紀要』X X V (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2009a「縄文晩期・東北北部の土製耳飾」『縄文時代』第20号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2009b「東北地方・縄文晩期における弧状土製品」『物質文化』87号 物質文化研究会
- 金子昭彦 2010a「北日本・縄文晩期のボタン状製品」『岩手考古学』第21号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2010b「東北北部・縄文晩期の菱形環状製品」『青森県考古学』第18号 青森県考古学会
- 金子昭彦 2010c「縄文晩期・東北北部の土製耳飾(続)」『縄文時代』第21号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2011a「北日本・縄文晩期の三角玉ほかの装飾品」『岩手考古学』第22号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2011b「北日本・縄文晩期の花卉丸玉、平玉」『縄文時代』第22号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2015「東北地方・縄文晩期の土偶(5)」『紀要』第34号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2016a「東北地方・縄文晩期の土偶(6)」『紀要』第35号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2016b「津軽海峡圏の装身具の変遷」『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会第1分科会「津軽海峡圏の縄文文化」研究報告資料集』
- 金子昭彦 2017a「東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物(2)」『紀要』第36号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2017b「多出遺跡から土偶の用途を考える」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀考古学の現在』六一書房
- 金子昭彦 2017c「東北地方『亀形土製品』の一類型」『縄文時代』第28号 縄文時代文化研究会
- 久慈市教育委員会 1985『大芦遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財報告書第5集
- 浄法寺町教育委員会 2001『岩手県二戸郡浄法寺町上杉沢遺跡』
- 浄法寺町教育委員会 2003『岩手県二戸郡浄法寺町上杉沢遺跡』
- 玉山村教育委員会 2004『宇登遺跡・田の沢D遺跡』玉山村文化財調査報告書第22集
- 中門亮太 2013「東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究」『古代』第131号 早稲田大学考古学会
- 八戸遺跡調査会 2002『是川中居遺跡 長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集
- 八戸遺跡調査会 2004『是川中居遺跡 中居地区 G・L・M』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第5集
- 八戸市教育委員会 1983『是川中居遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 八戸市教育委員会 1988『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 八戸市教育委員会 1992『八幡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第47集
- 八戸市教育委員会 1999『是川中居遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第82集
- 八戸市教育委員会 2002『是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集
- 八戸市教育委員会 2004『是川中居遺跡3』八戸市埋蔵文化財調査報告書第103集
- 八戸市教育委員会 2006『是川中居遺跡5』八戸市埋蔵文化財調査報告書第111集
- 八戸市教育委員会 2017『八幡遺跡Ⅵ』八戸市埋蔵文化財調査報告書158集
- 花泉町教育委員会 1971『貝島貝塚』
- 藤沼邦彦ほか 2002「青森県における縄文時代の土製仮面について」『青森県史研究』第6号 青森県
- 前沢町教育委員会 2004『川岸場Ⅰ遺跡 第2次発掘調査報告書』岩手県前沢町文化財調査報告書第16集
- 三島町教育委員会 1975『荒屋敷遺跡・銭森遺跡』三島町文化財報告第3集埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
- 三島町教育委員会 1990『荒屋敷遺跡Ⅱ』三島町文化財報告第10集埋蔵文化財調査報告書Ⅴ
- 宮城県教育委員会 1990『摺菰遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集
- 宮城県教育委員会 2011『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書第226集
- 宮城県教育委員会 2014『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書第234集
- 盛岡市教育委員会 1990『上平遺跡群(上平遺跡)―第4次発掘調査概報(遺構・土器)―』
- 盛岡市教育委員会 1995『上平遺跡群(猪去館・上平Ⅱ遺跡)―平成4・5年度発掘調査概報―』
- 山形県教育委員会 1977『主要地方道尾花沢・寒河江線道路改良工事発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 山形県教育委員会 1984『作野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第83集
- (財)山形県埋蔵文化財センター 1995『宮の前遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集
- (財)山形県埋蔵文化財センター 1999『宮の前遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第65集
- (財)山形県埋蔵文化財センター 2011『作野遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第194集
- (財)山形県埋蔵文化財センター 2012『作野遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第205集

第6表 「関連遺物」多出遺跡 (\*註の内容は、本文註の後に)

No.	県	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存率	現長 cm	接合 赤	付着物 黒	材質 (つくり製作)	出土 位置	遺跡 立地 評価	掲載箇所	備考
644	青	川原平(1)	人面土器	B1古?	浅鉢・顔破片	小片	7.2					段丘 抛点	県教06→10-1	眉鼻目口貼付。額ノ字文。額眉縄文
645	青	川原平(1)	岩版	A?	長楕円形・5類	1/3	9			泥岩		段丘 抛点	県教06→20-1	多段多重弧線。間に三叉文。註1
646	青	川原平(1)	岩版	不明	隅丸長方形・非KO	1/2?	7			凝灰岩		段丘 抛点	県教06→20-2	無文。表裏周縁擦痕。厚さ0.7cm
647	青	川原平(1)	土版	A1	角張楕円形・5類	1/7	4					段丘 抛点	県教06→19-18	片側多重弧線、片側工字文? 厚さ1.8cm
648	青	川原平(1)	人面土器	後末	香炉・胴3面	一欠	11.7					段丘 抛点	県教16a→21-1	表情異なる。眉鼻耳貼付。目口沈線
649	青	川原平(1)	人面土器	後末	注口・口縁5面?	破片	6	★	○			段丘 抛点	県教16a→21-2	口縁裝飾に融合。三叉文。縄文
650	青	川原平(1)	人面土器	B1古?	注口・腕部中央	欠損	20.7		○	割口		段丘 抛点	県教16a→28-5	額ノ字文? 流淚状沈線。眉縄文
651	青	川原平(1)	人面土器	後末?	[蓋か注口] 胴部	小片	4.3					段丘 抛点	県教16a→72-10	★11と同一個体(遠距離)。眉縄文。鼻突出
652	青	川原平(1)	人面土器	後末?	香炉頂部突起	小片	4					段丘 抛点	県教16a→92-11	★突起片面嵌面。貼付。眉T。二次焼成で色異なる
653	青	川原平(1)	人面土?	後末?	壺?・頸部・目のみ	破片	6.7					段丘 抛点	県教16a→94-3	楕円形貼付の間隙貼付。顔に見える
654	青	川原平(1)	岩版	C1?	不整形長方形・3類?	2/3	6.3			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→195-1	★片面正中線下△区画。施文雑。厚さ1cm
655	青	川原平(1)	岩版	A1?	長方形・5類	一欠	8.9			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→195-3	片面正中線。多段多重弧線。註2
656	青	川原平(1)	岩版?	B C?	?・2類?	細片	2.5			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→195-4	片面S字文。片面直線。厚さ0.6cm
657	青	川原平(1)	岩版?	C2?	★三角形?・4類	4/7	6.5			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→195-5	片面のみ文様。多重入組文。擦痕。厚1.8cm
658	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸方形?・非KO	1/2?	14.6			片面 凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→195-6	★特大。片面首孔下△区画?弧線。厚4cm
659	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸方形?・非KO	細片	4.5			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→195-2	表裏線刻(意匠不明)。厚さ0.7cm
660	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長方形・非KO	完形	8.4			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→204-1	全面研磨。擦痕。厚さ1.2cm。重さ57.4g
661	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	11.1			緑色凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→204-7	片面側面擦痕。厚さ1.6cm。重さ152.7g
662	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長方形・非KO	欠損	8			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→204-9	片面研磨。片面未整形?
663	青	川原平(1)	岩版?	~A?	方形?・非KO	破片	13.4			凝灰岩		段丘 抛点	※204-13	★特大。一部研磨。厚さ4.2cm
664	青	川原平(1)	岩版??	~A?	楕円形・非KO	完形	7.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→204-4	表面研磨。側面被削。厚さ1.5cm。71.2g
665	青	川原平(1)	岩版??	~A?	不整形楕円形・非KO	完形	13.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教16a→204-11	凹凸? 表裏擦痕。厚さ3.1cm。335.8g
666	青	川原平(1)	動物突起	後末?	[香炉]・頂部	完形	3.1					段丘 抛点	県教16a→64-9	イノシシ? 目鼻凹口。体縄文。土器小片
667	青	川原平(1)	動物突起	後末?	香炉頂部・トリ?	完形	2.5					段丘 抛点	県教16a→64-10	左右非対称。胴縄文。土器欠損
668	青	川原平(1)	岩版	A?	?・5類	破片	9.8			泥岩		段丘 抛点	県教16b→174-6	片面多重弧線多段。片面工字文。厚1.8cm
669	青	川原平(1)	土版	A?	隅丸方形?・6類	破片	5					段丘 抛点	県教17e写真443	表裏正中線? 表裏多重工字文。厚1.2cm
670	青	川原平(1)	正中中空	窟IV	長軸貫通孔	一欠	7.2			貫通孔		段丘 抛点	県教16b→160-8	正中線と文様は刻目列。裏入組文
671	青	川原平(1)	人面土器	B1古?	注口・腕部中央	細片	4.7					段丘 抛点	県教17a→185-17	650極似。顔部位貼付。流淚状沈線。縄文
672	青	川原平(1)	人面土器	B1古?	深鉢・口縁突起内面	細片	10					段丘 抛点	※211-写147-3	窟IV? 顔に。鼻瘤。流淚状沈線。縄文
673	青	川原平(1)	人面土器	~B1?	鉢・口縁突起内面	細片	5					段丘 抛点	※211-写149-14	二山台形突起。眉鼻貼付。口貫通孔。鼻孔
674	青	川原平(1)	人面土器	窟IV?	注口・頸部二面	一欠	3.6		○	頸部開口部		段丘 抛点	※211-写151-8	眉鼻T字貼付。目口短沈線。★眉端貫通孔
675	青	川原平(1)	人面土?	窟III?	注口・口縁正面	1/5	9.5		○	三段作り		段丘 抛点	※210-写146-9	眉鼻貼付のみ。眉隆帯接続縄文
676	青	川原平(1)	岩版	C2?	楕円形?・4類	2/5	3.8					段丘 抛点	県教17a→162-1	片面正中線渦巻文。片面入組文。厚1.6cm
677	青	川原平(1)	岩版	B?	長方形?・1b類?	1/2	10.2	△	●			段丘 抛点	県教17a→221-4	方形文。弧線。厚さ1.7cm
678	青	川原平(1)	岩版	C2?	?・4類?	小片	4.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→232-6	渦巻文。三叉文。厚さ2cm
679	青	川原平(1)	岩版?	A?	不整形形?・5類?	破片	8					段丘 抛点	県教17a→162-3	二脚? 表裏線多重弧線数段。厚さ2.2cm
680	青	川原平(1)	岩版?	~A?	? (隅丸)?	細片	3.5			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→162-2	曲線文? 表裏擦痕。厚さ0.7cm
681	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長楕円形・非KO	欠損	8.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→162-4	表裏正中線端貫通孔。表裏線刻。厚0.9cm
682	青	川原平(1)	線刻礫	~A?	不整形形?	欠損	12.1			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→146-2	自然礫片面に線刻。厚さ2.5cm
683	青	川原平(1)	線刻礫	~A?	楕円形	略完	6.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→147-5	片面弧線対称。表裏線刻。厚さ1.6cm
684	青	川原平(1)	線刻礫	~A?	略円形	欠損	10.1			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→155-6	表裏擦痕。厚さ1.8cm
685	青	川原平(1)	線刻礫	~A?	卵形	完形	5.9			凝灰岩		段丘 抛点	県教17a→232-8	表裏擦痕。厚さ1.3cm。重さ44.8g
686	青	川原平(1)	人面土器	~B1?	[蓋か] 胴部	細片	5.2					段丘 抛点	県教17b写真35-15	顔部位貼付。唇刻目列。縄文
687	青	川原平(1)	人面土器	~B1?	[香炉か] 口縁?	細片	4.3					段丘 抛点	※図29写37-11	鼻突起状。土器透かし孔
688	青	川原平(1)	岩版	C1?	隅丸方形・3類?	1/4	4.1		○	凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-1	片面正中線。表裏文様。厚さ2.4cm
689	青	川原平(1)	岩版	B C?	長楕円形・2類?	1/5	3.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-2	片面正中線貫孔。C・S字文。厚さ1.1cm
690	青	川原平(1)	岩版	~C1	方形基調・2か3類	1/4	4.5	△		凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-3	片面文様少ない。C字、三叉文。厚0.7cm
691	青	川原平(1)	岩版	~C1	方形基調・2か3類	1/5	4			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-4	多重C・S字文。三叉文。厚さ1cm
692	青	川原平(1)	岩版	C1?	丸長三角形・3類?	1/3	5.6	△	○	割口		段丘 抛点	県教17b→45-5	片面正中線貫孔挟んで楕円眼。厚0.5cm
693	青	川原平(1)	岩版	C1?	長台形・3類?	3/5	10.3	△		凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-6	正中線貫孔。パンツ区画? C字文。註3
694	青	川原平(1)	岩版	B C?	楕円形・2類?	1/3	5.8			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-7	線刻浅い。C字文。厚さ1.3cm
695	青	川原平(1)	岩版	~A?	円形基調・非KO?	小片	3.3			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-8	線刻浅い。意匠不明。厚さ0.5cm
696	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸方形・非KO	破片	3.7			緑色凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-9	片面正中線貫孔。片面浅い線刻。厚0.8cm
697	青	川原平(1)	岩版	~A?	楕円形・非KO	完形	6.4			砂質凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→45-10	片面正中線両端貫孔。表裏擦痕。註4
698	青	川原平(1)	岩版	C1?	丸長三角形・3類?	7/10	15			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→46-1	片面正中線、S・C字文。裏刻離? 厚1.2cm
699	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸方形・非KO	2/3	6.1			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-1	正中線貫孔挟んで刻突。△彫去。註5
700	青	川原平(1)	岩版	B C?	楕円形・2類?	完形	7.9			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-2	片面正中線。C字文。片面無文。註6
701	青	川原平(1)	岩版	~B1?	隅丸方形・非KO	3/4	8.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-3	★表人体?裏文様。連続文様。厚1.7cm
702	青	川原平(1)	岩版	~A?	楕円形・非KO	完形	8			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-5	★表人体?裏無文。厚2.2cm。138g
703	青	川原平(1)	岩版	C1?	楕円形・3類?	4/5	7.8			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-7	★正中線貫孔上顔? S文側面も。厚2.5cm
704	青	川原平(1)	岩版	A?	楕円形・5類	完形	8.9			緑色凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-9	表正中線貫孔多重弧線3段。厚1.2cm。121g
705	青	川原平(1)	岩版	~A?	丸長三角形・非KO	完形	6.7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→123-3	★表パンツ区画と記号。裏無文。註7。第2図4
706	青	川原平(1)	岩版	C2?	楕円形・4類?	2/5	4.1			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→123-5	表正中線貫孔。渦巻文。厚さ0.6cm
707	青	川原平(1)	岩版	~A?	小判形・非KO	一欠	6.6			緑色凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→123-9	表正中線両端貫孔。裏線刻? 厚1.3cm
708	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	5.1			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b写真21-12	[石製円盤]。厚さ1cm。26g
709	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長楕円形・非KO	略完	6.2			砂質凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→46-2	[石製品]。表裏擦痕? 厚0.7cm。28g
710	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	6.3			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→47-5	表裏無文。厚さ1.7cm。58g
711	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	略完	6.2	○		石質?		段丘 抛点	県教17b→48-2	観察表裏。表裏側面赤。側面角。厚0.7cm
712	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	9			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→48-3	表裏側面整形痕。厚さ2cm。144g
713	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	5.5			緑色凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→48-4	[線刻礫]。表裏煤付着? 厚さ1cm。29g
714	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸方形・非KO	完形	4.1			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→48-5	[石製品]。厚0.9cm。18g
715	青	川原平(1)	岩版?	~A?	方形基調・非KO	破片	4.9			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-4	片面線刻? 厚さ0.7cm
716	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長方形・非KO	完形	8.9			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→111-6	表裏無文。厚さ1.4cm。89g
717	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形?・非KO	欠損	8.9			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→112-2	表裏無文? 厚さ1cm
718	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	4.6			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→112-5	表裏無文。厚さ1.8cm。113g
719	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長方形・非KO	略完	5.2			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→112-6	表裏無文。厚さ0.6cm。13g
720	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	一欠	7			凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→113-7	[敲石]。表裏無文。厚さ1.3cm
721	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形?・非KO	破片	4.2			緑色凝灰岩		段丘 抛点	県教17b→113-9	表裏無文? 厚さ1.3cm

No.	県	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存率	現長 cm	接合	付着物 赤黒	材質 (つくり製作)	出土位置	遺跡 立地 評価	掲載箇所	備考
722	青	川原平(1)	岩版?	~A?	小平形・非KO	完形	4.8			凝灰岩	段丘	地点	県教17b→123-4	表裏線刻? (擦痕?)。厚さ1.3cm。28g
723	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸台形・非KO	略完	9.5			凝灰岩	段丘	地点	県教17b→123-7	[線刻?]。全面擦痕?。厚さ1.9cm。86g
724	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	7.6			凝灰岩	段丘	地点	県教17b→123-8	[線刻?]。一部線刻磨消。厚さ2cm。100g
725	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	略完	7.3			凝灰岩	段丘	地点	県教17b→123-9	[線刻?]。表裏擦痕。厚さ1.9cm。100g
726	青	川原平(1)	線刻	~A?	不整形破片	破片	5.3			凝灰岩	段丘	地点	県教17b→123-6	中心から放射状線刻。厚さ1cm。円盤状
727	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	10.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→65-1	表正中線両端穿孔。厚さ2.4cm。255g
728	青	川原平(1)	岩版	B C?	方形・2類?	破片	7.8		割口	凝灰岩	段丘	地点	県教17c→65-2	片面S字入組文? 片面無文。厚さ1.2cm
729	青	川原平(1)	岩版	C1?	楕円形・3類?	一欠	8.6			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→65-4	顔正中線△意匠。渦巻文。裏入組文。厚1.3cm
730	青	川原平(1)	岩版	~C2?	隅丸長方形・4-5類	2/5	12.9	△		凝灰岩	段丘	地点	県教17c→65-5	多重弧線。正中線穿孔。裏入組文。厚2.3cm
731	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	9/10	6.8			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→66-3	表正中線? 側面欠損。厚さ1.2cm
732	青	川原平(1)	岩版?	~A?	?板状・無文	小片	5.6			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→66-2	片面擦痕。厚さ0.6cm
733	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・無文	完形	6.5			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→66-4	表裏擦痕。厚さ1.4cm
734	青	川原平(1)	岩版?	~A?	不整形板状・無文	破片	10.6			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→66-5	[線刻?]。表裏擦痕。厚さ0.6cm
735	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・無文	完形	8.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→66-6	[線刻?]。表裏擦痕? 厚さ1.2cm。75g
736	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長楕円形・無文	欠損	3.8			泥岩	段丘	地点	県教17c→66-7	[線刻?]。面をなす。表裏擦痕。厚さ0.8cm
737	青	川原平(1)	岩版?	~A?	不整形板状・無文	欠損	7			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→66-8	[線刻?]。表裏擦痕。厚さ0.8cm
738	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・無文	完形	9.9			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→67-1	?。表裏擦痕。板状でない。厚3.7cm。344g
739	青	川原平(1)	岩版?	~A?	不整形板状・無文	完?	7.1			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→67-2	[線刻?]。表裏擦痕? 厚0.6cm。22g
740	青	川原平(1)	岩版?	~A?	不整形長方形・無文	完?	8			凝灰岩	段丘	地点	県教17c→67-3	[線刻?]。表裏擦痕。板状。厚1.2cm。61g
741	青	川原平(1)	土面	~A?	鼻曲型・中央破片	1/6	6.9			[裏面平]	段丘	地点	県教17d→93-187	眼くり抜き。鼻肩高い貼付。鼻孔沈線
742	青	川原平(1)	人面土器	B2	口縁人面突起	一欠	11.8			注口土器	段丘	地点	県教17d→写82-4	突起1単位。肩弧。楕円形。註8。第1図8
743	青	川原平(1)	岩版	~A?	角張楕円形・非KO	欠損	7.1			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→129-2	片面正中線。片面無文?
744	青	川原平(1)	岩版	A1?	楕円形・5類?	完形	11.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→129-3	片面対向多重弧線。片面中央渦巻。註9
745	青	川原平(1)	岩版	~A?	長方形・非KO	略完	7.8	△		緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→129-4	片面正中線片端穿孔。片面無文
746	青	川原平(1)	岩版	B C?	隅丸方形・2類?	完形	5.6	? ○		凝灰岩	段丘	地点	県教17d→130-2	川原平4遺跡同一個体? 渦巻文。厚1.7cm
747	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸方?・非KO	一欠	12.2			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→130-3	表裏パツツ。片面中央渦巻文。厚1.3cm
748	青	川原平(1)	岩版	B C?	楕円形・2b類	3/7	15.3	○		凝灰岩	段丘	地点	県教17d→130-4	表正中線穿孔。裏裏C字文。厚さ2.5cm
749	青	川原平(1)	岩版	~C1?	不整形楕円・2~3類?	完形	7.4			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→130-5	表正中線C字文。裏擦痕多。渦巻文。厚5.7g
750	青	川原平(1)	岩版	C1?	楕円形・3類?	完形	5.8			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→130-6	表正中線両端穿孔。裏中央入組文。註10
751	青	川原平(1)	岩版	C2?	?・4類	破片	2.8			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-1	表正中線渦巻文。裏無文。厚さ1.3cm
752	青	川原平(1)	岩版	C1?	?・3類	破片	3.8			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-2	表正中線()文。裏入組。多重S字文。厚1.4cm
753	青	川原平(1)	岩版	B C?	隅丸長方形・2b類	2/3	14.2	○		凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-3	表顔正中線両端穿孔。S字・C字文。註11
754	青	川原平(1)	岩版	C1?	隅丸隅丸方・3類?	4/5	5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-4	表正中線穿孔。裏多重S字文。厚0.9cm
755	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸長方形・?	一欠	5.5			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-5	穿孔。裏裏浅い曲線文(意匠不明)。厚0.6cm
756	青	川原平(1)	岩版	B C?	不整形長方形・2b類?	4/5	10.4			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-6	表正中線。正中線以外浅い文様。厚1.6cm
757	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸長方形・非KO	欠損	2.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-7	表正中線穿孔。裏無文? 厚さ0.7cm
758	青	川原平(1)	岩版	B C?	方形・2b類?	欠損	3.3			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-8	表正中線穿孔。裏C字文。厚さ0.8cm
759	青	川原平(1)	岩版	B C?	隅丸方形・2b類?	7/10	6	○		緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-9	渦巻・S字文。厚さ1.1cm
760	青	川原平(1)	岩版	~A?	?・?	小片	4.5	○		凝灰岩	段丘	地点	県教17d→131-10	表裏文様(意匠不明)。厚さ1.7cm
761	青	川原平(1)	岩版	C2?	楕円形・4類	一欠	8.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→132-1	表正中線穿孔。裏入組文。厚1.7cm。敲打痕?
762	青	川原平(1)	岩版	B C?	隅丸台形・2類?	4/5	3.5			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→132-2	表正中線穿孔。表裏曲線文。厚0.5cm
763	青	川原平(1)	岩版	~A?	楕円形・非KO	完形	7.1			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→132-3	表裏浅いパツツ区画。厚さ1.7cm。90g
764	青	川原平(1)	岩版	A1	?・5類	小片	12.3			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→132-6	特大★。表多重弧線。裏工字文。厚さ1.5cm
765	青	川原平(1)	岩版	~A?	長楕円形・非KO?	欠損	6.2			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-1	顔表現。穿孔2? 裏擦痕。厚さ1.7cm
766	青	川原平(1)	岩版	C1?	隅丸台形?・3類?	2/3	5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-2	表正中線()文。表裏文様意匠不明。厚1.3cm
767	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸台形?・非KO	一欠	8.6			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-3	表線刻(意匠不明)。裏黒色付着物。厚1.7cm
768	青	川原平(1)	岩版	A?	不整形楕円形・5類	略完	4.5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-4	表正中線両端穿孔。表裏対向多重弧線。註12
769	青	川原平(1)	岩版	A?	卵形・5類	一欠	6.2			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-5	表裏対向多重弧線。片中央入組文。厚1cm
770	青	川原平(1)	岩版	C2新?	楕円形・4-5類	完形	10.9			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-6	正中線両端穿孔。対向多重弧線。註13
771	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸長方形・非KO	欠損	5.5	○		凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-8	表正中線穿孔。厚さ1.1cm
772	青	川原平(1)	岩版	A?	楕円形・5類?	欠損	5.8			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-9	片面対向弧線。その他不明。厚さ3cm。90g
773	青	川原平(1)	岩版	~A?	楕円形・非KO	欠損	5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→134-1	表正中線端貫通孔。厚さ1.4cm
774	青	川原平(1)	岩版	~A?	楕円形・非KO	欠損	6			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→134-2	表正中線穿孔。裏無文? 厚さ不均質1.7cm
775	青	川原平(1)	岩版	~A?	隅丸台形・非KO	欠損	3.2			シルト岩	段丘	地点	県教17d→134-7	表正中線穿孔。脚表現? 厚0.9cm。★被熱
776	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	一欠	11.2			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→129-5	表不整形円形線刻内擦痕。裏欠損。厚さ2.9cm
777	青	川原平(1)	岩版?	~A?	不整形・非KO	破片	5.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→132-3	表裏曲線。表眼意匠? 厚さ1.6cm
778	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形?・非KO	破片	6.3			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→133-10	片面階段状沈線。厚さ1.4cm
779	青	川原平(1)	岩版?	~A?	卵形・非KO	一欠	5.9			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→134-3	表裏線刻意匠不明。中央敲打痕? 厚1.1cm
780	青	川原平(1)	岩版?	~A?	?・非KO	小片	4.6			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→134-4	表線刻(意匠不明)。裏剥落
781	青	川原平(1)	岩版?	~A?	?・非KO	欠?	7			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→134-6	片面擦痕。厚さ1.8cm
782	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	6			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-1	無文。面取り。厚さ1cm。28g
783	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸方形・非KO	完形	4.7			?	段丘	地点	県教17d→136-2	観察表なく不明。厚さ0.8cm
784	青	川原平(1)	岩版?	~A?	下彫楕円形・非KO	完形	5.8			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-3	無文。厚さ0.8cm。21g
785	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	6.4			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-4	無文。擦痕。厚さ0.8cm。26g
786	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸長方形・非KO	完形	5.9			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-5	無文。厚さ0.8cm。21g
787	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸方形?・非KO	欠損	4.4			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-6	無文? 厚さ1.1cm
788	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	欠損	6			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-7	無文? 厚さ1.7cm
789	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長楕円形・非KO	完形	11.5			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-8	無文。研磨?擦痕。厚さ2cm。162g
790	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	8.5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-10	無文。片面擦痕。片面凹。厚2.2cm。144g
791	青	川原平(1)	岩版?	~A?	卵形・非KO	一欠	11.3			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→136-12	★片面上方穿孔。表裏中央凹。厚2.7cm
792	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	8.4			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-2	無文。研磨? 厚さ2.1cm。122g
793	青	川原平(1)	岩版?	~A?	卵~楕円形・非KO	完形	7.2			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-3	片面片端穿孔。厚さ1.1cm。57g
794	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長楕円形・非KO	完形	5.6	○		シルト岩	段丘	地点	県教17d→137-4	無文。厚さ0.8cm。20g
795	青	川原平(1)	岩版?	~A?	隅丸長方形・非KO	完形	5.6	○		凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-5	無文。厚さ1.1cm。30g
796	青	川原平(1)	岩版?	~A?	不整形楕円形・非KO	一欠	10.6			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-6	片面片端穿孔。厚さ2.2cm
797	青	川原平(1)	岩版?	~A?	長楕円形・非KO	完形	5.5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-7	無文。厚さ1.3cm。34g
798	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形?・非KO	欠損	4.7			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-8	表裏擦痕。厚さ1cm
799	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	8			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→137-9	無文。横断面長方形。厚さ1.7cm。112g
800	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	7.5			凝灰岩	段丘	地点	県教17d→138-1	無文。整形擦痕。厚さ2cm。94g
801	青	川原平(1)	岩版?	~A?	楕円形・非KO	完形	5.1			シルト岩	段丘	地点	県教17d→138-3	無文。厚さ1cm。28g
802	青	川原平(1)	岩版?	~A?	卵形・非KO	完形	6.1			緑色凝灰岩	段丘	地点	県教17d→138-4	無文。厚さ1cm。44g

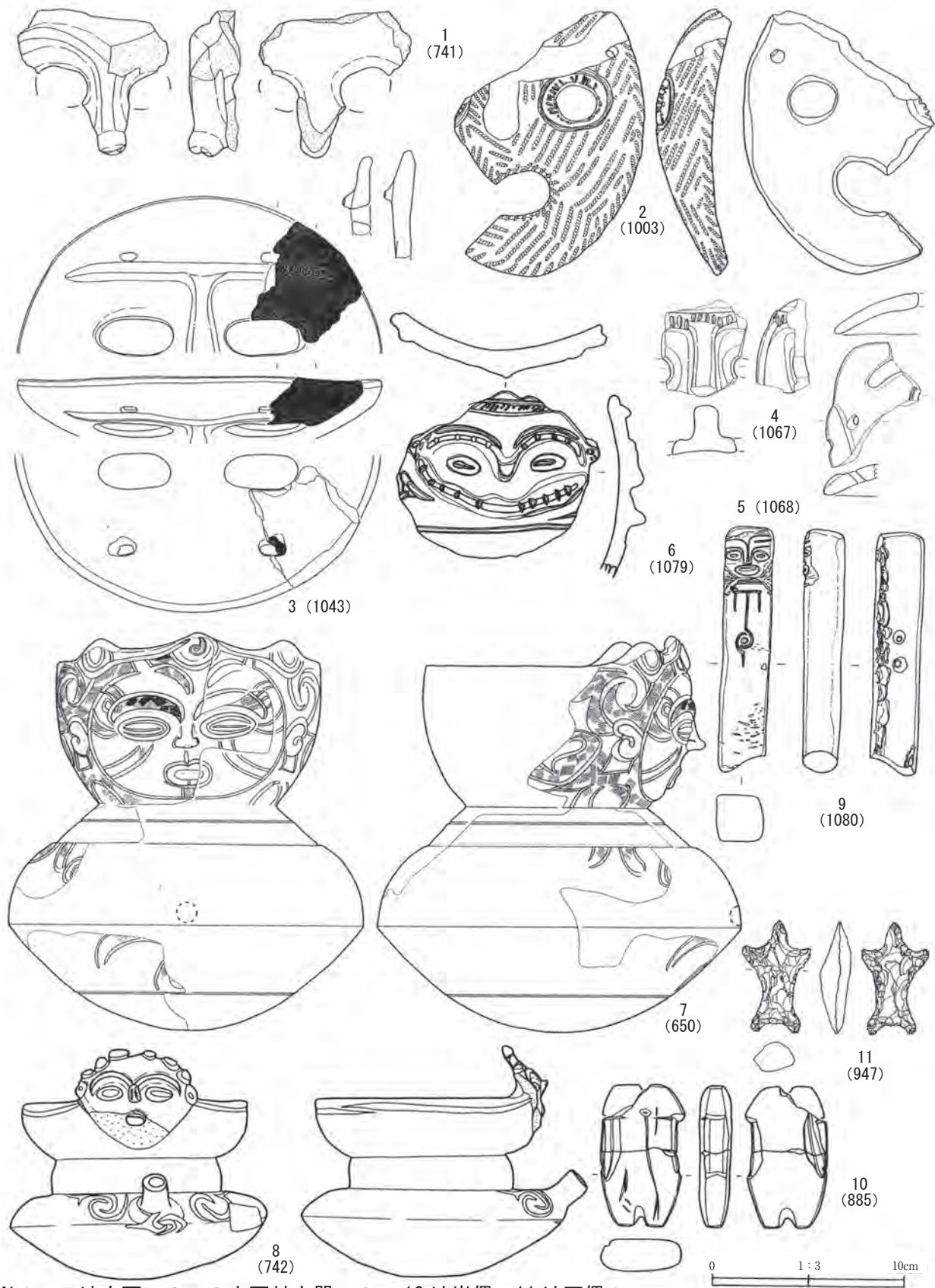








No.	県	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存率	現長 cm	接合 赤	附着物 黒	材質 (つくり製作)	出土 位置	遺跡 立地	評価	掲載箇所	備考
1046	宮	北小松	岩版	A?	楕円形・5類	略完	6.5			凝灰岩	沖積	掘?	県教14→156図8	表対向多重弧線1段。裏無文。厚さ1.5cm	
1047	宮	北小松	岩版	後末?	楕円形・非KO	4/5	5.4			凝灰岩	沖積	掘?	県教14→169図4	表裏正中線。片面目状表現。厚さ2.6cm	
1048	宮	北小松	岩版?	～弥前	楕円形・非KO	完形	7.6			凝灰岩	沖積	掘?	157図11	[線刻線]。線刻擦痕→未成品? 註46	
1049	宮	北小松	岩版?	～弥前	楕円形・非KO	略完	8.5			凝灰岩	沖積	掘?	県教14→159図3	中央一周線。両端太い線刻多。厚さ2.5cm	
1050	宮	北小松	線刻線?	～弥前	楕円球状・文様多	2/3	10.8			凝灰岩	沖積	掘?	県教14→260図2	多重平行線。同心円など充填	
1051	宮	北小松	土版	A?	隅丸方形・5類	1/4	5.3			文様側面線く	沖積	掘?	県教14→49図3	表裏、正中線盲孔多重弧線。厚さ1.9cm	
1052	宮	北小松	土版	A?	?・5類	破片	5.4				沖積	掘?	県教14→49図4	表裏多重弧線。厚さ1.9cm	
1053	宮	北小松	土版	A?	隅丸方形・5類	1/6	4.7			隅貫通孔	沖積	掘?	県教14→135図3	表裏正中線多重弧線。刻目列。註47	
1054	宮	北小松	土版	A?	楕円形・5類?	破片	5.5	○		隅貫通孔	沖積	掘?	県教14→135図4	表裏正中線端円形窪み。多重弧線? 註48	
1055	宮	北小松	★元土版	A?	?・5類?	小片	4.5			再利用品	沖積	掘?	15	円盤状土製品。多重弧線? 厚さ1.4cm	
1056	宮	北小松	土版	A?	方形・5類	破片	3.9				沖積	掘?	県教14→137図2	両面多重弧線。側面沈線。厚さ1.1cm	
1057	宮	北小松	土版	A?	長方形・5類	破片	4.4				沖積	掘?	県教14→138図1	両面正中線多重弧線。片面盲孔。厚1.2cm	
1058	宮	北小松	土版	A?	楕円形・5類?	破片	4			両面端刻目	沖積	掘?	県教14→138図2	両面、正中線盲孔多重弧線。厚1.3cm	
1059	宮	北小松	土版	～弥前	脚長楕円形・6類	完形	5.2			重さ?	沖積	掘?	236図10	表裏正中線刻列多重平行線。厚1.2cm	
1060	宮	北小松	土版	A?	長方形・5類	1/6	6.3			重多重線	沖積	掘?	236図11	表裏正中線多重弧線。側面沈線。厚1.3cm	
1061	宮	北小松	土版	A?	楕円形・5類?	3/10	5.1			厚さ1.3cm	沖積	掘?	236図12	表裏正中線多重弧線。表正中線刻目列	
1062	宮	北小松	土版	A?	長方形・5類	破片	7.7	○			沖積	掘?	県教14→239図1	表裏多重弧線。側面沈線。厚さ1.3cm	
1063	宮	北小松	土版	A?	脚長隅丸方形・5類	破片	7			隅貫通孔	沖積	掘?	県教14→258図3	表裏多重弧線。厚さ1.3cm	
1064	宮	北小松	正中中空	C2中?	頭突出脚円形	9/10	13.2		註49	中空	沖積	掘?	県教14→235図1	乳房。貫通孔。多重C字文。註49	
1065	宮	北小松	動物形	～弥前	[クマ]・顔破片	破片	3.7			耳貫通孔	沖積	掘?	県教14→137図3	目口凹。鼻孔刻目	
1066	宮	北小松	動物突?	～弥前	[クマ]・顔破片	破片	3.6			[動物形]	沖積	掘?	137図13	頭頂二股(裏線)3。目口凹。耳刺突	
1067	宮	摺萩	土面	後末頃	流涙型・顔中心片	小片	4.7			裏浅く凹	掘?	掘?	県教90→576図6	鼻高く貼付。肩刻目列。「大洞C2式旧段階」	
1068	宮	摺萩	土面?	?	流涙?・耳付近片	小片	4.8			縁貫通孔	掘?	掘?	県教90→576図7	唇低い。耳?貼付。横貫通孔。註50	
1069	宮	摺萩	岩版	～A?	隅丸方?・?	小片	3.5			凝灰岩	掘?	掘?	県教90→595図2	表裏曲線文意匠不明。裏無文? 厚1.1cm	
1070	宮	摺萩	岩版	C1?	隅丸方形・3類?	1/8	9.1			凝灰岩	掘?	掘?	県教90→595図4	表裏多重C字文。厚さ2cm	
1071	宮	摺萩	線刻線	～A?	不整形?	欠損	8.8			凝灰岩	掘?	掘?	県教90→595図1	擦痕状(意匠不明)。盲孔	
1072	宮	摺萩	線刻線	～A?	不整形?	完?	6.1			凝灰岩	掘?	掘?	県教90→595図3	表裏側面多重平行線。厚一部不均質。2.3cm	
1073	宮	摺萩	土版	A?	隅丸長方形・5類?	2/3	10.9	●		貫通孔	住覆	掘?	県教90→577図1	表裏、正中線、多重弧線向き逆★3段。註51	
1074	宮	摺萩	土版	A?	隅丸長方?・5類?	1/3	3.5			側面沈線	住覆	掘?	県教90→577図2	表裏、正中線、多重弧線向き逆★。厚1.3cm	
1075	宮	摺萩	土版	A?	楕円形・6類	一欠	6				住覆	掘?	県教90→577図3	表裏正中線。対向多重C字文。註52	
1076	宮	摺萩	土版	A?	長方形?・5類?	1/6	4.5			側面刻目列	掘?	掘?	県教90→577図4	表裏対向多重弧線? 厚さ1.6cm	
1077	宮	摺萩	土版?	～A?	楕円形・非KO	7/9	5.8				掘?	掘?	県教90→577図5	表乳房弧線。裏意匠不明文様。厚1.3cm	
1078	山	宮の前	人面土器	瘤II?	異形注口の一部	欠損	9.8			肩鼻Y字状	中	掘点	県埋95→90図642	顔逆三角形。刻目隆帯瘤。タスキ掛け状文	
1079	山	宮の前	人面土器	～初?	器種?・非突起	破片	8.6			肩弧状	中	掘点	県埋95→111図66	★破片周囲調整加工。肩隆帯刻目	
1080	山	宮の前	岩偶	～初?	角棒状	欠損	12.7			石質?	中	掘点	県埋95→124図1	胸に文様	
1081	山	宮の前	岩版?	BC?	丸い石槍?・2類?	欠損	4.4			石質?	中	掘点	県埋95→124図2	扁平礫使用。表裏表現。裏線刻。厚さ0.7cm	
1082	山	宮の前	岩版?	～A?	楕円形・非KO	欠損	8.3			軽石	中	掘点	県埋95→124図3	[岩偶]。表裏正中線。額土字状陰刻	
1083	山	宮の前	初期岩版	～B1?	三角形?・非KO	欠損	5.2			石質?	中	掘点	県埋95→124図4	表裏通孔2に絡む三叉文。裏無文。厚1.2cm	
1084	山	宮の前	初期岩版	～B1?	三角形?・非KO	破片	4			石質?	中	掘点	県埋95→124図5	表裏凹形文に絡む文様。厚さ0.6cm	
1085	山	宮の前	岩版	～C1?	?・非KO?	小片	3.2			石質?	中	掘点	県埋95→124図6	表正中線(?)文。裏二重C字。入組文。厚1.2cm	
1086	山	宮の前	岩版	BC?	?・2類?	小片	3.6			石質?	中	掘点	県埋95→124図7	C字文。裏面不明	
1087	山	宮の前	岩版	～C1?	?・非KO?	破片	4.5			石質?	中	掘点	県埋95→124図8	表裏曲線文意匠不明。厚さ1.3cm	
1088	山	宮の前	岩版	A?	楕円形・5類?	一欠	8.4			石質?	中	掘点	県埋95→124図9	表裏正中線、逆多重弧線?★厚さ3.4cm	
1089	山	宮の前	岩版	～C2?	隅丸方?・非KO?	破片	4.5			石質?	中	掘点	県埋95→124図10	表裏の字状文。厚さ0.7cm	
1090	山	宮の前	岩版	A?	隅丸方形?・5類	破片	5.6			石質?	中	掘点	県埋95→124図11	表裏正中線多重弧線。「被熱」。厚1.7cm	
1091	山	宮の前	岩版	A?	長楕円形・5類	3/4	8.7			石質?	中	掘点	県埋95→125図12	表裏正中線★孔。表対向多重弧。厚1.7cm	
1092	山	宮の前	岩版	C1?	?・3類?	小片	3.3			石質?	中	掘点	県埋95→125図16	渦巻文。裏面剥落?	
1093	山	宮の前	岩版	C2?	?・4類?	破片	5			石質?	中	掘点	県埋95→125図17	表裏渦巻文。厚さ2.6cm	
1094	山	宮の前	岩版	C1～2?	楕円形・3～4類?	完形	11.1			石質?	中	掘点	県埋95→128図65	表正中線両端盲孔。裏中央渦巻文。註53	
1095	山	宮の前	岩版?	～A?	方形?・非KO	完?	5.8			石質?	中	掘点	県埋95→125図13	表裏盲孔。「被熱で文様消失?」。厚1.7cm	
1096	山	宮の前	岩版?	～A?	楕円形?・非KO	破片	6			石質?	中	掘点	県埋95→125図14	表裏無文。「被熱で文様消失?」。厚さ2cm	
1097	山	宮の前	岩版?	A2?	?・6類?	小片	5.2			石質?	中	掘点	県埋95→125図15	正中線多重平行線。裏剥落?	
1098	山	宮の前	土版	C1?	楕円形・3類	一欠	11.6				中	掘点	県埋95→110図43	対向C字文ほか。厚さ2.4cm	
1099	山	宮の前	土版	A?	楕円形・5類	1/3	5.9			厚さ1.3cm	中	掘点	県埋95→110図44	表正中線対向多重弧線。裏意匠不明	
1100	山	宮の前	土版	A?	脚長方形・5類	破片	5.8			厚さ1.3cm	中	掘点	県埋95→110図45	表裏正中線多重弧線。側面沈線直交刻目	
1101	山	宮の前	★元土版	A2?	?・6類	小片	5			厚さ1.5cm	中	掘点	県埋95→110図47	円盤状土製品。表裏多重C字文	
1102	山	宮の前	土版	A2?	楕円形・6類	1/2	5.3			厚さ0.8cm	中	掘点	県埋95→110図48	正中線。表裏対向多重C字文。側面沈線	
1103	山	宮の前	土版	A2?	楕円形・6類	1/2	8.3			厚さ0.8cm	中	掘点	県埋95→110図50	表裏、多重C字文、細刺突。貫通孔?	
1104	山	宮の前	土版?	～A?	?・非KO?	細片	3.8				中	掘点	県埋95→110図46	[土版]。板状。表裏無文? 厚さ0.9cm	
1105	山	宮の前	土版?	～A?	円形基調・非KO	破片	4.3			厚さ0.8cm	中	掘点	県埋95→110図49	装身具? 表裏文様意匠不明。側面沈線	
1106	山	宮の前	正中中?	C1??	楕円形基調片面	破片	6.5			中空	中	掘点	県埋95→111図65	岩版3類に似た入組文。突起	
1107	山	宮の前	動物突?	A1?	深鉢口縁部突起	完形	2.5			土器は破片	中	掘点	県埋95→111図69	頭頂二股。キツネ?抽象的。目?沈線	
1108	山	宮の前	岩版	A?	?・5類?	小片	3.6			砂岩	中	掘点	県埋99→122図17	表裏多重弧線?裏銀歯文。厚さ1.3cm	
1109	山	宮の前	岩版?	BC?	?・2類?	小片	6			シルト岩	中	掘点	県埋99→122図25	C字文。厚さ1.2cm。「三脚石製器」	
1110	山	作野	岩偶?	～A?	自然礫に顔線刻	完形	8.4			泥岩質	扇頂	掘点	県教84→47図28	[層→C2式]。後頭部線刻。板状。厚0.8cm	
1111	山	作野	岩版	A?	?・5類?	破片	6			凝灰岩	扇頂	掘点	県教84→47図29	表裏多重弧線(側面文様線く)。厚1.9cm	
1112	山	作野	線刻線?	～A?	自然礫に線刻	?	6.5			凝灰岩	扇頂	掘点	県教84→49図62	片面×、片面多重平行線	
1113	山	作野	美々中空	B1古?	紡錘形に頭、ヒレ付	頭欠	12			中空	扇頂	掘点	県教84→44図6	胸下腹貫通孔。表裏中央ボタン貼付。三叉文	
1114	山	作野	岩版	A?	卵形?・5類	7/10	4.8			泥岩	扇頂	掘点	県埋11→66図2	表正中線対向多重弧線2段。裏無文。厚0.8cm	
1115	山	作野	線刻線?	～弥前	破片	破片	3.5			泥岩	扇頂	掘点	県埋11→66図6	格子状線刻。砥石?	
1116	山	作野	岩版	A?	丸い石槍状・5類	破片	5.1			凝灰岩	扇頂	掘点	県埋12→70図9	表裏正中線。表盲孔対向多重弧線。厚2cm	
1117	福	荒屋敷	線刻線	～弥中	自然礫に線刻?	欠損	31			泥質凝灰岩	段丘	半掘	三島90→281図2	短冊形の石。鋸歯文と直線の組み合わせ?	
1118	福	荒屋敷	土版	C2?	楕円形・非KO	9/10	8.9			人面付き	段丘	半掘	三島90→212図10	中央貫通孔4。の字文? 厚2.2cm	
1119	福	荒屋敷	土版	A?	?・5類?	小片	3.3			厚さ1.4cm	段丘	半掘	三島90→213図4	表裏正中線多重弧線。正中線刻列	
1120	福	荒屋敷	土版	C2?	?・4類?	破片	6.8			厚さ2.6cm	段丘	半掘	三島90→213図5	表裏正中線渦巻文。正中線刻列	
1121	福	荒屋敷	土版?	C2?	楕円形・非KO	完形	6.8	○		厚さ1.4cm	段丘	半掘	三島90→212図11	片面の字文? 片面無文。やや上貫通孔2	
1122	福	荒屋敷	土版?	C2?	楕円形・非KO	完形	5.4			人面付き	段丘	半掘	三島90→213図1	目貫通孔。類と裏渦巻。側面沈線。厚1.4cm	
1123	福	荒屋敷	土版?	～弥中	円形・非KO	一欠	4.5			厚さ1.2cm	段丘	半掘	三島90→213図2	両面十字意匠。刺突多。貫通孔2。蓋様	
1124	福	荒屋敷	土版?	～弥中	楕円形・非KO	完形	5.2			厚さ1.1cm	段丘	半掘	三島90→213図3	表裏、多重平行線、両端刺突充填	

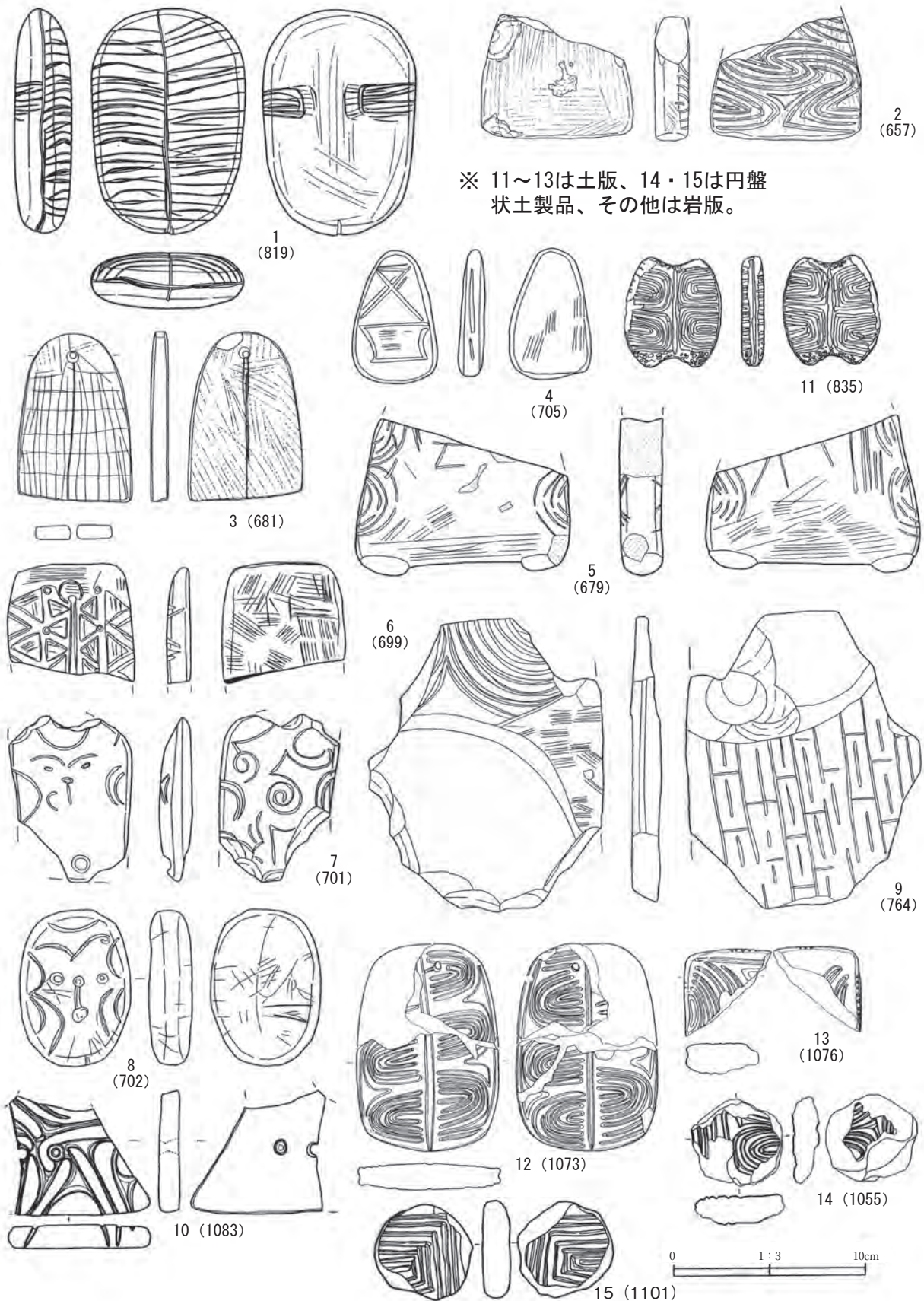


※ 1～5は土面 6～8人面付土器 9～10は岩偶 11は石偶？

1・7・8：川原平(1)(青森)、2：宇登(岩手)、3：北小松(宮城)、4・5：摺萩(宮城)、6・9：宮の前(山形)、10：八幡(青森)、11：是川中居(青森)

第1図 土面、人面付土器、岩偶、石偶？

(括弧内数字が第6表の番号=図版出典)



1～9：川原平(1) (青森)、10：宮の前 (山形)、11：薬師 (青森)、12・13：摺萩 (宮城)、14：北小松 (宮城)、15：宮の前 (山形)

第2図 岩版、土版、土版利用の円盤状土製品  
(括弧内数字が第6表の番号＝図版出典)

# 岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（2）

## －東北地方北部の赤彩土器を探る－

米田 寛・高橋静歩・河本純一

本稿は、昨年度刊行された当センターの紀要36号掲載論文の続編である。引き続き古墳時代～平安時代の赤彩土器の集成を行い、遺跡分布、土器編年、赤彩土器観察、胎土観察を検討し資料蓄積を目指した。今回は岩手県内の資料をより深く理解するため、隣県の青森・秋田・宮城各県から出土した一部の赤彩土器についても観察を行い、比較資料とした。

### 1. はじめに

筆者らは、当センター紀要36号掲載の「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（1）」（米田・高橋・河本・佐々木・酒井2017；以下、前稿または前稿2017と略す。）において、遺跡分布、土器編年、赤彩塗布観察、胎土観察、顔料分析・顔料製作実験を行った。本稿は、前稿に引き続き更なる資料蓄積を目的とする。今年度の観察資料は北上市中村（北上川流域）（註1）、同市牡丹畑・本宿Ⅲ・江釣子古墳群等（和賀川流域）、奥州市沢田（胆沢川流域）を主体とし、さらに隣県の資料についても実見した。その成果を合わせて報告する。なお、顔料製作と顔料成分分析の追加成果については紙面の都合上公表しない。次稿以降に紙幅を確保し公表する。本稿は前稿と同様に分担執筆し、2節分布・土器編年及び訂正事項を米田、3節色調・顔料塗布面の検討を高橋、4節胎土観察を河本が担当した。まとめは意見調整し、米田が執筆した。

### 2. 分布・土器編年及び訂正事項（図1・2）

主に県内の5世紀～9世紀前半までを対象とし、参考資料として一部の4世紀資料を検討した。なお、前稿での誤植等は、その都度指摘し修正する。これまで彩色文を前提とした研究のため、一々断らず等間隔縦位太条線、集合縦位細条線と表現していたが、「線」は線刻文のイメージがあり紛らわしいので、本稿から「彩色線」であることを強調し、等間隔縦位条線→彩色等間隔縦位条線、集合縦位細条線→彩色集合縦位細条線と記述する。

#### （a）岩手県内陸部

前稿で示した分布図に追加する資料は、雫石町仁沢瀬Ⅳ（報文では仁沢瀬Ⅱ）、滝沢市湯舟沢・仏沢Ⅲ・室小路7、矢巾町館畑、花巻市中嶋・古館Ⅳ・下坂井Ⅱ、奥州市北鶉ノ木である。仁沢瀬Ⅳは5世紀後半～6世紀前半の土壙墓出土資料、湯舟沢は7世紀後半～8世紀前半の遺構外出土資料、仏沢Ⅲは5世紀後半～6世紀前半の遺構外出土資料、室小路7・古館Ⅳ・下坂井Ⅱは7世紀後半～8世紀前半の竪穴建物出土資料、館畑は8世紀後半～9世紀の溝、中嶋は8世紀後半～9世紀の遺物包含層出土資料、北鶉ノ木は8世紀後半～9世紀の竪穴建物出土資料である。

今年度の県内陸部資料で実見したのは、県北域の一戸町大平、県央の雫石町仁沢瀬Ⅳ、滝沢市湯舟沢・仏沢Ⅲ・室小路7、県南の花巻市中嶋、北上市本宿羽場・藤沢・牡丹畑・妻川・本宿Ⅲ・八幡・江釣子古墳群五条丸支群・塚、奥州市胆沢区沢田である。

訂正事項は、前稿で5世紀後半～6世紀初頭の基準資料として取り扱った石田Ⅰ・Ⅱ34号竪穴建物出土赤彩壺（報文掲載No.537）について、赤彩土器であることを示す黒丸「●」が付されていない。また、前稿の遺跡分布図で8世紀後半以降としていた牡丹畑資料のなかで、今年度実見した牡丹

畑SI007の土器様相を8世紀前半と認識した。よって、本稿図2（7世紀後半～8世紀前半）にドットを追加した。

#### （b）岩手県沿岸部

岩手県沿岸部の遺跡分布に追加はない。沿岸部で実見したのは、中部域の宮古市沼里と釜石市麓山である。麓山は、報文掲載1個体（口縁部片+胴部片）以外にも別個体の赤彩土器2点を確認した。

トピックとしては、宮古市沼里の報告書が刊行され、沼里5号竪穴建物出土赤彩壺について重要な発見があった。この土器は、北上川流域の花巻市古館Ⅱ・北上市千苺・同中村出土赤彩土器と同類の胎土構造であることが確認された（河本2018、本稿4節）。この資料は、前稿で8世紀後半の様相とした彩色集合縦位細条線が口縁部に描かれる資料で、沿岸部では山田町間木戸Ⅴ、釜石市麓山で同文様が出土している。分布論のみならず編年研究にも貴重な資料であり、個別に構築された内陸部と沿岸部の土器編年を連絡する懸け橋的資料である。これまで須恵器研究が明らかにしてきた生産地と消費地の関係性や背後にある集団関係論についても、赤彩土器が活用できるものと期待する。また、前稿で確認済みの遺跡分布上の特徴として、7世紀後半以降の資料については、古代の閉（幣伊）村範囲とされる上閉伊郡・下閉伊郡内に集中することが挙げられる。特に宮古市津軽石川下流域と山田湾沿岸が質量ともに多い。これに北上川流域との交流痕跡が明らかとなったことで、集落論・集団論の展開も可能になると考える。

訂正事項として、前稿の分布図上で釜石市麓山の位置を中心市街地の甲子川河口付近にプロットしたが、誤植である。麓山が位置する鶴住居地区に訂正した。また、前稿の表7赤彩土器観察表には大植町夏本（8世紀後半～9世紀）の観察データが未掲載だったので追加した。

#### （c）岩手県外の主な赤彩土器

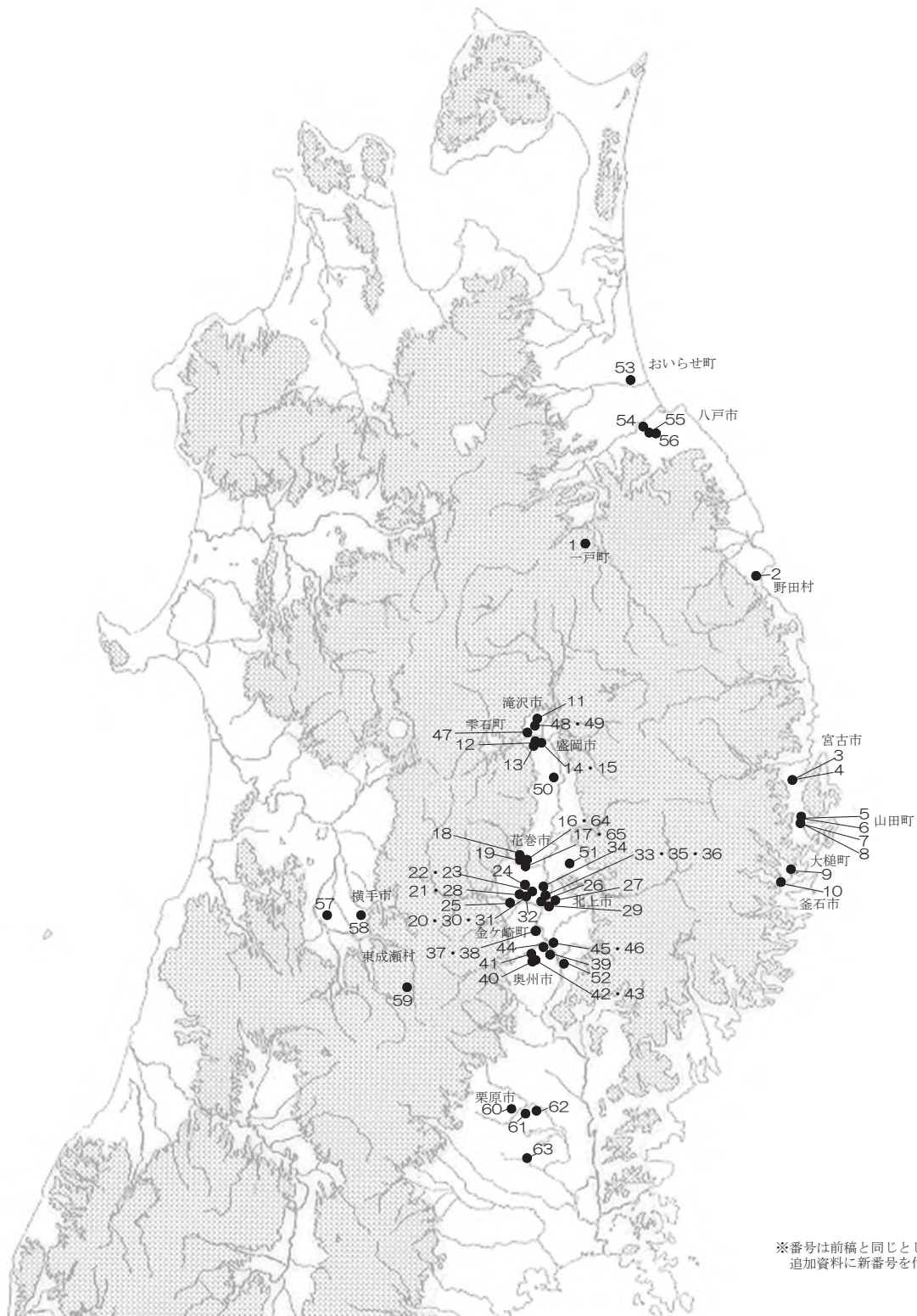
前稿では県外遺跡を分布図に示さなかったが、赤彩土器出土遺跡として青森県八戸市田面木、秋田県横手市釘貫（7世紀末～8世紀初頭）、同県東成瀬村トクラ（7世紀後半～8世紀前半）（註2）を紹介した。今年度は、青森県おいらせ町阿光坊古墳群（7世紀前半）、同県八戸市田面木・音喜多コレクション（ニッ屋地区）（7世紀後半～8世紀前半）、秋田県横手市田久保下（6世紀前葉～後半）、宮城県栗原市上戸（8世紀）・伊治城跡（4世紀・8世紀後半～9世紀）・泉谷館跡（7世紀前半）の資料を実見する機会を得たので、図1・2に遺跡位置を、表11に観察報告をまとめた。なお、隣接する栗原市糖塚遺跡資料（8世紀後半～9世紀）については未実見なので、具体的な考察は控える。東京都多摩市上っ原赤彩土器は、「俘囚・夷俘シンポジウム」での報告によれば本県の9世紀第1～2四半期の特徴を持っているという（註3・4）。また、長野県茅野市上原城下町遺跡においても本県出土の古代赤彩土器と同特徴の資料が紹介された（杉本2017、平野2017）。

#### （d）遺跡分布

赤彩土器出土遺跡の分布は、前稿の成果に県外参考資料を追加した。東北地方北部では、4～7世紀前半までの遺跡数は少ない。7世紀後半から遺跡数が増加し、8世紀後半～9世紀は北上川流域を中心に激増する。

4世紀～6世紀までは、岩手県中央部の雫石川下流域、岩手県南部の胆沢扇状地、秋田県横手盆地、太平洋沿岸部の青森県馬淵川下流域などに認められる。いずれも広い平野部に占地し、時期別では多少の粗密があるものの、現代まで一貫して人々の居住痕跡が確認される地域である。

7世紀は新たな展開がある。それまで赤彩土器の出土量が少ない地域でも認められ、なかでも彩色線文様が発生し、岩手県豊沢川下流域、和賀川下流域、雫石川下流域南部、沿岸部では津軽石川下流域と山田湾沿岸、青森県相坂川下流域・馬淵川下流域で出土する。また、山間部に位置する秋田県南



- |         |          |         |           |          |           |         |
|---------|----------|---------|-----------|----------|-----------|---------|
| 1 大平    | 11 湯舟沢Ⅲ  | 21 塚岡崎  | 31 八幡     | 41 中半入   | 52 北鶴ノ木   | 61 上戸   |
| 2 古館山   | 12 志波城跡  | 22 鳩岡崎  | 32 江釣子古墳群 | 42 石田    | 53 阿光坊古墳群 | 62 糖塚   |
| 3 津軽石大森 | 13 新堰端   | 23 鳩岡崎上 | 33 五条丸支群  | 43 石田Ⅰ・Ⅱ | 54 田面木    | 63 泉谷館跡 |
| 4 沼里    | 14 台太郎   | 24 藤沢   | 34 尻引     | 44 膳性    | 55 音喜多コレ  | 64 古館Ⅳ  |
| 5 間木戸Ⅰ  | 15 野古A   | 25 岩崎台地 | 35 秋子沢    | 45 新川Ⅲ   | (ニッ屋地区)   | 65 下坂井Ⅱ |
| 6 間木戸Ⅴ  | 16 古館Ⅱ   | 26 牡丹畑  | 36 千苜     | 46 宮地    | 56 田向冷水   |         |
| 7 沢田Ⅲ   | 17 下坂井Ⅰ  | 27 菅田   | 37 中村     | 47 仁沢瀬Ⅳ  | 57 釘貫     |         |
| 8 房の沢Ⅳ  | 18 法領    | 28 妻川   | 38 上餅田    | 48 仏沢Ⅲ   | 58 田久保下   |         |
| 9 夏本    | 19 熊堂古墳群 | 29 立花南  | 39 石田     | 49 室小路7  | 59 トクラ    |         |
| 10 麓山   | 20 本宿羽場  | 30 本宿Ⅲ  | 40 佐野原    | 50 館畑    | 60 伊治城跡   |         |
|         |          |         | 41 沢田     | 51 中嶋    |           |         |

図1 東北地方北部の主な古代赤彩土器出土遺跡



部の成瀬川上流にも局所的に認められる。なお、宮城県大崎平野の栗原市泉谷館跡出土赤彩壺は彩色線文様ではない。外面の胴部中位に顔料塗布しない面を残し、一見、横位条線に対応するような文様効果を得ているようである。これを弥生後期～古墳前期に見られる塗布面と非塗布面を交互に横位配置する赤彩土器の系統と見なすか、7世紀に出現した彩色線の影響を受けたとするかで、今後の議論の方向性は変わってくる。前者の場合は、古墳時代中期～後期資料から抽出できなければ系統的継続性を見出せないが、今のところ県内資料にはない。400年近く前の文様に系統を求めるのは理論の崩壊を招き、現実的ではないと考えるが、未検索資料が多いため判断を保留する。後者の場合は、7世紀前半の栗田土器様式圏成立と密接に関わる問題として検討していくことになる。現段階では資料不足で判断出来ない状況である。一方、非彩色線赤彩土器は、引き続き胆沢扇状地、雫石川下流域北部、横手盆地に認められ、太平洋沿岸部では野田湾沿岸部にも存在する。7世紀後半～8世紀前半は、前時期同様に外面塗布・内面黒色処理技術の赤彩土器が出土する地域と、彩色線赤彩土器が出現している地域がある。

8世紀後半～9世紀は、さらに出土地域が増加し、馬淵川上流域や沿岸部の鶴住居川下流域にも認められる。さらに関東・信越方面でも出土するなど、その社会的背景が注目される。この時期は広範囲に分布する以外にも特異な分布を示す。伊治城跡とその周辺、古代胆沢郡域の縁辺部（特に北上川河岸段丘面や自然堤防上）、志波城跡とその周辺である。共通項は城柵設置地域である。前稿でも紹介したが、8世紀後半、のちに古代胆沢郡域となる北上川河岸段丘面縁辺部に集落遺跡が急増する（高橋千2016）。これを新興勢力の台頭と認識し、同時期の古墓公阿弋流為の活躍と関連するとの意見（伊藤2016）もある。

#### （e）編年の見直し

編年は、前稿で5世紀後半～6世紀初頭、6世紀前葉～6世紀後半、7世紀前半、7世紀後半～8世紀前半、8世紀後半～9世紀の5時期区分とした。未だⅠ～Ⅴ期等の画期を設けない理由は、下記の通りである。

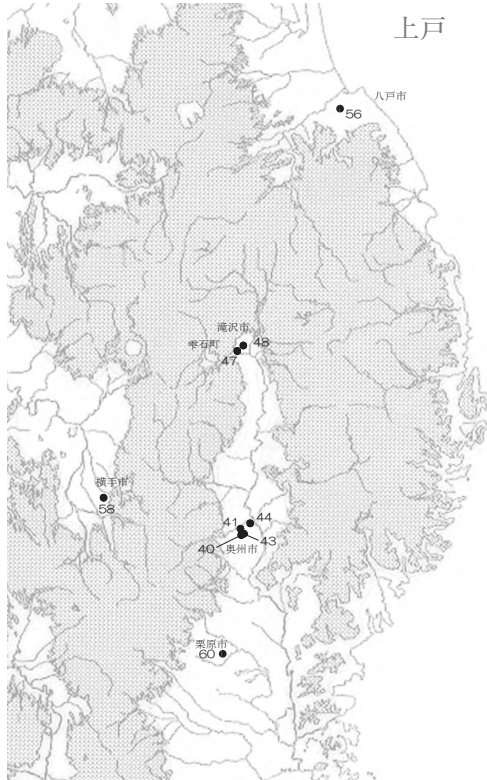
- ①数少ない県内の4世紀後半～5世紀中葉の資料（特に奥州市中半入）について未実見である。
- ②遺跡数が少ない6～7世紀前半の資料（特に奥州市膳性・今泉等の胆沢扇状地出土資料）について未実見資料が複数ある。
- ③質量ともに重要な内容を持つ山田町沢田Ⅲ遺跡の報告書刊行を待っている。
- ④墓域と集落での顔料塗布の状況や文様要素の差異について未検討である。

土器を「赤く塗る」という行為がどのような変遷を辿るのか今後も検討を重ね、次稿以降に大別・細別の編年を提示したい。

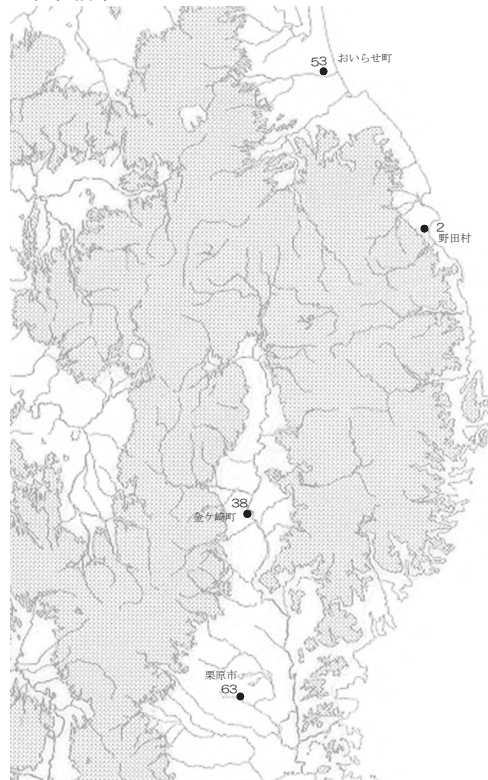
今年度実見した資料は、表11に掲載した。以下の年代観に位置付ける。

- |             |  |
|-------------|--|
| 4世紀～5世紀中頃   | ：伊治城跡SD284・SD320・SD834、沢田1号土坑  |
| 5世紀後半～6世紀初頭 | ：仁沢瀬Ⅳ、仏沢Ⅲ、沢田   |
| 6世紀前葉～6世紀後半 | ：田久保下  |
| 7世紀前半       | ：阿光坊古墳群、泉谷館跡   |
| 7世紀後半～8世紀前半 | ：田面木、音喜多コレクション（二ツ屋地区）、湯舟沢、室小路7<br>江釣子古墳群五条丸支群SZ06、藤沢、牡丹畑SI007                |
| 8世紀後半～9世紀   | ：大平、中嶋、中村、牡丹畑、本宿羽場、本宿Ⅲ、妻川、塚、藤沢、<br>八幡、沼里、夏本、麓山、伊治城跡SI490・SI491・SI792・SB704A、 |

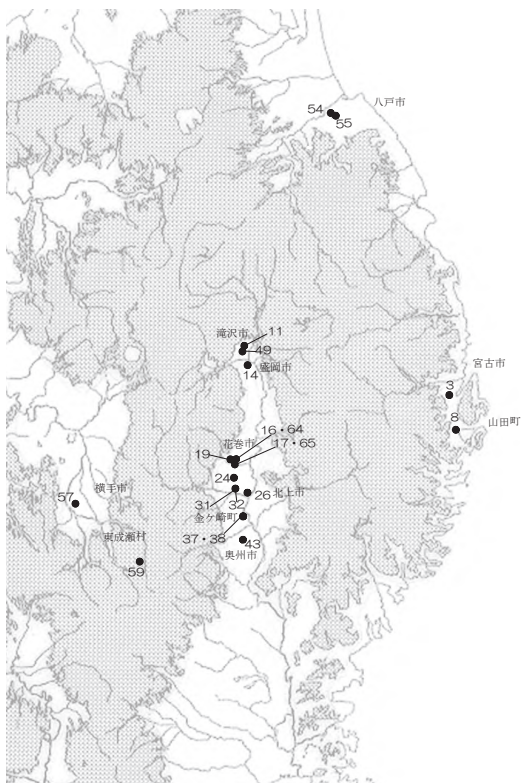
5世紀～6世紀



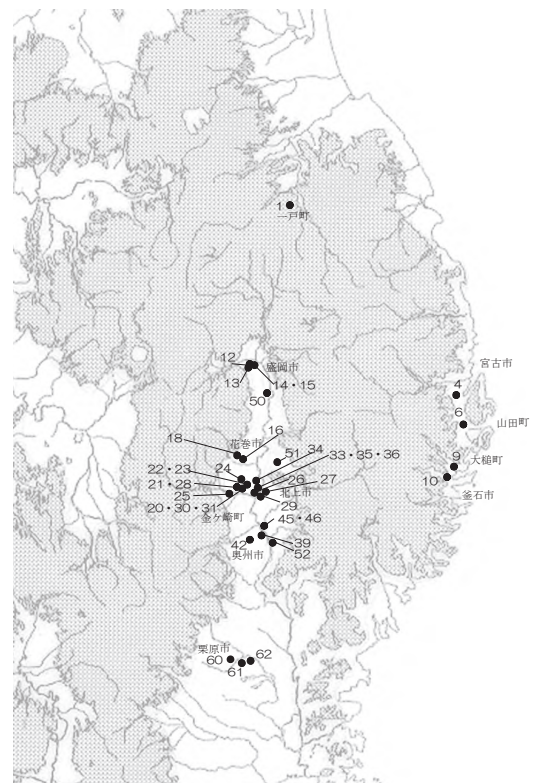
7世紀前半



7世紀後半～8世紀前半



8世紀後半～9世紀



※遺跡番号は図1の番号に対応する

図2 東北地方北部の主な古代赤彩土器出土遺跡（時期別分布）

岩手県内出土古代赤彩土器の画期は、前稿の成果から内外面塗布（5世紀以降：赤色主体）→外面塗布・内面黒色処理（5世紀後半～：赤色主体）→外面胴部全面+簡素な彩色線（7世紀前半～：赤褐色主体）→外面胴部全面+彩色等間隔縦位条線（7世紀後半～：赤褐色主体）→外面胴部全面+彩色集合縦位条線（8世紀後半～9世紀：赤褐色～明赤褐色・橙色主体）である。

また、図3に横位線・縦位線の変遷案を示した。7世紀以降の資料で横位線と縦位線に着目し、土器様相に照らして変化を追った結果（前稿2・3節2017）、口縁部彩色線文様が単純→集合（複雑）→退化と変遷する。彩色線文様は、横位・縦位の直線文様のほかに、円文や連続三角形文など多彩な文様があるが、変遷を追うだけの数量が確保されていないので、一先ず直線文様を主軸にした。この変遷案の問題は、前述した7世紀前半の資料不足にある。外面赤彩範囲に横位赤彩帯が存在する泉谷館跡資料が彩色線文様効果を持つものと判断し難く、系統に乗せることが出来るか問題が残る。つまり、7世紀前半文様→7世紀後半文様と単純に評価できるか、資料の増加を待ちたい。また、彩色線の出自をどこに求めるかの問題もある。古墳文化の中で、彩色線による赤彩土器文化は本県を中心に存在する。考古学の基本は「土器は土器から」、「石器は石器から」であるが、資料集成の結果、残念ながら赤彩土器文様を別地域の土器から借用して論を組み立てるのは困難である。北海道島の続縄文文化に出自を求める意見（杉本2017）も提出された。ただし、北海道島の続縄文文化期のうち後北C2・D式土器の4世紀代は、赤彩土器が墓域を中心に存在する。北大I式土器、北大II式土器の5世紀以降は本州島古墳文化の影響で製作された赤彩土器が微量あるものの、この客体的赤彩土器が続縄文の基層文化とは見なし難い。彩色線が発生する前後の時期にあたる6～7世紀の一般的な北大III式土器、擦文土器に至っては、赤彩土器を見出せない（註5）。では、土器文化以外での赤彩文化を考えた場合、横穴式石室や横穴墓内に顔料で文様を描く装飾古墳、埴輪、石棺の線刻文等の墓制関連文様がある。石棺には蓋部に線刻梯子文（格子目状）が描かれる事例が豊富であり、装飾古墳には直弧文、同心円文、円文、連続三角文、梯子文、格子目文、動物文、人物文など幾何学文や抽象文が数多く描かれており（乙益編1974、小田ほか編1993）、本県の彩色線で表現された文様要素はほぼ古墳文化の中にある。全国の装飾古墳を参照（九州国立博物館online）すると6世紀末までにほぼすべての文様が出そろっているため、装飾古墳文様の影響をうけて彩色線文様が成立したとするならば、7世紀前半には本県の彩色線文様が横位線の単純な文様だけでなく、各種の複雑な文様を描いて良いはずだが、実際の県内資料は横位線→横位線（口唇塗布）+縦位線=格子目文→退化への変遷が想定されるし、円文と集合条線の組み合わせ（夏本、新堰端）や連続三角文（本宿III）など資料数の少ない文様は8世紀後半～9世紀である点は注意を要する。現段階で類似性を指摘できる赤色顔料文様は、多段を含む格子目文が宮城県涌谷町追戸横穴墓群A地区2号墓（7世紀後半以降：玄室塗布+羨道部格子目文・条線文）、同大崎市三本木の山畑横穴群15号墓（7世紀：玄室格子目文・同心円文）、連続三角文が福島県いわき市中田1号横穴（6世紀後半：横位条線区画内に連続三角文）、茨城県虎塚古墳（6世紀後半～7世紀前半：玄室天井部塗布+側壁に横位条線区画内に連続三角文）等である。概ね7世紀代の装飾古墳文様である。ただし、九州地方の色彩鮮やかな装飾古墳と異なり、東北南部～関東北部では単色（赤色）であり、さらに宮城県域では幾何学文や抽象文、福島県域では人物文や動物文が多い（乙益編前掲、菊地2015等）とされる。よって、一先ず宮城・福島県域の古墳文化文様を中心に本県の彩色線土器の系譜を探っていく方針である。これまでの赤彩土器集成結果からは、壺には横位条線+縦位条線による格子目文+胴部塗布（7世紀後半～）、脚付鉢・高坏には横位条線（7世紀前半）や格子目文（多段：7世紀後半～8世紀前半）を描き、8世紀中葉を境に細線化し、9世紀には伝成品を除いて線が粗雑化する（図3）。直線表現文様は時期ごとの土器様相とも相関が

あるので、編年的な指標に成り得ると考える。

なお、本県では横穴式石室や横穴墓の製作技術による積石古墳の分布域と赤彩球胴甕高密度分布域に相関がある（杉本2001・2017）と指摘されている。高橋（2017）によれば、江釣子古墳群の積石古墳は、福島・宮城等東北部の横穴式石室製作技術にその系譜が求められ、さらに追送可能な構造にも拘らず新規の墳墓を古い墳墓の上に造営しているという。この現象を理解するには、追送構造を理解している東北部から移民が流入したとするよりも、墳墓デザインの斬新さに飛びついた東北北部豪族が、東北部の技術集団との交流によって造営に至ったとするのが自然である。前稿（2017）で触れた栗岡式土器様式圏内の活発な人的交流の一端が墓制にも表れていると捉えておく。

土器様相、顔料塗布技術、顔料色調、一部の文様など、各要素の変遷が明らかになりつつあり、将来的には大別区分し、土器様式の変化を加味して細分可能か検討する。以下、時期別の特徴を改めて述べ、今後の見通しとする。

4世紀～5世紀中頃は、未だ県内の古墳時代前期～中期前葉の資料を実見していないため報文検索による見通しであるが、外面塗布あるいは内外面塗布である。

5世紀後半～6世紀初頭は、集落では5世紀後半から内面黒色処理技術が認められ、墓域では内面黒色処理資料はなく、坏・甕ともに外面塗布あるいは内外面塗布である。これは、隣接する奥州市胆沢区石田Ⅰ・Ⅱ（集落）と沢田（墓域）の成果である。

6世紀代前葉～後半は資料不足だが、隣県の成果も合わせると前時期と同じ技術的特徴と考える。

7世紀前半は6世紀代と同様資料不足だが、彩色横位条線2条のおいらせ町阿光坊古墳群と彩色横

推定年代	7世紀前半	7世紀後半～8世紀前半			8世紀後半～9世紀	
彩色線文様	横位太線	縦位太線による 胴部塗布との 連結(格子目文)	多段	細線化	・縦位線の集合あるいは 太線の縁取り位置に細線 ・集合単位増加で空白域減少	集合縦位線の 簡略化と塗布 の粗雑化
線描具	太筆・刷毛	細筆				
脚付鉢・高坏・壺類	口縁部文様					
	胴部・脚部塗布					
各遺跡出土赤彩土器	阿光坊	津軽石大森	五条丸支群	湯舟沢	沼里	上っ原2竪穴
	金ヶ崎町石田	古館Ⅱ	熊堂古墳群		中村S160	中村S127
	泉谷館跡		音喜多コレ		中村S150	中村S168
					中村S176	中村SX06
					中村S119	八幡

図3 7世紀以降の彩色線文様の変遷（横位・縦位線）

位条線1条の金ヶ崎町石田の脚付鉢や、横位無色帯をもつ泉谷館跡赤彩壺が認められる。東北地方において7世紀前半は、栗田土器様式文化圏の成立期である。東北北部集団と移民の受け入れ関係を念頭に置きながら、この時期に始まる彩色線文様について検討していかなければならない。

7世紀後半～8世紀前半は、石田Ⅰ・Ⅱ、室小路7の成果から、5世紀から続く外面赤彩・内面黒色処理技術が胆沢扇状地や雫石川下流域北部の集落で継続する。一方、豊沢川流域の古館Ⅱ、和賀川流域の江釣子古墳群では彩色縦位条線文様が描かれるようになる(註6)。古館Ⅱ・江釣子古墳群は横穴式石室製作技術集団との相関がある(杉本2017)と指摘されており、7世紀赤彩土器に見られる2者の存在が、系統別に把握できるか今後の検討課題である。

8世紀代では、北上川河岸の集落で彩色等間隔縦位条線と彩色集合縦位条線が主体を占めるが、和賀川流域では、本宿ⅢSI157A出土資料等の複雑な文様も存在する。また縦位条線は、8世紀前半までは太筆による彩色線であるが、中葉以降に細筆による彩色線が出現すると考える(図3)。8世紀後半以降は前時期に比べて赤彩土器の数量が増加する。

9世紀は、集落への須恵器供給量が増加し、土師器壺が担ってきた用途が須恵器広口壺・甕に置き換わっていく。時期を同じくして須恵器製作技術を用いて赤く焼き上げる土器も増加する。この現象に対応するように赤彩壺の製造は停止される。8世紀後半代は、器形が須恵器壺・甕類に特徴的な胴部最大径が上半部にある稜肩主体で彩色線文様も精緻であったのが、9世紀には撫肩が増加し、粗雑な筆塗り(中村報文Noa283・a545)となる。中村では8世紀末～9世紀初頭段階とされた第2段階AのSI68と第2段階BのSI27が該当し、この特徴を9世紀的と評価したい(図3)。ほかに坏外底面に「×」を書く赤墨書土器が存在し、彩色とは別目的の土器も発生する。また、徳丹城跡の先行官衙に伴い、西暦812年に埋め戻されたとされる館畑SD100(西野2001)から、赤褐色に焼成した後に赤色顔料を塗布した高盤が出土している(伊藤2010)。須恵系土師質土器(福田2017)の手法である。9世紀中葉以降の仏教関連遺跡とされる花巻市中嶋では底部回転糸切の赤彩坏が出土している。どちらも饗宴での使用が想定される。以上の年代から、壺・脚付鉢が担ってきた本県の赤彩土器文化は、9世紀初頭を境に衰退し、僅かに饗宴の場で坏を中心に継続する。そして器の赤彩文化は、土器から漆器へと収斂し、今日まで継続するのであろう。

### 3. 色調・顔料塗布面の検討

本節では、資料観察の結果から顔料色調と塗布面の様相について傾向を抽出し、H28年度観察結果と総合して検討する。

今年度の観察資料は、岩手県内の一戸町大平、雫石町仁沢瀬Ⅳ、滝沢市仏沢Ⅲ・湯舟沢・室小路7、花巻市中嶋、北上市中村・藤沢・江釣子古墳群五条丸支群・牡丹畑・本宿Ⅲ・本宿羽場・八幡・妻川・塚、奥州市胆沢区沢田、釜石市麓山である。また、岩手県外では青森県おいらせ町阿光坊古墳群、八戸市田面木・音喜多コレクション、秋田県横手市田久保下、宮城県栗原市上戸・伊治城跡・泉谷館跡の観察をした。さらに、昨年度に観察済みで報告書が刊行された宮古市沼里、そして前稿で未報告の大槌町夏本の資料を加えて考察する。なお、資料観察の方法は、前稿を参照されたい(前稿4節2017)。

#### (a) 顔料色調

色調の分類は表1のとおりである。前稿では、花巻市古館Ⅱ・法領・熊堂古墳群、北上市千苺、金ヶ崎町石田、奥州市石田Ⅰ・Ⅱ、宮古市津軽石大森、山田町間木戸Ⅴの資料から、顔料色調は5世紀後半～6世紀は赤色、7世紀～8世紀前半は赤色から赤褐色、8世紀後半～9世紀は明赤褐色から橙

色へ移行する傾向を示した（前稿4節2017）。また、赤彩土器赤色顔料のX線回折分析では、赤色顔料候補として赤色酸化鉄（ヘマトイト）と褐色酸化鉄（マグヘマトイト）が想定され、古代人が求める色が深い赤色から次第に赤褐色、明赤褐色、橙色へと明るくなることから、古い時期はヘマトイトの鮮やかな色調に拘っていたものが、新しい時期のベンガラ製作ではマグヘマトイトの色調で生成されても積極的に利用した可能性が指摘されている（前稿7節2017）。

表1 色調分類

分類	色 調
ア	赤色 (7.5R 赤～10R 暗赤、赤、赤褐)
イ	a 赤褐色 (2.5YR 暗赤褐色、赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色)
	b 明赤褐色 (5YR 赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色)
ウ	橙色 (2.5YR 橙～7.5YR 橙、にぶい褐色)

i) H29年度観察結果

以下に、観察結果を時期別にまとめて述べる。

【4世紀～5世紀前半】伊治城跡SD284・SD320・SD834、沢田1号土坑出土の5点があり、すべてア類赤色である。

【5世紀後半～6世紀初頭】仁沢瀬Ⅳ、仏沢Ⅲ、沢田出土の15点があり、その内訳はア類赤色13点、イ a 類赤褐色2点である。

【6世紀前葉～6世紀後半】田久保下出土の2点があり、ア類赤色1点、イ a 類赤褐色1点である。

【7世紀前半】阿光坊古墳群、泉谷館跡出土の3点があり、ア類赤色1点、イ a 類赤褐色2点である。

【7世紀後半～8世紀前半】田面木、音喜多コレクション、湯舟沢、室小路7、牡丹畑SI007、江釣子古墳群五条丸支群出土の11点があり、その内訳はア類赤色2点、イ a 類赤褐色5点、イ b 明赤褐色4点である。

【8世紀後半～9世紀】大平、中嶋、中村、藤沢、牡丹畑SI009、本宿Ⅲ、本宿羽場、妻川、八幡塚、沼里、夏本、麓山、上戸、伊治城跡SI490・SI491・SI792・SB704A出土の113点があり、その内訳はア類赤色12点、イ a 類赤褐色64点、イ b 類明赤褐色35点、ウ類橙色2点である。

ii) H28・29年度観察結果の検討

H28年度観察資料と合わせて考察する。2か年分の観察結果を統合して時期別傾向を図4に示した。6世紀後半まではア類赤色が主体である。7世紀前半の資料が少ないため明確でないが、7世紀後半以降にはア類赤色～イ類赤褐色に主体が移行し、8世紀後半～9世紀はイ a 類赤褐色～イ b 類明赤褐色が主体となる。H28年度は、8世紀後半～9世紀は明赤褐色～橙色であったので今回の結果では一段階赤くなっているが、前稿で示された傾向とおおむね同様に色調は時期によって明るく変化することを確認した。

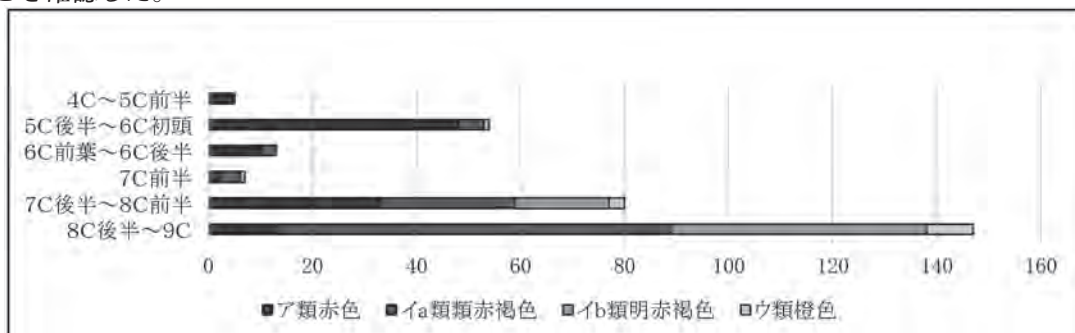


図4 顔料色調の時期別傾向

次に、色調の遺跡別傾向についてみると、4世紀～6世紀後半までは、広範囲に分布する赤彩土器の色調のほとんどがア類赤色であり、今のところ遺跡間の違いは見られない。また、色調が多様になる7世紀後半以降の遺跡別状況について、7世紀後半～8世紀前半を表2、8世紀後半～9世紀を表3にまとめた。資料が増加するものの、同時期における遺跡間の明確な違いは今のところ見られない。このことから現状では、色調は遺跡間の違いよりも時期差が大きいと考える。赤彩土器赤色顔料のX線回折分析結果から、古い時期は鮮やかな赤色酸化鉄（ヘマタイト）を利用し、新しい時期は褐色酸化鉄（マグヘマタイト）の色調でも利用した可能性が指摘されているが、今回の色調変化の傾向からもその可能性が想定される。

表2 顔料色調の遺跡別状況  
(7世紀後半～8世紀前半)

色調分類 遺跡	ア	イ		ウ	計 (点)
		a	b		
古館Ⅱ	12	11	10	2	35
熊堂古墳群		2			2
五条丸支群		1			1
牡丹畑		3	1		4
石田	7				7
石田Ⅰ・Ⅱ	5	1			6
津軽石大森		1			1
田面木			2		2
音喜多コレ			1		1
湯舟沢	1	1			1
室小路7	1				1
計(点)	26	19	14	2	61

表3 顔料色調の遺跡別状況  
(8世紀後半～9世紀)

色調分類 遺跡	ア	イ		ウ	計 (点)
		a	b		
大平	12	1			1
法領			1		1
中嶋		3			3
千苺	1	10	12	7	30
中村	8	38	29	2	77
藤沢	1	2			3
牡丹畑		1			1
本宿Ⅲ		3	2		5
本宿羽場		2			2
八幡	1	1	3		5
妻川	1				1
塚	1				1
沼里		1			1
間木戸Ⅴ		1			1
夏本		1			1
麓山		2	1		3
伊治城跡	1	7			8
上戸	1				1
計(点)	15	73	48	9	145

(b) 顔料質感

質感の分類は表4のとおりである。分類は顔料質感の特徴から3項目を設けて行っている。項目1では、赤色顔料に混ぜ合わされた粘土と水分の割合からカ～ケに分類し、カ：粘土と水分ともに多い。キ：粘土多く、水分少ない。ク：粘土少なく、水分多い。ケ：粘土と水分ともに少ないとした。具体的には、カは粘土と水分の割合が程よいため濃厚でとろりとした質感で、塗布面の様子を見ると顔料の伸びが良好である。キは粘土が水分よりも多いので泥っぽく、ざらりとした質感があり、伸びは不良で擦れも見られる。クは水分が多いためざらりとし

表4 質感分類

項目1	粘土と水分の割合	項目2	含有物質粒の細かさ	項目3	顔料塗布の厚さ
カ	粘土、水分ともに多い	Ⅰ	粗い	a	厚い
キ	粘土多く、水分少ない				
ク	粘土少なく、水分多い	Ⅱ	細かい	b	薄い
ケ	粘土、水分ともに少ない				

た質感で、伸びも良好である。ケは粘土と水分ともに少ないのでパサパサした質感で擦れており、摩耗の可能性もある。以上、項目1の質感イメージを図5に表した。項目2では、顔料に含まれるベンガラや粘土粒といった含有物質の細かさにより、I：粗いもの、II：細かいものに分けた。項目3では、顔料塗布された厚さを、a：厚いもの、b：薄いものに分けた。なお、前稿で各項目の例とした資料写真を紹介したので参照されたい（前稿4節2017）。

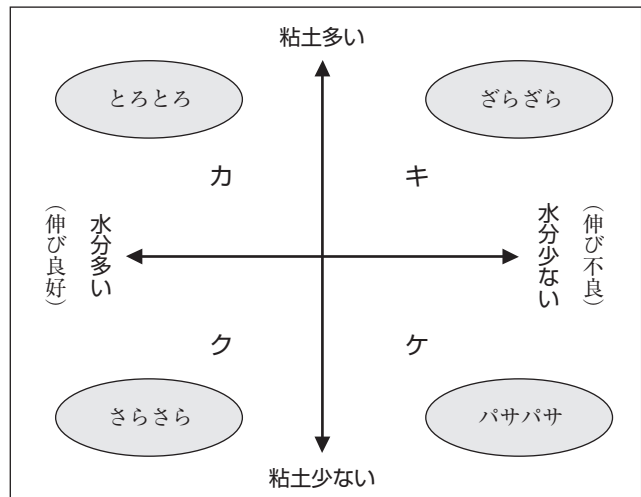


図5 項目1の質感イメージ

前稿において、顔料質感は古い時期がさら

りとして、含有物質は細粒で薄塗りのクII b類が主体となり、時期が新しくなるとクII b類に加えて、カII a類（とろとろ・細粒・厚塗り）、キI b類（ざらざら・粗粒・薄塗り）など様々な質感が観察され、多様な質感となる傾向を示した。また、7世紀後半～8世紀前半の赤彩土器に着目すると、石田、石田I・II、津軽石大森の資料はクII b類（さらさら・細粒・薄塗り）が主体であるが、古館IIではカII a類（とろとろ・細粒・厚塗り）とカII b類（とろとろ・細粒・薄塗り）が主体であることから、遺跡によって質感の傾向が異なる可能性を示した（前稿4節2017）。

#### i) H29年度観察結果

以下に、観察結果を時期別に述べる（註6）。

【4世紀～5世紀前半】伊治城跡SD284・SD320・SD834、沢田1号土坑出土の5点があり、すべてクII b類である。

【5世紀後半～6世紀初頭】仁沢瀬IV、仏沢III、沢田出土の15点があり、すべてクII b類である。

【6世紀前葉～6世紀後半】田久保下出土の2点があり、すべてクII b類である。

【7世紀前半】阿光坊古墳群、泉谷館跡出土の3点があり、カII b類2点、クII b類1点である。

【7世紀後半～8世紀前半】田面木、音喜多コレクション、湯舟沢、室小路7、牡丹畑SI007、江釣子古墳群五条丸支群出土の10点があり、その内訳はカII a類2点、カII b類4点、キII a類2点、キII b類1点、クII b類1点である。

【8世紀後半～9世紀】大平、中嶋、中村、藤沢、本宿III、本宿羽場、妻川、八幡、塚、沼里、夏本、麓山、上戸、伊治城跡SI490・SI491・SI792・SB704A出土の102点があり、その内訳はカI a類8点、カI b類1点、カII a類8点、カII b類23点、キI a類5点、キII a類10点、キII b類15点、クI b類1点、クII b類31点である。なお、102点中73点が中村の資料である。中村の資料は上記9種類の分類がすべてあり、クII b類20点、キII b類15点で主体を占める。その他の遺跡は、カII b類、クII b類が多い。

#### ii) H28・29年度観察結果の検討

色調と同様にH28年度観察資料と合わせて考察する。2か年分の観察結果を統合して時期別傾向を図6に示した。4世紀から6世紀後半まで、すべての質感がクII b類（さらさら・細粒・薄塗り）である。7世紀前半はやはり資料が少ないので明確でない。資料が増加する7世紀後半以降はクII b類



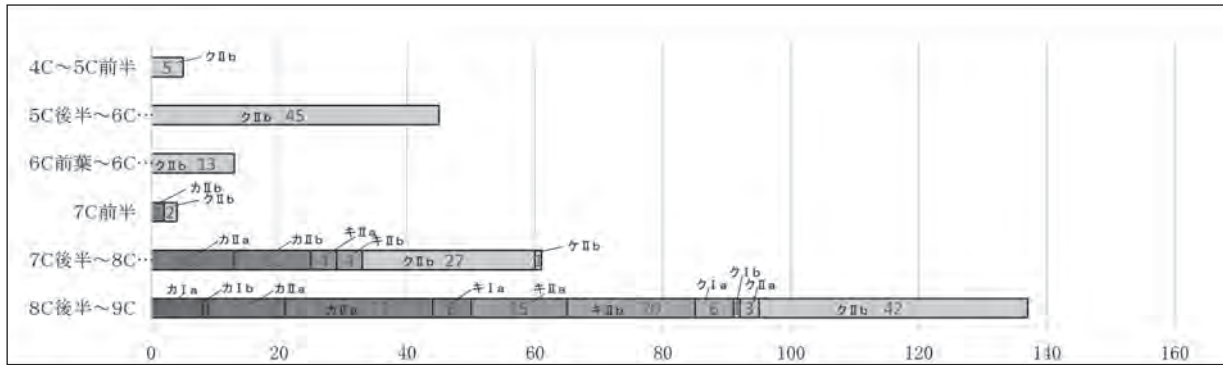


図6 顔料質感の時期別傾向

が主体的であるが、その他の質感もあり、多様になる。

次に、質感の遺跡別傾向について見ていく。4世紀～6世紀後半までは、広範囲に分布する赤彩土器の質感がすべてクIIb類であり、今のところ遺跡による違いはみられない。質感が多様になる7世紀後半以降の遺跡別状況については、7世紀後半～8世紀前を表5、8世紀後半～9世紀を表6にまとめた。7世紀後半～9世紀までを通じて各遺跡の質感は、クIIb類とカIIb類（とろとろ・細粒・薄塗り）が主体的である。その中で、古館IIではカIIa類（とろとろ・細粒・厚塗り）が3割程度を占めているのが特徴である。また、千苺と中村では、資料数も豊富で多様な質感がある。特に、他遺跡でほとんど見られない粘土が多い（項目1-キ）、含有物質が粗い（項目2-I）が一定量ある。このことから、8世紀後半～9世紀により一層多様になるのは、資料豊富な千苺と中村の傾向を強く反映しているためである。しかしながら、7世紀後半以降、それまでのクIIb類に加えて、新たにカIIb類の質感も見られ、質感に多様性が生まれる傾向であると考えられる。以上から前稿で示したとおり、時期が新しくなると質感が多様になり、遺跡によって質感に違いがみられる可能性を確認した。

続いて、質感と彩色文様の関係について考察する。前稿では、8世紀後半～9世紀の彩色集合縦位細条線をもつ赤彩土器について、細かい条線を描くために千苺出土資料を中心として水分が多くて流動性のあるクIIb類が多いと考えた（前稿4節 2017）。今年度、千苺に隣接し、同一集落を形成すると考えられている中村資料を観察したので再検討してみる。千苺と中村の彩色集合縦位細条線をもつ赤彩土器の質感をまとめて図7に示した。彩色細条線文様の質感は分類の項目1に着目すると、カ類24%、キ類40%、ク類36%を示した。彩色集合縦位細条線をもつ赤彩土器の質感はクIIb類に偏る傾向は示されず、細かい文様でも流動性のある質感とは限らないことがわかった。このことから文様の種類に関わらず、質感は遺跡によって違いがあることが想定される。

(c) その他

使用痕の有無について、今年度の観察でスス・コゲ等の黒色付着物がある資料を数点確認したが、明らかに火にかけて使用したと判断できるものはなかった。このことから赤彩土器を火にかけて使用するのは例外というこれまでの傾向に変化はない。また、赤色顔料塗布の段階についても焼成後に塗られた資料は確認さ

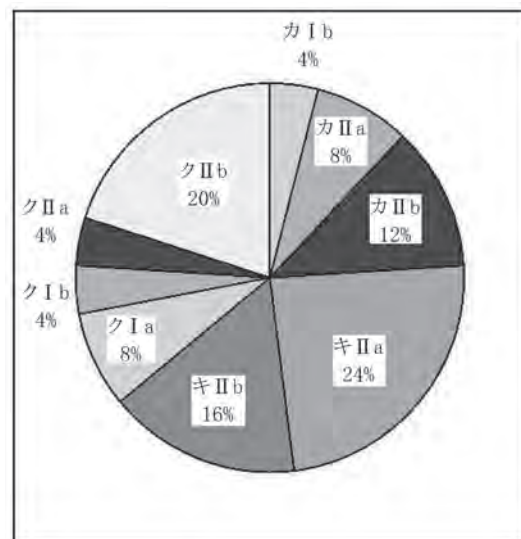


図7 千苺・中村遺跡の彩色集合細条線の質感

表5 顔料質感の遺跡別状況（7世紀後半～8世紀前半）

質感分類 遺跡	質感分類												計 (点)
	カI a	カI b	カII a	カII b	キI a	キII a	キII b	クI a	クII a	クI b	クII b	ケII b	
古館Ⅱ			11	7		2	3				11	1	35
熊堂古墳群				1							1		2
五条丸支群				1									1
牡丹畑				2			1				1		4
石田											7		7
石田Ⅰ・Ⅱ											6		6
津軽石大森											1		1
田面木						2							2
音喜多コレ			1										1
湯舟沢			1										1
室小路7				1									1
計(点)	0	0	13	12	0	4	4	0	0	0	27	1	61

表6 顔料質感の遺跡別状況（8世紀後半～9世紀前半）

質感分類 遺跡	質感分類												計 (点)
	カI a	カI b	カII a	カII b	キI a	キII a	キII b	クI a	クII a	クI b	クII b	ケII b	
大平				1									1
法領											1		1
中嶋											3		3
千苺			1		1	5	5	6	3		9		30
中村	8	1	8	9	4	9	13			1	20		73
藤沢						1							1
本宿Ⅲ				1									1
本宿羽場				1							1		2
八幡				2			2				1		5
妻川				1									1
塚											1		1
沼里											1		1
間木戸V											1		1
夏本				1									1
麓山				2	1								3
伊治城跡				5							2		7
上戸											1		1
計(点)	8	1	9	23	6	15	20	6	3	1	41	0	133

れなかった。中村遺跡で検出された焼成土坑から、焼成により弾けた赤彩土器の破片が出土している（岩文振埋2017）。この事例からも赤色顔料の塗布は焼成前と窺える。

#### (d) 小結

ここまで、今年度の資料観察の結果から顔料色調と塗布面の様相について傾向を抽出し、H28年度観察結果と総合して検討した。以下に2か年の観察結果から明らかになった傾向をまとめた。

顔料色調は、4世紀～6世紀は赤色主体→7世紀～8世紀前半は赤色～赤褐色主体→8世紀後半～9世紀は赤褐色～明赤褐色主体というように、時期が新しくなると色調が明るくなる傾向を確認した。また、6世紀後半まで広範囲に分布する赤彩土器の色調のほとんどがA類赤色であるのに対し、7世紀後半以降、色調が多様になることがわかった。このような色調変化について今のところ、同時期における遺跡間の明確な違いは見られないため、色調は遺跡間の違いよりも時期差が大きいと考える。また、時期による色調変化は、赤彩土器赤色顔料のX線回折分析結果（前稿7節2017）と概ね合致することがわかった。

顔料質感は、4世紀～6世紀は全てクII b類（さらさら・細粒・薄塗り）であるが、7世紀以降はクII b類に加えて、カII b類（とろとろ・細粒・薄塗り）が主体に加わり、その他の質感も遺跡によって見られるようになることから多様性が生まれると考える。

顔料色調と質感の変化は、7世紀前半は明確でないが、おおむね7世紀に画期があると考えられる。6世紀まで広範囲で同じような色調と質感にまとまっていたものが7世紀に変化し始める。7世紀といえば、赤彩土器に彩色文様が描かれ始めるのが7世紀前半であり、赤彩土器が増加し始めるのが7世紀後半である。このことから色調と質感の変化は彩色文様の出現や赤彩土器の増加ということに関係がありそうである。

今後は、盛岡市域・奥州市域などの未実見資料観察を行い、これまでの傾向と比較検討していきたい。

## 4. 胎土観察

### (a) 観察資料

今回は、岩手県・青森県・秋田県・宮城県の4県にまたがる資料を実見した。

岩手県では一戸町大平、雫石町仁沢瀬Ⅳ、滝沢市仏沢Ⅲ・湯舟沢・室小路7、花巻市中嶋、北上市中村・藤沢・江釣子古墳群五条丸支群・牡丹畑・本宿Ⅲ・本宿羽場・八幡・妻川・塚、奥州市沢田、釜石市麓山、大槌町夏本、青森県ではおいらせ町阿光坊古墳群、八戸市田面木・音喜多コレクション、秋田県では横手市田久保下、宮城県では栗原市上戸・伊治城跡・泉谷館跡から出土した土師器について胎土の観察を行った。今回観察を行った資料の多くは赤彩土器であるが、一部それ以外の土師器も比較資料として観察している。

### (b) 観察方法および胎土分類

#### ①観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファール（倍率20倍）を用いて、土器胎土を観察した（註8）。観察の際には、土器の断面だけでなく器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは、観察面積が少なく、含まれる砂粒の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

#### ②胎土分類（表7・8）

表7・8に示したように、A～H類という土器の胎土に含まれる砂粒・混和材の種類による分類

と、0～1類というその大きさによる分類を設けた（註9）。

前稿と同様に、赤彩土器の製作に用いられた材料について、それを概括的に把握することをまず第一の目的として、大半の資料については含まれる砂粒の種類だけを情報として抽出するという、簡易な観察を行い、その結果を表11に記載した。そして、一部の資料についてのみ、含まれる砂粒の大きさや含有量も詳細に観察し、その結果は表10に記載した。

表7 砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B類	雲母を一定量含む土器。
C類	頁岩・チャートを一定量含む土器。
D類	火成岩を一定量含む土器（凝灰岩を含む土器についても当分類に含める）。
E類	腐り礫を一定量含む土器。
F類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器。
G類	海綿骨針を一定量含む土器。
H類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色鉱物（石英・長石）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに一定量含めばAB類、チャートと火成岩をともに一定量含めばCD類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも2cm<sup>2</sup>中に1粒は0.5mm以上でその存在が認められる量を指す。

表8 砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
1類	1.0mm～1.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
0類	1.0mm未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

(c) 観察結果（表9～11、写真1・2）

今回は観察した遺跡数が多いこともあり、以下5つの地域に分けて観察結果を記す。

①青森県南東部および岩手県内陸北部

阿光坊古墳群と田面木で出土した赤彩土器は、いずれもG類（海綿骨針を含む土器）であった（写真1-1・2）。海綿骨針を含む点で、前稿で見た奥州市石田Ⅰ・Ⅱと類似する。しかし、阿光坊古墳群出土の赤色顔料が塗布されていない土師器にも海綿骨針は含まれており、これらの赤彩土器を岩手県内陸南部からの搬入品と積極的に評価できない。大平で出土した赤彩土器は、C類（頁岩・チャートを含む土器）であった（写真1-3）。同遺跡出土の赤色顔料が塗布されていない土師器も同様の胎土であり（写真1-4）、こちらの赤彩土器も搬入品と積極的に評価できない。

②岩手県内陸中部

仁沢瀨Ⅳでは雲母を、湯舟沢遺跡では安山岩を、仏沢Ⅲでは海綿骨針を含む赤彩土器が出土しており、それぞれの遺跡で胎土に違いがみられた。現時点では、これらの遺跡で出土した赤色顔料が塗布されていない土師器を十分には実見できておらず、当地域出土の赤彩土器が岩手県内陸南部からの搬入品か否か判断できない。

表9 砂粒・混和材の含有状況

胎土	遺跡および時期・器種		沢田遺跡		中村遺跡		本宿Ⅲ遺跡	八幡遺跡	伊治城跡
			5～6世紀		8～9世紀		8～9世紀	8～9世紀	8～9世紀
	坏	壺	坏・鉢	壺	壺	壺	壺	坏(※坏蓋含む)	
A類：黒色光沢粒を含む	0/6	5/5	17/47	63/63	5/5	5/5	5/5	5/5	
B類：雲母を含む	0/6 (1)	—	—	0/63 (7)	0/5 (2)	0/5 (2)	—	—	
C類：頁岩・チャートを含む	0/6 (2)	0/5 (1)	3/17 (9)	23/63 (44)	0/5 (2)	1/5 (2)	—	—	
D類：火成岩・凝灰岩を含む	0/6 (3)	0/5 (1)	1/17 (12)	10/63 (53)	0/5 (2)	0/5 (5)	0/5 (2)	—	
E類：腐り礫を含む	—	—	—	0/63 (2)	0/5 (1)	—	—	—	
F類：その他有色砂粒を含む	0/6 (6)	—	0/17 (4)	7/63 (32)	1/5 (4)	0/5 (4)	—	—	
G類：海綿骨針を含む	0/6 (4)	1/5 (4)	—	0/63 (3)	—	0/5 (1)	0/5 (1)	—	
H類：石英・長石のみ	—	—	—	—	—	—	—	—	

※ 今回扱った遺跡のうち、同一の時期・器種で5点以上観察できたものを当表に提示。（ ）内の数値は、1つの土器片中に一定量含むとは評価できないが、1・2粒と極少量でも確認できたものも合計した点数。また、1つの土器片中に雲母とチャートをともに含めば、それぞれで1点ずつ集計しているため、縦列の合計は総観察点数より多くなる。

### ③岩手県内陸南部および秋田県内陸南部

多くの観察点数を得た中村の状況を見ると、A類（黒色光沢粒を含む土器）以外では、C類・D類（火成岩を含む土器）が多く（写真1-5・6）、前稿で見た千苺と同様である。北上市内の他の遺跡で出土した赤彩土器も、中村と同じような胎土であり、顕著な違いは認められなかった。また、こちらも多く観察点数を得た沢田では、G類が1点認められ、海綿骨針を極少量でも含むものならば、この他に8点存在する。（写真2-9～11）。これは前稿で見た石田Ⅰ・Ⅱと同様である。赤色顔料が塗布されていない土師器にはB類（雲母を含む土器）もみられたが、海綿骨針を極少量でも認められるものが多く、大きく胎土が異なることはない（写真2-7・8）。なお、続縄文土器についても胎土に顕著な違いは認められなかった（写真2-12）。田久保下では、G類が1点認められた。しかし、赤色顔料が塗布されていない土師器との間で、胎土に顕著な違いは認められず、当遺跡出土の赤彩土器を岩手県内陸南部からの搬入品と積極的に評価できない。

### ④岩手県沿岸部

夏本ではチャートと少量の酸化粒を、麓山では雲母を含む赤彩土器が出土している。現時点では、両遺跡で出土した赤色顔料が塗布されていない土師器を十分には実見できておらず、これらが岩手県内陸南部からの搬入品か否か判断できない。

### ⑤宮城県北西部

伊治城跡で出土した赤彩土器の壺（または甕）には、G類が2点認められ、海綿骨針を極少量でも含むものならば、この他に8点存在する。これは岩手県石田Ⅰ・Ⅱや沢田と同様であるが、伊治城跡で出土した赤色顔料が塗布されていない土師器にも海綿骨針は含まれており、当遺跡出土の赤彩土器を岩手県内陸南部からの搬入品と積極的に評価できない。

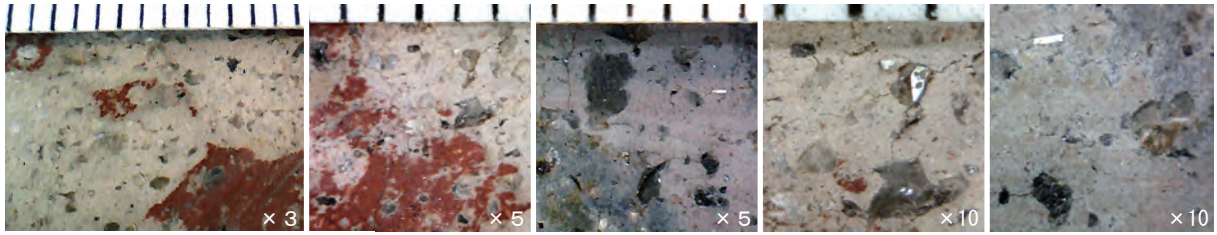
#### （d）小結

以上、今回は赤彩土器の主たる出土地域だけでなく、その周辺部での出土例も多く実見できた。本稿で取り扱った資料には、積極的に岩手県内陸南部からの搬入品と評価できるものはなかった。つまりこれらの赤彩土器の多くは、製作者の移動か模倣によって、周辺部において生産されたものであろう。一方、宮古市沼里出土の赤彩土器には搬入品の可能性を指摘した（河本 2018）。このことから、たとえば岩手県内陸南部を中心に南北へは人が頻繁に移住するが、沿岸部とは交易で行き来するだけなど、人や物の移動する背景が地域間ごとで違っていった可能性が考えられる。今回は、観察資料の不足から搬入品か否かの判断ができなかったものも多いが、これらについて補足の観察を行っていくことで、赤彩土器を手掛かりにして古代における地域間の関係をより深く検討できるだろう。

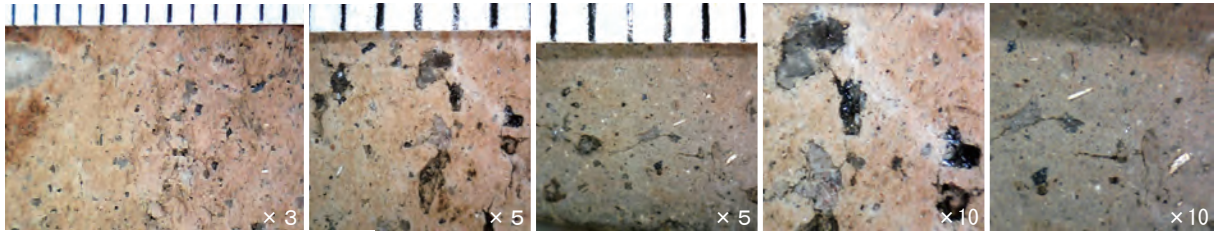
## 5. まとめと課題

本稿は前稿の記載を踏襲して執筆した。各節でまとめられた成果を総括する。

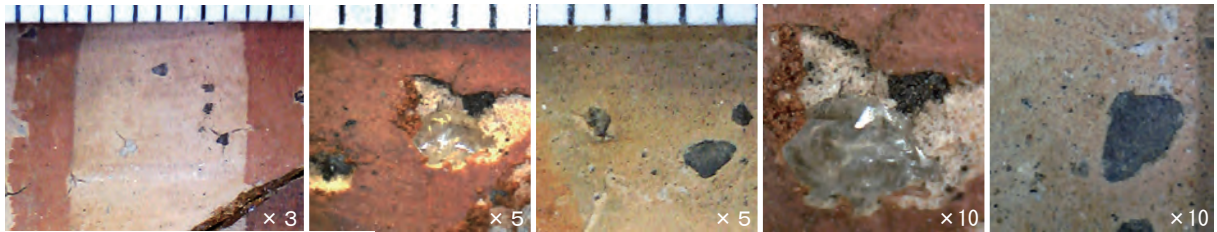
- ・分布論では、岩手県内資料の蓄積と隣県の分布を追加し、東北部の赤彩土器について考察する準備が整ったと考える。
- ・編年論では、概ね5時期区分が可能になりつつあることを確認した。
- ・顔料論では、色調変化や塗布方法が前稿で示したものと概ね合致することを確認した。
- ・胎土観察では、宮古市沼里の成果から、岩手県沿岸部と内陸南部の交流の一端を明らかにした。また、赤彩土器ばかりでなく、赤彩土器出土遺構や遺跡出土の非赤彩土器の胎土構造を把握し、小地域ごとの胎土資料の蓄積が行われた。その結果、北上市二子・立花地区産赤彩壺が、沼里例を



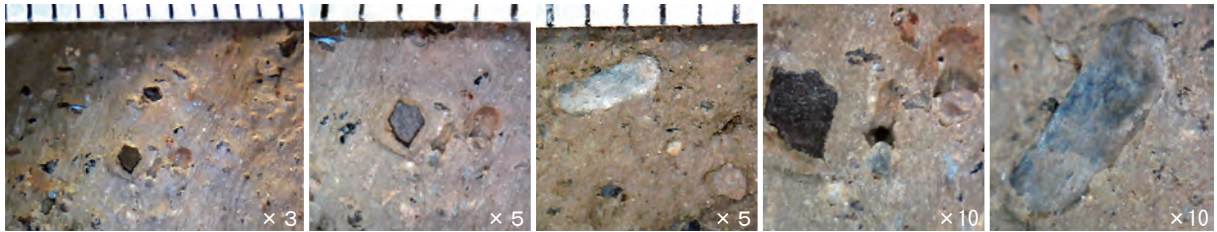
1. 阿光坊古墳群 A1号墳出土 (7世紀前半 台付鉢 赤彩 胎土 AGO 類)



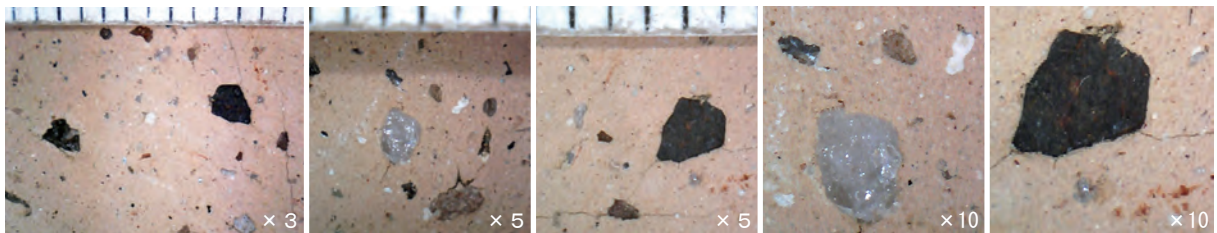
2. 田面木遺跡 第17図-1 (7世紀後半~8世紀前半 壺 赤彩 胎土 AFGO 類)



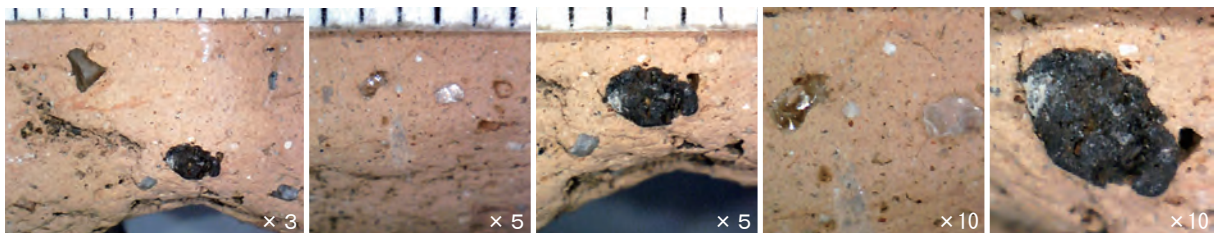
3. 大平遺跡 第140図-1 (8世紀後半~9世紀 壺 赤彩 胎土 AC1-類)



4. 大平遺跡 第140図-4 (8世紀後半~9世紀 甕 非赤彩 胎土 AC0 類)

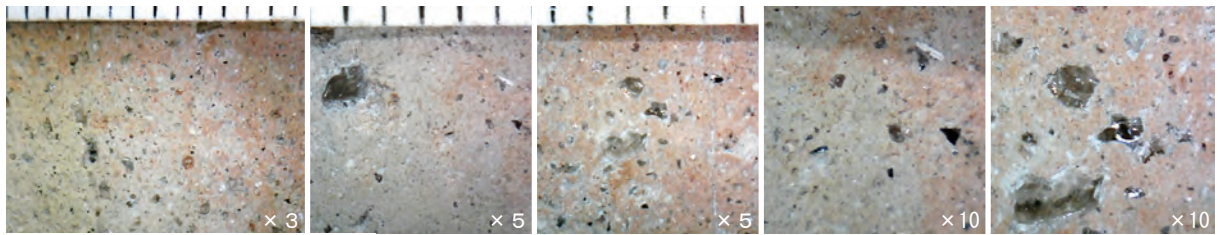


5. 中村遺跡 第209図-a127 (8世紀後半~9世紀 壺 赤彩 胎土 ACD1-類)

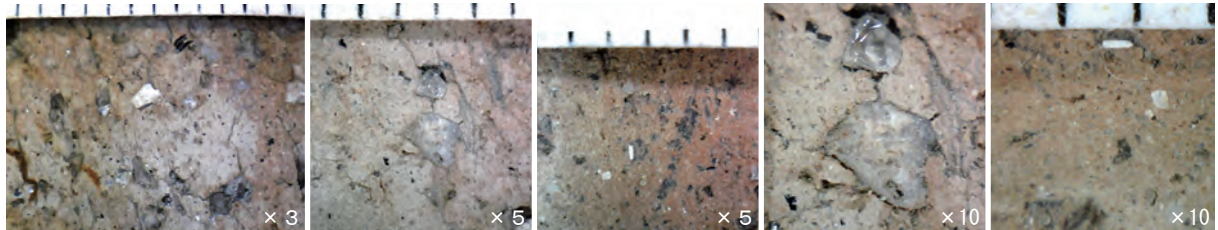


6. 中村遺跡 第241図-a790 (8世紀後半~9世紀 壺 赤彩 胎土 ACD1-類)

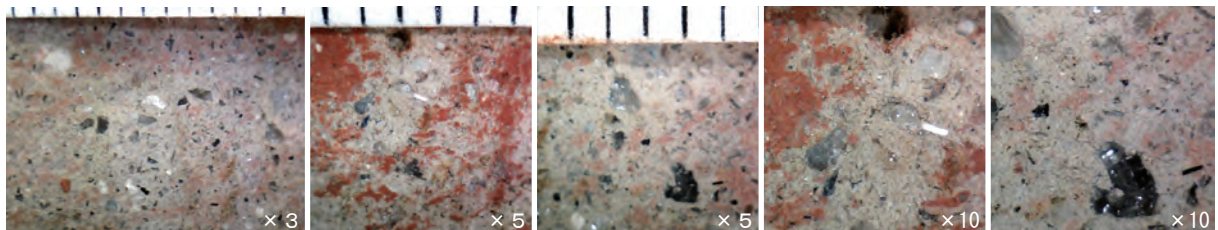
写真1 土器胎土写真(1)



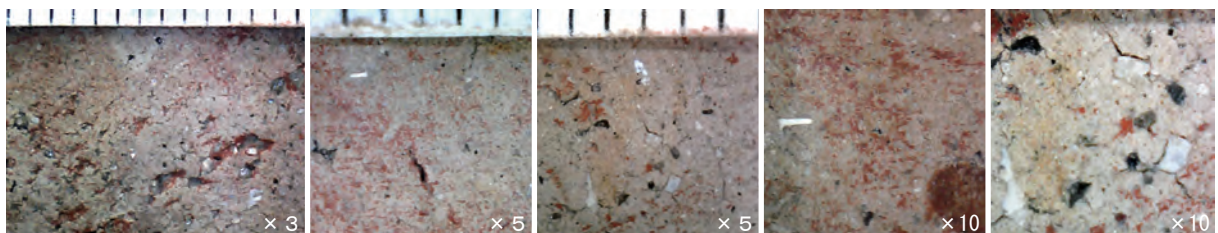
7. 沢田遺跡 第34図-3 (5世紀後半～6世紀初頭 壺 非赤彩 胎土A0類)



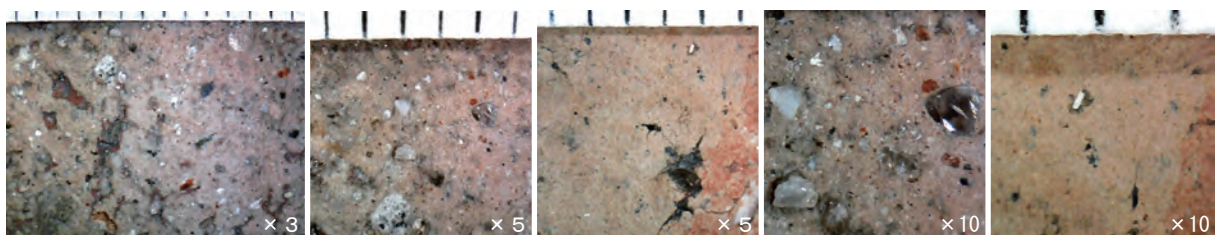
8. 沢田遺跡 第34図-5 (5世紀後半～6世紀初頭 坏 非赤彩 胎土A1-類)



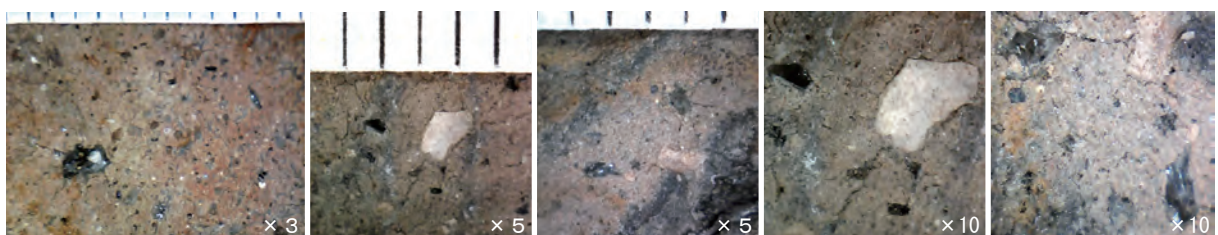
9. 沢田遺跡 第34図-8 (5世紀後半～6世紀初頭 壺 赤彩 胎土A1-類)



10. 沢田遺跡 第34図-11 (5世紀後半～6世紀初頭 壺 赤彩 胎土AG0類)



11. 沢田遺跡 第39図-49 (5世紀前半 坏 赤彩 胎土A0類)



12. 沢田遺跡 第39図-51 (5世紀前半 片口付鉢 非赤彩(続縄文土器) 胎土A0類)

写真2 土器胎土写真(2)

表10 土器胎土観察表

観察 No.	遺跡名	出土遺構・ 掲載番号	器種	胎土 分類	色調		含有砂粒・混和材										
					内面 (or表面)	外面 (or裏面)	黒色 光沢粒	雲母	頁岩・ チャート	結晶片岩	火成岩	腐り籾	その他 有色砂粒	石英	長石	海綿骨針	
1	阿光坊古墳群	A1号墳	台付鉢	AGO	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y7/4 浅黄	0.5少		(2.0)			(1.0?)		(2.0) (1.0)	(1.0) 0.5	(2.0) (1.0) 0.5	0.5少
2	阿光坊古墳群	4号墳 溝	高坏	AFGO	2.5Y5/2 暗灰黄	7.5YR6/6 橙	0.5少		(1.0)					0.5少	(1.0) 0.5少	(1.0) 0.5少	0.5少
3	田面木	第17図-1	壺	AFGO	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	0.5多		△			(1.0)		0.5少	0.5少	0.5	0.5
4	田面木	178-2層	壺	AGO	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	0.5多					△		0.5極少	0.5少	0.5	0.5
5	(二ツ屋)	音喜多 コレクション	壺	AF0	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄	0.5							(4.0) (3.0) (1.0) 0.5少	0.5少	(1.0) 0.5	
6	大平	S105 第140図-1	壺	AC1-	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	0.5少		0.5			(1.0)		(1.0)	(1.0) 0.5少	1.0s×0~1 0.5	
7	大平	S105 第140図-2	甕 (非赤彩)	C1-	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	0.5極少		1.0s×0~1 0.5少			(2.0) (1.0)		(1.0)	(2.0) 1.0s×0~1 0.5	(1.0) 0.5少	
8	大平	S105 第140図-3	甕 (非赤彩)	ACD1-	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄	0.5少		0.5少	(2.0)		(8.0) (3.0) (1.0) 0.5少		(2.0) (1.0)	0.5極少	(2.0) 1.0s×0~1 0.5	
9	大平	S105 第140図-4	甕 (非赤彩)	AC0	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/4 浅黄	0.5		(5.0) (3.0) (2.0) 0.5少	(3.0) (1.0) 0.5極少				(0.5)	0.5極少	(2.0) (1.0) 0.5	
10	中村	S115 第209図-a127	壺	ACD1-	10YR7/6 明黄褐	10YR8/4 浅黄橙	0.5少	(0.5)	(1.0) 0.5			1.0s×0~1 0.5		(1.0)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	
11	中村	S159 第226図-a480	坏	A0	2.5Y7/3 浅黄	10YR7/3 にぶい黄橙	0.5多		(2.0) (0.5)			(0.5)			(1.0) 0.5多	0.5少	
12	中村	S199 第241図-a790	壺	ACD1-	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	0.5少		(2.0) 1.0s×0~1 0.5			(2.0)		(2.0) (1.0)	(2.0) (1.0) 0.5	(1.0) 0.5少	
13	沢田	1号墳 第34図-1	坏	A0	2.5Y6/2 灰黄	10YR5/2 灰黄褐	0.5							(1.0)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5少	
14	沢田	1号墳 第34図-2	壺	A0	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄	0.5								(1.0) 0.5	(6.0) (2.0) (1.0) 0.5	
15	沢田	1号墳 第34図-3	壺 (非赤彩)	A0	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	0.5少		(0.5)						(1.0) 0.5	(3.0) (2.0) 0.5	(0.5)
16	沢田	2号墳 第34図-4	坏	A0	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	0.5		(0.5)	(1.0)		(1.0) (0.5)			(1.0) 0.5多	(3.0) (2.0) (1.0) 0.5多	(0.5)
17	沢田	2号墳 第34図-5	坏 (非赤彩)	A1-	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	(1.0) 0.5			(1.0)		(1.0)		(0.5)	(2.0) 1.0s×0~1 0.5	(2.0) (1.0) 0.5	(0.5)
18	沢田	2号墳 第34図-6	坏	A0	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	(1.0) 0.5			(2.0) (1.0)		(1.0)		(1.0)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	
19	沢田	2号墳 第34図-7	坏	A0	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/2 灰黄	0.5少		(4.0)	(1.0) (0.5)					(1.0) 0.5	(1.0) 0.5少	(0.5)
20	沢田	2号墳 第34図-8	壺	A1-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	(1.0) 0.5多					(0.5)			1.0s×0~1 0.5	(2.0) (1.0) 0.5少	(0.5)
21	沢田	2号墳 第34図-9	壺	A1-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	0.5多								1.0s×0~1 0.5	1.0s×0~1 0.5	(0.5)
22	沢田	2号墳 第34図-10	甕 (非赤彩)	AG1-	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	(1.0) 0.5少								1.0s×0~1 0.5少	(2.0) 1.0s×0~1 0.5	0.5少
23	沢田	2号墳 第34図-11	壺	AGO	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	0.5							△	(1.0) 0.5少	(1.0) 0.5	0.5少
24	沢田	3号墓 第36図-18	坏	A1-	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	(1.0) 0.5多	(1.0) 0.5極少			(1.0?)	(2.0)			(2.0) 1.0s×0~1 0.5	(1.0) 0.5少	(0.5)
25	沢田	3号墓 第36図-19	甕 (非赤彩)	AB0	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	(1.0) 0.5少	(1.0) 0.5少	(0.5)					(1.0)	(2.0) (1.0) 0.5少	(1.0) 0.5少	(0.5)
26	沢田	5号墓 第36図-20	壺	A1-	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/4 にぶい黄橙	0.5		(2.0) (1.0)	(4.0)					(2.0) 1.0s×0~1 0.5	(5.0) (1.0) 0.5少	(0.5)
27	沢田	1号土坑 第39図-49	坏	A0	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	(1.0) 0.5						(2.0) (1.0)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(0.5)	
28	沢田	1号土坑 第39図-50	高坏	A1-	10YR7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	0.5					(2.0)			1.0s×0~1 0.5	1.0s×0~1 0.5	(0.5)
29	沢田	1号土坑 第39図-51	片口付鉢 (非赤彩)	A0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	0.5			△		(2.0) (1.0)			(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	
30	沢田	第44図-123	坏	A1-	2.5Y7/1 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	(1.0) 0.5多							(1.0)	1.0s×0~1 0.5	1.0s×0~1 0.5	(0.5)



除いて広範囲に移動しているとみなす証拠を見つけられなかった。

さて、前稿の読者から未検索資料の情報提供があった。筆者らの勉強不足を補っていただき感謝申し上げます。引き続きそうした資料の存在をご指摘いただければ幸いです。来年度以降に、山田町沢田Ⅲ、山田町間木戸Ⅰ、秋田県東成瀬村トクラなどの報告書が刊行される予定であり、資料蓄積が一層進むであろう。次稿で資料集成に一つの目途をつけ、各論に入っていく予定である。

最後になりましたが、本稿執筆に際し、多くの方々と関係機関の御教示、御支援をいただきました。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

杉本 良 君島武史 手塚新太 加藤幹樹 安達訓仁 加藤 竜 小谷地 肇 上ノ山拓己  
菅野紀子 鈴木雪野 堀川昌英 宇田川浩一 加藤朋夏 赤星純平 柴田慈幸 奥村英則  
菅原好美 井上雅孝 佐藤 剛 平野 修 阿部勝則 丸山直美 山川純一 佐藤あゆみ  
佐々木あゆみ

脱稿後、盛岡市薬師社脇・永福寺山・志波城跡・新堰端・台太郎・野古A、奥州市杉の堂・膳性・佐野原・北鶴ノ木を実見する機会を得た。次稿でその成果を公表する。

#### 註

- (1)中村遺跡では報告書掲載資料に不掲載数点を追加して計81点を実見した。ただしこのほかにもコンテナ2箱程度の不掲載資料が存在する。これら不掲載資料の中には焼成土坑出土資料が含まれており、土器焼成に関するデータ収集には非常に重要と考える。不掲載資料の内容については丸山直美氏ご教示による。君島（2017）によれば、赤彩土器と土器焼成遺構の存在する遺跡の分布が重なりを持つ時期があるという。本稿では、未だこの現象を理解する前段階の作業を行っているため触れることができないが、いずれ赤彩土器焼成方法・顔料分析を行う中で、中村・千苺・立花南の大量の焼成遺構出土赤彩土器片を検討しなければならない。
- (2)年代観は、前稿で示したとおり26年度現地説明会での観察所見である。文様等の詳細は報告書刊行後となる次稿以降に記載する。
- (3)シンポジウム基調講演での杉本良氏の報告による。
- (4)シンポジウム資料の河西（2017）に岩手県内陸部の河川堆積土、北上市立花南・八幡、東京都上原赤彩土器の分析結果が示され、この成果から上原資料を関東方面の胎土構造の可能性が高いとされた。生データが丁寧に掲載されており、他者が検証でき、河西氏の解釈過程がわかる高論である。このデータを概観すると、在地産と断定する前にもう一押し分析が必要ではないかと考える。平野修氏が当センターで千苺・中村資料を実見された際、上原資料は多数の未接合破片が存在する1個体とのご教示であった。河西（2017）で分析された上原4破片が同一個体とすると、4点の鉱物組成差は誤差と解釈される。上原4点はクラスター分析樹形図において、クラスター5・12に位置付けられた。クラスター5は赤彩土器2点を含む埼玉県河川堆積土、クラスター6は上原・竜ヶ峰の帝京大学校地遺跡群資料、クラスター12は構成数18のなかに北上川流域河川堆積土を含む東北地方の河川堆積土と立花南・上原の赤彩土器資料が含まれ、強い相関関係を示す。この分析値から、埼玉県河川と北上川・岩手県河川の鉱物組成は類似すると言える。岩手県内の考古資料（特に千苺・中村資料）や北上市二子地区の自然堤防堆積土の分析データを蓄積すれば、上原資料の胎土について岩手県内産の胎土の可能性が出てくるのではなかろうか。河西（2017）と同方法論で分析していただける機会を得たい。
- (5)北海道島の古代赤彩土器の時期別分布については、佐藤剛氏ご教示による。
- (6)雫石川下流域南岸の志波城跡、台太郎、向中野館跡、新堰端では多数の彩色線文赤彩土器が出土している。次稿にその観察成果を公表する。
- (7)色調と質感観察の結果でそれぞれの点数が一致しないのは、例えば色調は観察できたが質感は判別できなかった資料があるためである。
- (8)土器胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および表10として提示した土器胎土観察表の記述内容については、旧稿（河本2011）を参照されたい。
- (9)どのような特徴を有する砂粒をどの岩石・鉱物や混和材と認定したかについては、旧稿（河本2015・2017）を参照されたい。また、今回は1.5mm以上の砂粒を一定量含む土器は認められなかったため、表8に示した基準で全ての土器を分類できた。

## 引用・参考文献

※岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを「岩文振埋」と略す。「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書」は省略して集数を記載

### <報告書>

秋田県教育委員会 1992『富ヶ沢A・B・C窯跡 田久保下遺跡 富ヶ沢1号塚～4号塚 第2分冊』秋田ふるさと村建設事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター 2016『トクラ遺跡 現地見学会資料』

阿部正光・赤沢靖章・佐藤敏幸 1987「瀬峰町泉谷館跡・清水山Ⅰ遺跡発掘調査報告略報」『瀬峰町の文化財』第6集  
宮城県瀬峰町教育委員会

一戸町教育委員会 2006『大平遺跡』文化財調査報告書第56集

岩手県教育委員会 2009「釜石市麓山遺跡発掘調査報告書」『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第128集

岩文振埋 1986『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第103集

岩文振埋 1989『夏本遺跡発掘調査報告書』第134集

岩文振埋 1993『仁沢瀬遺跡群発掘調査報告書』第185集

岩文振埋 2010『中嶋遺跡発掘調査報告書』第547集

岩文振埋 2014『沢田遺跡発掘調査報告書』第626集

岩文振埋 2015『石田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第632集

岩文振埋 2015『津軽石大森遺跡発掘調査報告書』第641集

岩文振埋 2016『千苺遺跡発掘調査報告書』第652集

岩文振埋 2017『中村遺跡発掘調査報告書』第671集

岩文振埋 2018『沼里遺跡発掘調査報告書』第684集

江釣子村教育委員会 1985『塚遺跡』『江釣子遺跡群 昭和59年度発掘調査報告書』

おいらせ町教育委員会 2007『阿光坊古墳群発掘調査報告書』おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集

金ヶ崎町教育委員会 2014『石田遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第71集

北上市教育委員会 1977『尻引遺跡』文化財調査報告第17集

北上市教育委員会 1989『藤沢遺跡』文化財調査報告第54集

北上市教育委員会 1989『牡丹畑遺跡』文化財調査報告第55集

北上市教育委員会 1995『本宿羽場遺跡』埋蔵文化財調査報告第19集

北上市教育委員会 2004『菅田遺跡』埋蔵文化財調査報告第64集

北上市教育委員会 2007『妻川遺跡』埋蔵文化財調査報告第83集

北上市教育委員会 2007『本宿Ⅲ遺跡』埋蔵文化財調査報告第88集

北上市教育委員会 2009『八幡遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第98集

北上市教育委員会 2015『立花南遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第116集

北上市教育委員会 2016『江釣子古墳群』北上市埋蔵文化財調査報告第120集

滝沢村教育委員会 2008『湯舟沢遺跡』調査報告書第2集

滝沢村教育委員会 2008『仏沢Ⅲ遺跡』調査報告書第3集

滝沢村教育委員会 1999『室小路1・7・11・15・16遺跡』文化財調査報告書第31集

栗原市教育委員会 2008『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第7集

栗原市教育委員会 2014『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第17集

栗原市教育委員会 2015『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第19集

八戸市教育委員会 1988『田面木遺跡』埋蔵文化財調査報告書第28集

花巻市教育委員会 2001『平成12年度 花巻市内遺跡発掘調査報告書(久田野Ⅱ遺跡・熊堂古墳群・下坂井Ⅱ遺跡・花巻城跡・根子館跡)』  
花巻市埋蔵文化財調査報告書第25集

花巻市教育委員会 2007『平成18年度 花巻市内遺跡発掘調査報告書(古館Ⅳ遺跡・胡四王山遺跡)』花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

### <論文・研究報告>

伊藤博幸 2010「コラム 土器の年代決定」『東北の古代遺跡 - 城柵・官衙と寺院 -』高志書院

伊藤博幸 2016「座談会 アテルイの歴史像」『アテルイと東北古代史』高志書院

乙益重隆編 1974『装飾古墳と文様』講談社

小田富士雄・藤丸詔一郎・松永幸男編 1993『終末期古墳の世界 - 高松塚とその時代 -』北九州市立考古博物館

河本純一 2011「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」『大阪文化財研究』38 財団法人大阪府文化財センター

河本純一 2015「県内出土の縄文土器胎土について - 肉眼による胎土分類からの検討 -」『紀要』34 (公財) 岩文振埋

河本純一 2017「県内出土の縄文土器胎土について (3)」『紀要』36 (公財) 岩文振埋

河本純一 2018「土師器の胎土観察」『沼里遺跡発掘調査報告書』(公財) 岩文振埋 684集

- 菊地芳朗 2015 「前方後円墳の終焉と終末期古墳」『倭国の形成と東北』吉川弘文館
- 君島武史 2017 「古代北東北の土器生産 - 土師器焼成遺構の分布と展開から -」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨考古学協会
- 九州国立博物館「装飾古墳データベース」<http://s-kofun.kyuhaku.jp/> (2017.12.01)
- 杉本 良 1998 「岩手県北上盆地における蝦夷（エミシ）集団の動態」『考古学研究』45 - 1 考古学研究会
- 杉本 良 2001 「赤彩球胴甕再考（1）」『北上市立博物館研究報告』13号 北上市立博物館
- 杉本 良 2002 「赤彩球胴甕再考（2）- 分布とその傾向（和賀川流域編）-」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』2 北上市立埋蔵文化財センター
- 杉本 良 2017 「赤彩球胴甕とは何か」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨考古学協会
- 高橋静歩 2007 「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』19 岩手考古学会
- 高橋千晶 2016 「胆沢周辺の集落遺跡と墳墓」『アテルイと東北古代史』高志書院
- 高橋千晶 2017 「岩手県における古代墓制の展開」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨考古学協会
- 西野 修 2001 「IV 徳丹城跡東半地域の遺構変遷について（試案）」『徳丹城跡第46・47・48・49次』矢巾町教育委員会
- 平野 修 2013 「東京都多摩市上っ原（うわっぱら）遺跡（多摩市No.1遺跡）出土の東北系土師器について」『東京考古』31 東京考古談話会
- 平野 修 2017 「甲斐と武蔵における俘囚・夷俘痕跡」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨考古学協会
- 福田健司 2017 『考古調査ハンドブック16 土器編年と集落構造』ニューサイエンス社
- 米田 寛・佐藤 剛 2016 「岩手県域の太平洋沿岸中部地域における6世紀から8世紀の土器様相について」『紀要』35（公財）岩文振埋
- 米田 寛・高橋静歩・河本純一・佐々木あゆみ・酒井野々子 2017 「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（1）- 石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、古館Ⅱ遺跡、千苺遺跡資料を中心に -」『紀要』36（公財）岩文振埋

表 11 赤彩土器観察表 (平成 29 年度分) ※器面調整の表現：ナア→ナ, ヨコナア→ヨコナ, ハケ→ハ, ミガキ→ミ, ケズリ→ケ, 黒色処理→黒 ※赤色顔料塗布で、彩色縦位条線等の「彩色」を省略

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤色顔料塗布			色調	色調分類	質感	その他	黒斑・ス・コ ゲ	胎土 分類	極少量 含有物	備考		
				外面	内面		線描	外面特徴 (口唇部：唇 口縁部：唇 胴部：肩 胴部：胴 底部：底)	内面									外面	内面
中村	SI10	a81	壺	ハ・ヨコナ	ナ	8c 後～9c			無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	キ II b	摩耗	AC	安山岩				
中村	SI15	a116	坏	ナ	ナ、黒	8c 後～9c			無	5YR4/8 赤褐	イ b	キ II a	摩耗	AC	酸化粒	平底風丸底			
中村	SI15	a126	壺	ミ	ハ	8c 後～9c			無	5YR6/6 橙	ウ	キ II a		A	流紋岩・磨り礫				
中村	SI15	a127	壺	ナ	ナ	8c 後～9c			無	10R3/6 暗赤 (変色部は 7.5YR5/6 明褐)	ア	キ II a	摩耗	ACD	雲母				
中村	SI16	a143	壺	ミ	ナ・ハ	8c 後～9c			無	赤色顔料付着 (2.5YR4/6 赤褐)	イ b	キ II b	摩耗	A	堆積岩・酸化粒				
中村	SI19	a159	壺	ナ	ナ	8c 後～9c			無	2.5YR3/6 暗赤褐	イ a	キ II b	摩耗	AC	流紋岩・安山岩				
中村	SI22	a204	壺	ナ	ナ	8c 後～9c			無	5YR5/6 明赤褐	イ b	キ II a	摩耗	A	流紋岩・安山岩				
中村	SI23	a230	壺	ハ→流布→ミ	ナ、ハ	8c 後～9c			無	5YR4/6 赤褐	イ b	キ II b		A	安山岩				
中村	SI27	a283	壺	ハ	ナ、ハ	8c 後～9c			無	2.5YR4/8 赤褐	イ a	カ II b		AD	堆積岩				
中村	SI34	a317	壺	ハ→流布→ミ	ナ	8c 後～9c			無	(外) 2.5YR3/6 暗赤褐 (内) 2.5YR3/6 暗赤褐	イ a	キ II a	塗布後ミガ キ	AC	安山岩・酸化粒・ 薄綿骨針				
中村	SI38	a343	壺	ハ→流布→ミ	ナ	8c 後～9c			無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	カ II a	強く塗付け	AC	安山岩				
中村	SI42	a395	坏	回転ナ	回転ナ	8c 後～9c			無	2.5YR5/8 明赤褐	イ a	ク II b		AC	流紋岩・安山岩	報告書では廻と している			
中村	SI50	a456	壺	ハ、ナ	ナ	8c 後～9c			無	2.5YR3/4 暗赤褐	イ a	キ II b	摩耗	AC	雲母・凝灰岩				
中村	SI54	a466	壺	ナ	ナ	8c 後～9c			無	2.5YR4/4 にぶい赤褐	イ a	カ II b	塗布後ミガ キ	AD	雲母				
中村	SI59	a479	坏	ミ	ミ、黒	8c 後～9c			無	5YR5/6 明赤褐	イ b	ク II b		A	堆積岩・流紋岩				
中村	SI59	a480	坏	回転ナ	回転ナ	8c 後～9c			無	2.5YR5/6 明赤褐	イ a	ク II b		A	黒堆積岩・酸化 粒				
中村	SI60	a498	壺	ハ	ナ	8c 後～9c			無	(外) 2.5YR4/6 赤褐 (内) 2.5YR4/6 赤褐	イ a	キ II b	摩耗	ACD	堆積岩・凝灰岩	回転系切			
中村	SI68	a535	坏	回転ナ	回転ナ、黒	8c 後～9c			無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b		A	堆積岩・凝灰岩				
中村	SI68	a540	鉢	ミ→流布ミ	ナ、ミ	8c 後～9c			無	10R4/6 赤	ア	カ II a	塗布後ミガ キ	A	凝灰岩				
中村	SI68	a544	壺	ケ、ナ→赤彩 →ミ	ナ	8c 後～9c			無	10R3/4 暗赤色	ア	キ II b	塗布後ミガ キ、摩耗	AC	安山岩				
中村	SI68	a545	鉢	ナ、底部木葉 痕	ナ	8c 後～9c			無	(外) 10R2/2 極暗赤褐 (内) 2.5YR4/6 赤褐	ア～イ a	カ II a		AC					

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時間	線描	塗布特徴 (口唇部：唇 口縁部：口 頸部：頸 肩部：肩 胴部：胴 底部：底)				胎土分類	極少量含有物	備考	
				外面	内面			外面	内面	色調	色調分類				質感
中村	SI68	a546	壺	ナ→赤彩	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	5YR4/6 赤褐	イ b	カ II b	カ II b	流紋岩・凝灰岩	
中村	SI70	a558	壺	ハ→塗布→ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	付着	2.5YR4/6 赤褐	イ a	カ II b	カ II b	内面口縁～胴部黒斑	器台取用？
中村	SI70	a559	壺	ナ→赤彩→ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	無	5YR4/6 赤褐	イ b	カ II a	カ II a	内面胴部黒斑	
中村	SI70	a560	壺	ナ→赤彩→ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	無	5YR5/6 明赤褐	イ b	カ II b	カ II b	外面胴部黒斑	
中村	SI71	a568	壺	ハ、ナ→赤彩→ミ	ハ、ナ	8c 後～9c		(口・胴部) 塗布	(口) 横位塗布	10R3/6 暗赤	ア	カ II b	カ II b	内面スス	
中村	SI72	a573	壺	ナ→塗布	ナ	8c 後～9c		(胴部) 塗布	無	5YR4/6 赤褐	イ b	II	II	外面上部黒斑、内面下部黒斑	
中村	SI73	a578	壺	ナ→塗布	ナ	8c 後～9c		(口～胴) 塗布	(口) 塗布	(外) 5YR4/6 赤褐 (内) 5YR4/6 赤褐	イ b	キ II b	キ II b	外面胴部黒斑、内面底部黒斑	
中村	SI76	a591	壺	ハ→塗布	ハ、ナ	8c 後～9c		(口～頸) 3本縦線位細条線 (底) 顔料付着	(頸～胴) 付着	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b	ク II b	内外面胴部黒斑	甗に取用？
中村	SI76	a592	壺	ナ→塗布	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	2.5YR4/4 にふい、赤褐	イ a	キ II b	キ II b	内面胴部黒色付着物	
中村	SI84	a615	壺	ハ、ナ→塗布	ナ	8c 後～9c		(口～胴) 塗布	(口) 付着	2.5YR4/8 赤褐	イ a	キ II b	キ II b	内外面胴部黒斑	
中村	SI89	a627	坏	回転ナ、回転条切→ハ→ラナ	回転ナ	8c 後～9c		(底) 線描で「×」or「十」	無	2.5YR5/8 明赤褐	イ a	ク II b	ク II b	流紋岩	甗に取用？、根本斑有の大型建物
中村	SI89	a629	壺	ナ→塗布	ナ	8c 後～9c		(唇～胴) 塗布	無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	II	II	堆積岩・流紋岩・凝灰岩	甗に取用？、根本斑有の大型建物
中村	SI89	a630	壺	ナ→塗布	ナ	8c 後～9c		(口～頸) 縦位細条線	無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	カ I b	カ I b	閃緑岩・凝灰岩	根本斑有の大型建物
中村	SI89	a631	壺	ナ→塗布→ミ	ナ	8c 後～9c		(頸) 顔料付着 (胴) 塗布→ミガキ	(口～頸) 2本縦線位大条線	5YR4/6 赤褐	イ b	カ I a	カ I a	流紋岩・凝灰岩	
中村	SI90	a632	坏	回転ナ、回転条切	回転ナ	8c 後～9c		(底) 線描で「×」or「十」	無	5 Y R5/6 明赤褐	イ b	ク II b	ク II b	内外面スス	
中村	SI90	a634	坏	回転ナ、回転条切	回転ナ	8c 後～9c		(底) 線描で「×」or「十」	無	5YR5/6 明赤褐	イ b	ク II b	ク II b	外面底部黒斑	
中村	SI90	a643	坏	回転ナ、ハ→ナ	回転ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	(胴) 塗布	2.5YR4/8 赤褐	イ a	ク II b	ク II b	外面胴部黒斑、内面底部黒斑	堆積岩・流紋岩？・凝灰岩
中村	SI90	a644	坏	ナ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	8c 後～9c		(底) 塗布 or 付着	(胴) 塗布 or 付着	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b	ク II b	外面胴部黒斑	甗の製作上で止めて、坏にした？
中村	SI90	a660	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c 後～9c		(口～頸) 顔料付着	(頸) 横位細大条線？	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b	ク II b	安山岩・凝灰岩・凝灰岩	
中村	SI95	a692	壺	ヨコナ、ハ、ナ→ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	カ II a	カ II a	内面胴部黒斑	堆積岩・花崗岩・凝灰岩
中村	SI98	a712	壺	ヨコナ、ナ→ミ	ミガキ	8c 後～9c		(頸) 2本縦線位細条線 (胴) 塗布	無	5YR6/6 橙	ウ	ク I b	ク I b	安山岩・凝灰岩・凝灰岩・不明有色粒	根本斑有の大型建物
中村	SI99	a761	鉢	ケ、ナ→ミ	黒	8c 後～9c		(胴～底) 塗布	無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b	ク II b	堆積岩・安山岩	根本斑有の大型建物

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	線描	塗布特徴 (口縁部：唇 口縁部：口 頸部：頭 肩部：肩 胴部：胴 底部：底)		胎土分類	極少量含有物	備考				
				外面	内面			外面	内面				色調	色調分類	質感	その他
中村	SI99	a787	壺	ハ→ナ→ミ	ハ→ミ	8c 後～9c		(口) 顔料付着	5YR4/6 赤褐	イ b	キ I a	AC	凝灰岩	根太痕有の大形 建物		
中村	SI99	a790	壺	ヨコナ	ハ→ヨコナ	8c 後～9c		(唇) 塗布 (口～頸) 4本組縦位細条線	2.5YR3/6 暗赤褐	イ a	-	ACD	安山岩・凝灰岩・ 酸化粒	根太痕有の大形 建物		
中村	SI99	a791	壺	ナ→赤彩→ミ	ナ	8c 後～9c		(頸) 縦位細条線 (胴) 付着	2.5YR3/4 暗赤褐	イ a	キ II a	A	酸化粒	根太痕有の大形 建物		
中村	SI116	a851	壺	ナ→ミ	ナ	8c 後～9c		(口) 塗布	2.5YR4/8 赤褐	イ a	ク II b	ACF	安山岩・凝灰岩			
中村	SI120	a883	壺	ヨコナ→口端部ミ	ヨコナ	8c 後～9c		(唇) 塗布	2.5YR4/8 赤褐	イ a	ク II b	AD				
中村	SI121 Ph01 埋土	a906	壺	ハ、ナ→赤彩→ミ	ハ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	5YR4/6 赤褐	イ b	キ II a	A	安山岩・凝灰岩	大形建物		
中村	報文欠番	a907	壺	ナ→赤彩→ミ	ナ			(胴) 塗布→ミガキ	10R4/6 赤	ア	カ I a	AF	安山岩			
中村	SI122	a914	壺	ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	2.5YR4/6 赤褐	イ a	カ II a	A	珪レイイ岩・安山 岩・酸化粒			
中村	SI124	a921	壺	ハ→ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	10R4/6 赤	ア	キ II b	A	堆積岩・安山岩・ 酸化粒			
中村	SI125	a922	環	ミ→塗布ミ	ミ、黒	8c 後～9c		(口) 塗布	5YR4/6 赤褐	イ b	カ II b	A	堆積岩・安山岩			
中村	SI126	a927	壺	ナ	ハ、ナ	8c 後～9c		(口) 塗布	5YR4/6 赤褐	イ b	カ II b	AC	雲母・流紋岩・ 酸化粒			
中村	SI126	a928	壺	ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	5YR4/4 にぶい赤褐	イ b		AF	堆積岩・安山岩・ 凝灰岩			
中村	SI128	a934	環	ケ、ナ	ミ→赤彩?	8c 後～9c		塗布?不明	2.5YR4/8 赤褐	イ a	ク II b	A	流紋岩・安山岩	非赤彩?		
中村	報文欠番 (a971?)		ミニ チュウ	ナ	ハ、ナ			(口) 付着?	2.5YR4/6 赤褐	イ a	イ a	A	流紋岩・酸化粒	非赤彩? 坏形ミ ニチュウ		
中村	SI136	a978	壺	ハ、ナ	ハ、ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	5YR5/6 明赤褐	イ b	カ I a	ACD	凝灰岩・酸化粒			
中村	SK29	a989	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c 後～9c		(唇) 縦位細条線	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b	A	堆積岩・安山岩?			
中村	SK128	a997	鉢	ナ→赤彩→ミ	ナ、ミ→黒	8c 後～9c		(胴) 塗布	2.5YR5/6 明赤褐	イ a	カ II b	A	酸化粒			
中村	SK128	a998	壺	回転ナ、ハ→ 赤彩(光沢有)	回転ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	2.5YR4/8 赤褐	イ a	カ I a	A	安山岩・酸化粒・海 綿付針・不明有色粒			
中村	SK149	a1005	壺	ハ、ナ→赤彩	ハ、ナ	8c 後～9c		(口縁) 顔料付着、塗布→ミガキ	5YR5/6 明赤褐	イ b	キ I a	AF	堆積岩			
中村	SK154	a1009	壺	ハ→赤彩	ハ	8c 前～9c		(胴) 塗布	5YR3/6 暗赤褐	イ b	キ II b	AF	流紋岩			
中村	SX06	a1011	壺	ナ、ハ→赤彩	ナ	8c 後～9c		(口) 縦位細条線 (胴) 塗布	10R3/6 暗赤	ア	キ II b	A	堆積岩・流紋岩・ 安山岩・酸化粒			
中村	SX46	a1024	壺	赤彩→ミ	ハ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	5YR4/6 赤褐	イ b	カ I a	A	堆積岩			

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	線描	塗布特徴 (口唇部：唇 口縁部：口 頸部：頸 肩部：肩 胴部：胴 底部：底)				胎土分類	極少量含有物	備考	
				外面	内面			外面	内面	色調	色調分類				質感
中村	SX53	a1026	壺	ハ、ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	5YR4/6 赤褐	イ b	カ I a	摩耗	雲母・堆積岩・安山岩	
中村	SX58	a1027	坏	ミ	ミ	8c 後～9c		(口～胴) 塗布→ミガキ	(口～胴) 塗布→ミガキ	2.5YR4/6 赤褐	イ a	ク II b	塗布後ミガキ	凝灰岩	
中村	SX73	a1028	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c 後～9c		(唇) 塗布	(唇) 縦位細条線	2.5YR3/6 暗赤褐	イ a	キ II a		安山岩・酸化粒・不明有色粒	
中村	SD01	a1033	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c 後～9c		(口) 縦位細条線	(口) 縦位細条線	2.5YR3/6 暗赤褐	イ a	キ II b		雲母・堆積岩・安山岩	
中村	SD23	a1044	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c 後～9c		(唇) 塗布	(唇) 縦位細条線	10R4/6 赤	ア	ク II b		流紋岩	
中村	遺構外	a1055	壺	ハ	ナ	8c 後～9c		(口) 3本組縦位細条線	(口) 縦位細条線	2.5YR4/8 赤褐	イ a	ク II b	摩耗	流紋岩?・安山岩・酸化粒	
中村	遺構外	a1056	壺	ナ→赤彩→ミ 光沢	ナ	8c 後～9c		(口) 6本組縦位細条線 車位? (胴) 塗布	(口) 6本組縦位細条線	10R3/6 暗赤	ア	キ II a		堆積岩・安山岩・凝灰岩・酸化粒	
中村	SX36	不掲載	壺	ケ→ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	2.5YR4/4 にふい赤褐	イ a	ク II b		堆積岩	焼ハジケ胴部片
中村	SX73	不掲載	壺	ナ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	8c 後～9c		(唇) 塗布 (口) 縦位細条線	(口) 縦位細条線	5YR4/4 にふい赤褐	イ b	カ II b		酸化粒	不明番号号に同納 (焼ハジケ胴部片)
中村	S170	不掲載 (注記 2490 号 302)	壺	ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	5YR5/8 明赤褐色	イ b	カ I a	塗布後ミガキ	凝灰岩?・酸化粒	不明番号号に同納 (焼ハジケ胴部片)
中村	S108	不掲載 (注記 2898 号 304)	壺	ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	無	2.5YR4/6 赤褐	イ a	カ I a		凝灰岩?・酸化粒	不明番号号に同納
中村	S122	不掲載 (注記 595 号 3013)	壺	ハ、ナ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	(底) 顔料付着?	5YR5/6 明赤褐	イ b	キ I a		凝灰岩	不明番号号に同納
中村	S119	不掲載 (注記 477 号 3008)	壺	ケ・ナ→赤彩 後ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布 (底) 顔料付着	無	5YR5/6 明赤褐	イ b	キ I a		安山岩・凝灰岩	不明番号号に同納
中村	S114	不掲載 (注記 3159 号 7013)	壺	ナ	ナ	8c 後～9c		(口) 縦位細条線 (胴) 塗布	無	5YR4/6 赤褐	イ b	カ II a	塗布後ミガキ	凝灰岩?・酸化粒	不明番号号に同納
中村	S130	不掲載 (注記 3445 号 7023)	壺	ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	無	5YR5/6 明赤褐	イ b	カ I a		凝灰岩	不明番号号に同納
中村	S135	不掲載 (注記 3528 号 7025)	壺	ミ	ナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	5YR5/6 明赤褐	イ b	カ II a		凝灰岩	不明番号号に同納
本宿羽場	S1006	図版 22-14	壺	ナ、ヨコナ	ナ	8c 後～9c	細筆	(口～胴) 3本組縦位細条線、単位 条線 1条、(肩～胴) 塗布	無	2.5YR5/8 明赤褐	イ a	ク II b		石英・海綿骨針・不明有色粒	
本宿羽場	S1031	図版 27-14	壺	ミ、ヨコナ	ナ	8c 後～9c		(口) 顔料付着	無	2.5YR4/8 赤褐	イ a	カ II b	塗布後ミガキ	同一個体破片多数	
藤沢	S1008 3 層	27 図-2	高坏	ナ、ヨコナ	ミ、黒	8c 後～9c		(坏部～脚部) 塗布	無	2.5YR4/8 赤褐	イ a	ク II b		堆積岩	
藤沢	S1008 床 PH5	27 図-4	壺	ヨコナ、ミ	ナ、ヨコナ	8c 後～9c	極細筆	(唇) 塗布 (口～胴) 3本組 縦位細条線 (胴) 塗布	(口～胴) 3本組縦位細 条線	10R3/6 暗赤	ア	キ II a			
藤沢	S1008	27 図-9	壺	ナ? (摩耗)、 ヨコナ	ナ、ヨコナ	8c 後～9c		(胴) 塗布	無	2.5YR3/6 暗赤褐	イ a	カ II b	摩耗、質感 不明	安山岩?	
牡丹畑	S1007 I 層	6 図-11	壺	ナ (摩耗)	ナ、ヨコナ	8c 前		(口～胴) 縦位太条線 (胴) 塗布	(口) 顔料付着	5YR4/4 にふい赤褐	イ b	キ II b		安山岩	

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	網描	塗布特徴 (口縁部：唇・口縁部：唇・口縁部：底)			胎土分類	黒斑・ス・コ グ	少量 含有物	備考			
				外面	内面			外面	内面	色調					色調分類	質感	その他
牡丹畑	SI007 1層	6図-12	壺	ミ	ナ	8c前	(脚) 塗布→ミガキ (底) 顔料付着	(脚) 顔料付着	25YR4/6赤褐	Ⅰa	カⅡb	塗布後ミガキ	堆積岩?・凝灰岩・ 安山岩?・海綿骨針				
牡丹畑	SI007 輝道カマド	6図-13	壺	ヨコナ、ミ	ナ、(明いハ)	8c前	(唇) 塗布 (口) 点 (脚) 塗布→ミガキ	無	25YR3/6暗赤褐	Ⅰa	カⅡb	塗布後ミガキ	堆積岩・安山 岩?・酸化粒				
牡丹畑	SI007 輝出	7図-15	甕	ハ、ヨコナ	ナ	8c前	(口縁) 顔料付着 (底) 顔料付着	無	25YR4/6赤褐	Ⅰa	クⅡb		堆積岩・安山岩				
牡丹畑	SI009 1層	15図-2	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c後~9c	(口) 顔料付着	(口) 顔料付着	25YR4/6赤褐	Ⅰa	(クⅡb)		堆積岩・不明有 色粒				
妻川	SI001	9図-5	壺	ナ→赤彩→ミ	ヨコナ	8c後~9c	(脚) 塗布→ミガキ	無	25YR4/6赤褐	Ⅰa	カⅡb	塗布後ミガキ	堆積岩?・凝灰 岩				
本宿Ⅲ	SI157A	26図-1	壺	ナ→赤彩→ミ?	ナ	8c後~9c	(口) 顔料付着	(口) 顔料付着	25YR4/6赤褐	Ⅰa	カⅡb		堆積岩?・酸化 粒				
本宿Ⅲ	SI158・ 162A	27図-17	壺	ナ	ナ	8c後~9c	(口) 顔料付着	無	5YR4/6赤褐	Ⅰb		摩耗で不明	雲母・堆積岩・ 安山岩・凝灰岩				
本宿Ⅲ	SI225	28図-37	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c後~9c	(口) 顔料付着	無	5YR4/6赤褐	Ⅰb		摩耗で不明	雲母・安山岩?・腐 り塵・不明有色粒				
本宿Ⅲ	SI225	28図-39	壺	摩耗	摩耗	8c後~9c	摩耗で不明	無	25YR4/6赤褐	Ⅰa		摩耗で不明	堆積岩				
本宿Ⅲ	SI225	28図-40	壺	摩耗	摩耗	8c後~9c	(口) 顔料付着	(口) 顔料付着	25YR3/4暗赤褐	Ⅰa		摩耗で不明	酸化粒・不明有 色粒				
八幡	SI066	27図-106	壺	ナ、ハ、ヨコ ナ	ナ、ヨコナ	8c後~9c	硬質細 筆	(口) 顔料付着	5YR4/8赤褐	Ⅰb	キⅡb		雲母・凝灰岩・安山 岩?・海綿骨針				
八幡	SI066	27図-109	壺	ハ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	8c後~9c	硬質太 筆	(唇) 顔料付着	5YR3/6暗赤褐	Ⅰb	キⅡb		雲母・安山岩?・ 酸化粒				
八幡	SI142	31図-186	壺	ハ→赤彩→ミ	ハ	8c後~9c	(口) 顔料付着	無	25YR4/8赤褐	Ⅰa	カⅡb	摩耗	安山岩?・酸化 粒				
八幡	SI143	34図-215	壺	ハ→赤彩	ハ	8c後~9c	(口) 顔料付着	(口) 顔料付着	10R3/6暗赤	ア	カⅡb		堆積岩・安山岩				
八幡	SI143	34図-216	壺	ハ→ミ	ナ	8c後~9c	(口) 顔料付着	(口) 顔料付着	5YR5/6明赤褐	Ⅰb	クⅡb		安山岩・酸化粒・ 不明有色粒				
江戸古群 五輪瓦群	SZ06	29-29	台付鉢	ハ、→ミ、赤 彩	ミ、黒	7c後~8c前	太田の軟質 筆	(口) 顔料付着	25YR4/8赤褐	Ⅰa	カⅡb		酸化粒・海綿骨 針				
麓山 塚	SI018床 面	9図-12	壺	ナ→ミ	ナ	8c後~9c		(口) 顔料付着	25YR4/8赤褐	Ⅰa	クⅡb		堆積岩?・安山 岩?				
麓山	HID (平安 の1号土坑)	未掲載	坏	ヨコナ、ミ、 ミ	ナ	8c後~9c		無	25YR5/8明赤褐	Ⅰa	カⅡb	塗布後ミガキ	堆積岩?・酸化 粒				
麓山	取り上げ 番号163		壺	ミ	ミ、黒	8c後~9c		無	5YR5/6明赤褐	Ⅰa	カⅡb	塗布後ミガキ					
伊治城 跡	SI490	坏15集・7 図-1	坏	ケ・ヨコナ	ケ・ミ・ヨ コナ	8c後~9c		無	25YR5/8明赤褐	Ⅰa	クⅡb		凝灰岩・海綿骨 針				



遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	線描	塗布特徴 (口唇部：唇 口縁部：口 頸部：頸 肩部：肩 胴部：胴 底部：底)				胎土分類	胎土含有物	備考		
				外面	内面			外面	内面	色調	色調分類				質感	その他
伊治城跡	S1490	13集・7図-2	坏	ケ・ヨコナ	ケ・ミ	8c後～9c		(胴～底) 塗布	無	25YR5/8明赤褐	ⅴa	-	摩耗、質感不明	A	凝灰岩・海綿骨針	
伊治城跡	S1491	13集・12図-1	坏	ハ	ミ	8c後～9c		(口～底) 塗布	(口～底) 塗布	25YR4/4にふい赤褐色	ⅴa	クⅡb	摩耗	A	海綿骨針	
伊治城跡	S1491	13集・12図-2	坏	ミ	ミ	8c後～9c		塗布	塗布	25YR4/8赤褐色	ⅴa	カⅡb		A	長石	
伊治城跡	SE704A	6集6図-7	壺	ハ→赤彩	ハ→赤彩	8c後～9c		(頸) 塗布	(頸) 塗布	10R4/8赤	7	カⅡb		A	長石	
伊治城跡	IT拡張区	17集15図-1	壺	ナ→赤彩→ミ	ナ	8c後～9c		(口～胴) 塗布→ミガキ	無	25YR4/6赤褐	ⅴa	カⅡb	塗布後ミガキ	AG	長石・酸化粒	
伊治城跡	IT拡張区	17集未報告	壺	ミ	ナ	8c後～9c		(胴) 塗布→ミガキ	無	25YR4/6赤褐	ⅴa		キ	AG	長石・酸化粒	
伊治城跡	S192北堀土層分層	17集21図-2	坏	ミ	ミ	8c後～9c		塗布→ミガキ	塗布→ミガキ	25YR5/8明赤褐	ⅴa	カⅡb	塗布後ミガキ	A	海綿骨針	
伊治城跡	SD834	19集6図-3	坏	ヨコナ	ヨコナ	5c後～6c		(口～胴) 塗布	(口～胴) 塗布	10R4/6赤	7	クⅡb		A	長石・凝灰岩・海綿骨針	
伊治城跡	SD320	壺(厚手)	壺	ミ	ナ	4c		(胴) 塗布	(胴) 塗布	10R4/4赤褐	7	クⅡb		A	流紋岩?・凝灰岩?・海綿骨針	
伊治城跡	SD320	壺(薄手)	壺	ミ	ミ	4c		(胴) 塗布	(胴) 塗布	10R4/6赤	7	クⅡb		A	長石	
伊治城跡	SD323	SD323	坏	ケ・ヨコナ	ヨコナ・ナ	4c		(口～胴) 塗布	(口～胴) 塗布	10R4/6赤	7	クⅡb		A	安山岩・海綿骨針	
伊治城跡	SD284	SD284	壺	ナ?	ナ?	4c		(頸～胴) 塗布	(頸～胴) 塗布	10R4/6赤	7	クⅡb		A	長石・海綿骨針	
上戸	採集資料		壺	ケ・ナ	ナ	8c～9c		(口～頸) 横位太条線	(口) 横位太条線	10R4/6赤	7	クⅡb		A	長石・凝灰岩	
泉谷館跡	7号住	6図-7	壺	ハ→胴部中央	ナ	7c前		(口～底) 塗布	無	25YR3/6前赤褐(ハイリター溶液による変色の可能性あり)	ⅴa	カⅡb		A	ハイリター処理か?	
阿光坊古墳	A1号墳		台付鉢	ハ→ミ、上半部黒	ミ 黒	7c前	大	(口～胴) 横位太条線	(口) 横位太条線	10R4/6赤色	7	クⅡb		AG	堆積岩・凝灰岩?・酸化粒・不明有色粒	
阿光坊古墳	4号墳		高坏	ケ→ミ、上半部黒	ミ 黒	7c前	非準壺?	(口～胴) 塗布、環部底部に強く塗り付け	(胴部) 段の下位まで塗布	25YR4/8赤褐色	ⅴa	カⅡb		AG	堆積岩・不明有色粒	環部内面に凹文状沈線
田面木遺構外	17図-1		壺	ケ→ミ、ヨコナ	ナ	7c後～8c前	大	(口) 横位太条線、縦位線に点文(凹文)を、下に点文(凹文)	無	5YR4/6赤褐色	ⅴb	キⅡa		AFG	堆積岩?・安山岩・酸化粒・不明有色粒	
田面木遺構外	178-2層		壺	ナ	ナ	7c後～8c前	大(17図より大い)	(頸) 横位太条線?	無	5YR5/4にふい赤褐色	ⅴb	キⅡa		AG	不明有色粒	
龍崎コノシヨク(二層)			壺	ハ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	7c後～8c前	大	(胴) 上半と下半に横位太条線+上半に縦位太条線+縁部子口文(環部) 塗布	無	5YR4/6赤褐色	ⅴb	カⅡa		AF	外周部黒斑、内周縁部黒斑	円形の赤褐色平均4～5mm多数
大平	S105	140図-1	壺	ミ(細い)、ヨコナ	ナ	8c後～9c	軟質	(口～頸) 2本組縦位太条線	線細	25YR4/6赤褐色	ⅴa	カⅡb	塗布後ミガキ	AC	凝灰岩・酸化粒・不明有色粒	北市内のものより、黒色粒は少ない。
沢田	1号墳	34図-1	坏	ナ→ミ	ナ、ヨコナ	5c後～6c初		(口～胴) 塗布	(口) 塗布	10R4/4赤褐色	7	クⅡb		A	酸化粒	
沢田	1号墳	34図-2	壺	ケ→ミ、木葉	ナ、ヨコナ	5c後～6c初		(口～胴) 塗布→ミガキ	(口) 塗布	10R4/6赤色	7	クⅡb	塗布後ミガキ	A	外周部・底面部黒斑	

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	線描	塗布特徴 (口縁部:唇 口縁部:口 頸部:頭 肩部:肩 胴部:胴 底部:底)			胎土分類	黒斑・ス・コ グ	少量 含有物	備考			
				外面	内面			外面	内面	色調					色調分類	質感	その他
沢田	2号墳	34図-4	坏	ナ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	5c 後~6c 初		外面	(口~底) 塗布	10R4/8 赤色	7	ク II b	外面底部黒斑	A	堆積岩・変成岩?・凝灰岩・安山岩・海綿骨針		
沢田	2号墳	34図-6	坏	ケ→ミ、木葉痕	ナ、ヨコナ	5c 後~6c 初		外面	(口~胴) 塗布 (底) 塗布?	10R4/8 赤色	7	ク II b	外面胴部ス	A	変成岩・凝灰岩・酸化泥		
沢田	2号墳	34図-7	坏	ナ→ミ	ナ→ミ	5c 後~6c 初		外面	(口~底) 塗布	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	7	ク II b	外面口縁~底部ス、内面口縁~胴部ス	A	堆積岩・変成岩・凝灰岩・海綿骨針		
沢田	2号墳	34図-8 (9と同一?)	壺	ヨコナ→口縁部 タテミ、ナ→ミ	ヨコナ→口縁部 タテミ、ナ→ミ	5c 後~6c 初		外面	(口) 塗布、(胴) 垂流れによる付着	10R4/4 赤褐色	7	ク II b	外面口縁~胴部ス	A	凝灰岩・変成岩・海綿骨針	1889年調査報告書では内面の赤褐色が認められない	
沢田	2号墳	34図-9 (8と同一?)	壺	ナ→ミ	ナ→ミ	5c 後~6c 初		外面	(胴) 塗布 (底) 顔料付着	10R5/4 赤褐色	7	ク II b	外面胴部黒斑・ス	AG			
沢田	2号墳	34図-11	壺	ケ→ナ・ミ、底部分	ヨコナ、ナ→ミ	5c 後~6c 初		外面	(口) 塗布	10R4/6 赤色	7	ク II b	外面口縁~底部黒斑、内面胴部黒斑	A	雲母・変成岩・凝灰岩・海綿骨針		
沢田	3号墓	36図-18	坏	ケ→ミ	ヨコナ→口縁部 タテミ、ミ	5c 後~6c 初		外面	(口~底) 塗布	10R4/6 赤色	7	ク II b	外面胴部黒斑	A	堆積岩・海綿骨針		
沢田	5号墓	36図-20	壺	ミ	ナ	5c 後~6c 初		外面	(口) 塗布	10R4/8 赤色	7	ク II b	外面胴部~底部黒斑	A	腐り織・海綿骨針		
沢田	1号土坑	39図-49	坏	ケ→ナ、ヨコナ、タテミ	ナ、ヨコナ	5c 前		外面	(口~胴) 塗布 (底) 不明	10R4/8 赤色	7	ク II b	外面胴部黒斑	A			
沢田	1号土坑	39図-50	高坏	ケ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	5c 前		外面	(坏部~胴部) 塗布	10R5/4 赤褐色	(7)	-	坏部内面黒斑	A	凝灰岩・海綿骨針		
沢田	遺構外	44図-123	坏	ケ→ナ、ミ、底部分	ミ	5c 後~6c 初		外面	(胴) 塗布	10R4/6 赤色	7	ク II b	内面底部黒斑	A	酸化粒・海綿骨針		
田久保下	SK309	151図-8	坏	ナ、ミ	ナ	6c 前~後		外面	(口~底) 塗布	10R4/4 赤褐色	7	ク II b	内外面口縁黒斑	AG		報告書では内面の赤褐色が認められない	
田久保下	SK317	152図-18	壺	ミ、赤彩	ナ	6c 前~後		外面	(胴~底) 塗布	2.5YR5/8 明赤褐色	7	ク II b	外面底部黒斑	A	石英		
田久保下	SK309	151図-9	甕	ミ、赤彩?	ナ	6c 前~後		外面	(口~胴) 塗布?	外面: 2.5YR6/6 黄褐色 内面: 2.5YR5/4 にぶい赤褐色~4.8赤褐色	—	ク II b	内外面口縁黒斑	A		二次焼結有、内面に黄褐色顔料が付着?	
田久保下	SK310	151図-10	甕	ハ、ヨコナ	ナ	6c 前~後		外面	(頸) 付着?	外面: 2.5YR5/4 にぶい赤褐色	—	不明	外面底部黒斑	H	雲母・海綿骨針		
仁沢瀬IV	III C4h 土坑	36図-5	坏	ケ→ナ、ヨコナ	ナ、ミ→赤彩	5c 後~6c 初		外面	(口) 付着 (意図的な塗布の痕跡ではない)	2.5YR5/6 明赤褐色	7	ク II b	外面底部黒斑	AB			
湯舟沢	遺構外	157図-10	壺	ナ、ヨコナ→赤彩	ナ、ヨコナ	7c 後~8c 前	平軟の痕跡	外面	(口~底) 塗布 (口) 等間隔の縦位細流線	10R4/6 赤色	7	ク II a	外面胴部黒斑、内面胴部黒斑	AD	石英・堆積岩・凝灰岩	顔料のひび割れ	
湯舟沢	遺構外	158図-16	壺?	ヨコナ	ナ、ヨコナ	7c 後~8c 前		外面	(口) 塗布	2.5YR5/6 明赤褐色	7	-	内面底部黒斑	AF	石英・安山岩	顔料摩耗	
仏沢III	遺構外	83図-5	坏	ケ→ミ→ヨコナ→赤彩	ヨコナ	5c 後~6c 初		外面	(口~胴) 塗布 ※底部は未塗布	10R4/6 赤色	7	ク II b	内外面黒斑とス	A	石英・凝灰岩	摩耗、顔料塗布面に光沢あり	
仏沢III	遺構外	83図-6	坏	ケ→ミ→ヨコナ	ナ→赤彩	5c 後~6c 初		外面	(口~底) 塗布	10R4/4 赤褐色	7	ク II b	内外面黒斑とス	A	海綿骨針		
仏沢III	遺構外	83図-6と号えられたりした個体	坏	ナ	ナ→赤彩	5c 後~6c 初		外面	(口~底) 塗布	10R4/4 赤褐色	7	ク II b	内外面黒斑とス	AG	海綿骨針	摩耗、顔料塗布面に光沢あり	
室小路D   681 竪穴	7	45図-3	高坏	坏部: ミ→赤彩 胴部: ハ→ミ→赤彩	坏部: ミ→赤彩 胴部: ナ	7c 後~8c 前		外面	(坏部~胴部) 塗布	10R4/4 赤褐色	7	ク II b	内外面口縁黒斑	A	雲母・石英		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	塗布特徴 (口唇部：唇 口縁部：口 頸部：頸 肩部：肩 胴部：胴 底部：底)					胎土分類	黒斑・スス・コケ	極少量含有物	備考		
				外面	内面		線描	外面	内面	色調	色調分類					質感	その他
夏本	AE7住	411	壺	ナ、ヨコナ	ナ	8c後～9c		(唇・胴部) 塗布 (口) 2本組縦位太条線の集合	(口) 等間隔コの字状線 (頸) 等間隔円文	2.5YR4/8 赤褐色	ⅴ a	カ II b		凝灰岩・海綿骨 針			
中嶋	包含層	96	坏	回転ナ	回転ナ	8c後～9c		(胴～底) 塗布	(胴～底) 付着	2.5YR4/6 赤褐色	ⅴ a	ク II b	摩耗	雲母	回転条切		
中嶋	包含層	127	坏	ハ→ミ	ミ	8c後～9c		(胴) 塗布	(胴) 塗布	2.5YR5/8 明赤褐色	ⅴ a	ク II b	外面摩耗	雲母・酸化粒	壺肩部か？		
中嶋	包含層	161	壺・甕類	ハ	ナ	8c後～9c		(胴) 塗布	無	2.5YR5/6 明赤褐色	ⅴ a	ク II b		雲母・酸化粒			
沼里	5号竪穴	23図-58	壺	ヨコナ・ハ ヨコナ・ハ	ヨコナ ・ハ・ナ	8c後～9c		(口～頸) 5本組縦位細条線 (胴) 塗布	(口～頸) 5本組細縦位 条線	2.5YR5/6 明赤褐色	ⅴ a	ク II b	外面に光沢有	雲母・チャート・腐り礫 凝灰岩・凝灰岩・安山岩	塗布後ミガキ		

# 江戸の南部屋敷（1）

## －盛岡藩南部家江戸上屋敷の研究－

中村隼人・滝尻侑貴・野田尚志

本稿は陸奥盛岡藩南部家が所有した各種江戸屋敷の建築空間について考察を行ったものである。連作の一本目となる本稿では盛岡藩が近世を通じ、外桜田に所有した江戸上屋敷を研究対象とする。本稿では、研究状況の整理、資料概要の説明、基本的な空間構成の把握、各資料の大きな年代比定までを行った。史料との比較を含めた分析と考察については続稿で行う。

### 序

本稿は陸奥盛岡藩南部家が江戸に所有した各種江戸屋敷の建築空間について考察を行うものである。連作の一本目となる本稿では、盛岡藩が近世を通じ、外桜田に所有した陸奥盛岡藩江戸上屋敷を対象に、その空間構成の具体について検討を行う。

陸奥盛岡藩江戸上屋敷（以下江戸上屋敷）については、ごく少数の既往研究が存在するが、いずれも史料上に記載された江戸上屋敷の情報を整理したものであり、絵図などの視覚的な資料を研究の対象としていない。

本稿では資料収集によって確認することができた九点の江戸上屋敷絵図を主たる資料とし、そこに描かれた建築空間の分析を行う。具体的には各絵図の内容の異同について整理を行い、成立年代の比定と絵図の性格の特定を行う。

なお本稿では、敷地内の施設全般を考察の対象としたい。屋敷地内の御殿空間のみを考察の対象とするのではなく、屋敷地形状の変化や、付属屋などの諸施設の実態、あるいは絵図面中にみられる特殊な図表現など、江戸上屋敷に関連する建築文化の諸相の全般を検討の対象とし、多面的な視点からその具体に迫ることが本稿の目的である。

連作の一本目となる本稿では、江戸上屋敷に関わる資料の紹介と、その資料内容の異同の把握を中心に記述する。

## 1. 研究状況

### 1.1 既往研究の整理

本稿の研究対象である江戸上屋敷に関する先行研究として、岩手県1963『岩手県史第5巻 近世篇 2 盛岡藩附・八戸藩』と、松方冬子1999「盛岡藩江戸屋敷の変遷について」を挙げることができる。

岩手県史第5巻は当時岩手県史編纂室に所属した田中喜多見氏が執筆したものである。盛岡藩の各種江戸屋敷について、被災歴や屋敷地の移動についての概略を整理している。

松方氏の論考は宮崎勝美氏を研究代表とする科研費成果報告書中のものである。県史同様に盛岡藩の各種江戸屋敷の被災歴や屋敷地の移動について概要を整理したもので、内容は前掲書よりも詳細である。なお上述したように、両論考はともに絵図などの資料を用い、屋敷地内の空間構成の具体について言及するまでには至っていない。

両論考で報告された内容のうち、大要については本稿二章七節「盛岡藩の江戸屋敷」に適宜転記する。

## 1. 2 建築史研究における絵図の資料性

次に本稿の主たる資料である絵図の特徴と資料性についてここで概観しておきたい。

江戸に造られた大名屋敷を考える資料として、最初に挙げることができるのは、藩政史料や大名家文書などの文献史料であろう。史料内容にも左右されるが、これら文書類は対象となる建物それ自体を描くというよりは、建物が建築されたり、あるいは増改築されたりする際に必要な一連のシステム（建築組織の運営や土地・費用・資材・人員の調達・調整など）を把握するのに適当な史料である。一方で文書は対象となる建物の内容を直接的に示すものではない。この為、建物それ自体の空間配置の具体を短時間で視覚的に把握するという点においては不向きな史料ということもできる。

これら文書類が必然的に持たざるを得ない視覚性の欠落という性質を補完しうる資料として、絵図や指図が存在する。絵図は対象とする建物の平面をそのまま図示する場合が一般的で、その空間構成の具体を容易に視認することができる。ただし実際に工事図面として使われた指図とは異なり、建物の高さに関する情報や、細部意匠に関する情報が全く示されていない場合も多く、絵図一枚でその建物に関する全ての情報を得ることができるわけではない。

絵図と一口に言っても、その性格や作成意図は多様である。例えば既に存在する建物の中で行われた行事の席次や作法・手順を書きこんだ図や、建物の破損や老朽化の情報を書き込んだ図、あるいは増改築の計画を書き込んだ計画図である場合などが多い。先行する建物が全く何もない土地に、建物を新築する際の計画図である場合は極めて稀で、多くの場合それぞれの絵図が作成された背景を推論する作業が必要になる。

また絵図に描かれた建物の全てが実際に存在したとは限らない、という点も注意すべきである。例えば新築の建物を建築するために造られた計画図が残されていたとしても、この計画が頓挫し実際の工事が行われなかった場合、その絵図に描かれた建物は実際には存在しなかったということになる。

また同様に、現実存在した建物の増改築の計画を示した絵図が残されていたとしよう。この計画が頓挫した場合はさらに複雑で、その絵図に描かれた建物の一部は現実存在し、別の一部は現実には存在しなかったなどという事例も考えうる。

これら絵図作成の背景や、そこに描かれた建物が実際に存在したか否かを判断する為には、同じ建物を描いた異なる絵図や史料類、あるいは遺構との比較を含めた多面的な史料批判が必要である。

図中に年代や方位が書かれていない場合も多く、この場合も同様に他の史料との突合せ作業が必要である。また仮に図中に年代が書かれていたとしても、それが絵図に描かれている内容の年代を指すのか、あるいは絵図が作成された年代を指すのかを判断しなければならない。さらにはこれが後年の加筆による場合も当然あるため、資料中に示された年代の取り扱いには慎重さが求められる。

作図精度の良し悪しや、図面表現の省略などの理由により、同一時期の同じ建物を描いた絵図でありながら、全く異なる印象を与える絵図が残される場合もある。史料批判を行うに当たっては多くの判断が必要である。

## 2. 江戸大名屋敷の成立と機能

### 2. 1 江戸の都市計画と江戸大名屋敷の成立

天正十八年（1590）、小田原の後北條氏を攻略し、関東を掌握した豊臣秀吉は、徳川家康に関東への転封と本拠を江戸城とすることを命じた。江戸城は扇谷上杉氏の家宰太田道灌によって康正二年から二年かけ（1446～1447）築かれた城館であるが、道灌没後の大永四年（1524）には後北条氏二代氏綱によって攻め落とされ、遠山綱景を城代とする後北条氏の支城となった。関東六か国

二百五十万石の領主として家康が入部する以前の江戸城近郊には、戦国期以来の集落が複数存在したほか五十以上の社寺が存立していたとされるが、基本的には広い武蔵野の一村落到過ぎなかった。

天正十八年の江戸入部以降、家康は江戸城とその城下の建設に着手した。江戸前島から道山掘を開削し、江戸城と江戸湊とを繋ぎ、資材の搬入を容易にするなどの開発が行われた。江戸入部当初段階の家康はいまだ豊臣政権下の一大名に過ぎなかった。このため江戸及び江戸城に関わる最初期の開発は全て徳川の自普請で行われた。家康は江戸開発の最初期段階において既に三河から付き従った譜代衆に対し、江戸城内堀内に用地を提供しており、ここに屋敷を構えさせた。後の幕閣であるこれら譜代衆が江戸城の東側、つまり大手付近に相当する大名小路に築いた江戸屋敷こそが、その後の江戸大名屋敷の起こりと位置付けることができる。なお家康が下賜した敷地に造られた屋敷は拝領屋敷と呼ばれ、年貢が免除された。

慶長五年（1600）の関ヶ原合戦に勝利し、家康は武家の第一人者となった。この段階の江戸城及び江戸は、諸大名を参集させるほどの規模と荘厳を有していなかった。政務の実態はいまだ伏見城にあり、江戸は徳川氏の本拠という以上の意味を持たなかった。慶長八年（1603）に家康が征夷大將軍に任じられると、江戸城は將軍の居城としての意味を与えられ、江戸は幕府の所在地となった。家康はこれを契機とし、諸国の大名に江戸への参集を求め、江戸城とその城下の整備を課役した。諸大名は家康への臣従の意を示すべく、この天下普請に助力するよりほかに、家康は勞せずして本拠の大改修を成し遂げた。家康はこの天下普請により神田山を削平し、日比谷入江を埋め立て、現在の江戸城南東域に相当する日比谷から丸の内周辺の地域を造成するなど、城下の拡充を図った。

造成地東半に相当する江戸前島は町人地に設定された。日本橋が架けられ東海道と中山道を結ぶ日本橋通りが造られた。日本橋通りの両側には京間六十間四方を基調とする正方形街区の町割が造られた。

造成地西半に相当する江戸城南側の外桜田や霞ヶ関などは外様大名の屋敷地に設定された。慶長三年（1598）に秀吉が没すると、外様大名の多くは家康へ接近し、自らの妻子などを証人（人質）として江戸に差し出した。家康はこれらの証人と江戸に出府する大名達のために、これらの地域を拝領屋敷の用地として下賜した。慶長六年（1601）には伊達政宗が桜田と愛宕下に、同七年（1602）には細川忠興が外桜田に、さらに翌年には毛利輝元・上杉景勝・加藤清正らも外桜田に屋敷地を拝領し、居屋敷を構えた。また、江戸城西側の高台は旗本や御家人など、小身武士の屋敷地に設定された。

慶長九年（1604）には天下普請が本格化し、江戸城本丸御殿の作事や石垣普請がなされた。寛永十二年（1635）には外堀が完成するなど、江戸は天下の首府としての体裁を整えるに至った。

## 2. 2 江戸の発展と江戸大名屋敷の林立

寛永十二年（1635）の武家諸法度により隔年ごとの参勤が制度化されると、外様大名の妻子の江戸在住が強制化された。同十九年には譜代大名に対しても同様に参勤が適用されることになり、全ての大名が江戸に屋敷を所持しなければならない状況が形成された。

近世初頭段階の諸大名の江戸屋敷は、江戸城近郊の外堀内にもみ造られた。外堀内のなかでも大手に相当する城東の大名小路や西丸下には譜代大名が配置された。城南の外桜田には外様大名の屋敷地が集中して配置された（図1）。この段階では居屋敷の他に、複数の控屋敷の用地を拝領した大名は極めて少数で、基本的には一大名が所持する江戸屋敷は拝領屋敷一カ所という状態が一般的であった。

この状況が一変するのが当時の江戸城下の六割を焼尽させた明暦大火である（明暦三年（1657））。この大火の教訓から城下には多くの広小路や堤、明地などの防火帯が設置されることに

なった。江戸城内堀内でも、城東に築かれた譜代大名の居屋敷や、城南に築かれた外様大名の居屋敷は再建され維持されたが、一部の有力大名にのみ許された控屋敷や社寺地はすべからく外堀外へと強制的に移転させられた。また、これを契機とし、それまで控屋敷を持たなかった大名の多くも、外堀外に控屋敷の用地を拝領するようになり、一大名が複数の江戸屋敷を所持する状態が一般的になった。

さらに十七世紀後半段階になると諸大名多くが、拝領屋敷のほかに、自ら郊外の年貢地を購入し、控屋敷として所有するようになった。これら大名が自力で購入した江戸屋敷は抱屋敷と呼ばれ、大名は複数の江戸屋敷を所有し、これを使い分けた。

抱屋敷の林立の背景には参勤交代に伴う江戸の急激な人口増加があった。参勤交代の制度化に伴い、

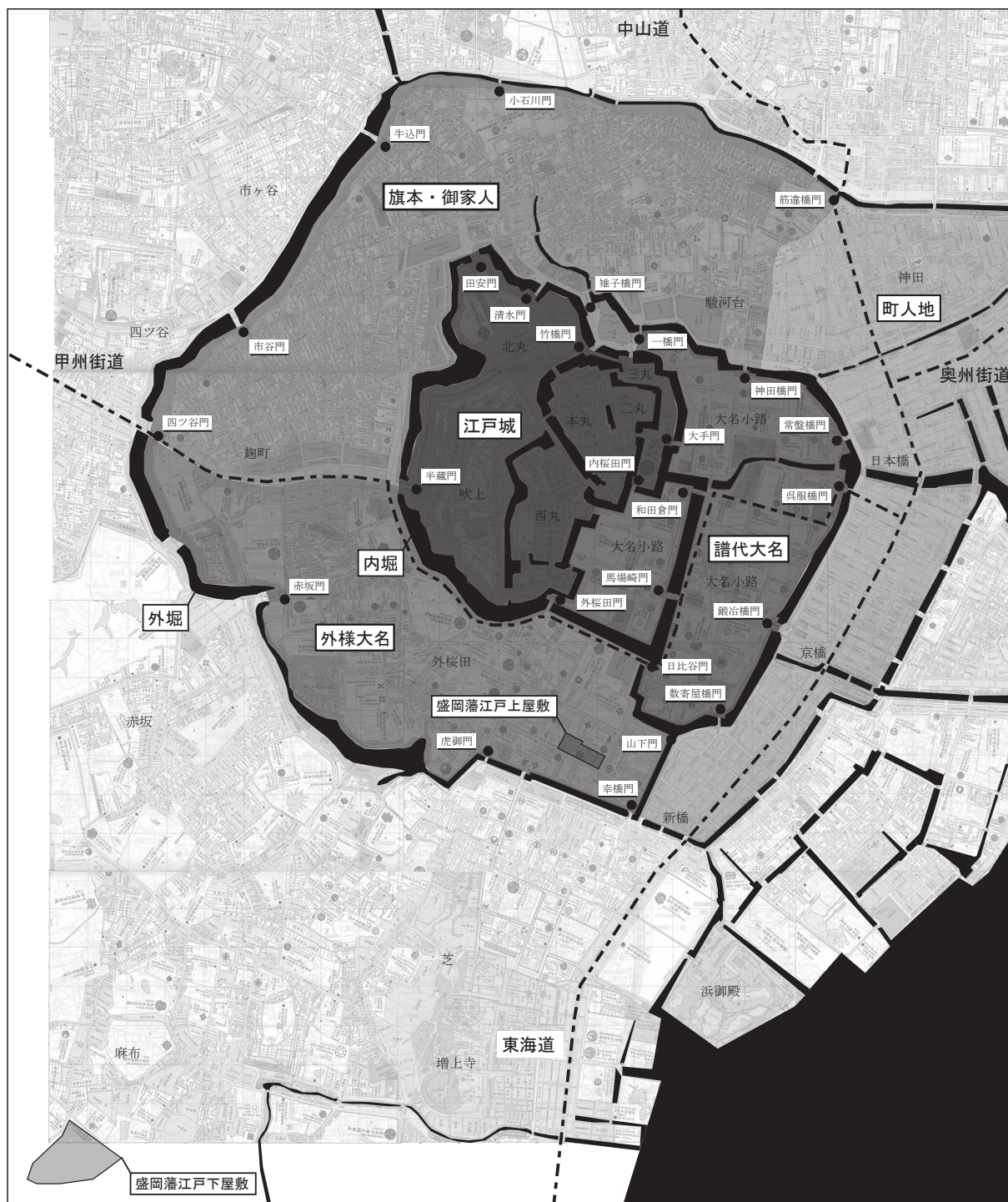


図1 江戸城近郊の都市計画と盛岡藩江戸上屋敷・江戸下屋敷の立地 (下が南)

大名は藩士を連れ、隔年で国許と江戸を往復することが義務付けられた。諸大名にとって大名行列は、一面においては多大な出費を強いられる軍役であり、かつ將軍への服従の意志を示す儀礼であったが、しかし他方においては領内外を問わず、自らの権勢を誇示する絶好の機会でもあった。年を追うごとに諸藩の大名行列は長大化し、旅装も華美になった。一万石程度の小大名であっても行列の随員が百人を超えるのが一般的で、最大の外様大名である加賀前田家では、最盛期においては随行者が四千人を超えた。享保六年（1721）には参勤の随行者数に対し、幕府が規制を設けるほどだった。これら参勤交代に随行した藩士と、これに従った従者たちの居住地を用立てるため、大名は郊外に多くの抱屋敷を買い求めた。また当然これら武家地を支えるには膨大な数の商工業者が必要で、これら町人地の需要も増した。明暦大火以降、幕府は赤坂や小石川などを造成し、武家地と町人地の拡張を図った。控屋敷の郊外移転と、新規購入された抱屋敷の林立に伴い、これを支える町場の移転と拡張も行われるなど、江戸の人口はさらなる増加を続け、都市域は外掘外まで拡大した。

十八世紀初頭段階の江戸は人口百万人超を有する世界屈指の巨大都市で、かつその人口の半数程度が武士階級であった。諸大名が構えた江戸屋敷は六百以上に及び、それぞれが広大な敷地面積を誇った。旗本や御家人の拝領屋敷を含めれば、府内全域の七割相当が武家屋敷に占有される状況であった。

拝領屋敷・抱屋敷を問わず、大名同士の屋敷地の相對替（交換）や、金銭による売買も日常的に行われていた。頻繁に変更される屋敷地の所有者や、利用の実態について、幕府が完全に把握できない状況もみられた。大名の居屋敷である江戸上屋敷が幾度も移転することは稀だが、以外の控屋敷に限定するならば、屋敷地の交換や売買により、何度も屋敷替えを繰り返すことも珍しくなかった。

### 2. 3 江戸大名屋敷の種類と機能分化

先述の通り、諸大名は江戸に複数の江戸屋敷を所持し、立地条件や敷地面積などによりこれを使い分けた。幕府から下賜された屋敷地に建てられた屋敷は拝領屋敷と呼ばれ、大名自らが年貢地を購入し構えた屋敷は抱屋敷と呼ばれた。この他に大名が在府中に主に過ごす江戸上屋敷を居屋敷と呼び、以外の屋敷を控屋敷と呼んだ。ここでは拝領屋敷の機能分化を中心に、各種江戸屋敷の性格の違いについて概略を示したい。

江戸上屋敷には、大名及びその家族の参府時の居屋敷としての機能が求められた。在府中の大名には定例の登城日が定められており、頻繁に江戸城に登城する必要があった。このため江戸上屋敷はほぼ例外なく、その藩が持つ拝領地のうち、最も江戸城に近い用地に構えられた。また江戸上屋敷は大名在府中の政務の場でもあり、かつ参勤に従い出府した江戸詰めの藩士らの生活空間でもあった。大名が生活し、政務を行う御殿空間の他に、藩士らが起臥する長屋など、詰人空間も多く造られたため、狭隘な敷地内に高い密度で多くの大型建物が建てられた。

江戸上屋敷に比べ、江戸中屋敷や江戸下屋敷に与えられる役割は各藩によって異同がある。

一般的に江戸中屋敷は、隠居した先代藩主や世子の在府中の屋敷として使われた。このほかにも江戸上屋敷が罹災した際に大名が控屋敷として利用することも多く、江戸上屋敷に準じる機能が求められた。多くの場合、水景を伴う庭園が築かれるなど、遊興や交流の場としての機能も求められた。この他に江戸上屋敷と同様に在府中の藩士達の居住空間としても利用される場合も多い。なお小藩の場合、江戸中屋敷を持たない例も多く、幕末期においては約半数の藩が江戸中屋敷を所持していない。江戸下屋敷は江戸上屋敷・江戸中屋敷以外の拝領屋敷の全てを指す。藩によっては、同一時期に多くの屋敷地を下賜される場合もあり、複数の江戸下屋敷を所持する場合もあった。幕府から下賜される拝領屋敷の数に明瞭な基準はなかったようで、幕末期の尾張藩などは三十カ所以上の拝領屋敷を所有



している。江戸城近郊の拝領地が居屋敷として使われたため、必然的に郊外の拝領地が江戸下屋敷の用地に割り当てられた。これら郊外の拝領地は、ほぼ例外なく江戸城近郊の拝領地に比べ広大な敷地面積であったため、大名達はこれを活かし、居屋敷を補完する種々の機能を与えた。その用途は藩によって異同がみられるが、屋敷数の少ない小藩の場合、やはり藩士達の居住空間として利用される例が多い。複数の屋敷地を所有する大藩の場合、広大な敷地面積を活かし、庭園を築き、藩主の別邸と利用する例が多い。この他にも国許から運ばれた物資を保管する蔵屋敷としての利用や、田畑として利用する例もみられる。

抱屋敷の代表的な用途は蔵屋敷や藩士の居住空間である。

なお、ここでは大名の江戸屋敷についてのみ概略を示したが、旗本や御家人、大奥女中らの屋敷地も幕府によって下賜されたものであり、広義の拝領屋敷に含まれる。大身小身を問わず、世嗣断絶などにより、屋敷の所有者が不在になった場合、これら拝領地は幕府に返上された。

## 2. 4 江戸大名屋敷の消失

明治元年（1865）、江戸は東京へと名を変え、奠都がなされた。江戸の人口の過半を占めた藩士たちは帰郷し、東京の人口は短時間で急速に減少した。当然江戸屋敷の多くは管理が行き届かない、ないしは放置された状態となった。特に郊外に造られた江戸下屋敷や旗本屋敷の荒廃は著しかった。同年、新政府は上地令を布告し、拝領地の多くを接収することとした。華族（大名）に対しては、家禄に関わらず郭内に一カ所、郭外に二カ所までの屋敷の所有を認めるが、以外の拝領地は全て接収する方針を示した。また華族が引き続き拝領地で生活することを望む場合、地代を徴収し、貸し付けることとした。新政府は、接収した拝領屋敷の多くを取り壊し、その用地を主要官庁や軍官舎、大学用地へと転用した。財政的な基盤を持たなかった明治政府が、迅速に首都東京の開発を成し遂げた最大の要因として、これら拝領地の転用や転売を挙げることができる。この他にも桑茶政策を推奨した新政府は、桑畑や茶畑の開墾希望者を募り、接収した拝領地を払い下げた。同様に接収された小身武士の拝領屋敷も、維持管理や修繕に費用が掛かることから、低価で払い下げられ、破却された。

抱屋敷の所有権は引き続き華族に与えられたが、近世を通じ借財に苦しんだ大名達が、これを維持し続けるのは財政的に困難で、抱屋敷の屋敷地と建物もまた、多くの場合新政府や政商へと売却され、破却された。郭内に残った少数の江戸屋敷も、その殆どが関東大震災（大正十二年（1923））と、東京大空襲（昭和二十年（1945））により失われた。小石川後樂園や六義園など、江戸屋敷内に築かれた庭園が原位置を保ち、遺されている例もあるがこれも少数である。また門や御殿の一部のみが移築され遺されている例もあるが、これもごく僅かである。日本史上最も贅を尽くした建築群と評することも可能なこれら江戸大名屋敷の建物群は、近代の到来とともにごく短い期間で失われた。

## 2. 5 江戸上屋敷の基本的な空間構成

次に本稿の研究対象である江戸上屋敷の一般的な空間構成について概要を示したい。

大名の江戸在府中の居屋敷であった江戸上屋敷は、大名とその妻子が生活する御殿空間と、藩士達とその従者が生活した詰人空間とに二分できる。少数の例外を除き多くの場合、屋敷地の中心に御殿空間が位置し、この周辺に詰人空間が展開するのが一般的である。

御殿空間は表御殿（表・中奥）と奥御殿（奥）を中心とし、この周囲に台所・馬屋・馬場・庭園・能舞台などが配置された。

江戸上屋敷の表御殿は表と中奥の二つの空間に区分される。表は大名が在府中に藩政を行う公的の空

間で、大名と家老以下の家臣がここに出勤し執務を行った。この他にも表には広間や書院などの施設が設けられ対面・接客・宴席などの儀礼が行われた。中奥は大名が日常的に起居する私的空間である。大名以外には一部の側近しか立ち入ることのできない空間で、平時の執務は中奥で行われた。

奥御殿は大名妻子とこれに仕える女中らの居住空間で、藩主以外の男性の出入りは禁じられた。

御殿空間は国許の居屋敷と同様に、御家の威光を示す最も重要な施設であり、その建築と維持には莫大な費用がかけられた。

これら御殿空間の空間構成は中近世以降期を経て、半ば定型化したものになっていた。将軍が座す江戸城本丸御殿から、大名の国許の居屋敷に至るまで、規模の大小や装飾の多寡の差こそあれ、一定以上の家格の武家の居屋敷は、基本的には同様の空間構成で造られていた。

詰人空間の主体をなすのは多くの藩士とその従者たちが生活した御長屋である。御長屋は在府中の藩士たちが暮らした居住空間であるが、屋敷地のうちでも街路に面する外縁に築かれたものは表長屋と呼ばれた。屋敷地の外周は表長屋と、これと一体になった門・堀・番所や矢倉によって全周されるのが一般的で、表長屋は屋敷地と外部を区画する圍繞施設としての機能も併せ持った。街路に面する部分に造られたことから、多くの場合瓦葺き屋根の二階建てにするなど、御家の威光を示すべく外観にも気が配られた。この他にも敷地に余裕のある屋敷地の場合、敷地中央に内長屋を設けた。これら内長屋は外観に気を配る必要がなかったため、簡便な造りで済まされることが一般的で、板葺き屋根の平屋である例も多い。町長屋と同様に御長屋も井戸や厠は共用で数は少ない。

江戸上屋敷に居住した藩士の多くは一年から二年程度の短期間のみ在府し、後に国許に帰郷する単身の江戸詰人（勤番者）であったが、この他にも江戸に常住する定府（常府）の藩士も多く存在した。これら定府の藩士は妻帯が認められており、家族とともに生活する独立した家屋が与えられる場合もあったが、多くの場合はこの限りではなく、江戸詰人らと同様に妻子とともに御長屋に居住した。御長屋の居室には多少の大小の差があり、役職や禄高に応じ、入居する居室が割りふられたが、その多くが間口二間ないしは三間であるなどすべからず狭小であった。

江戸上屋敷の場合、屋敷地の大半が御殿空間に占有されるため、詰人空間は残余の狭隘な空間に限定して造られた。必然的にそこに造られた建物は過密化し、狭小であるのが一般的で、御長屋はその中でも最も狭い空間であった。前述したように、幕府が享保六年（1721）に参勤の随員に対し規制を設けるまで、江戸に出府する流入者人口は増加を続ける一方であった。藩士以外の従者も含めれば、大藩では五千人、小藩でも五百人以上の人員が江戸上屋敷内に収容される様相であり、異様ともいえる高密度の空間利用が行われていた。

## 2. 6 盛岡（三戸）南部家と陸奥盛岡藩の歴史

文治五年（1189）奥州合戦に鎌倉方として従軍した南部光行は、その功により陸奥国最奥の地である糠部郡を給された。光行が拝領した糠部郡は現在の青森県東半から岩手県北部の範囲に相当する広域な郡で、鎌倉時代には北条得宗家の所領であった。光行の後裔は、八戸（現青森県八戸市）を拠点とし、糠部郡中に勢力を拡げた。室町時代中期に至ると、これら南部一族の有力国人達は、郡中の一戸・三戸・七戸・八戸・九戸などにそれぞれの所領を構え、分立した。これら南部一族の有力国人は、一揆的結合状況にあり、衆議を前提として糠部郡中全域を共同知行した。戦国時代に入るとこのうちの三戸南部氏が台頭し、発言力を強めた。

三戸南部氏二十四代当主南部晴政は、岩手郡や鹿角郡への侵攻に成功するなど、南部一族の勢力域を拡大させる意向を示した。しかしこの段階に至ってもなお一族間の内紛や競合が頻発するなど、三

戸南部家の統制は絶対的なものではなく、晴政はいまだ戦国大名足りえる存在ではなかった。三戸南部氏は元来、平良崎城や本三戸城（ともに現青森県南部町）を居城としたが、晴政が当主を務めた十六世紀中頃以降は三戸城（現青森県三戸町）へと本拠を移した。

天正九年（1581）に晴政と世子晴継が相次いで没すると、晴政の娘婿である田子信直が三戸南部家二十六代当主の座を得た。一族中の九戸氏・久慈氏・櫛引氏・七戸氏などは信直の当主相続に反発し、一族内の対立は深まった。また、天正十七年（1589）には津軽で大浦為信が蜂起し、翌十八年（1590）には安藤実季が比内を奪還するなど、南部一族の結束と糠部の安定は危機に瀕した。

一方、時を同じくして天下を一統した豊臣秀吉は、奥羽の領主層に対し上洛と参礼を求め、自らへの臣従を促した。この動きにいち早く呼応した信直は、天正十八年（1590）の豊臣軍の小田原攻めへ参陣し、続く奥州仕置にも従軍することにより、秀吉から南部一族の代表として認められ、所領七ヶ郡を安堵する朱印状を得た。有力氏族のうち三戸南部氏と友好的な立場にあった八戸氏などは三戸南部氏の家臣として服属することを承諾したが、反目する九戸氏らはこれを認めず、天正十九年（1591）三月に挙兵した（九戸一揆）。奥州再仕置軍の加勢を得た信直は同年九月に九戸城を攻略し、名実ともに大名としての安定的な立場を得た。

天正十八年（1590）秀吉は、信直に先んじて接近した津軽（大浦）為信に平賀・鼻和・田舎を与えることを決め、南部は三郡を失領した。この失領に替わる代替地として、南部に和賀・稗貫の二郡の加領を行うことが決まった。信直は南方に拡がった版図の安定を図るため、居城を北上川流域の不来方（現岩手県盛岡市）に移す意向を示し、築城と城下の普請に着手した。

慶長三年（1598）に秀吉が没すると、信直は徳川家康に接近した。自領の一揆鎮圧のために、慶長五年（1600）の関ヶ原の合戦には参加しなかったが、この段階で既に信直は徳川方に属していた。大坂の役には信直の嫡子利直が徳川方として参陣している。

盛岡城の普請は度重なる水害と火災の影響などにより、予想以上の歳月が費やされた。寛永十年（1633）、三戸南部家二十八代重直（盛岡藩三代藩主）の代に盛岡城は完成し、以来盛岡藩十萬石の居城となった。

寛文四年（1664）三代藩主重直は後継を定めないまま江戸で没した。これを受け幕府は二萬石減封のうえで、盛岡藩八萬石を弟の七戸隼人正（盛岡藩四代藩主南部重信）に継がせ、同じく弟の中里数馬直房（八戸藩初代藩主南部直房）には家を興させ、八戸藩二萬石を与えた。

元禄七年（1694）五代藩主行信は弟の正信と勝信に五千石と三千石を分知し、旗本として幕府に出仕させた。以降両家はそれぞれの拝領屋敷の地名から三田屋敷南部家・麴町南部家と呼ばれた。

安永三年（1774）九代藩主利雄は長子利謹を廃嫡し、三田屋敷南部家五代信由（十代藩主利正）を盛岡藩本家の世子として迎え入れた。これに伴い三田屋敷南部家は途絶え、所領・家臣・江戸の拝領屋敷は盛岡藩本家に復した。

文化五年（1808）には、領地の加増を伴わない二十萬石への高直しがなされた。

藩政期を通じ、盛岡藩の名産は大豆・片栗・紫根・俵物（海産物）・漆器・良馬などであった。一方、近世を通じ寒冷な気候に悩まされたため、農業生産力は安定しなかった。立藩から廃藩に至るまでの二百七十年間で二十八度の不作、三十六度の凶作、十六度の大凶作に見舞われるなど、藩財政は常に困窮していた。領内では述べ百三十三度の一揆が起きたが、この数は諸藩中でも最多である。

戊辰戦争においては、当初勤皇派に属したが、後に幕府方に転じた。奥羽越列藩同盟に加わった盛岡藩は、津軽藩や出羽秋田藩に侵攻するなどしたが、最終的には新政府軍に屈し、慶応四年（1868）九月に降伏した。また同年にはこの責を負い、石高を十三萬石に減じたうえで、陸奥白石藩への転封

が決定した。翌年（明治二年（1869））には新政府に七十万両の献金を行うことを条件に、旧領盛岡に復した。しかし翌年（明治三年（1870））には藩財政破綻を理由に、他藩に先んじ廃藩を願い出た。同年、新政府はこれを受理し、盛岡藩の版籍は奉還された。

## 2. 7 盛岡藩の江戸屋敷

ここでは盛岡藩が所有した江戸屋敷の変遷について概要を示す。なお、いずれの屋敷も火災や地震、あるいは老朽化などにより、何度も改変されているが、これについてはここでは詳述しない。罹災歴や改変歴については、続稿で行う史料類との比定において、合わせて整理し分析する。

**江戸上屋敷** 盛岡藩南部家の江戸上屋敷は外桜田の一画にあった。近世を通じ屋敷替えはなく、罹災に伴い控屋敷に一時的に非難した場合を除き、居屋敷は常に同所にあった。江戸上屋敷の屋敷地は、現在の千代田区立日比谷公園内にあたる。具体的には公園内南端の位置に相当し、現在は区立日比谷図書館や日比谷公会堂が建てられている。同所の発掘調査は行われておらず、江戸上屋敷に関する建造物も残されていない。

南部史要には慶長五年（1600）に江戸屋敷を拝領したと記されている。慶長十一年（1606）には三代藩主重直が「江戸屋敷」で誕生している。慶長十七年（1612）には將軍秀忠の御成を迎えている。宝暦三年（1706）には東接する陸奥三春藩秋田家の居屋敷を相対替により入手し、のちに当初からの屋敷地に囲い込み一筆とした。江戸上屋敷が所在した外桜田は、外様を中心とする大名の居屋敷が建ち並ぶ地域であった。盛岡藩南部家の拝領地は東と南の二面が街路に面し、以外の二面は下野吹上藩有馬家・丹波福山藩朽木家・肥前唐津藩小笠原家・河内狭山藩北条家の居屋敷と接していた（図②）。

明治新政府に接収されると同所一帯は、兵部省の所轄地となった。盛岡藩の拝領地を含む桜田門外から日比谷御門外までの敷地は一括して更地となり、明治四年（1871）には陸軍操練所が造られた。当時府下唯一の操練所であった同施設は、同十八年（1885）には日比谷練兵場と改称された。明治二十年頃には近隣の都市化が進んだうえ、敷地が手狭になったため、練兵場は廃止され青山に移転した。

同二十一年（1888）の東京都市区改正委員会において日比谷練兵場跡地の公園整備計画が告示され、同二十六年（1893）に軍は東京市に練兵場跡地を払い下げた。東京市は同所に日本初の西洋式近代公園である日比谷公園を造り、広く市民に開放した。同四十一年（1908）には、園内に東京市立日比谷図書館が開館し、首都東京の中核的公立図書館としての役割を担った。なお同図書館の管理は平成二十一年（2009）に東京都から千代田区に移管されている。

**江戸中屋敷** 盛岡藩南部家がどの段階で中屋敷の用地を拝領したのかは定かではないが、元禄十四年（1701）に築地の盛岡藩南部家江戸中屋敷の用地と、芝愛宕下の神尾五郎太夫の屋敷地を相対替した記録が残されている。さらに宝永三年（1706）にはこの芝愛宕下の屋敷地に三千五百両を加え、盛岡藩江戸上屋敷に東隣する三春藩秋田家の拝領地と相対替し、のちに元来の江戸上屋敷の拝領地と一筆にまとめた。

この後しばらく盛岡藩南部家は江戸中屋敷を持たない時代が続いた。安永三年（1774）、九代藩主利雄は長子利謹を廃嫡し、分家の三田屋敷南部家五代信由（盛岡藩十代藩主利正）を世子として迎え入れた。この裁定に伴い、本来三田屋敷南部家の拝領地は幕府に返上されるはずであったが、南部家は幕府と交渉し、引き続き同所の拝領を認められた。以降盛岡藩南部家はこの三田屋敷南部家の居屋敷跡（港区三田）に江戸中屋敷を構えたが、以降も築地木挽町の旗本屋敷や、小石川小原町の一橋徳川家の下屋敷の一部と相対替を繰り返すなど、長期間一カ所にあり続けることはなく、幾度も屋敷替えを繰り返した。

江戸下屋敷 盛岡藩南部家がどの段階で下屋敷の用地を拝領したのかは定かではない。明暦二年（1656）に赤坂の水川神社付近にあった盛岡藩南部家江戸下屋敷の用地に九百両を加えることにより、麻布一本松にあった播磨赤穂藩浅野家の屋敷地と相對替した記録が残されている。以後近世を通じ盛岡藩南部家はこの麻布一本松の屋敷地を江戸下屋敷とし使用しつづけた。

同屋敷の跡地は現在の港区麻布五丁目の有栖川宮記念公園に相当する。園内には現在も江戸下屋敷時代に築かれた庭園を由来とする麻布台地の地形を利用した林泉式庭園が良好な状態で残されている。なお同公園内に江戸下屋敷時代の建造物は残されていないが、もりおか歴史文化館に所蔵される「江戸下屋敷絵図」や「麻布屋敷図」などにより、往時の概要を知ることができる。藩政期の同屋敷は藩主の別邸としての機能が強い空間で、敷地の中央から西端に掛けての範囲は庭園空間に占められていた。敷地東半には富士見御殿・寿御殿という二棟の御殿が建てられ、屋敷境には同心長屋と呼ばれる表長屋が築かれた。

明治二十九年（1896）、有栖川宮威仁親王が霞ヶ関の御殿から屋敷替えをするにあたり、代替の御用地として盛岡藩江戸下屋敷の跡地が選ばれ、同年政府は同所を有栖川宮家に譲渡した。大正二年（1913）有栖川宮が薨去し、同家が廃絶すると、同地は有栖川宮家の祭祀を引き継いだ高松宮に継承され、高松宮御用地となった。有栖川宮没後二十年にあたる昭和九年（1934）に、高松宮から東京市に屋敷地の一部が下賜され、東京市は同地を有栖川宮記念公園として市民に開放した。

現在、同公園内には東京都立中央図書館が所在しているが、同図書館は先述の都立日比谷図書館が



図2 盛岡藩江戸上屋敷の立地と周辺環境（安政三年（1856）頃）（下が南）

所蔵していた古文書類や江戸東京資料の収蔵と公開を目的とする近世史料図書館として企画されたものである。つまり盛岡藩江戸上屋敷の跡地に造られた図書館の新館が、盛岡藩江戸下屋敷の跡地が造られる、という奇縁が生まれた。

なお同図書館の開設や、有栖川宮記念公園内の諸施設の設置に伴い、同所では複数回の発掘調査が行われており、成果報告書も刊行されている。なお盛岡藩が近世初頭に下屋敷を構えた赤坂と、この麻布には現在も「南部坂」の地名が残されている。

抱屋敷 他にも複数抱屋敷を所有していたが、ここでは割愛する。安政三年（1856）の諸向地面取調書には、盛岡藩江戸屋敷として「上屋敷幸橋門内六〇一三坪、拝領中屋敷大崎村一五〇〇坪松平内蔵頭江貸置、拝領下屋敷麻布一本松二八〇〇〇坪、抱屋敷中里村・本郷村入合五四七三坪、抱屋敷豊嶋郡土志田村二三〇〇〇坪、町並屋敷深川獵師町二六二坪、借地 同所一一一坪余」が挙げられている。

### 3. 江戸上屋敷 資料の概要

現時点で江戸上屋敷を描いた絵図は九点確認されている。内訳はもりおか歴史文化館所蔵資料六点、江戸東京博物館所蔵資料一点、青森県三戸町月溪山龍川寺所蔵資料一点、遠野南部家所蔵資料一点である（図3、図8～15）。本稿では以後各絵図をそれぞれ絵図①～⑨と呼称する。ここに挙げる資料名と年代は基本的には所蔵先の登録名を踏襲している。資料の異同については後述するが、御殿空間のみを描いた絵図と、詰人空間も含め敷地全体を描いた絵図が存在する。概要は以下のとおりである。

- ・もりおか歴史文化館所蔵資料 六点
  - 絵図①・② 『江戸上屋敷図』 同名二点 正徳六年（1716）
  - 絵図③・④・⑤ 『江戸上屋舗図』 同名三点 文化三年（1806）
  - 絵図⑨ 『江戸下屋敷図』 一点 年代不明
- ・江戸東京博物館所蔵資料 一点
  - 絵図⑥ 『盛岡藩南部家外桜田上屋敷絵図』 一点 文化三年（1806）
- ・月溪山龍川寺所蔵資料 一点
  - 絵図⑦ 『江戸御上屋敷絵図面』 一点 年代不明
- ・遠野南部家所蔵資料 一点
  - 絵図⑧ 『江戸南部藩邸図』 一点 年代不明

#### 3. 1 江戸上屋敷 基本的な空間構成

各絵図に異同はあるが、江戸上屋敷の空間構成の大略は以下の通りである。

敷地形状は東西に長いL字をなす。西半は正方形に近い形状で中央に御殿空間が展開し、北東隅には稲荷社が座す。東半は東西に長い長方形の形状で詰人空間が展開し、北縁には馬場が設けられる。詰人空間の中央には内長屋が設けられる。敷地東面と南面は街路に接し、以外の二面は他大名の居屋敷と接する。街路に接する南縁には表御門と裏御門が、東縁には東御門と無番門が設けられる。北縁を除く三面は門と一体化した表長屋が巡り、北縁の屋敷境には堀が廻る。長屋と堀により、屋敷地は全周を囲繞される。敷地南縁中央に位置する表御門から御殿正面（南面）の御玄関に向け石敷の通路が設けられており、同門が江戸上屋敷の正門であったことがわかる。

御殿空間は南東を表、北東を中奥、北西を奥とし、南西に台所が設けられる空間構成である。すべての絵図に庭園は描かれていない。

### 3. 2 江戸上屋敷 資料の詳細

#### 絵図① 『江戸上屋敷図』 (図3・16)

所蔵：もりおか歴史文化館 所蔵先が示す資料年代：正徳六年(1716) 範囲：部分図

作図：書絵図 彩色：茶 方位：有 罫線：無 付箋：有 敷地寸法：有 端書：無

資料状態：絵図①・②はともに『江戸上屋敷図』の名称で登録された一連の資料で、正徳六年甲四月十六日の日付が書かれた絵図と同じ質感の和紙袋に同封されていた(図4)。これ以外にも同資料中には貼絵図の素材であろう紙片や(図5)、絵図①との相関が予想される屋敷地東半の詰人空間のみを描いた未成品の書絵図二点も同封されていた(図6・7)。絵図①・②、そしてこれら未成品はいずれも細部の内容が異なるものだった。これら一連の資料は、袋書きにあるように正徳六年四月、ないしはそれに前後する年代に作成され、同封されたものであろうが、成立の背景はいずれも異なるものと考えべきである。絵図①の北側には茶色の貼紙で「ろ」の番付が振られているが、これは同封の詰人空間のみを描いた未成品の書絵図二点でも同様に確認できる。このことから考えると絵図①とこれら未成品の書絵図二点は一連の資料と理解すべきものだろう。図16の作図に際しては、敷地西半の御殿部分を描いた絵図①と、敷地東半の詰人空間を描いたこれら未成品の書絵図の内容を繋ぎ合わせ、一連の屋敷図として提示することも考えた。しかし敷地東半部分を描いた書絵図の内容が一様ではなく、複数例存在することから、この中のいずれかのみを選択し、絵図①と繋ぎ合わせるのは恣意的であると判断した。このためここでは敷地西半の御殿空間(つまり絵図①、図16)のみを提示する。

なお敷地東半を描いた未成品の書絵図二点には、ともに表御門に類する大型の門が描かれていない。ともに敷地南縁を廻る表長屋中に「御新門」と書かれた間口二間半の小型の門が描かれるのみで、大型の門は描かれない。なお絵図①には御玄関正面に位置する門の名称が書かれていないが、未成品の書絵図の中にはここに茶色の付箋を貼り「表御門」と書いている例もある。敷地全体を描いた絵図は②・④・⑤・⑥・⑧とあるが、この未成品の書絵図を除き、いずれ絵図においても最大の門は敷地南縁の中央にある「表御門」である。つまりこの未成品の書絵図のみ記載内容が異なる。

内容：御殿空間の間取りは全図の中でも簡便な部類に属す。表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりである。御殿北に土蔵はない。御殿北東に独立した能舞台が造られている。なお同図では井戸や升を繋ぐ茶色の線が描かれているが、これは上水管を示している。上水管の表現は今回確認した資料中唯一である。

#### 絵図② 『江戸上屋敷図』 (図8・17)

所蔵：もりおか歴史文化館 所蔵先が示す資料年代：正徳六年(1716) 範囲：全体図

作図：貼絵図 彩色：赤・青 方位：有 罫線：有 付箋：無 敷地寸法：無 端書：無

資料状態：絵図①・②は同封の資料である。絵図②は今回確認した資料中唯一の貼絵図である。貼絵図とは建物平面の形に色紙を切り、台紙に張り込んだ図を指す。初期の大名屋敷絵図の多くは貼絵図である場合が多いが、後年に至るにつれ書絵図(建物平面を直接台紙に墨書した図)が増加する。十九世紀代に入ると貼絵図はほぼ確認されない。

内容：御殿空間では全室の間取りを描いているが、御長屋は間取りの記載を省略し、建物の外形のみを描いている。御殿空間の間取りは全図の中で最も簡便である。表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりである。御殿北に土蔵が造られている。御殿北東に独立した能舞台が造られている。彩色は表・中奥・詰人空間を青とし、奥を赤とする。表長屋に「御供座敷上二階捨間御物見」、内長屋に「此所二階下通道有」と書かれた付箋が貼られており、御長屋はいずれも二階建てであったことがわかる。

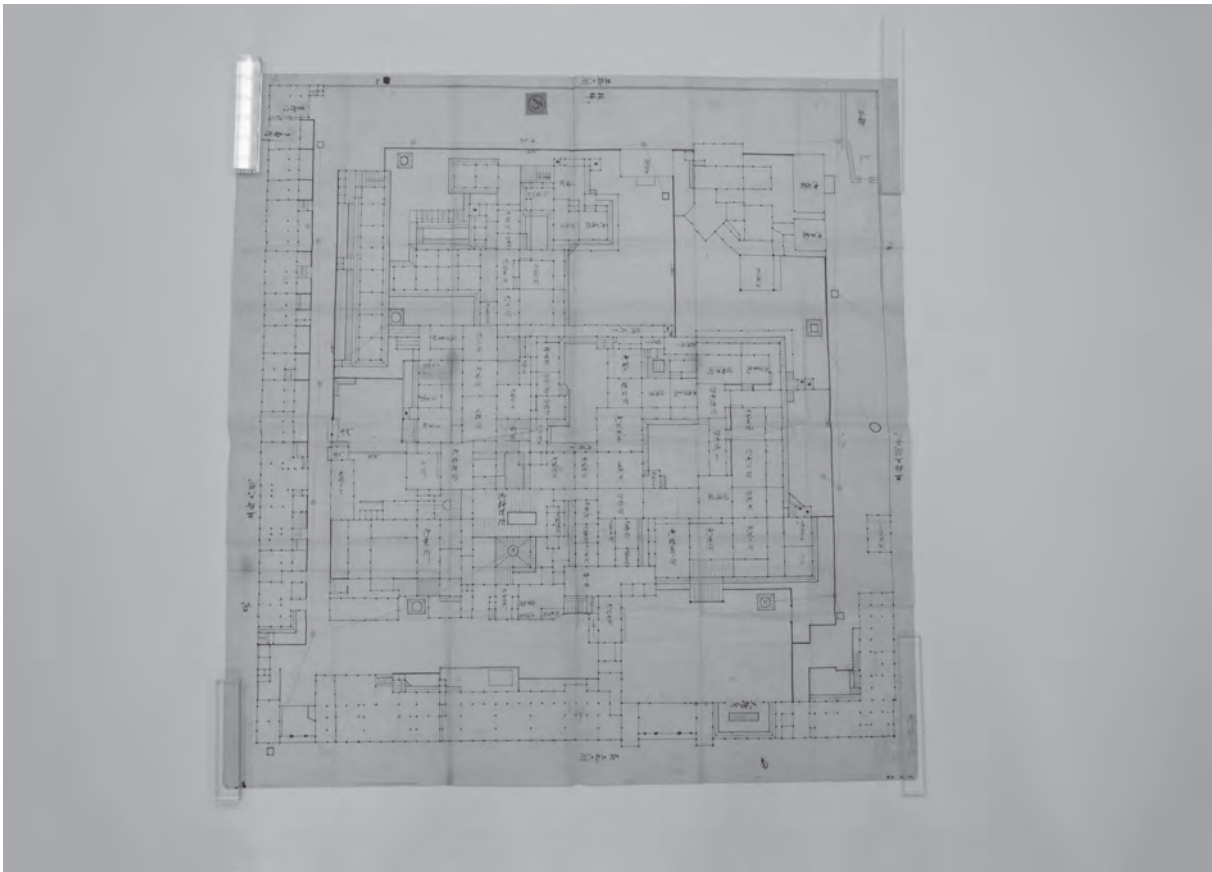


图3 絵図①『江戸上屋敷図』 正徳六年（1716）（下が南）



图4 『江戸上屋敷図』袋

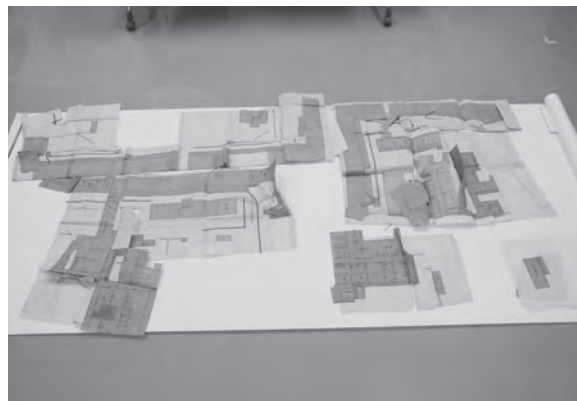


图5 『江戸上屋敷図』同封 未成品紙片

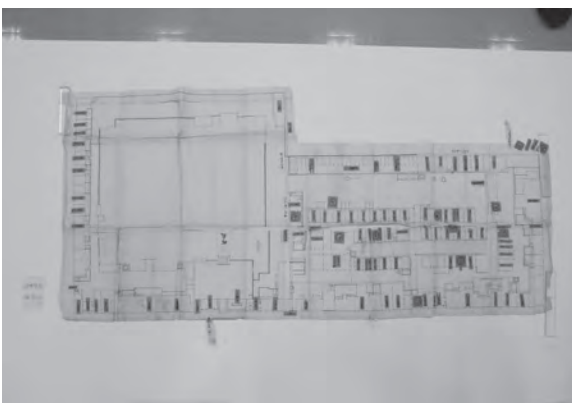


图6 『江戸上屋敷図』同封 未成品書絵図1

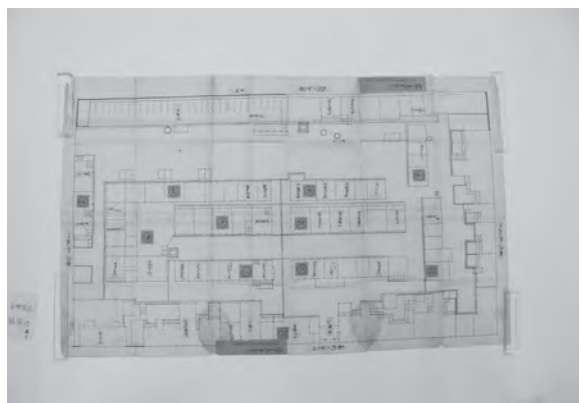


图7 『江戸上屋敷図』同封 未成品書絵図2



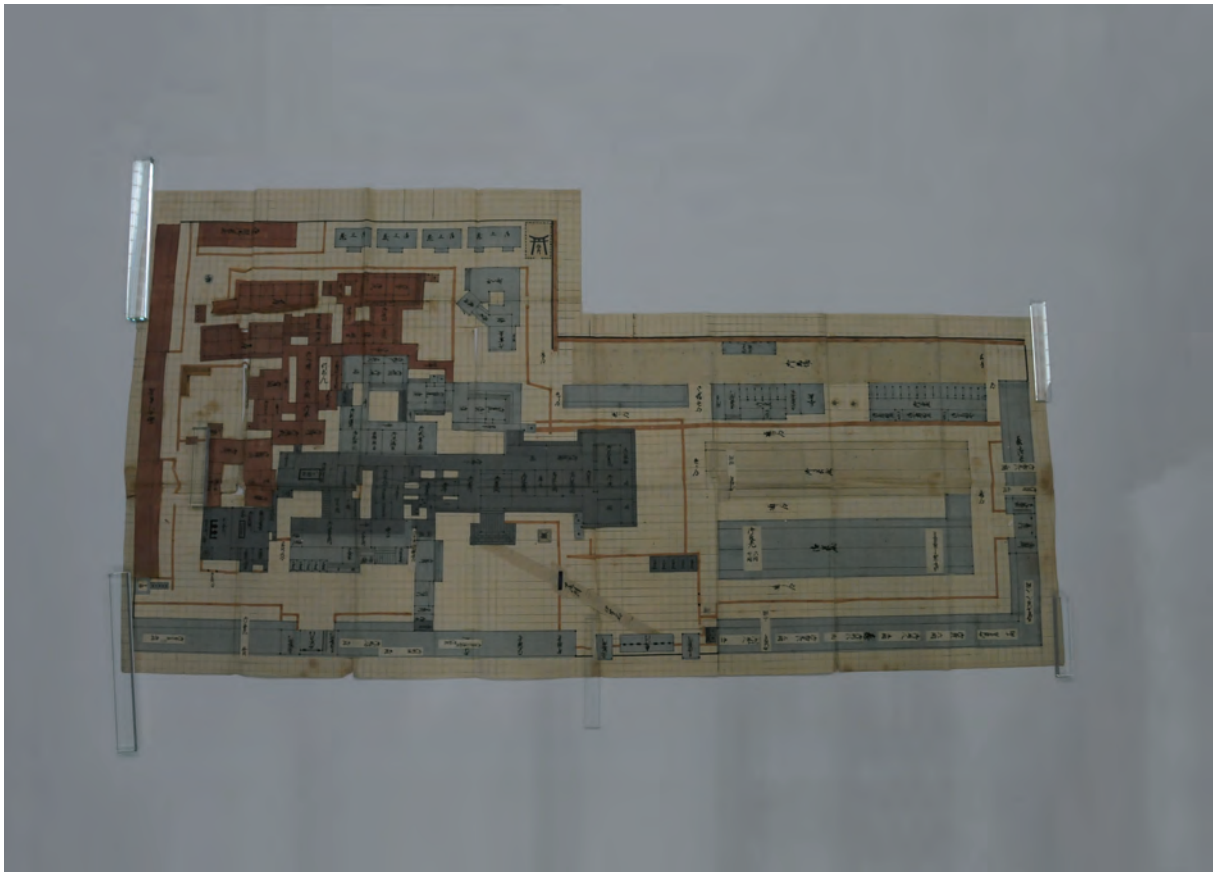


図8 絵図②『江戸上屋敷図』 正徳六年（1716）（下が南）

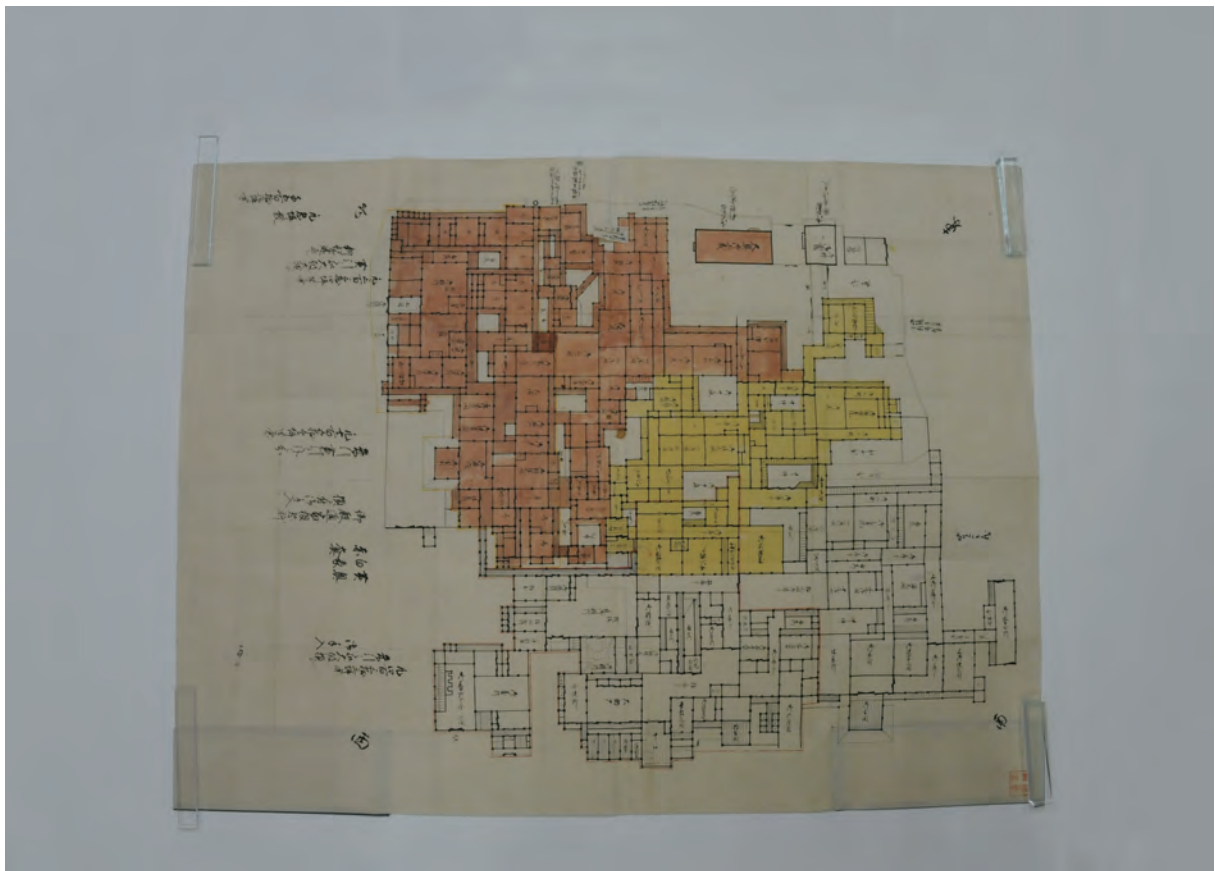


図9 絵図③『江戸上屋敷図』 文化六年（1806）（下が南）



図 10 絵図④『江戸上屋舗図』 文化三年（1806）（下が南）



図 11 絵図⑤『江戸上屋舗図』 文化三年（1806）（下が南）

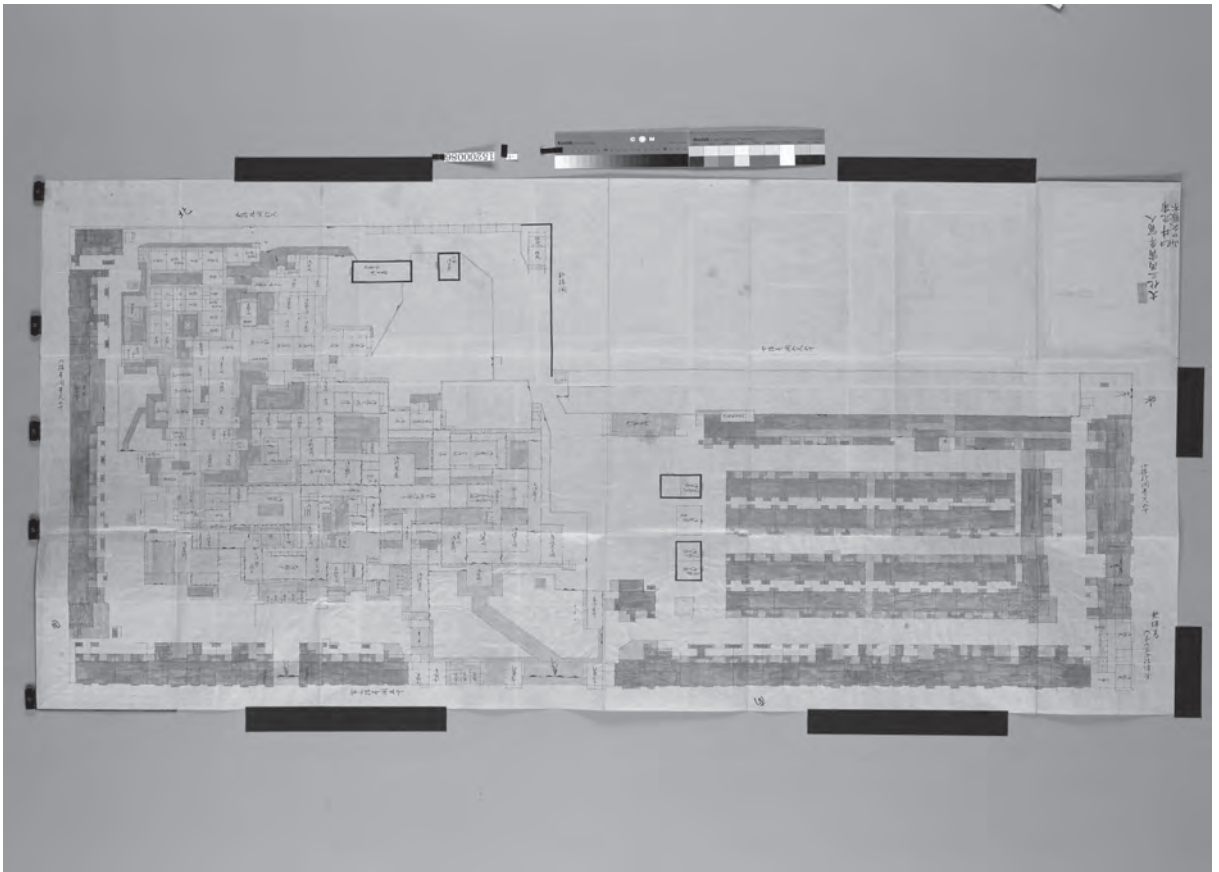


図 12 絵図⑥『盛岡藩南部家外桜田上屋敷絵図』 文化三年（1806）（下が南）

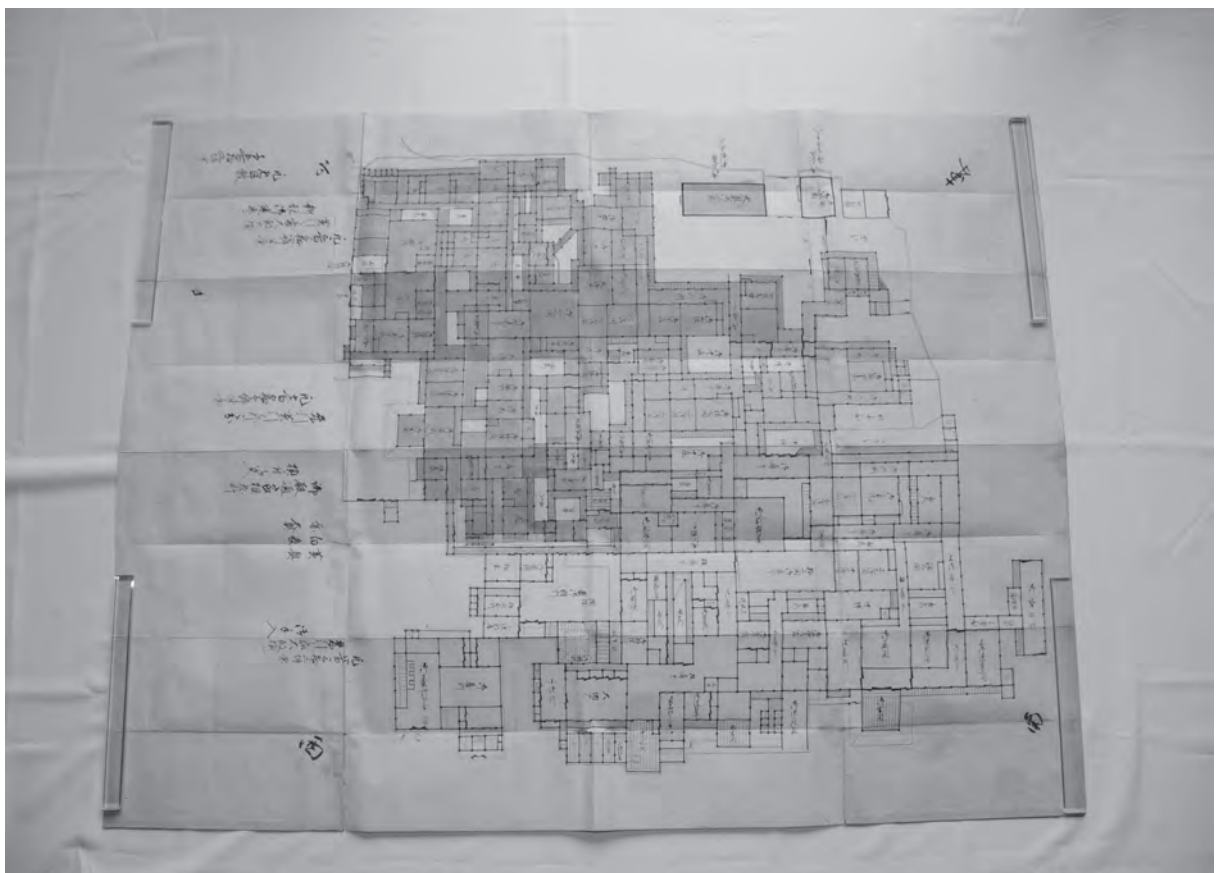


図 13 絵図⑦『江戸御上屋敷絵図面』 年代不明（下が南）

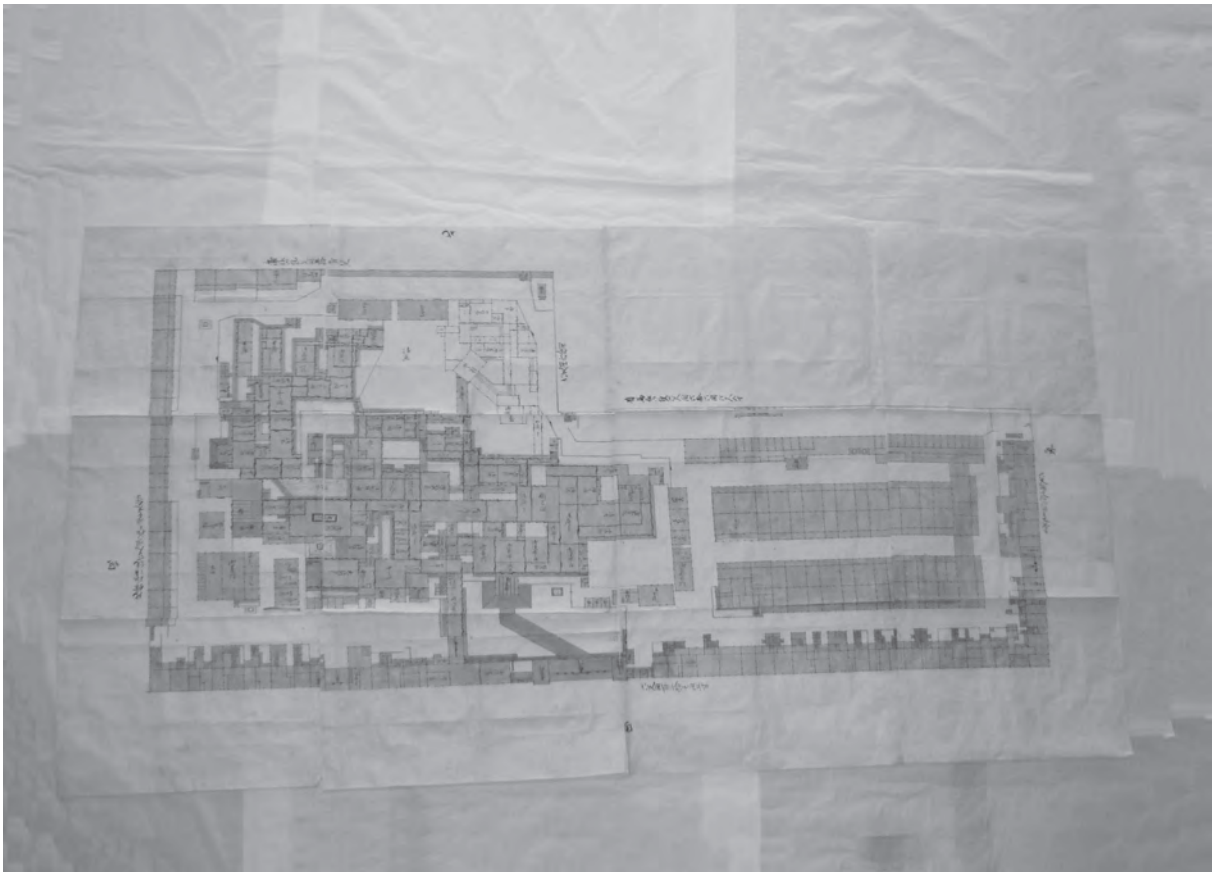


图 14 絵図⑧『江戸南部藩邸図』 年代不明（下が南）

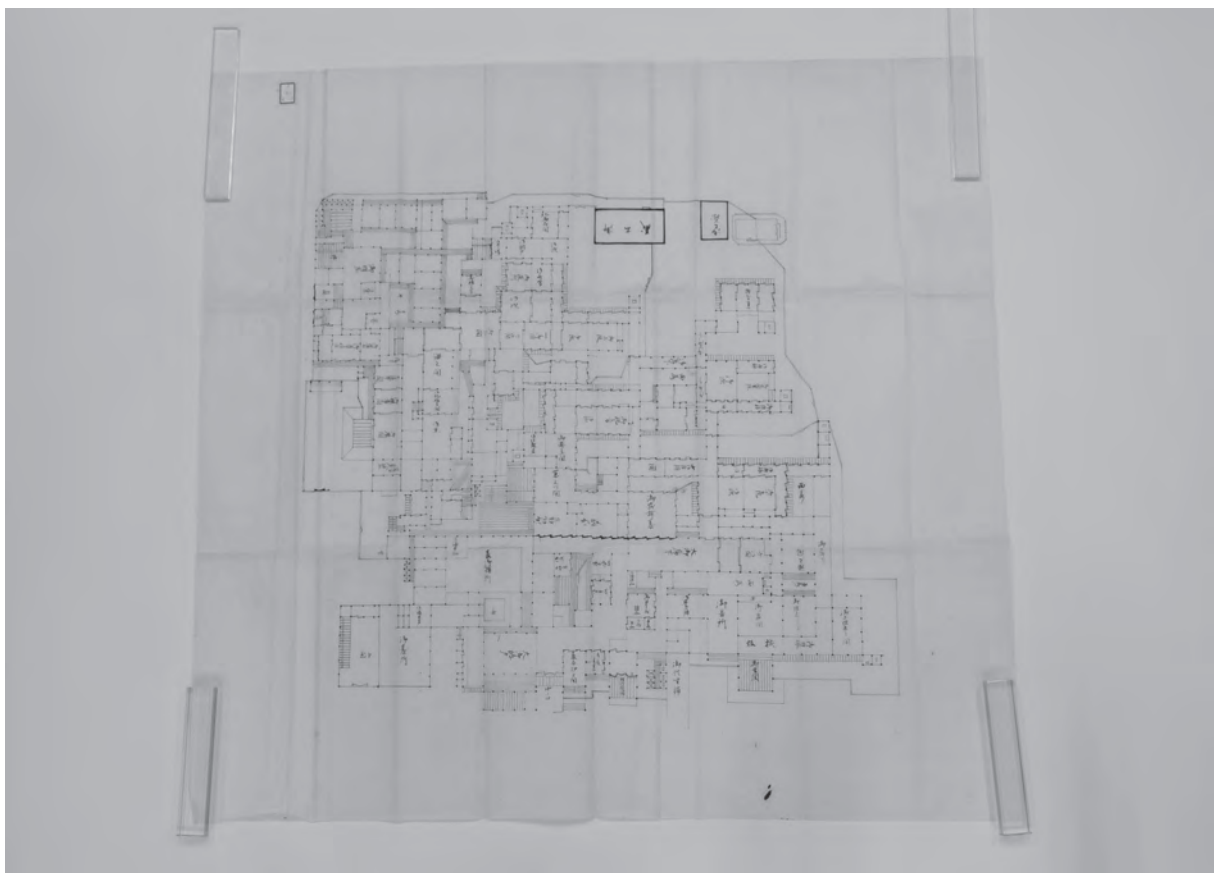


图 15 絵図⑨『江戸下屋敷図』 年代不明（下が南）

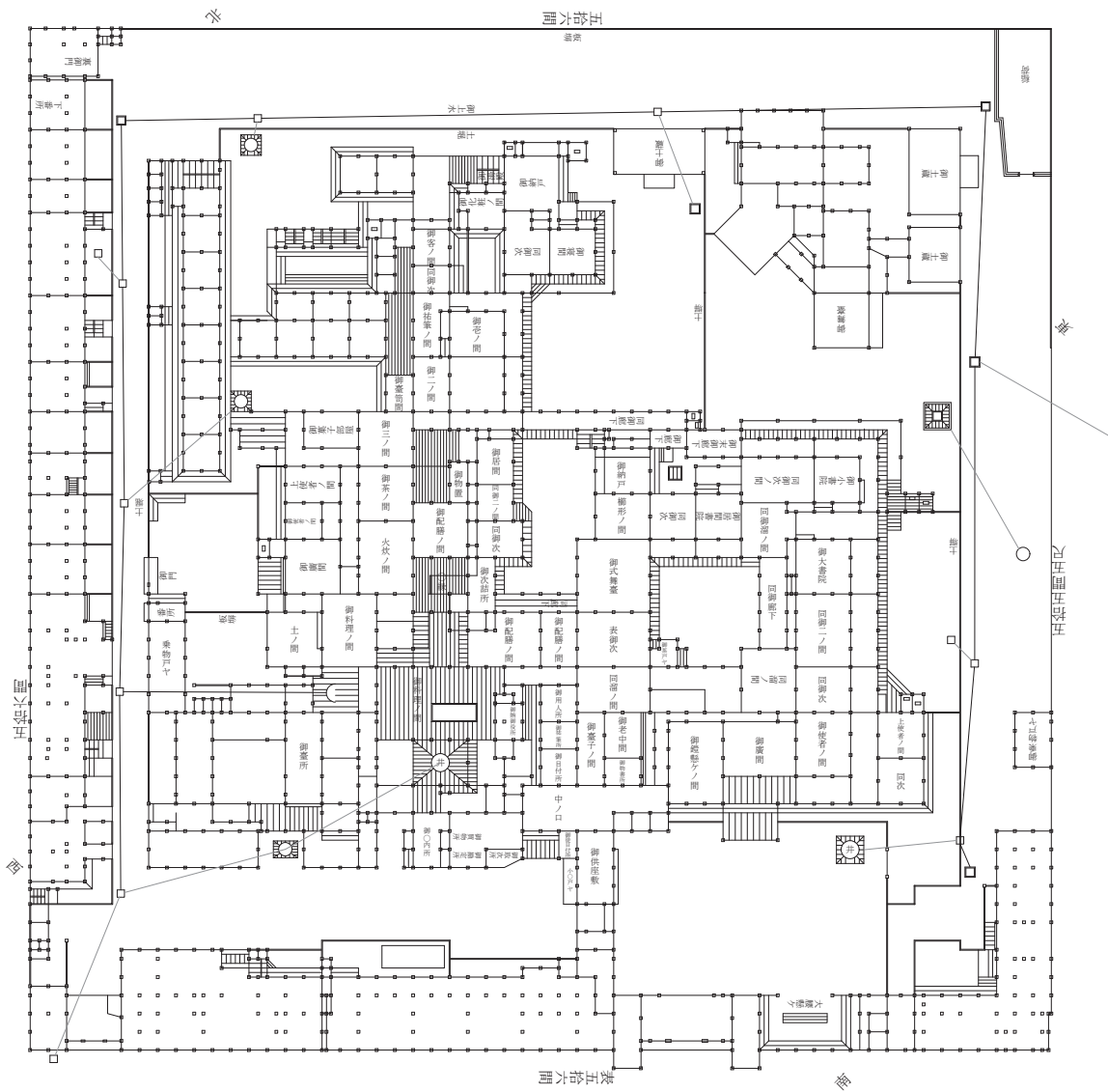


図 16 絵図①『江戸上屋敷図』正徳六年（1716）（下が南）



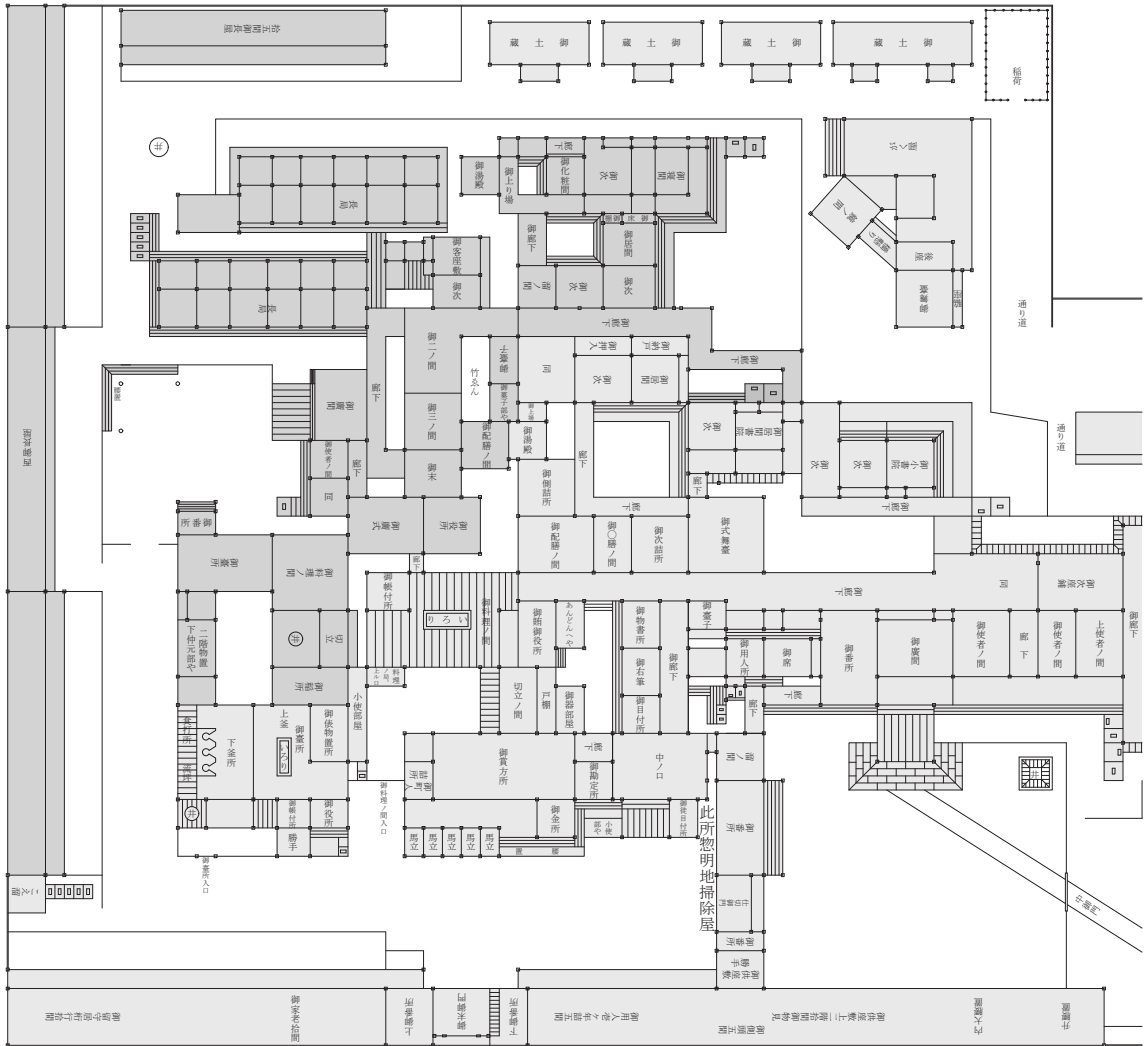


图 18 左 絵図②『江戸上屋敷図』正徳六年（1716）（下が南）







翻表紙  
、 大十長知即強鉄条

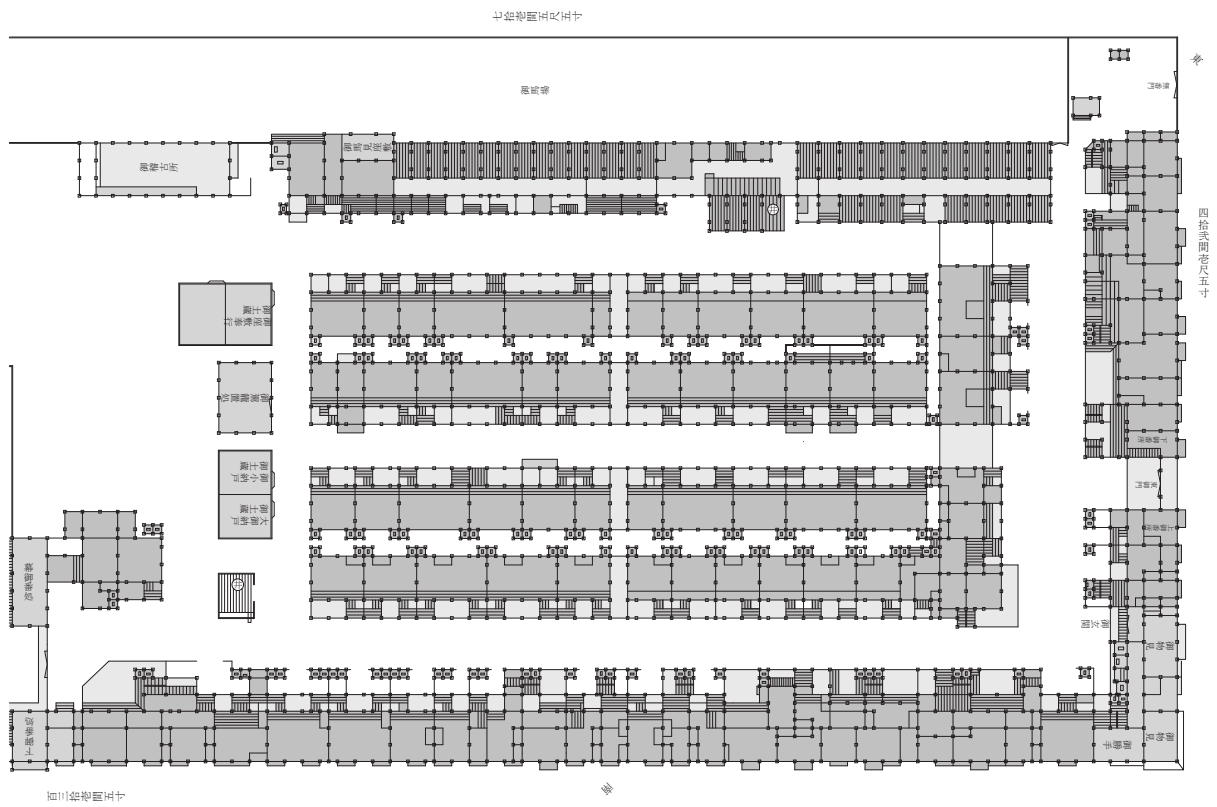


图 19 右 絵图④『江戸上屋鋪図』文化三年（1806）（下が南）





図 20 右 絵図⑤『江戸上屋鋪図』文化三年（1806）（下が南）

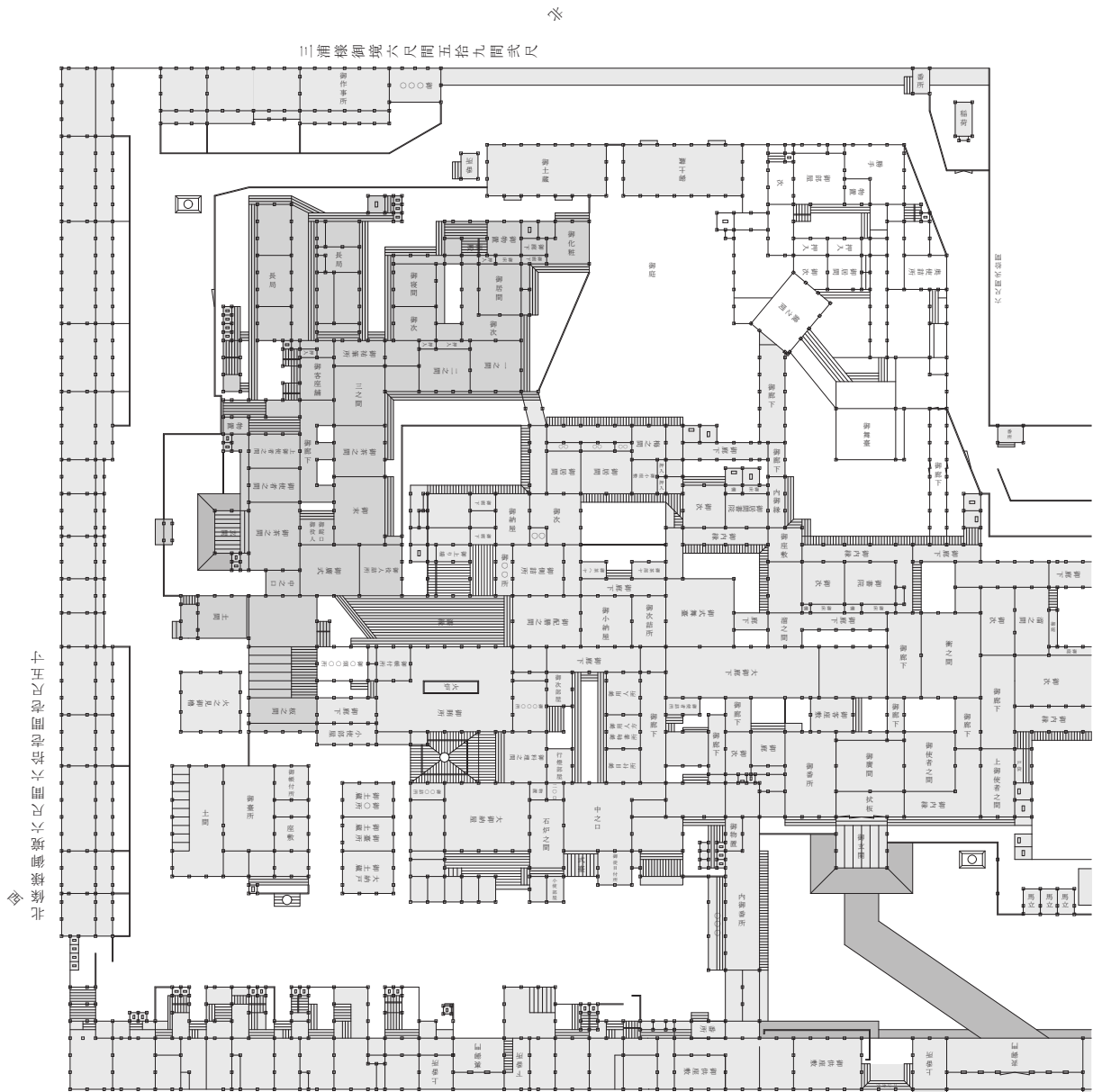


図 21 左 絵図⑧『江戸南部藩邸図』年代不明（下が南）

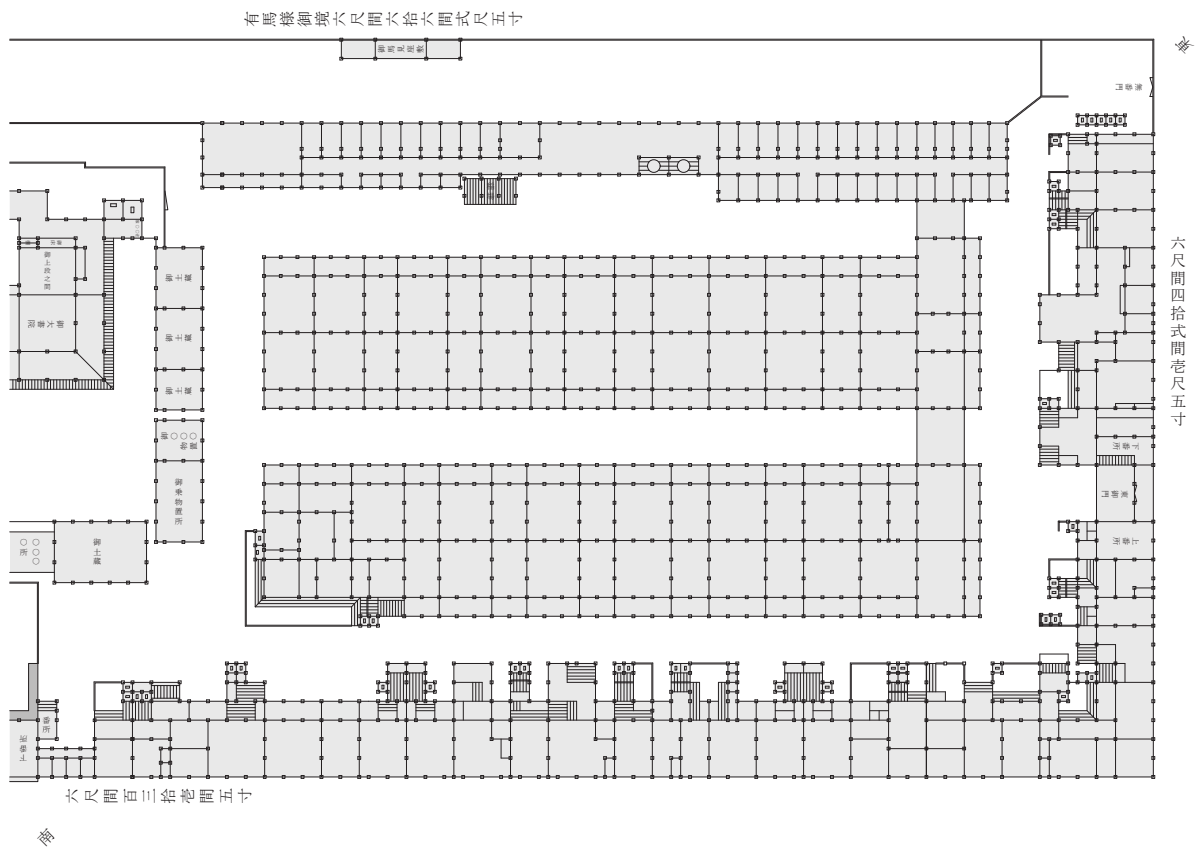


図 21 右 絵図⑧『江戸南部藩邸図』年代不明（下が南）

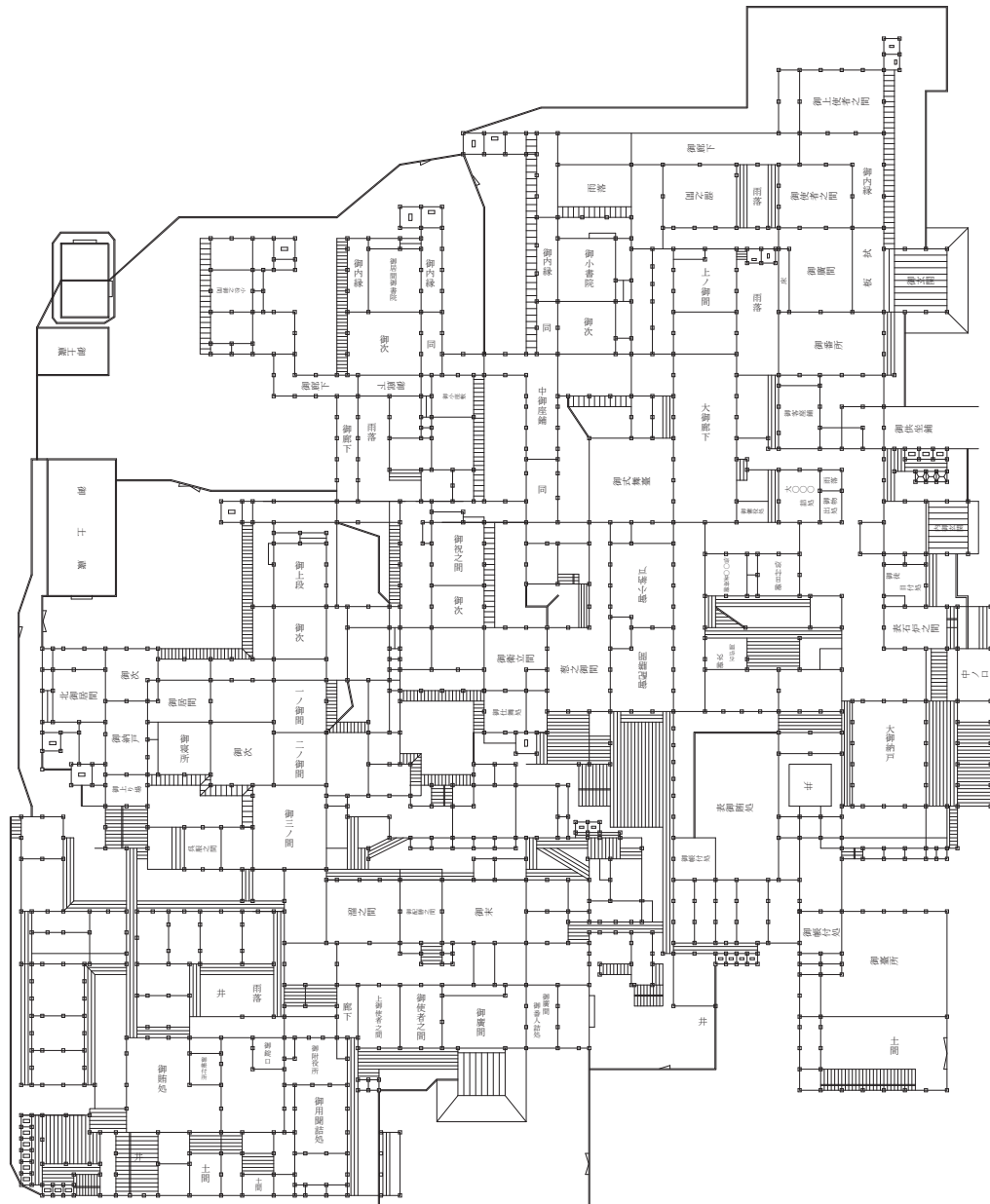


図 22 絵図⑨『江戸下屋敷図』 年代不明 (右が南)

絵図③ 『江戸上屋鋪図』（図9・18）

所蔵：もりおか歴史文化館 所蔵先が示す資料年代：文化三年（1806） 範囲：部分図

作図：書絵図 彩色：赤・黄 方位：有 罫線：無 付箋：有 敷地寸法：無 端書：有

資料状態：絵図③・④・⑤はともに『江戸上屋鋪図』の名称で登録された一連の資料である。資料はともに同一の封筒に入れられていたが、この封筒は近年のもので、資料自体に直接関係するものではなかった。絵図③には「江戸御上屋敷絵図面」、絵図④には「桜田御上屋敷惣御絵図面」と書かれた表紙が付けられており、絵図⑤は「桜田御上屋敷惣御絵図面」と書かれた絵図と同等の質感の和紙袋に入れられていた。これら一連の絵図及び付属物中で年代が示されているのは絵図④の端書のみである。内容：図面に描かれた建物の内容は、絵図⑦と完全に同一である。作図と彩色の精度や筆致が完全に一致することから考えると、両資料は同一人物によって作成されたものと考えて大過ない。

ともに「凡四百三拾三坪余朱引之処大破損シ御手入」や「凡三百三十四坪半余黄引之処大破大損シ、新規御建直シ」の端書があるほか、図に赤線と黄線によってこの破損範囲が図示されている。したがって、絵図③及び⑦は御殿の破損状況の記録図と解釈すべき資料であろう。両図の相違点は付箋の有無である。絵図③には「御雪隠此処窓東へ向ケ」など、さらに詳細な内容を示した付箋が貼られているが、絵図⑦にはこれがない。御殿空間の間取りはやや複雑である。表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりだが、他図に比べ奥が広い。御殿北に土蔵が造られている。御殿北東に能舞台はない。

彩色の説明として「黄奥 白表 赤大奥」という端書があるがこれは異例である。先述のように大名屋敷の御殿空間は表・中奥・奥の三空間に分節されるが、両図ではこれを表・奥・大奥と示している。一般的に大奥は将軍家の奥の空間のみを指す名称であり、大名家ではこれを用いない。

絵図④ 『江戸上屋鋪図』（図10・19）

所蔵：もりおか歴史文化館 所蔵先が示す資料年代：文化三年（1806） 範囲：全体図

作図：書絵図 彩色：赤・黄・緑・灰 方位：有 罫線：無 付箋：無 敷地寸法：有 端書：有  
資料状態：絵図③・④・⑤は同封の資料である。

内容：端書に「御勘定頭松田茂左衛門謹中於江戸上下御屋敷絵図為 引所持ニ付御作事処江茂間取〇置可申ニ付田蔵相右衛門 大工棟梁惣兵衛江申付為引候上御席江御〇入〇之上 御作事処江〇〇 文化三年寅七月」とあり、作成年代がわかる。

図面に書かれた建物の内容は絵図⑥と完全に同一である。ただし、作図精度やと彩色の具合、筆致などは異なり、いずれも絵図⑥が優れる。同一人物によって作成されたものと考えすることはできないが、絵図の成立の背景には相関性があると考えられるべきであろう。両図の相違点は端書の有無である。絵図④には先述の文化三年寅七月の日付を含む端書があるが、絵図⑥にはこれがない。御殿空間の間取りはやや複雑である。表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりだが、他図に比べ奥が大きい。御殿北に土蔵はない。御殿北東に能舞台はない。彩色は表・中奥を黄、奥を赤、詰人空間を青とする。

絵図⑤ 『江戸上屋鋪図』（図11・20）

所蔵：もりおか歴史文化館 所蔵先が示す資料年代：文化三年（1806） 範囲：全体図

作図：書絵図 彩色：赤・黄・灰 方位：無 罫線：無 付箋：無 敷地寸法：有 端書：無  
資料状態：絵図③・④・⑤は同封の資料である。

内容：御殿空間の間取りは絵図③（＝⑦）・絵図④（＝⑥）と類似するが、細部においては微妙に異なる。端書のある絵図④（＝⑥）が文化三年に成立した資料であると考えられるならば、絵図③（＝⑦）



と絵図⑤もこれと同一か、ないしは多少前後する成立年代を予想するのが妥当であろう。

御殿空間の間取りはやや簡便である。表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりだが、他図に比べ奥が極端に狭い。また中奥も小さく、御殿北東が大きな空地になっている。御殿北に土蔵はない。御殿北東に能舞台はない。彩色は表・中奥・詰人空間を黄、奥を赤とする。

敷地外には「田舎間百三拾間」など敷地寸法が書かれている。近世段階の江戸では田舎間（江戸間、六尺間）、中京間（六尺三寸間）、京間（六尺五寸間）など複数の基準尺度が混在していたことが知られるが、同図においては田舎間（六尺間）を基準とし、敷地測量を行ったことがわかる。

#### 絵図⑥ 『盛岡藩南部家外桜田上屋敷絵図』（図12）

所蔵：江戸東京博物館 所蔵先が示す資料年代：文化三年（1806） 範囲：全体図

作図：書絵図 彩色：黄・緑・灰 方位：有 罫線：無 付箋：無 敷地寸法：有 端書：有  
資料状態：絵図⑥は平成二十七年に江戸東京博物館が新規購入した資料である。収蔵先が現在改装中で、一切の外部調査を行えない状況にあるため、筆者は資料を実見していない。よって袋や表紙など付属物の有無については未確認である。

内容：図面に書かれた建物の内容は絵図④と完全に同一であるためここでは詳述はしない。建物の内容については図19を参照されたい。絵図④には先述した「御勘定頭松田茂左衛門謹中～（中略）文化三年寅七月」の端書があるが、絵図⑥にはこれがない。一方絵図⑥には「文化三年寅年写入 白井元甫 山口氏蔵本」の端書と印が確認できる。白井元甫は者頭・鹿角境奉行・大目付各・用人・花巻城代を歴任した人物で、没年は文政十年（1827）である。彩色は表・中奥を黄、奥を白、詰人空間を緑とする。

#### 絵図⑦ 『江戸御上屋敷絵図面』（図13）

所蔵：月溪山龍川寺 所蔵先が示す資料年代：年代不明 範囲：部分図

作図：書絵図 彩色：赤・黄 方位：有 罫線：無 付箋：無 敷地寸法：無 端書：有  
資料状態：絵図⑦は青森県三戸町に所在する月溪山龍川寺の収蔵資料である。同図には表紙が付けられており「江戸御上屋敷絵図面」とあることからこれを資料名とした。同図の内容が絵図③と同一であることについては先述したが、表紙の内容・用紙・筆跡についても、同図と絵図⑦は同一であった。  
内容：図面に書かれた建物の内容は絵図③と完全に同一であるためここでは詳述はしない。建物の内容については図18を参照されたい。

#### 絵図⑧ 『江戸南部藩邸図』（図14・21）

所蔵：遠野南部家 所蔵先が示す資料年代：年代不明 範囲：全体図

作図：書絵図 彩色：赤・黄・灰 方位：有 罫線：無 付箋：無 敷地寸法：有 端書：無  
資料状態：絵図⑧は遠野南部家の所蔵資料である。遠野南部家は根城南部家とも呼ばれる。同家は現在の八戸市根城を本拠とした中世糠部の有力国人八戸氏を祖とし、藩政期においては代々盛岡藩の家老職を務めた。同家収蔵史料については斉藤利男氏を代表とする調査団によって調査研究が行われている。今回は同調査時に撮影した写真データをご提供いただき掲載した。同資料についても筆者は実見していない。このため表紙や袋などの付属物の有無については確認していない。

内容：描かれた御殿空間の間取りは絵図②に類似し、表の間取りはほぼ同一である。以外の御殿空間の間取りは絵図②の方が簡便で、絵図⑧の方がやや複雑である。このことから考えると、絵図⑧は、

絵図②の後年の状態を示した資料と考えるべきだろう。

表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりだが、他図に比べ比較的奥が小さい。御殿北に土蔵が造られている。御殿北東の能舞台は御殿と廊下で繋がれている。彩色は表・中奥・詰人空間を黄、奥を赤、能舞台を白とする。

敷地外には敷地寸法が書き込まれているが、「三浦様御境六尺間五拾九間式尺」など、隣地の大名の名が書かれている。また同図も六尺間（田舎間）を基準に敷地測量を行ったことがわかる。

絵図⑨ 『江戸下屋敷絵図』（図15・22）

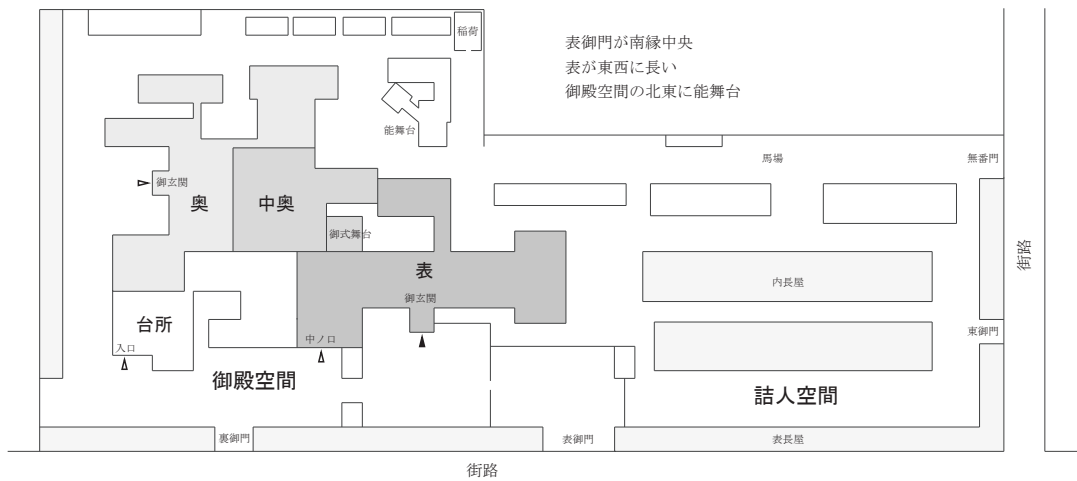
所蔵：もりおか歴史文化館 所蔵先が示す資料年代：年代不明 範囲：部分図

作図：書絵図 彩色：無 方位：無 罫線：無 付箋：無 敷地寸法：無 端書：無

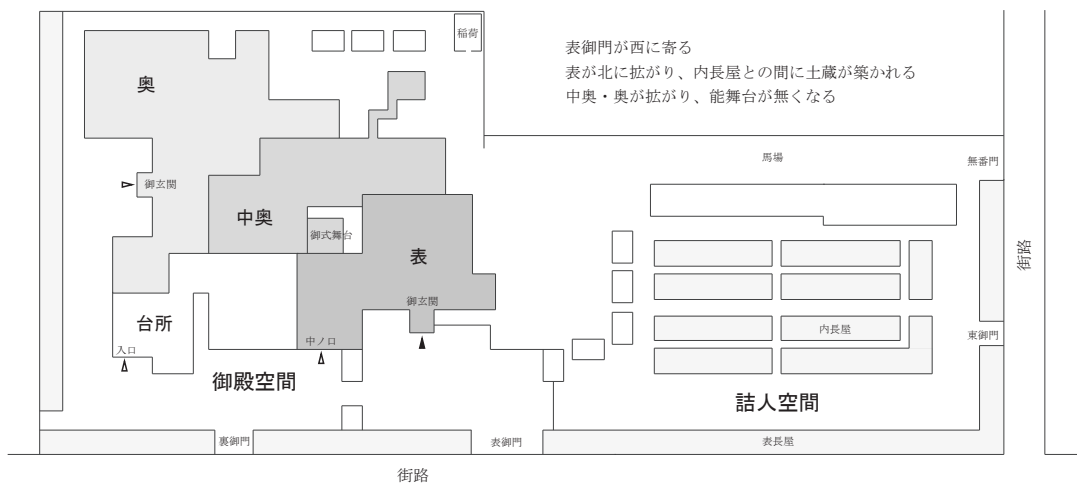
資料状態：絵図⑨は『江戸下屋敷絵図』という資料群として、麻布下屋敷を描いた絵図群と同封されていた資料である。登録名称は『江戸下屋敷絵図』であるが、図の内容から、同図もまた外桜田上屋敷を描いたものであると判断しここに挙げた。なお名称は所蔵先の登録資料名のままとした。

内容：描かれた御殿空間の間取りは絵図③（＝絵図⑦）に類似する。

御殿空間の間取りはやや複雑である。表・中奥・奥と台所の構成は先述のとおりだが、他図に比べ奥が大きい。御殿北に土蔵が造られている。御殿北東に能舞台はない。



A. 正徳六年（1716）前後の成立が予想できる一群（絵図①・②・⑧）



B. 文化三年（1806）前後の成立が予想できる一群（絵図③＝⑦・④＝⑥・⑤・⑨）

図23 江戸上屋敷の基本的な空間構成とその変遷（模式図）

### 3. 2 江戸上屋敷 大まかな年代比定

各絵図に描かれた江戸上屋敷の空間構成を分析すると、二群に分類できる(図23)。

絵図①・②・⑧の一群の空間構成は図23-Aのように整理できる。絵図①・②に示された年代から、これらの一群の絵図の成立は正徳六年(1716)か、ないしはその前後と比定することができる。

絵図③=⑦・絵図④=⑥・絵図⑤・絵図⑨の一群の空間構成は図23-Bのように整理できる。絵図④・⑥に示された年代から考えると、これら一群の成立は文化三年(1806)か、ないしはその前後と比定することができる(図23-B)。またこの一群は奥が大型化するもの(絵図③=⑦・絵図④=⑥・絵図⑨)と、小型化するもの(絵図⑤)に細分することもできる。

#### 謝辞

本稿執筆に際し、下記機関及び個人よりご協力を賜りました。ここに記し深甚の謝意を表します。

江戸東京博物館、三戸町立歴史民俗資料館、八戸市博物館、もりおか歴史文化館、月溪山龍川寺、伊藤敏行氏、太田梯子氏、小山祐司氏、長岡孝博氏、仲光克顕氏、南部光徹氏、藤田俊雄氏、船場昌子氏(五十音順)

#### 執筆及び作業分担・図版出典

本稿の原稿は全て中村が執筆した。資料調査・資料翻刻・写真撮影・作図などの作業は共著者で分担した。

また図版作成と編集に際し、佐々木昭太氏と森裕樹氏にご協力いただいた。作業分担及び図版出典は以下のとおりである。

図1・2 中村作図 吉原健一郎他編 1994『復元・江戸情報図』朝日新聞社に加筆修正

図3~8 もりおか歴史文化館蔵『江戸上屋敷図』野田撮影 中村・森編集

図9~11 もりおか歴史文化館蔵『江戸上屋敷図』野田撮影 森編集

図12 江戸東京博物館蔵『盛岡藩南部家外桜田上屋敷絵図』江戸東京博物館写真提供

図13 月溪山龍川寺蔵『江戸御上屋敷絵図面』野田撮影 森編集

図14 遠野南部家蔵『江戸南部藩邸図』南部光徹氏写真提供 森編集

図15 もりおか歴史文化館蔵『江戸下屋敷図』野田撮影 森編集

図16 原図 もりおか歴史文化館蔵『江戸上屋敷図』中村作図翻刻 森編集

図17 原図 もりおか歴史文化館蔵『江戸上屋敷図』中村作図翻刻 佐々木・森編集

図18~20 原図 もりおか歴史文化館蔵『江戸上屋敷図』中村作図 滝尻翻刻 佐々木・森編集

図21 原図 江戸東京博物館蔵『江戸南部藩邸図』中村作図 滝尻翻刻 佐々木編集

図22 原図 もりおか歴史文化館蔵『江戸下屋敷絵図』中村作図 滝尻翻刻 佐々木・森編集

図23 中村作図

#### 参考文献

岩手県 1963『岩手県史 第5巻 近世篇2 盛岡藩附・八戸藩』杜陵印刷

江戸遺跡研究会編 2000『江戸文化の考古学』吉川弘文館

2011『江戸の大名屋敷』吉川弘文館

2014『江戸の開府と土木技術』吉川弘文館

金行信輔 1996「屋敷絵図を読む 江戸遺跡と建築史の接点」『江戸の都市空間』江戸遺跡研究会第10回大会発表要旨

菊池悟朗 1911『南部史要』

黒木喬 1978「『明暦大火』前後における屋敷移動」『地方史研究』155

斉藤利男編 2010『南部光徹氏所蔵「遠野南部家文書」の調査・研究』科学研究費補助金基盤研究成果報告書

佐藤巧 1979『近世武士住宅』叢文社

史籍研究会 1982「諸向地面取調書」『内閣文庫所蔵史籍叢刊 十四』汲古書院

白石つとむ 1993『江戸切絵図と東京名所絵』小学館

鈴木理生 1991『幻の江戸百年』筑摩書房

玉井哲雄 1986『江戸 失われた都市空間を読む』平凡社

東京都 1965『明治初年の武家地処理問題』都史紀要13

1990『江戸住宅事情』都史紀要34

都立日比谷図書館新館企画係 1971『新館建設用地の沿革と発掘品について』

松方冬子 1999「盛岡藩江戸屋敷の変遷について」

『近世都市における巨大建設技術に関する総合的研究』科学研究費補助金基盤研究成果報告書

港区教育委員会 2007『陸奥盛岡藩南部家屋敷跡遺跡発掘調査概要報告書』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告46

宮崎勝美 1995「武家屋敷」『岩波講座 日本通史14』近世4

宮崎勝美・吉田信之編 1994『武家屋敷 空間と社会』山川出版社

吉原健一郎他編 1994『復元・江戸情報図』朝日新聞社

# 荒川台型細石刃剥離技術の検討

村木 敬

筆者はかつて下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の荒川台型細石刃石器群及び尖頭器石器群を整理した。その結果、荒川台型細石刃石器群は従来より技術的な幅があること、また、尖頭器石器群の中に荒川台技法に繋がる剥離技術が存在することを確認した。このことから、本稿では荒川台型細石刃石器群の様相を概観し、尖頭器石器群を検討することで両者に繋がる技術的系統を明らかにしていく。

## 1 はじめに

荒川台型細石刃剥離技術、いわゆる荒川台技法は、従来東アジアで把握されていた細石刃剥離技術とは異なるものであり、細石刃核母型作出から細石刃剥離に至るまでの工程を捉えた剥離技術である（阿部1993）。提唱当時は、関連資料も少なく様相は判然としなかったが、近年東北地方を中心に資料が増加した結果、その全体像が概ね把握できつつある（青森県教育委員会2011、村木2013）。

上記のような中、筆者は下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡（村木2013）を調査する機会を得ており、第1図にあるような資料を確認している。そして整理の結果、当該石器群については以下のことを言及している。位置づけは、As-YPを挟んで形成され北方系細石刃石器群と併行期とする。そして、神山型石刃石器群との関係については、同一段丘面で検出したものの具体的な接点を見出せていない。さらに、当該技法は剥片剥離から細石刃剥離に至るまでの包括的技術であり、石刃石器群よりも尖頭器石器群Ⅰ群の中に技術的類似性が認められている。ただし、報告書中において両石器群の類似性について若干触れるだけに留め、具体的な資料の提示までには至らず課題としている。ここでは荒川台技法の概要をまとめ、課題とした技術的系統及び所属年代について検討してみたい。

## 2 荒川台技法の様相

当該技法は、荒川台遺跡に五川目（6）遺跡の資料が追加されたことにより、全体像が概ね明らかとなった。両遺跡では主体となる資料は異なり、荒川台遺跡、下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡がⅠ類、五川目（6）遺跡がⅢ・Ⅳ類を中心に構成されている。それぞれの接合資料における剥離工程については、報告書中にまとめられているので、それらを参照されたい（阿部1993・2002、青森県教育委員会2011）。

これらによって母型作出工程Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類は工程を把握できるようになったが、Ⅱ類については定型資料が少なく未だ判然としない。各剥離工程図を第2図に示しており、概要は以下の通りである。

Ⅰ類は素材となる剥片の側縁と下縁に対してU・V字形状に調整を施したうえで、細石刃剥離を行うものである。典型的な資料で、該当する遺跡において最も多く認められるものである。

Ⅲ類は素材となる石核に対して、粗割を行った後、側縁に対してU・V字形状に調整を施したうえで、細石刃剥離を行うものである。

Ⅳ類は素材となる石核に対して、粗割を行った後、側縁に対して調整を施したうえで、細石刃剥離を行うものである。

Ⅱ類は上記と異なり様相が判然としないものの、若干触れておく。横断面以外はⅠ類と共通しており、提示資料（阿部1993）を見ると背面及び側面は大きな剥離で構成されるものである。第1図下段の母岩別資料sh18（註1）もⅡ類に含まれるものだが、接合資料を見ていくと意図した剥離工程の

中で目的剥片を獲得できなかったことが看取される。このように本類が少ない要因としては、I類の工程が適わなかったことから生じた偶発的所産にあるのではないだろうか。この点については今後の課題である。

ここでは母型作出工程ではなく、それ以前に当たる剥片生産技術の段階において当該技法を伴う資料が確認できたことから、その点についてまとめておく。それは第1図下段に示している下嵐江I・II遺跡石器集中区8出土の母岩別資料sh18である。この剥離過程は、素材となる中型剥片（註2）の側縁と下縁に対してI類と同じU字形状の調整が施された後に、縁辺から母型の素材となる厚手の縦長剥片を剥離している（第1工程）。それ以降は、打面転位を繰り返しながら、側縁と下縁側で剥片剥離を進めていくことにより、石核の規模は縮小していく。最終的に石核は、180度打面転位したうえで、下縁と側縁にU字形状（I類）の調整が再度施され細石刃を剥離している（第2・3工程）。つまり、この資料からは母型素材獲得に伴う剥片剥離と細石刃剥離の石核に対してU字形状（I類）の調整を施していると捉えられる。これらの過程は、定義通りの母型作出から細石刃剥離工程に限定されるものではなく、さらに荒川台技法が包括的な技術体系が採られていたと考えられる。

このように当該技法は、さらに技術的に幅が広がることから定義を再考していく必要があるものと思われる。ただし、資料が少ないため、類例の増加を待ちたい。

### 3 技術的系統

#### (1) 類似資料

まず、尖頭器石器群の概要をまとめ、次に小型化（註3）した資料と荒川台技法の類似資料を提示していく。当該石器群は、遺跡の中において集中区1箇所（石器集中区18）を検出しており、石刃石器群や荒川台型・北方系細石刃石器群などと同一段丘面上で確認している。出土点数は3320点と多く、長軸10m前後の大規模な集中区を形成している。器種組成は、ナイフ形石器、尖頭器、搔器などが主体をなしている。石器材料組成は、玉髓質頁岩、頁岩、黒曜石（男鹿産、湯ノ倉産）などが主体をなし、他の石器群と比べ種類が豊富である。その位置づけはAs-YP降灰以前、ナイフ形石器から尖頭器石器群への移行期として捉えている。この石器群は、ナイフ形石器や尖頭器などの器種が極端に小型化していくこと、また、それらの素材を獲得する剥片剥離には、荒川台技法の細石刃核より小型の石核が存在していることが特徴として挙げられる。

以下に、小型化した剥片石器及び荒川台技法の類似資料を提示していく。記載にあたっては、報告書から母岩別資料名・遺物番号をそのまま抽出している。

・**単体資料**：主要器種は第2図に掲載しているナイフ形石器と尖頭器であり、これらの規模は小型が主体を成している。そして、注目すべきはそれらの右隣に掲載した二次加工を伴う剥片である。規模は約1.3cmであり、あまりにも小型であるため報告書中では二次加工として扱ったものである。ナイフ形石器もしくは尖頭器と同じような周縁や側縁に調整が施されている。同様の石器はこれらの他に数点認められている。また、それらの素材となる小型剥片も確認できている。このように極端な小型化傾向にあることが捉えられている。

これらの他に第2図には小型剥片剥離に伴う石核をまとめて掲載している。最終形状がU字形状（a）、円錐形・稜柱系（b）、それ以外の形状が認められている。さらに、荒川台技法を伴う細石刃核を隣に掲載し対比してみると、より小型化であることが窺える（第2図下段）。

・**sh65c**（第3図）：目的剥片剥離過程に伴う資料である。この石核は厚手の剥片を素材としており、左側縁及び下縁部に調整を施しているため、平面形状はU字状を呈している。打面は素材打面側

に位置しており、縁辺部を中心に小型剥片を剥離している。この剥離は、末端がステップとなり剥離が停止すると、正面及び右側縁裏面側において剥離を展開していく。また、剥離はほとんど打面転位されず一方向からである。石核の作業面は3cm以下である。

・sh85b（第3図）：石核整形から小型剥片剥離の過程に伴う資料である。中型の礫を素材としており、打面転位を繰り返しながら小型剥片を剥離している。常に作業面は一定であり、対となる裏面には礫面を残している。石核の作業面は4cm前後である。

・sshc3（第4図）：石核整形から小型剥片剥離の過程に伴う資料である。この石核の素材は不明であるが、作業面と対となる裏面に礫面を残している。作業面再生や打面調整を介在させながら小型剥片を剥離している。作業面は常に同一面に形成されており、打面転位が繰り返されてもこの点は変わらない。最終的な作業面再生後の石核の作業面は2.5cmである。

・sshc19（第4図）：目的剥片剥離の過程に伴う資料である。この石核は厚手の剥片を素材としており、打面転位を繰り返しながら小型剥片を剥離している。石核の作業面は4cmである。

・sshc35b（第5図）：石核整形から小型剥片剥離の過程に伴う資料である。下縁側を石核整形した後、縁辺で小型剥片を剥離している。石核の作業面は4.5cmである。

## （2）技術的類似性

上記において小型化した単体資料と共に類似した母岩別資料を概観してみたが、それらからは荒川台技法との関連が窺える。以下には提示資料に対して当該技法の各段階と比較しながら、技術的な共通性についてまとめておく。

・素材剥片獲得段階：荒川台技法第1工程である。素材剥片を獲得する段階にあり、剥片生産技術Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類を挙げている（阿部1992）。ただし、阿部はⅤ類を挙げていないものの、五川目（6）遺跡で類似資料を確認できることから、ここに含めておく。

この段階の尖頭器石器群の中にはⅡ類やⅣ類に相当する多くの資料を確認している。しかし、それを用いて次の段階まで一連の工程に組み込まれている接合資料が確認できていないことから、両者の関連性については判然としない。また、Ⅴ類に含まれる母岩別資料が存在しており、小型の尖頭器やナイフ形石器などの素材獲得に用いられている。この剥離方法や石核のあり方は、荒川台や五川目（6）と類似している。ただし、これらの技術を把握できたものの、特定器種との関連性については依然として不明である。なお、sh18のような荒川台技法Ⅰ類と類似した剥片剥離は確認できていない。

・側縁・下縁調整段階：荒川台技法第2工程である。母型作出工程をⅠ～Ⅳ類に細分している。

この段階では各類型に伴う類似工程の資料を確認している。sh65cでは剥片素材の側縁と下縁に粗雑な調整が認められ、Ⅰ類の調整に相当する。sshc35bでは下縁部に対して粗い調整が認められる。同技法と比べるとやや粗雑な感じは否めないものの、Ⅲ類の調整に相当する。sshc3やsh85bなどでは礫面を残置させる点についてはⅣ類の剥離に相当する。さらに、この段階ではsh65c、sshc19のように、石核の素材に厚手の剥片が用いられている点が類似している。

・小型剥片剥離段階：荒川台技法第3工程である。母型作出後に細石刃剥離を行い、細石刃核はU字状（Ⅰa類）、円錐（Ⅰc類）などの形態へと展開している。

この段階では各類型に伴う類似工程の資料を確認している。sh65cでは側縁を中心に素材の背面側へと小型剥片を剥離していく状況を把握できている。これはⅠa類と極めて類似した工程である。また、sshc3のように残核形状だけを見ていくのであれば、打面再生を繰り返しながらⅠc類と同じ円錐形状となる。これらの石核は荒川台技法に伴う細石刃核よりも規模が小さくなるものも窺える。さら

に、sh85 b・sshc19のように作業面の対に礫面を残置させるあり方はI d類、sshc35bのように下縁側を両面から調整が行われ、側面に作業面を形成するようなあり方はI b類と捉えることができる。

### (3) 小結

このように尖頭器石器群は小型化していく中で、小型剥片剥離における側縁・下縁調整段階において荒川台技法第2工程I・Ⅲ・Ⅳ類と類似した技術が認められた。この過程が看取される資料は第5図に掲載した通りであり、両石器群は同一の技術的系統にあることが想定される。それに対して、荒川台遺跡を含め共伴関係と考えられている石刃石器群には、小型化の要素及び剥離技術の共通性を現段階では見出すことができない。これらのことを勘案すると、荒川台技法は尖頭器石器群の剥離技術に内在していると捉える方が、技術的系統をよりスムーズに解釈できるものと思われる。

細石刃石器群の母体となる石器群については、加藤真(2012、2013)と同じ結論に至った訳だが、在地の石器群から成立したと捉えた点では異なるものである。その点で言えば、砂田(1994)、田村(2011)、堤(2013)などの見解と一致する。結果として先学を追随する形となったが、本論では荒川台型細石刃石器群は尖頭器石器群に技術的系統を求めることでまとめておきたい。

## 4 所属年代

ここでは当該石器群の所属年代を五川目(6)遺跡、下嵐江I・II遺跡、荒川台遺跡の成果から捉えていきたい。所属年代の特定を困難にしている要因には、周知の通り東北地方の堆積層が薄いことに加え、複数の異なる石器群が同一段丘面上に形成されていることなどもあり、良好な成果が得られていない状況にある。五川目(6)遺跡では石器集中部1は13,600~14,670yrBP、石器集中部2は14,710~15,740yrBPの年代が得られている。下嵐江I・II遺跡では年代測定が行われているものの成果は得られていない。ただし、火山灰同定によりAs-YP降灰以降に形成されていることが明らかとなっている。荒川台遺跡では年代測定が行われているものの成果は得られていない。ただし、火山灰同定によりUGとATに挟まれていることが明らかとなっている。また、参考までに神奈川県大保戸遺跡(栗原ほか2013)の事例から見ていくと、石器出土層位はAs-YPの降灰層準とされるL1S層からである。

これらを基に位置づけていくと、当該石器群がAs-YP降灰前後~16,000yrBPにかけて形成されたものと捉えることができる。上限年代は尖頭器石器群終末期の年代を遡らずに納まっている。また、下限年代にあたるAs-YP降灰年代については、従来幅広く捉えられている点にあったが、現在は13,600yrBP前後と捉えられている(矢口2011)。このようにみていくと、五川目(6)遺跡の石器集中部1の年代は、降灰年代と整合しているものと思われる。また、下嵐江I・II遺跡の出土事例が大きく乖離するものでないと捉えられる。この出土事例については、群馬県などでは細石刃石器群はAs-YPの下位から出土し、上位では認められないとのことであるが、この災害イベント後に降灰する範囲で活動するとは考えられないことから、当然被災地の中心から離れていくことが予想される。

よって、ここでは当該石器群の年代は尖頭器石器群終末期となる13,600yrBP前後~16,000yrBPの時間幅でもより新しい段階に収まるものと捉えておきたい。

## 5 おわりに

以上、荒川台技法は資料増加に伴い定義の再考を要するとの見解に至り、また尖頭器石器群との間には技術的系統を見出すことができた。さらに今回の成果を付け加えれば、As-YP降灰以降までを下限年代とする上述したような時間幅にある石器群として考えることができる。現時点では石刃石器群

との共伴は証明されていないことから、上記のような同一技術系統にある尖頭器石器群の終末より遡らない年代を設定するのが妥当かと思われる。また、この新しい時期まで下る点については加藤真(2012)と同様の見解に至っている。今後は、上述したような時間幅の中で他の細石刃石器群との関係性を探る必要があるものと思われる。

本稿は阿部朝衛還暦記念論集に掲載したものに加筆・修正を加えたものであるが、このノートにおいて結論に変更はない。執筆にあたり、北村忠昭、直江康雄、米田寛の各氏に御助言を頂いた。末筆ながら感謝申し上げます。(敬省略)

#### 註

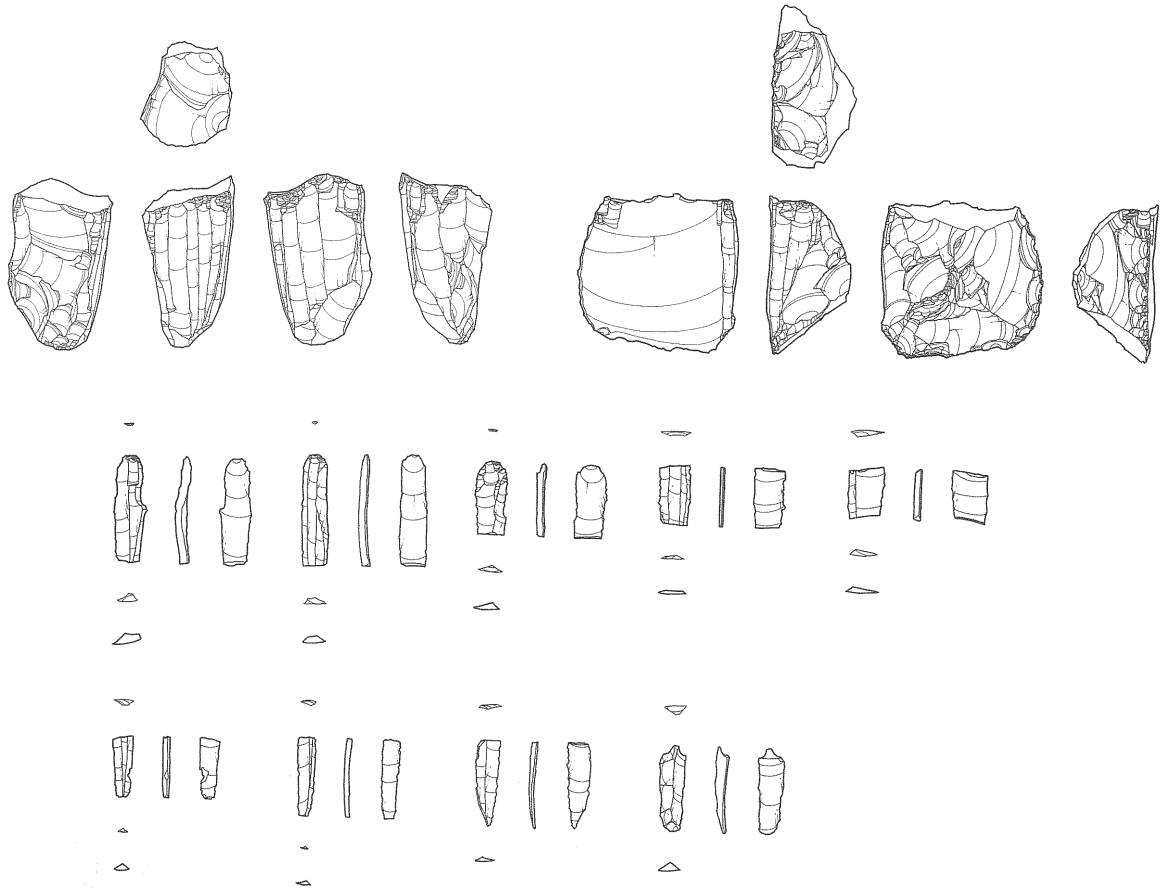
- 1: 母岩名に付しているアルファベットは、石材を表しており、shは頁岩、sshcは玉髓質頁岩である。
- 2: 規模を示す表記は報告書の記載をそのまま採用しており、5cm以下を小型、5.1~15cmを中型としている。
- 3: 規模が小さくなることに対して小型化と表記しておく。田村(2011)や堤(2013)らが用いている細石器化と同義語である。

#### 参考文献

- 岩田安之ほか 2011 『五川目(6)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第502集
- 阿部朝衛 1993 「新潟県荒川台遺跡の細石刃生産技術の実態-荒川台技法の提唱-」『法政考古学』第20集 pp 1~22
- 阿部朝衛 1993 「細石刃技法の把握-荒川台技法」『細石刃文化研究の新たな展開』Ⅱ pp161~171
- 阿部朝衛 2002 『荒川台遺跡-1989年調査-』帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 2013 「新潟県荒川台遺跡第13次調査略報」『帝京史学』第28号 pp 1~78
- 加藤 学 2013 「日本列島における細石刃石器群出現期に関する諸問題」『日本列島における細石刃石器群の起源』pp28~37
- 加藤 稔・合田容弘 1995 「山形県小国町平林遺跡の研究」『東北芸術工科大学 紀要』第2号 pp108~144
- 加藤真二・李 占揚 2012 「河南省許昌市壘井遺跡の細石刃技術-華北地域における角錐状細石刃石器群-」『旧石器研究』第8号 pp31~44
- 加藤真二 2013 「華北地域における角錐状細石刃石器群-古本州島の細石刃石器群との関連について-」『日本列島における細石刃石器群の起源』pp14~27
- 栗原伸好 2013 『大保戸遺跡』神奈川県考古学財団調査報告 289
- 佐藤宏之 2011 「荒川台型細石刃石器群の形成と展開-稜柱系細石刃石器群生成プロセスを展望して-」『考古学研究』第58巻 第3号 pp51~68
- 佐藤宏之 2013 「稜柱系細石刃石器群の生成プロセスを展望-荒川台型細石刃石器群を中心として-」『日本列島における細石刃石器群の起源』pp10~13
- 芝康次郎 2013 「九州における初期細石刃石器群の形成過程」『日本列島における細石刃石器群の起源』pp38~43
- 須藤 隆 2013 「古本州島開発型細石刃技術の起源」『日本列島における細石刃石器群の起源』pp44~46
- 砂田佳弘 1994 「相模野細石器の出現-器種変遷と石材流通-」『国学院大学 考古学資料館紀要』第10輯 pp 1~36
- 田村 隆 2011 『旧石器社会と日本民俗の基層』同成社
- 堤 隆 2013 「石器群の小形化・細石刃化と細石刃石器群のイノベーション」『日本列島における細石刃石器群の起源』pp70~73
- 中村雄紀 2014 「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第10号 pp107~128
- 村木 敬 2013 『下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第608集
- 村木 敬 2016 「荒川台細石刃剥離技術の検討」『阿部朝衛還暦記念論集』pp238~246
- 矢口裕之 2011 「関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新統に関わる諸問題」『研究紀要』29pp21~40頁 (財)群馬県埋蔵文化財調査団

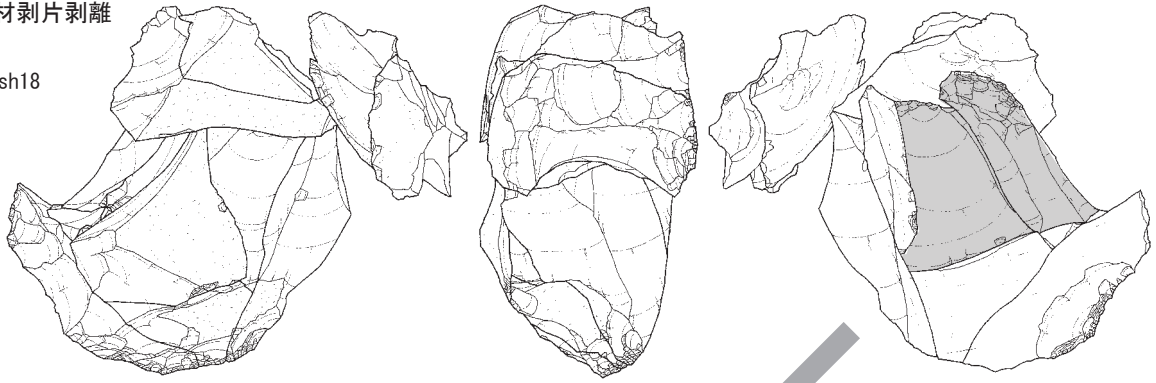


下嵐江 I・II 遺跡荒川台型細石刃石器群



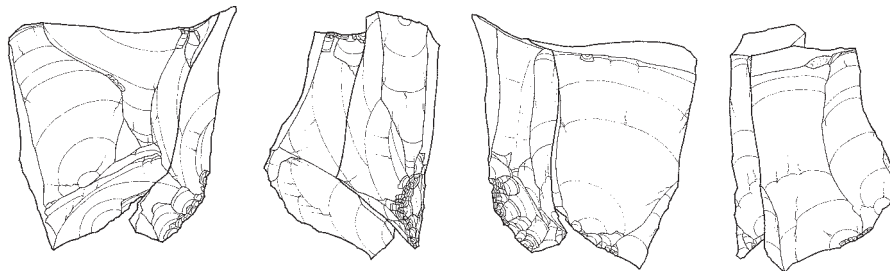
第1工程  
素材剥片剥離

sh18



第2・3工程  
母型作出細石刃剥離

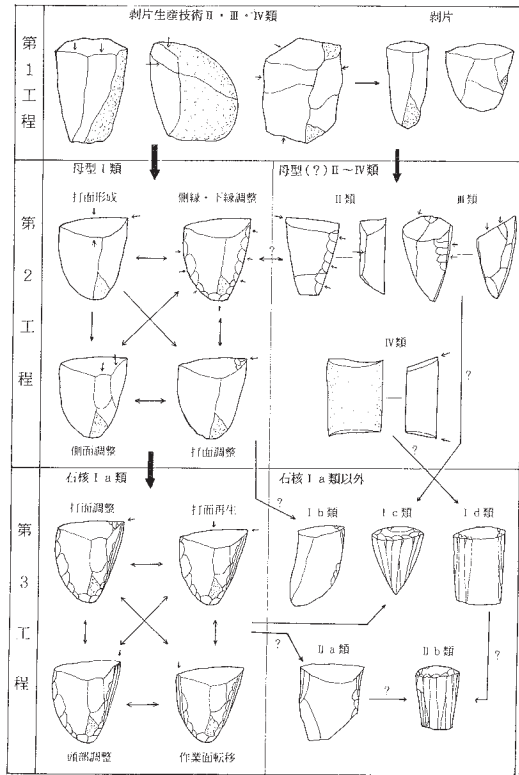
アミ部分を180° 打面転位して使用



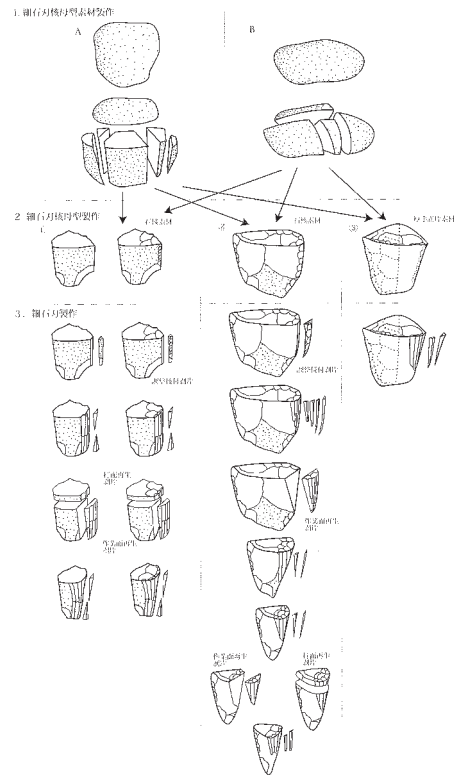
(s=1/2)

第1図 下嵐江 I・II 遺跡出土石器(1)

荒川台技法概念図



荒川台遺跡(阿部1993)



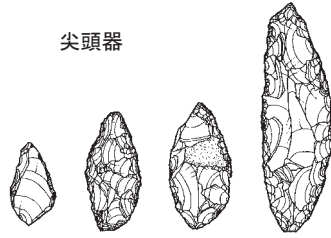
五川目(6)遺跡(岩田ほか2011)

下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡尖頭器石器群

ナイフ形石器



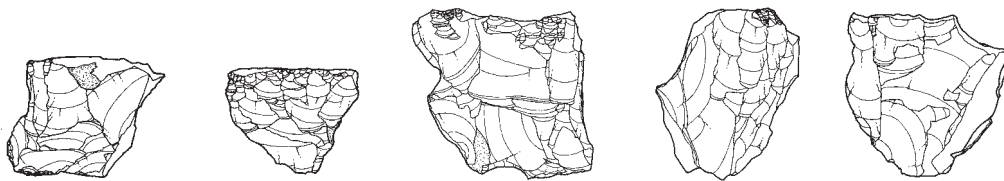
尖頭器



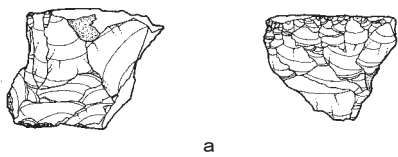
二次加工のある剥片



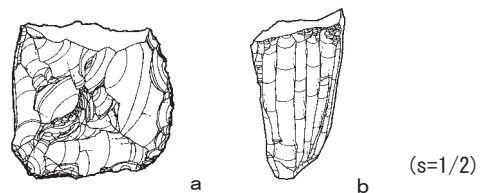
石核



尖頭器石器群に伴う石核

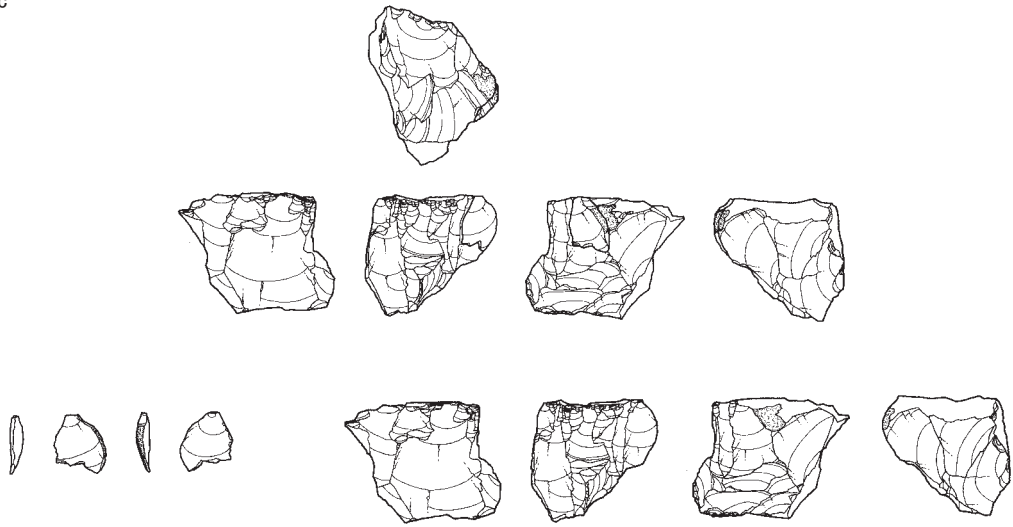


荒川台技法に伴う細石刃核

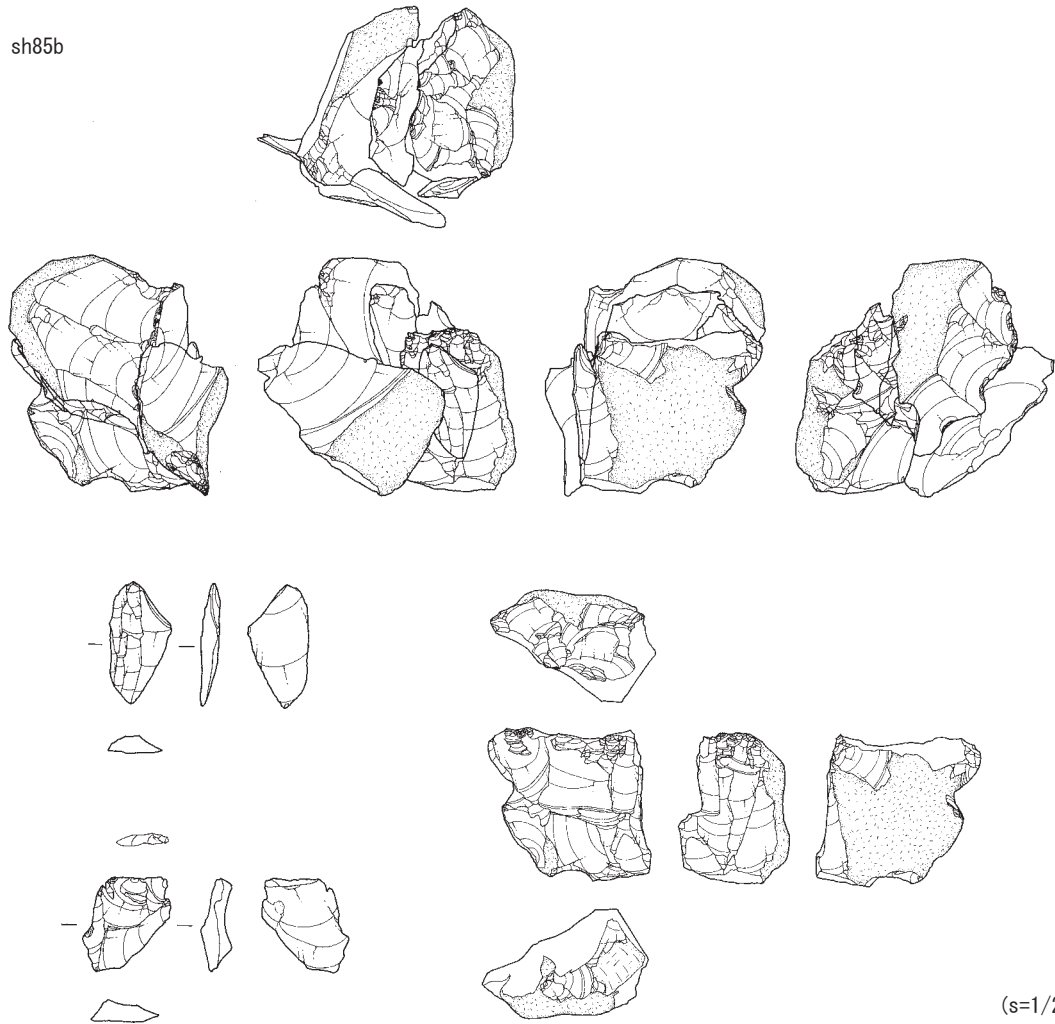


第2図 下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡出土石器(2)

sh65c



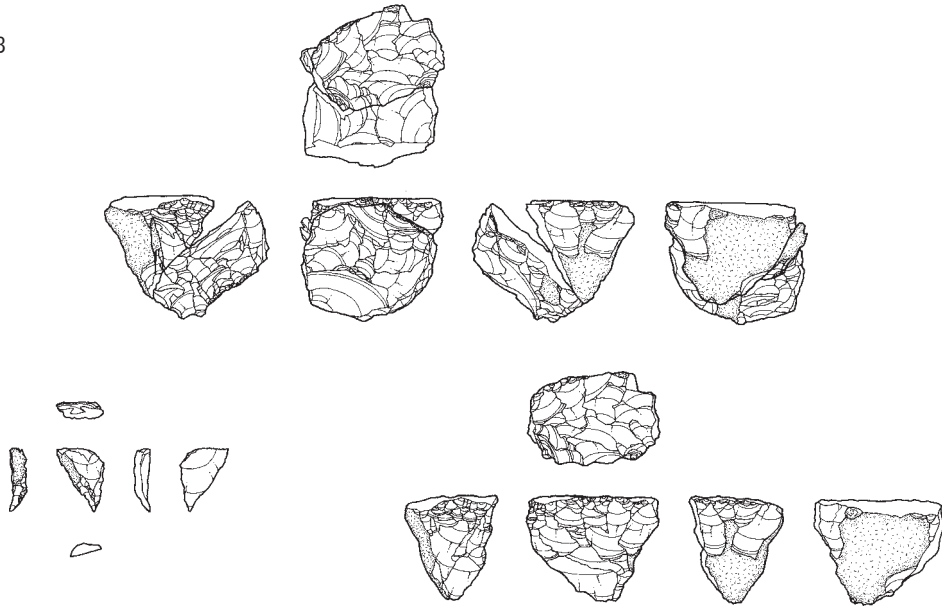
sh85b



(s=1/2)

第3図 下嵐江 I・II 遺跡出土石器(3)

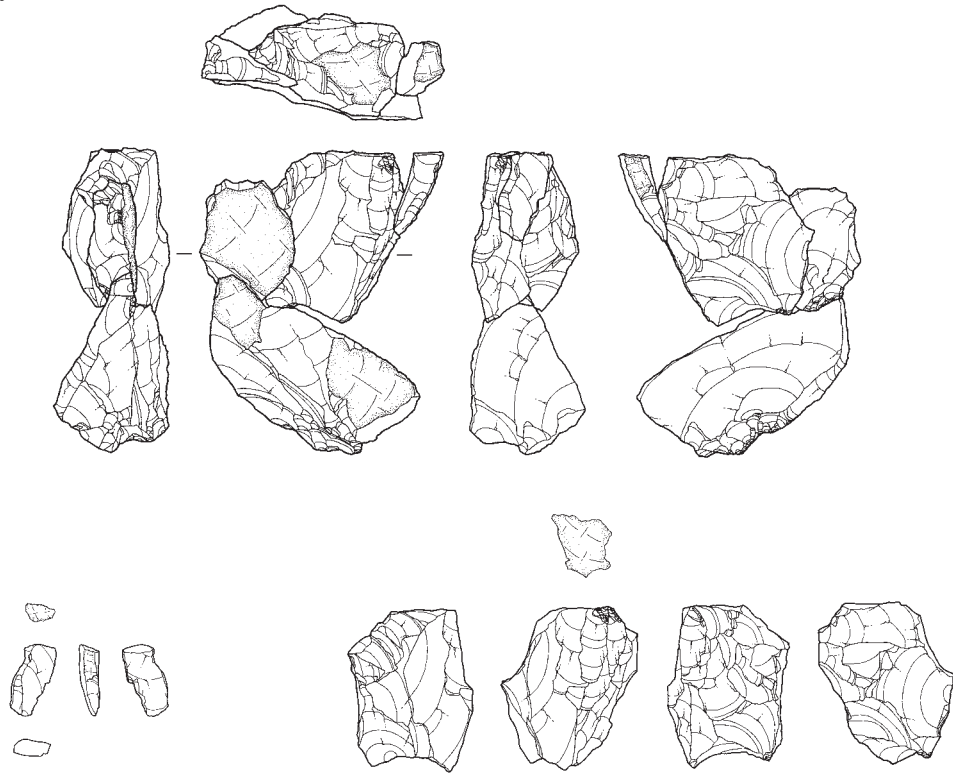
sshc3



sshc19

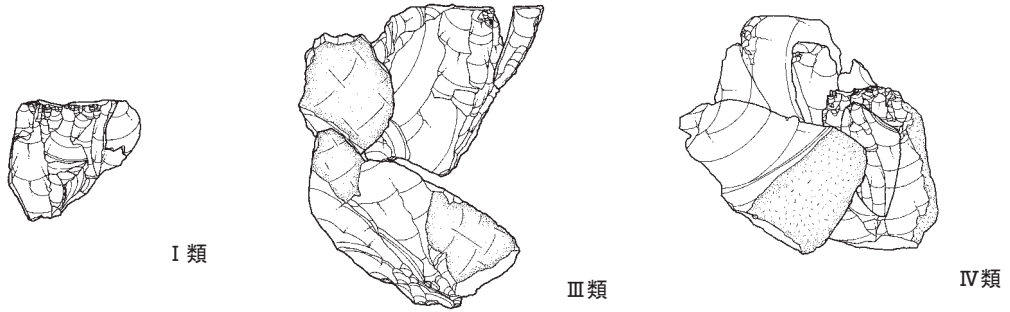


第4図 下嵐江 I・II 遺跡出土石器(4)

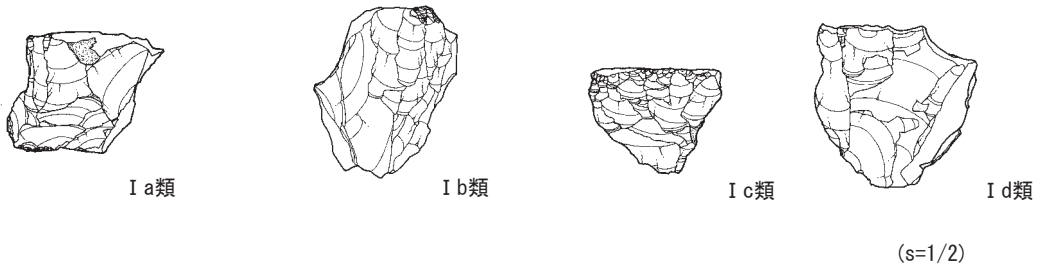


下嵐江 I・II 遺跡尖頭器石器群  
に見られる荒川台技法

第2工程  
母型



第3工程  
石核



(s=1/2)

第5図 下嵐江 I・II 遺跡出土石器(5)

## 県内出土の縄文土器胎土について（４）

河 本 純 一

当紀要の34号以降、岩手県内における縄文土器の胎土研究を進めるための基礎作業として、県内各地の遺跡から出土した土器の胎土観察をおこなってきた。今回もその作業の一環として、住田町に所在する2遺跡から出土した縄文土器の胎土を観察し、各地との比較検討などから、縄文時代における土器作りの様相について考察した。

### 1. はじめに

前号までに、県内各地の遺跡から出土した縄文土器について、極めて断片的ではあるが、その胎土の様相を探ってきた。その結果、飯岡層が分布する周囲では土器胎土に海綿骨針が多く認められるといった地域的な特徴だけでなく、中期の土器胎土には土器片や凝灰岩が多く認められ、後期の土器胎土には雲母が多く認められるといった时期的な特徴もあることを示してきた。このような土器胎土にみられる地域的・时期的特徴は、その遺跡が立地する地質的背景や当時の土器製作流儀が反映された結果である。それゆえ、土器胎土の様相を明らかにすることによって、人や土器の移動および土器作りの実態といった、その土器を出土した遺跡にかかわる過去の社会の様子を探ることができる。

しかし現状では、土器胎土に関わる情報がこれらを説得力をもって議論するにはまだ十分とは言えないだろう。そこで今回、これまで扱ってこなかった地域・時期を補完することを念頭に入れ、住田町の2遺跡で出土した土器について、胎土観察をおこなった。



(国土地理院「一関」S=1/200,000 2013年6月1日発行を縮小・加筆)

第1図 胎土観察をおこなった各遺跡の位置

### 2. 観察資料

今回は、住田町に所在する館遺跡、小松 I 遺跡の2遺跡（第1図）から出土した土器で、報告書（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004a・b）に実測図が掲載されているものの一部を観察資料とした。観察した土器およびその観察結果は、附表1・2に示した。

### 3. 観察方法および胎土分類

#### (1) 観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファール（倍率20倍）を用いて土器胎土を観察した（註1）。観察の際には、土器の断面だけでなく器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは観察面積が少なく、含まれる砂粒・混和材の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

#### (2) 胎土分類

今回は、土器に含まれる砂粒・混和材の種類および大きさによる分類を設けた。

##### a) 砂粒・混和材の種類（第1表）

観察した土器の胎土に含まれていた主な砂粒としては、黒色光沢粒（角閃石または輝石）・雲母・結晶片岩・凝灰岩・火山ガラス・石英・長石があり、砂粒以外にも海綿骨針・植物質などの存在が確

第1表 砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B類	雲母を一定量含む土器。
C類	結晶片岩を一定量含む土器。
D類	凝灰岩を一定量含む土器。
E類	火山ガラスを一定量含む土器。
F類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器（酸化粒を含む土器についても当分類に含める）。
G類	海綿骨針を一定量含む土器。
H類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色鉱物（石英・長石）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに一定量含めばAB類、結晶片岩と凝灰岩をともに一定量含めばCD類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも2cm<sup>2</sup>中に1粒は0.5mm以上でその存在が認められる量を指す。

第2表 砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
2-類	2.0mm～2.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
1+類	1.5mm～2.0mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0mm以上のものはほとんど含まれていない。
1-類	1.0mm～1.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
0類	1.0mm未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

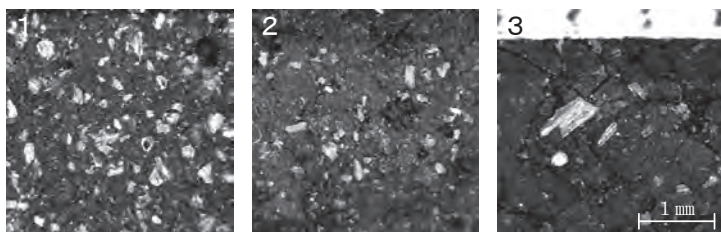
認できた。

今回は、これらの砂粒・混和材のあり方に基づき第1表に示すA～H類という、含まれる砂粒・混和材の種類による分類を設けた。

#### b) 火山ガラスについて（写真1）

旧稿（河本2015・2017）において、どのような特徴を有する砂粒をどの岩石・鉱物または混和材と認定したかを記している。ただし、今回取り扱う火山ガラスについては、これまで扱った縄文土器の中では、その含有量の顕著なものがほとんどなかったために、十分には注意してこなかったこともあり、その分類基準を示せていなかった。そこで、どのような特徴をもって火山ガラスと分類したか、以下簡単に記しておく。

火山ガラス（写真1）無色透明またはわずかに白みがかった半透明。土器胎土中に存在していたものは、0.5mm前後かそれ以下と小さく、その形状は多様であるが、柱状などやや細長い形状になるものが目立ち、その長軸方向に繊維状の細かい筋がみられるものもある。



※ いずれも約10倍に拡大した土器表面の写真。白く見える粒がほぼ全て火山ガラス。

写真1 土器胎土中にみられる火山ガラス

#### c) 砂粒・混和材の大きさ（第2表）

含まれる砂粒・混和材の大きさについて、第2表に示す0～2-類という分類を設けた。

今回は2.5mm以上の砂粒・混和材を一定量含む土器は認められなかったもので、第2表に示した基準で全ての土器を分類できた。

## 4. 観察結果

### (1) 館遺跡

前期前葉～後葉、中期中葉・末葉の資料計47点を観察した。中期中葉以外、いずれの時期も比較的まとまった観察点数を得ることができ、以下各時期の様相について述べる。

#### a) 前期前葉～中葉（大木2a～3式期）

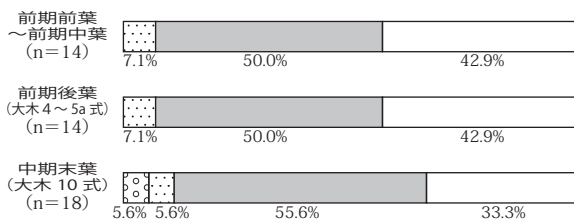
当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・凝灰岩・

第3表 砂粒・混和材の含有状況

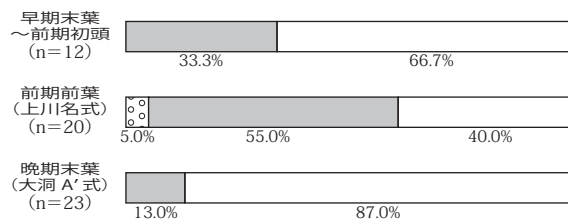
胎土	館遺跡			小松I遺跡		
	前期前葉 ～前期中葉	前期後葉 (大木4～5a式)	中期末葉 (大木10式)	早期末葉 ～前期初頭	前期前葉 (上川名式)	晩期末葉 (大洞A'式)
A類：黒色光沢粒を含む	12/14	13/14	18/18	11/12	19/20	22/23
B類：雲母を含む	1/14	—	8/18	—	—	16/23
C類：結晶片岩を含む	—	—	1/18	—	—	1/23
D類：凝灰岩を含む	1/14	4/14	—	—	1/20	—
E類：火山ガラスを含む	—	—	—	—	—	7/23
F類：その他有色砂粒を含む	—	—	—	3/12	7/20	2/23
G類：海綿骨針を含む	2/14	1/14	—	1/12	4/20	—
H類：石英・長石のみ	2/14	1/14	—	—	—	—

※たとえば1つの土器片中に雲母と結晶片岩をともに含めば、それぞれで1点ずつ集計しているので、縦列の合計は総観察点数より多くなる。

館遺跡



小松I遺跡



○ 2-類    ◐ 1+類    ◑ 1-類    □ 0類

第2図 含まれる砂粒・混和材の大きさ

海綿骨針を確認できた。第3表に示したように、A類（黒色光沢粒を含む土器、写真2-1）が14点中12点と最も多い。このほかG類（海綿骨針を含む土器、写真2-2）・H類（ほぼ石英・長石だけからなる土器）が各2点、B類（雲母を含む土器）・D類（凝灰岩を含む土器）が各1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。石英を主体とするものが14点中9点と多く、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが4点、長石を主体とするものが1点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第2図に示したが、0類42.9%、1-類50.0%、1+類7.1%と、1mm前後のものが多く認められる。

b) 前期後葉（大木4～5a式期）

当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・凝灰岩・海綿骨針を確認できた。A類（写真2-3）が14点中13点と最も多く、次に多いものはD類（写真2-4）であり4点存在している。このほかG類・H類が各1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの2種類が存在している。胎土観察した14点のうち、前者が12点、後者が2点と、石英が主体となるものが多い傾向がみられる。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類42.9%、1-類50.0%、1+類7.1%と、1mm前後のものが多く認められる。

c) 中期末葉（大木10式期）

当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・結晶片岩を確認できた。A類が18点中18点と最も多く、次に多いものはB類（写真2-5）であり8点存在している。このほかC類（結晶片岩を含む土器、写真2-6）が1点存在している。



無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。長石を主体とするものが18点中11点と多く、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが4点、石英を主体とするものが3点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類33.3%、1類55.6%、1+類5.6%、2類5.6%と、1mm前後のものが多く認められる。

いずれの時期もA類が多いことは共通しているが、A類以外の胎土に注目すると、前期前葉～後葉ではD類・G類が少量みられるだけだが、中期末葉ではB類の存在が顕著である。無色鉱物の含有状況をみても、前期前葉～後葉は石英を主体とするものが多い一方、中期末葉は長石を主体とするものが多い。このように同一の遺跡においても、時期ごとで使用される土器の材料は異なっている。

## (2) 小松I遺跡

早期末葉～前期前葉、晩期末葉の資料計55点を観察した。いずれの時期も比較的まとまった観察点数を得ることができ、以下各時期の様相について述べる。

### a) 早期末葉～前期初頭

当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・海綿骨針を確認できた。A類(写真3-7)が12点中11点と最も多く、次に多いものはF類(その他の有色砂粒を含む土器)であり3点存在している。このほかG類が1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。石英を主体とするものが12点中7点と多く、長石を主体とするものが3点、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが2点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類66.7%、1類33.3%と、1mm以下のものが多く認められる。

### b) 前期前葉(上川名式期)

当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・凝灰岩・海綿骨針を確認できた。A類が20点中19点と最も多く、次に多いものはF類(写真3-8・9)であり7点存在している。このほかG類(写真3-9)が4点、D類が1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。石英を主体とするものが20点中16点と多く、長石を主体とするものが3点、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが1点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類40.0%、1類55.0%、2類5.0%と、1mm前後のものが多く認められる。

### c) 晩期末葉(大洞A'式期)

当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・結晶片岩・火山ガラスを確認できた。A類が23点中22点と最も多く、次に多いものはB類(写真3-10・11)であり16点存在している。このほかE類(火山ガラスを含む土器、写真3-11・12)が7点、F類が2点、C類が1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。長石を主体とするものが、23点中13点と多く、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが9点、石英を主体とするものが1

点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類87.0%、1類13.0%と、1mm以下のものが多く認められる。

いずれの時期もA類が多いことは共通しているが、A類以外の胎土に注目すると、早期末葉～前期前葉ではF類・G類が一定量みられるが、晩期末葉ではB類・E類の存在が顕著である。無色鉱物の含有状況をもても、早期末葉～前期前葉は石英を主体とするものが多い一方、晩期末葉は長石を主体とするものが多い。このように同一の遺跡においても、時期ごとで使用される土器の材料は異なっている。

## 5. 小考

以上、今回は住田町に所在する館遺跡・小松I遺跡で出土した縄文土器の胎土についてみてきたが、両遺跡の観察結果とも、それぞれの遺跡が位置している地点に起因する胎土の違い以上に、土器が作られた時期の違いに起因する胎土の違いが明瞭であった。

早期末葉～前期後葉では、D類・F類の両遺跡におけるあり方が異なっており、これは位置する地点の違いに起因する土器胎土の違いが出ているようだが、ともにG類が一定量存在し、無色鉱物では石英を主体とするものが多いなど、共通点も多い。館遺跡の中期末葉および小松I遺跡の晩期末葉の土器胎土には、G類がほとんど見られず、時期による胎土の違いがG類の存否に表れている。これについて、同一地点に遺跡を営んでいたとしても、時期によって材料を採取する場所が異なっていたために、このような胎土の違いが生じたと考えるべきか、または海綿骨針を含む材料で土器を作る地域との関係性が時期により異なっていたために、この違いが生じたと考えるべきか、現状では判断できない。今後、周辺地域における土器胎土の様相を把握することが必要である。

中期末葉では、B類が顕著である。中期末葉に雲母を含む土器が多くなることは、これまでも指摘してきたが（河本 2016a・b）、今回の観察結果も同様の結果となった。この現象は前稿で示したように、岩手県県北～県南にかけて共通して見られる。製作流儀が広く共有されていたことが窺える。また、雲母を含む土器に含まれる無色鉱物が長石主体となることも、今回の観察結果でもやはり同様であった。雲母を混和させる際、たとえば花崗岩に由来する砂粒を使用したために、雲母と同時に存在する長石も多く混じった結果であろうか。



第3図 火山ガラスを含む縄文土器が出土した遺跡

晩期末葉では、B類とともにE類が顕著である。火山ガラスを含む土器については、西田泰民が秋田県横手市の虫内I遺跡から出土した縄文土器の胎土を分析し、大洞B2式段階で出現し、精製土器の大部分（壺・鉢・台付鉢・皿・注口土器）に限定されることを指摘している（西田 1998）。一方、筆者がこれまでに岩手県内で実見した中では、一戸町野尻Ⅲ遺跡および山田町浜川目沢田I遺跡で、火山ガラスを含む土器を確認している（註2）。

浜川目沢田 I 遺跡では、縄文中期前葉から晩期中葉にかけて連続的に胎土の変遷を追うことができたが、こちらでも大洞 B 式になり火山ガラスを含む土器が突如として出現し、先の西田の指摘と一致した（河本 2018）。浜川目沢田 I 遺跡では、小松 I 遺跡と同様に、雲母を含む土器も多くみられ、材料の使用傾向はよく似ていた。しかし、野尻Ⅲ遺跡では火山ガラスを含む土器が存在するという点で共通点を見い出せる一方、雲母を含む土器が少なく、結晶片岩を含む土器が多いことなど、相違点も存在する。

虫内 I 遺跡で出土した火山ガラスを含む土器には海綿骨針を伴うものがあるが、小松 I 遺跡や浜川目沢田 I 遺跡では認められなかった。また、野尻Ⅲ遺跡で出土した火山ガラスを含む土器には、雲母を伴うものがない一方、小松 I 遺跡や浜川目沢田 I 遺跡では雲母を伴うものが認められた（第 3 図）。このように、各遺跡で火山ガラスに伴う砂粒が異なるため、火山ガラスを含む土器はどこか特定の遺跡で作られ各地へ運ばれたものというよりは、それぞれの遺跡で作られたものであろう。火山ガラスを含む土器については、柴正敏が青森県で出土した縄文土器を中心に EPMA 法により産地同定し、土器の移動を論じている（柴 2014）。このような理化学的分析手法による検討も今後は必要であろう。

## 6. おわりに

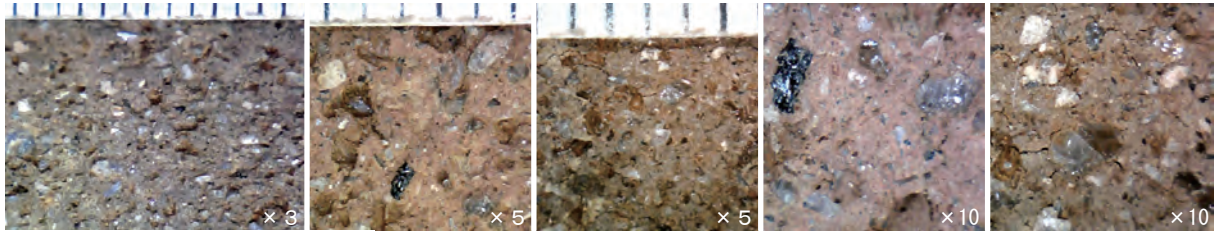
今回までの作業で、岩手県内で出土する縄文土器の胎土について各地域・各時期での特徴を提示し、縄文時代における土器作りの諸側面を論じてきた。当初の目的である、土器胎土研究の叩き台は少しは出来つつあろうが、今後とも継続的に土器胎土に関わる基礎データを積み重ねていく必要がある。

### 註

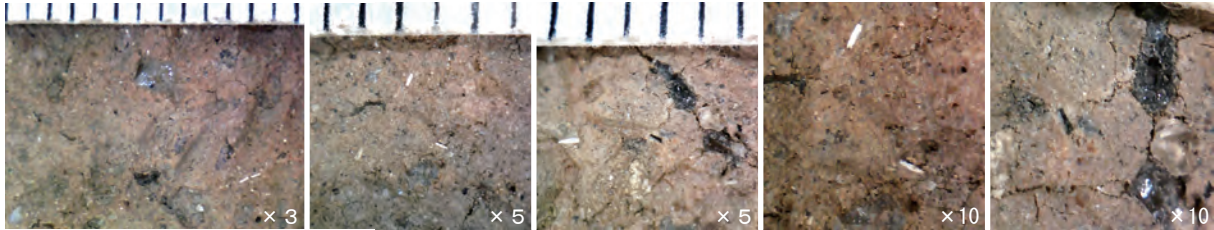
- (1)土器胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および附表 1・2として提示した土器胎土観察表の記述内容については、旧稿（河本 2011）を参照されたい。
- (2)前稿（河本 2017）において、一戸町野尻Ⅲ遺跡で出土した晩期前葉～中葉の縄文土器を扱ったが、今回改めて確認したところ、このうち観察№ 8～10・15・16（報文第 20 図 -171～173・第 21 図 -186・187）には火山ガラスが含まれていたことを、ここに加筆訂正しておく。

### 参考文献

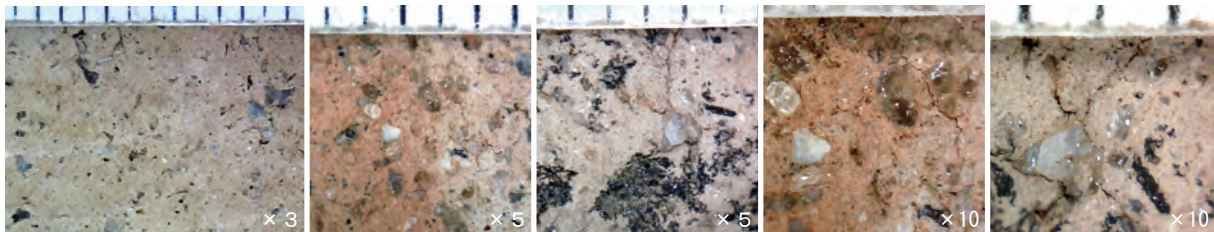
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004a 『館遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 432 集  
2004b 『小松 I 遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 433 集
- 河本純一 2011 「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」『大阪文化財研究』38 財団法人大阪府文化財センター  
河本純一 2015 「県内出土の縄文土器胎土について -肉眼による胎土分類からの検討-」『紀要』34（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
河本純一 2016a 「県内出土の縄文土器胎土について（2）」『紀要』35（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
河本純一 2016b 「立花地区出土縄文土器の胎土観察（1）-塩釜遺跡・館Ⅳ遺跡-」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』5 北上市立埋蔵文化財センター  
河本純一 2017 「県内出土の縄文土器胎土について（3）」『紀要』36（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
河本純一 2018 「土器胎土からみた縄文時代における土器製作の諸相」『浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 689 集（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
柴 正敏 2014 「津軽の地質と縄文土器原料」『第四紀研究』53-5 日本第四紀学会  
西田泰民 1998 「第 6 節 虫内 I 遺跡出土縄文土器・土製品の胎土」『虫内 I 遺跡』秋田県文化財調査報告書第 274 集  
秋田県教育委員会



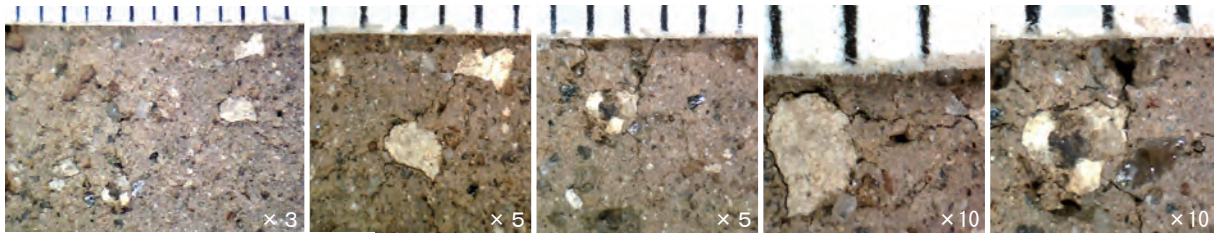
1. 館遺跡 第76図-125 (観察No.15 前期前葉 (大木2a式) 胎土A1-類)



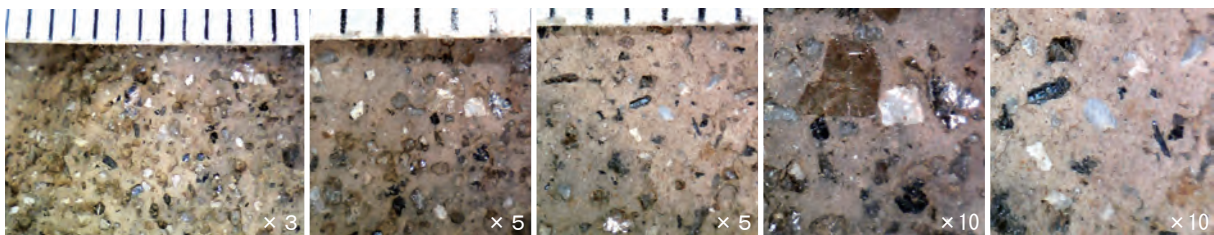
2. 館遺跡 第76図-130 (観察No.20 前期中葉 (大木3式) 胎土AG1-類)



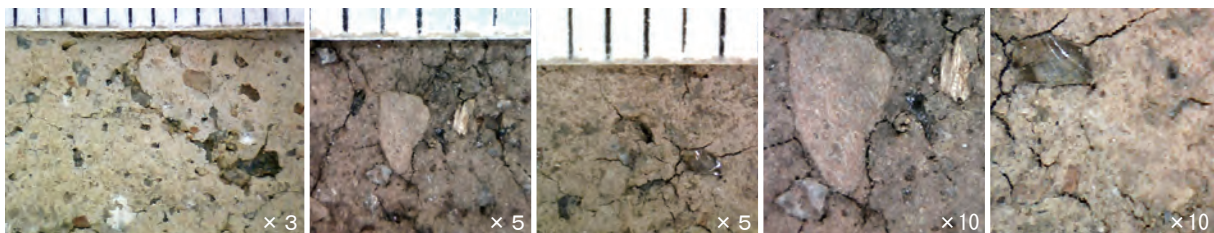
3. 館遺跡 第76図-131 (観察No.21 前期後葉 (大木4~5a式) 胎土A1-類)



4. 館遺跡 第77図-138 (観察No.28 前期後葉 (大木4~5a式) 胎土AD1-類)

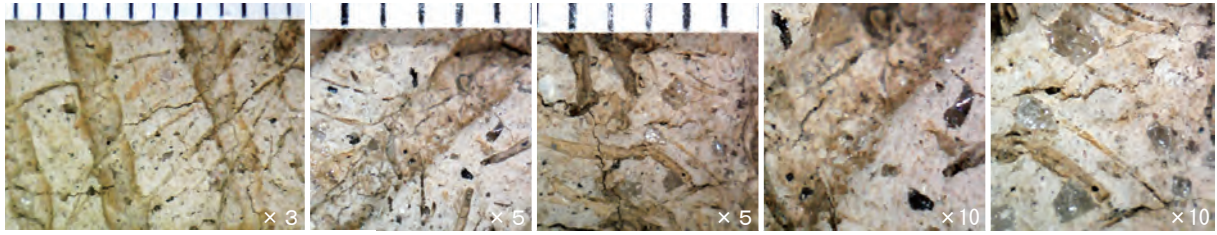


5. 館遺跡 第86図-214 (観察No.44 中期末葉 (大木10式) 胎土AB0類)

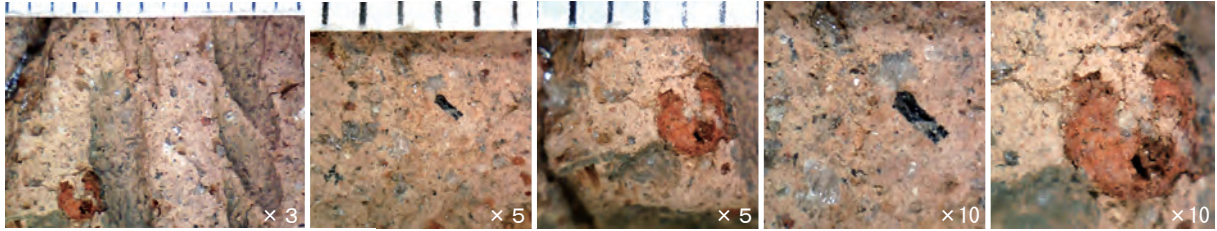


6. 館遺跡 第86図-205 (観察No.38 中期末葉 (大木10式) 胎土AC1-類)

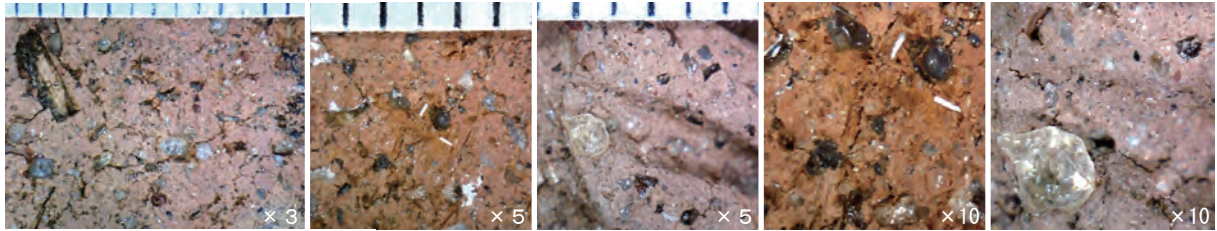
写真2 縄文土器の胎土写真(1)



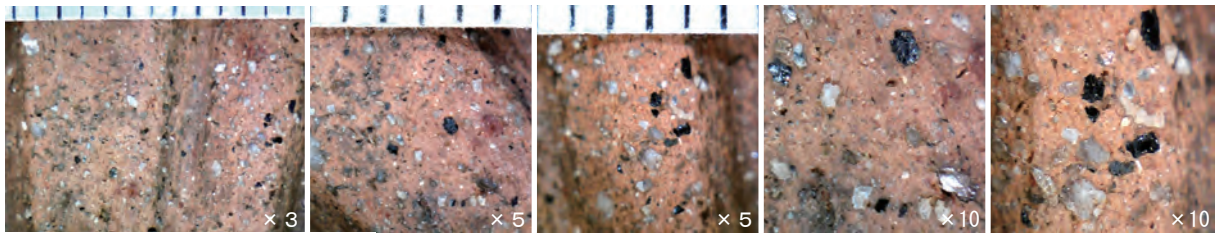
7. 小松 I 遺跡 第 147 図-6 (観察No.40 早期末葉~前期初頭 胎土 A0 類)



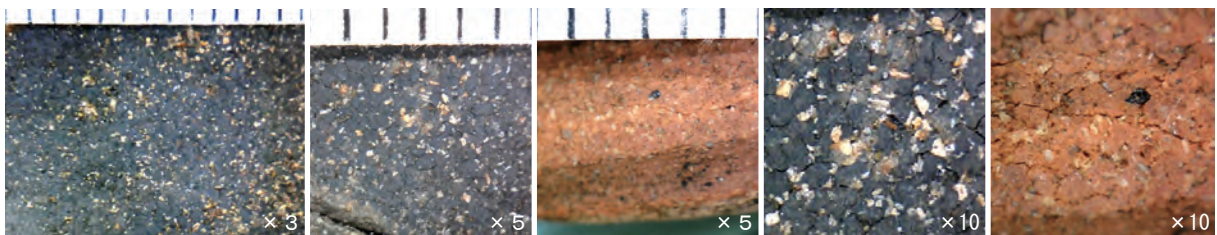
8. 小松 I 遺跡 第 135 図-10 (観察No.25 前期前葉 (上川名式) 胎土 AF1- 類)



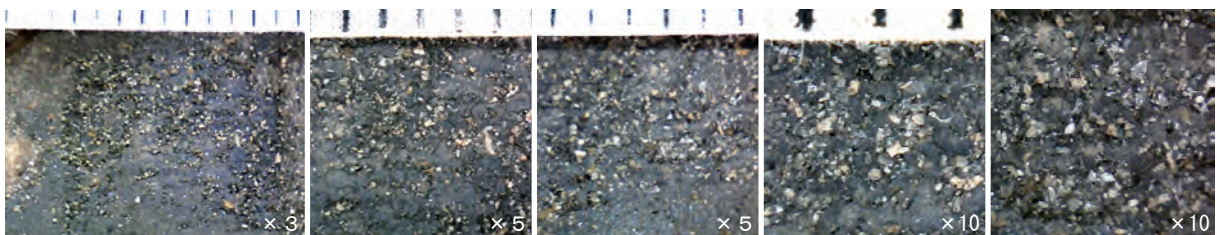
9. 小松 I 遺跡 第 148 図-3 (観察No.47 前期前葉 (上川名式) 胎土 AFG1- 類)



10. 小松 I 遺跡 第 132 図-5 (観察No.1 晚期末葉 (大洞 A' 式) 胎土 ABO 類)



11. 小松 I 遺跡 第 132 図-9 (観察No.5 晚期末葉 (大洞 A' 式) 胎土 ABE0 類)



12. 小松 I 遺跡 第 136 図-9 (観察No.36 晚期末葉 (大洞 A' 式) 胎土 E0 類)

写真 3 縄文土器の胎土写真 (2)

附表 1 土器胎土観察表 (1)

観察 No.	掲載 番号	時期 (型式)	胎土 分類	色調			黒色 光沢粒	雲母 ・ チャート	結晶片岩	凝灰岩 ・ 火山 ガラス	酸化度	その他 有色粒	石英	長石	海綿骨料
				内面	外面	断面									
1	第750 -111	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	7.5X6/6 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
2	第750 -112	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
3	第750 -113	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	2.3X1/1 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
4	第750 -114	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
5	第750 -115	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
6	第750 -116	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	2.3X1/1 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
7	第750 -117	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	2.3X1/1 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
8	第750 -118	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
9	第750 -119	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
10	第750 -120	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
11	第750 -121	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
12	第750 -122	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
13	第750 -123	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
14	第750 -124	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
15	第750 -125	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
16	第750 -126	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
17	第750 -127	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
18	第750 -128	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
19	第750 -129	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
20	第750 -130	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
21	第750 -131	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
22	第750 -132	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
23	第750 -133	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
24	第750 -134	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
25	第750 -135	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
26	第750 -136	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
27	第750 -137	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5少	(0.3)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		

観察 No.	掲載 番号	時期 (型式)	胎土 分類	色調			黒色 光沢粒	雲母 ・ チャート	結晶片岩	凝灰岩 ・ 火山 ガラス	酸化度	その他 有色粒	石英	長石	海綿骨料
				内面	外面	断面									
28	第750 -138	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
29	第750 -139	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
30	第750 -140	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
31	第750 -141	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
32	第750 -142	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
33	第750 -143	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
34	第750 -144	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
35	第750 -145	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
36	第750 -146	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
37	第750 -147	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
38	第750 -148	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
39	第750 -149	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
40	第750 -150	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
41	第750 -151	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
42	第750 -152	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
43	第750 -153	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
44	第750 -154	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
45	第750 -155	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
46	第750 -156	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		
47	第750 -157	前期中葉 (X81~55C)	A0	10X3/2 黒	10X3/2 黒	10X3/2 黒	0.5	(1.0)			(1.0)	(1.0)	(2.0)		

小松1遺跡  
報告書・吉田晋 2004 『小松1遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第433集。(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



# 岩手県沿岸北部における遺跡の層序学的検討

趙 哲済・佐瀬 隆・濱田 宏・長橋良隆

宿戸や鹿糠浜 I、サンニヤ I などの岩手県沿岸北部の諸遺跡では、十和田火山から飛来したテフラを挟在する類似した遺跡層序が認められる。本稿では、十和田火山周辺と沿岸北部のテフラを対比しつつ、沿岸北部の遺跡に則した基本層序を提案し、黒ボク土層の堆積や地域差を検討するとともに、最新の遺跡情報をもとに層序と遺跡の編年を整理する。

## 1. はじめに

十和田火山起源のテフラ研究は古く、1960年代には南部浮石・中振浮石(大池ほか、1966)が命名され、1970年代初めには「二ノ倉火山灰」「十和田b火山灰」「十和田a火山灰」(大池ほか、1971)の名が現れている。また、1972年にはテフラの等層厚線図も描かれている(大池、1972)。

岩手県沿岸北部には、これらの鍵テフラを挟在する陸上成の更新統～完新統が分布する。しかし、十和田火山近隣のテフラの分布と岩相は変化している。たとえば、北上低地帯以東(馬淵川以東)には「二ノ倉火山灰」はほとんど分布せず、十和田火山近隣で編年された「完新統テフラ」(東北地方第四紀研究グループ、1969)の開始層準を沿岸部で特定することは困難である。また、東南東に細長く分布する「南部浮石」は、沿岸部では黒ボク土層中に「南部浮石」の本体が塊状に擾乱され残った状態(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1999)や、黒ボク土層中に拡散した軽石粒子の密集部(趙ほか、2016)として分布するなど、火山近隣で連続して追跡できる軽石層とは異なる岩相を示している。東日本大震災の復興事業として沿岸部の発掘調査が進められている状況下で、調査の基準となる沿岸北部の層相に即した層序の確立は、円滑で着実な調査を促進するものと考えられる。

そこで本稿では、「南部浮石」の分布域の長軸線に沿う青森県三戸町の古屋敷、岩手県軽米町軽米、同赤石峠、同洋野町有家までの東南東ルートと、有家から沿岸を北へ洋野町宿戸、鹿糠浜、小長根、サンニヤ、青森県階上町道仏までの南北ルート(図1)を、2016年と2017年に行った調査結果をもとに、十和田火山近隣のテフラ層序と岩手県沿岸北部の遺跡層序を対比し、沿岸北部の基本層序を記載することを目的とする。また、黒ボク土層の堆積と岩相上の地域差、降下テフラ層の攪乱と拡散、および層序と遺跡の編年など、遺跡層序に係るいくつかの問題点を検討する。なお、本稿には未報告資料が含まれるが、上述の事情から層序に関する部分を先行して公表するものである(註1)。

## 2. 本稿の用語・テフラの呼称

本稿が記載対象とする地域はすべて台地や丘陵上にあり、地質学的にはテフラやレスなどの風で運ばれて堆積する風成層を主体とする陸上成層、土壌学的には地表履歴のある土壌(土層)、および人間により形成された人工地層(人為層)により構成される。専門分野の違いにより用語の意味が異なる場合があるので、本論に入る前に、「新版地学事典」(平凡社)や「土壌の事典」(朝倉書店)、「地形の辞典」(朝倉書店)、黒川勝己(2005)、三浦ほか(2009)などにに基づき用語を整理しておく。

火山灰:火山活動により地表に放出された破片状の固体物質の総称である火山碎屑物(火砕物・テフラ)のうち、粒径が2mm以下のものを指す。2~1/16mmを粗粒火山灰、1/16mm以下を細粒火山灰として区分する。なお、2~64mmは火山礫(ラピリ)、64mm以上は火山岩塊などと呼ばれる。また、火山灰は、たとえば火山灰土(層)や「八戸火山灰層」のように、広義の火砕物(テフラ)と同義で使わ



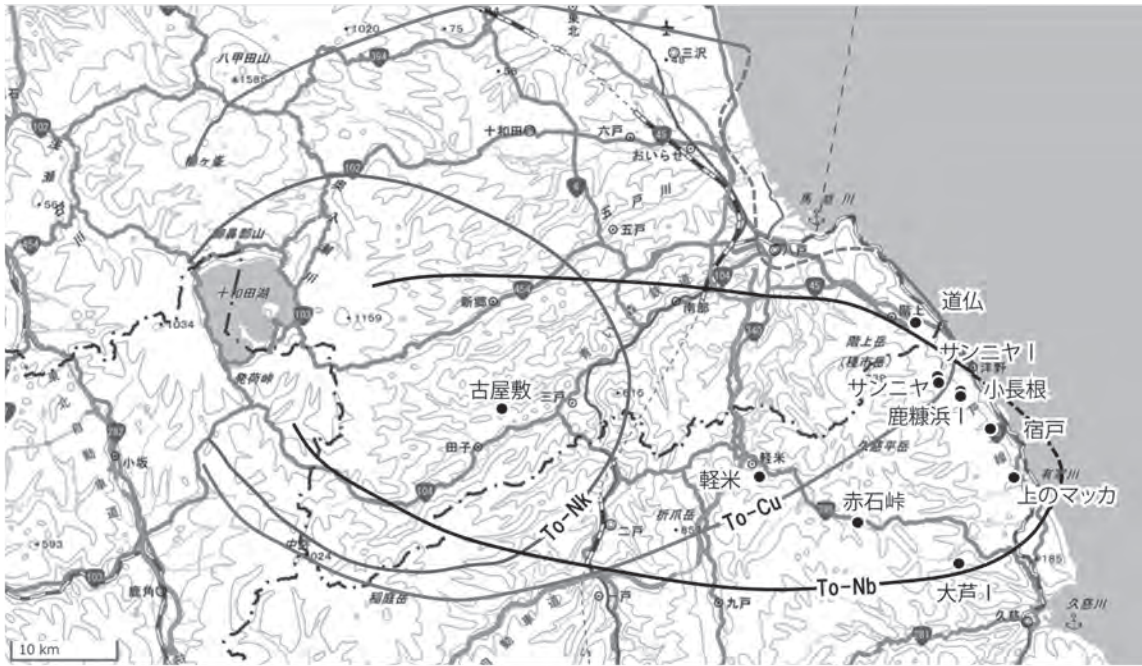


図1 テフラの分布と調査地等の位置

大池 (1972) の図と国土地理院地図 (電子国土) を合成、To-Nb : 南部テフラ、To-Nk : 二の倉テフラ、To-Cu : 中振テフラ

れることがある。軽石やスコリアなどの、火砕物の粒度区分を適用せず、岩石の性質で分類する粒子の粒度は、地質学のウェントワース法に倣い、碎屑物の粒度区分 (フリッツ・ムーア、1999) を用いる。各粒度は、小型大礫128~64mm、極粗粒中礫~32mm、粗粒中礫~16mm、中粒中礫~8mm、細粒中礫~4mm、細礫~2mm、極粗粒砂~1mm、粗粒砂~1/2mm、中粒砂~1/4mm、細粒砂~1/8mm、極細粒砂~1/16mm、シルト~1/256mm、粘土<1/256mmであり、中粒中礫サイズの軽石などと表記する。

テフラ：狭義には噴火により火口から放出され、降下堆積した火砕物をさす。広義には降下火砕物のほか、火砕流堆積物や、固体と気体が混合して地表に沿って乱流状態で流れ広がる火砕サージの総称として用いられる。短時間で広域に堆積するため鍵層として有効な時間指標となるが、長橋・片岡 (2014) は、テフラ粒子の集合が層状に堆積したテフラ層には、初生堆積以外に再堆積したものも含まれることに注意を喚起している。

ローム (層) : 土壌学的には砂・シルト・粘土が適度にまじりあった土性区分 (粒度区分) 上の粒度組成名である。地質学的には土壌学の土性区分を援用して、関東ローム層のように、降下テフラやその再堆積テフラの風化した褐色テフラ層 (褐色火山灰土層) の名称として用いられる。後述する洋野6層以下が地質学のいうローム層にあたるが、土性区分との混乱を避けるため、本稿の記載用語にローム (層) は使用せず、褐色火山灰土 (層) を用いる。

黒ボク土：テフラ (広義の火山灰) を母材とする土壌 (火山灰土) で、火山灰が土壌生成 (風化) により変質した黒色で腐植に富む上層 (黒ボク土層) と褐色~黄褐色の下層 (地質学のローム層) からなる。この2層は残積土壌観では母材としてのテフラ層 (土壌層位のC層) が変質して生成された同A層とB層と考えられているが、堆積土壌観では上方へ累積したものと捉える (詳細は後述)。

黒ボク土層を構成する黒色の腐植質火山灰土はボクボクと砕けやすく粗鬆 (多孔質) で、通気性・保水性がよく、柔らかく、軽い。草原的植生下で生成される。一方、自然林植生下では褐色火山灰土層が生成される。土色からみた腐植量は、黒色がすこぶる富み (炭素含量10%以上)、黒褐色は富み (同5~10%)、暗褐色は含む (同2~5%) 程度である (松井、1988 : 日本ペドロロジー学会編、1997

など)。発掘現場でしばしば使われる「クロボク（黒ボク・黒ぼく）」は本稿の黒ボク土層とほぼ同義であるが、「黒色土」は黒ボク土層以外に非火山灰質の腐植土層や泥炭層、黒泥層なども指す。

ところで、当該地域のテフラ層の呼称は、必ずしも統一的に用いられてきたわけではない。たとえば、縄文時代前期の指標テフラ層としてよく知られた「中振浮石」（大池ほか、1966：東北地方第四紀研究グループ、1969：大池ほか、1971：大池、1972・1973：大池・中川、1979）は、最初の記載が「高瀬浮石」（中川、1963）で、1980年代以降は「中振テフラ層」（早川、1983）、「中振浮石層」（松山・大池、1986：丸山・松山、1989）、「十和田中振」（町田・新井、2003）などと呼ばれている。また、記号「Cu」（大池、1972・1973）や「Cu-1・2・3」（松山・大池、1986）、「To-Cu」（町田・新井、2003）なども付けられている。一方で、「〇〇火山灰」の呼称は、「火山灰」が火砕物と同義で使われた場合に個々の現場の岩相を反映していないこともある。たとえば大池・中川（1979）の「十和田b降下火山灰」は「下部の粗粒浮石密集部と上部の青灰色火山灰」からなるし、「二の倉火山灰」は「スコリア、ラピリ、黒色火山灰などの互層」からなる。

そこで、以下では「日本地質学会地層命名の指針」（日本地質学会訳編、2001）が示す「地名＋岩相名＋単元名」の表記法に従いつつ、岩相層序単元の部層（member）と単層（bed）にあたるテフラ層の名称は、地名等をテフラ層序の概要を総括した大池・中川（1979）に準じ、岩相名はひとつの岩相を想起する接尾語を避けて「テフラ」で統一し、かつ、単元名を省略して、たとえば「南部テフラ」「二の倉テフラ」（註2）などと表記することにする。岩相層序単元の層（formation）や亜層（subformation）にあたる「高館火山灰層」や「八戸火山灰層」の岩相名は、慣例にならぬそのまま用いる。火山流下物単元の流（flow）である大池・中川（1979）の「八戸浮石流凝灰岩」はHayakawa（1985）の「八戸火砕流」とする。記号は町田・新井（2003）に準じて「To-b」「To-Nk」などとする。また、降下单層を記述する際には早川（1983）やHayakawa（1985）を適宜活用する。

### 3. 十和田火山周辺～沿岸北部の層序

#### 3-1. 古屋敷のテフラ層序

十和田火山の活動は、20以上の噴火エピソードに区分されている（Hayakawa、1985）。十和田湖中湖から東南東へ25km離れた青森県三戸町古屋敷赤坂の露頭には、噴火エピソードAの十和田a降下テフラ、Bの十和田b降下テフラ、Cの中振テフラ、Eの南部テフラ、H～Kの二の倉テフラ、Lの八戸降下テフラ・八戸火砕流が、黒ボク土層、褐色火山灰土層を挟んで分布する。噴火エピソードLは現在の十和田湖カルデラを形成した活動であり、噴火エピソードK～Aは後カルデラ期の活動で、主に十和田湖中湖を噴出源とする（註3）（表1）。

噴火エピソードAの十和田a降下テフラ（To-a）は古屋敷では不明確であり、地表下0.4mに約5cmの厚さで砂サイズの軽石が黒色腐植質土層中に散っているのを確認できる程度である。西暦915年の噴火によるものである（町田ほか、1981）。

十和田a降下テフラの下位は層厚31cmの黒褐色～黒色の腐植質火山灰土層（黒ボク土層）である。

噴火エピソードBの十和田b降下テフラ（To-b）は、地表下0.7mに基底のある層厚6cmの軽石層である。軽石は細粒中礫～粗粒砂サイズである。噴出年代を工藤・佐々木（2007）は $2550 \pm 20$  yr B.P. (PLD-6376) を較正して得た2708-2740 cal yrs B.P.から2.8kaと推定している（註4）。

十和田b降下テフラの下位は軽石が混じる黒褐色～黒色の腐植質火山灰土層（黒ボク土層）で、層厚は36cmである。これに混じる軽石は下位の中振テフラに由来し、細粒中礫～粗粒砂サイズで、上方細粒化するとともに混入量も散在から点在へ減少する。

表 1 十和田火山起源のテフラの層序

大池・中川(1979), 松山・大池(1986)※1		Hayakawa(1985), 工藤(2010)※2		町田・新井(2003)	年代
テフラ名(記号)	層序区分	テフラ名	噴火エピソード	テフラ名(記号)	
十和田a降下火山灰(To-a)	完新世火山灰層	毛馬内火砕流 大湯3軽石 大湯2火山灰 大湯1軽石	A	十和田a(To-a)	AD915 *1
十和田b降下火山灰(To-b)		惣辺火山灰 迷ヶ平軽石	B	十和田b(To-b)	2.8ka *2
中振浮石(Cu)		宇樽部火山灰 金ヶ沢軽石 中振軽石	C	十和田中振(To-Cu)	6.2ka *2
椀山浮石 ※1		戸来軽石 ※2	D'		7.5ka *2
南部浮石(Nb)		小国軽石	D		8.2ka *2
二ノ倉火山灰(NA)		貝守火山灰 南部軽石	E	十和田南部(To-Nb)	9.2ka *3
		椀山火山灰	F	十和田二の倉(群)(To-Nk)	10.2ka *3
		夏坂スコリア			11ka *3
		新郷軽石	G		14.3~11.7ka *4
二の倉スコリア		H~K			
八戸浮石流凝灰岩(HPf) 八戸降下浮石(HP)	八戸火山灰層	八戸火砕流 八戸火山灰	L	十和田八戸(To-H) 十和田八戸(To-HP)	15.2ka *5
ビスケット浮石2(BP2)	高館火山灰層	米田降下火砕堆積物	M	十和田ビスケット2(To-BP2)	21ka *6
大不動浮石流凝灰岩(Opf) ビスケット浮石1(BP1)		大不動火砕流 切田降下火砕堆積物	N	十和田大不動(To-Of) 十和田大不動(To-BP1)	29~29.6ka *7

\*1: 町田ほか(1981)、\*2: 工藤・佐々木(2007)、\*3: 工藤(2008)、\*4: 八戸市埋蔵文化財センターは川縄文館・東京大学大学院新領域創成科学研究科環境史研究室(2014)、\*5: Hoiuchi et al.(2007)、\*6: 工藤・小林(2013)、\*7 青木・新井(2000)

噴火エピソードCの中振テフラ(To-Cu)は、地表下1.6mにある層厚52cmの軽石層である(ニックネーム: 粟砂、註5)。軽石は中粒~細粒中礫サイズを含む白色の極粗粒~中粒砂サイズが主体で、上部では褐色をおび、細粒砂サイズの軽石が認められ中礫サイズが少なくなるが、粒度変化は顕著ではない。噴出年代を工藤・佐々木(2007)は工藤ほか(2003)の5320±90 yr B.P.(NUTA-6790)を較正して得た5993-6206 cal yrs B.P.から6.2kaと推定している。

中振テフラの下位は軽石が混じる黒褐色~黒色の腐植質火山灰土層(黒ボク土層)で、層厚は42cmである。これに混じる軽石は下位の南部テフラに由来し、細粒中礫~粗粒砂サイズで、上方細粒化するとともに、混入量も散在から点在へ減少し、噴火エピソードD・D'の特徴も認められない。

噴火エピソードEの南部テフラ(To-Nb)は、地表下2.8mに基底のある層厚77cmの軽石部層である(ニックネーム: ゴロタ)。3降下单層に区分できる。下部の層厚65cmは軽石層である。そのうち下半57cmの軽石は褐灰色~上半で褐色の中礫サイズが主体で極粗粒~粗粒中礫サイズが多いが、小型大礫サイズのものも含まれる。基質は細礫~粗粒砂サイズの火山礫と発泡度の低い軽石である。下部の上半8~13cmは火山灰質軽石層である。この軽石層は本来、下部層と一体であるが、暗褐色の降下細粒火山灰が軽石の粒子間に入りコーティングした部分である。上部は層厚12cmの軽石層である。軽石の大きいものは褐色の極粗粒~中粒中礫サイズで下部と似るが、細礫~粗粒砂サイズの軽石・火山礫が大半を占め、下部との顕著な違いである。以上の3細分は給源付近でも認められる(Hayakawa, 1985)。噴出年代を工藤(2008)は8110±30 yr B.P.(PLD-8913)を較正した8996-9094 cal yrs B.P.から得た9.0kaと、工藤・佐々木(2007)がHayakawa(1985)の8370±170 yr B.P.(GaK-10650)を較正した9232-9537 cal yrs B.P.から得た9.4kaを平均して9.2kaとしている(註6)。

南部テフラの下位には、層厚10cmの黒褐色腐植質火山灰土層(黒ボク土層)と、その下位の層厚約

20cmでスコリアが混じる暗褐色火山灰土層が重なる。

噴火エピソードH~Kの二の倉テフラ (To-Nk) は、地表下3.3mに基底のある層厚約50cmのテフラ部層である。3層に区分できる。下部と上部はスコリア層で、スコリアは赤褐色の細粒中礫~細礫サイズが主体である。中部は暗褐色のスコリア混り火山灰土層である。噴出年代は八戸市埋蔵文化財センター是川縄文観・東京大学大学院新領域創成科学研究科環境史研究室 (2014) が、辻 (2014) と工藤 (2008) の年代から11.7-14.3kaとしている (註7)。

二の倉テフラの下位は層厚25cmの褐色で軽石質の火山灰土層である。これは大池・中川 (1979) の風化火山灰にあたる。

八戸火山灰層は、噴火エピソードLを構成する地表下5.1mに基底のある八戸降下テフラ (To-HP) とこれを部分剝する八戸火砕流 (To-H)、および噴火後の風化火山灰 (上述) からなる。八戸降下テフラは全層厚47cmで5層に区分できる。最下部は細粒中礫サイズの軽石層と軽石質火山灰層の互層で層厚は11cm、下部は細粒中礫サイズの軽石を含むガラス質火山灰層で層厚は10cmである。中部は小型大礫~中粒砂サイズの軽石層で層厚は12cmあり、軽石の最大粒径は7.5cmである。上部はガラス質火山灰で層厚11cm、最上部は細粒中礫~細礫サイズの軽石層で層厚は最大12cmである。大池・中川 (1979) や早川 (1983) は八戸降下テフラをHP1~6ユニットに分けたが、ここでの最下部と下部がHP1に、中部がHP4に、上部がHP5に、最上部がHP6に対比され、古屋敷にはHP2・3は分布しない。

十和田湖から東に伸びる八戸降下テフラの分布は、松山・大池 (1986) の等層厚線図に詳しく示されている。これによれば内陸におけるHPⅢ・Ⅳ (HP3・4) の分布南限は南部町小向の少し北側にあり、小向の南にある古屋敷に分布しない上述の観察を支持する (註8)。

八戸火砕流は層厚124cmあり、粒径2~1cmの中粒~細粒中礫サイズの軽石が主体の軽石質火山灰からなり、全般に低角のクロスラミナがあり、火砕サージの様相が認められる。火砕流の最上部には降下軽石層と思われる細粒中礫~細礫サイズの軽石薄層を挟むガラス質火山灰層が層厚約20cmで載る。なお、八戸降下テフラには火砕流発生時の地震によると思われる断層が走っている。八戸降下テフラの噴出年代をHoriuchi et al. (2007) はウイグルマッチング法により15.5kaとしている (註8)。

八戸火山灰層は高館火山灰層を覆っている。高館火山灰層最上部の層厚7cmのにおい褐色の泥層は、最終氷期の最寒冷期末期に飛来したレスの付加層であり (細野ほか、1994)、炭が混じったその色合いから「ミルクチョコ層」と通称される。

### 3-2. 軽米・赤石峠のテフラ層

十和田湖中湖から東南東50kmの岩手県軽米町軽米のハートフルスポーツランド脇の露頭では、十和田a降下・中振・南部の各テフラと八戸火山灰層が確認できるが、二の倉テフラは確認できない。

十和田a降下テフラは表土の黒色腐植質シルト層と黒褐色腐植質火山灰土層に挟まれる層厚約5cmの火山灰土層であり、無機物の火山灰が増加したために土色が明るみを増して暗褐色を呈する。

地表下0.9mに基底のある中振テフラは擾乱により本体の上下に軽石が拡散する。テフラ本体は黄灰色の粗粒~中粒砂サイズの軽石層が層厚15cmでわずかに正級化成層し、上方で暗褐色やや腐植質の軽石質火山灰土層・層厚10cmに移化する。テフラ直下の黒褐色腐植質火山灰土層中にも同サイズの軽石粒子が散在し、特に深さ9cmまでは多量に混じる。

中振テフラの下位は軽石が混じる黒褐~黒色の腐植質火山灰土層 (黒ボク土層) であり、約50cmの層厚がある。軽石の粒径は1cm以下の中粒~細粒中礫~細礫サイズで、南部テフラに由来する。

地表下約2.0mに基底のある南部テフラは、上下2層に分けられる。下部は黄褐色の軽石層で層厚は

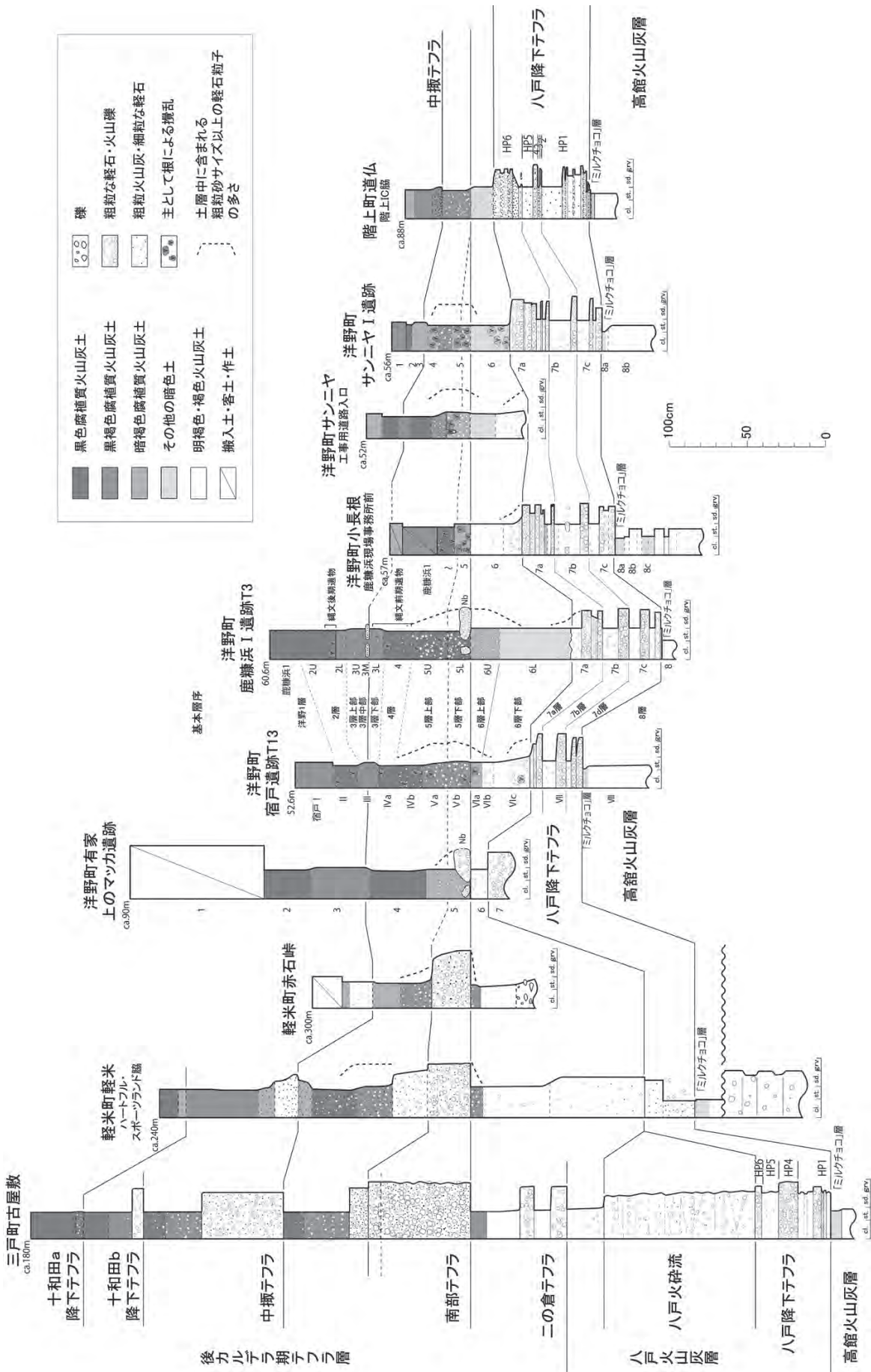


図2 十和田火山近隣～沿岸北部の地層対比

27cmである。上半6cmは風化し、褐色を帯びる。軽石の最大粒径は粗粒中礫サイズの18mmであり、中粒中礫サイズが多く、基質を極粗粒～粗粒砂サイズの小さい軽石が埋めている。上部にはおい褐色の軽石層で層厚は22cmである。軽石は極粗粒～粗粒砂サイズが主体で、中礫サイズのものが混じる。軽米における南部テフラの下部と上部は、岩相上の特徴から、古屋敷における下部と上部に対比されるが、古屋敷の中部にあたる細粒火山灰は未確認である。

南部テフラの下位は黒褐色～暗褐色で腐植質の火山灰土層（黒ボク土層）で層厚は8cmあり、南部テフラに由来する新鮮な白色軽石が散在する。その下位は黄褐色で泥質な火山灰土層で層厚は42cmあり、粒径1cm以下の中礫サイズの黄灰色軽石が散在する。これらの中に予想される二の倉テフラの降灰層準は確認できない。

さらに下位は軟質で黄褐色のガラス質粗粒火山灰層であり、層厚は60cmである。火山灰は分級が悪く粘土～中粒砂サイズからなり、粗粒～細粒中礫サイズの黄白色軽石を含む。

地表下3.3mに基底のある八戸降下テフラは上部の層厚12cmで黄灰色、細粒砂サイズのガラス質粗粒火山灰層と下部の層厚20cmで淡黄色、粘土化のすすんだガラス質細粒火山灰層とからなる。上部には粒径3～5mmの粘土質の火山豆石が混じり、稀に粒径2mmの石質岩片が含まれる。

八戸降下テフラは高館火山灰層を覆う。高館火山灰層の最上部は炭薄層を伴う暗黄灰色のシルト質粘土層「ミルクチョコ層」である。その下位は基盤層で、黄白色でシルト質砂～極粗粒砂の互層であり、円磨した軽石や極粗粒砂の偽礫を含み、分級は悪い。基盤最上部は暗褐色泥層で土壌化している。

軽米の露頭からさらに11km余り東南東、噴出源からは61kmの赤石峠では、中振テフラと南部テフラが認められる。

中振テフラは全般に腐植が混じって暗赤褐色の火山灰層となる。層厚は18cm前後であるが、擾乱により火山灰が上位・下位に拡散し、上限・下限は漠然としている。

南部テフラは細粒中礫サイズが主体の軽石層である。層厚は25cmあり、古屋敷・軽米の下部に対比できるが、両地域に比べれば、かなり風化して軟質になっている。

南部テフラを覆う層厚40cmの軽石混り腐植質火山灰土層（黒ボク土層）は、腐植に富み、この露頭では最も黒い。また、南部テフラ直下も層厚7cmの黒褐色～暗褐色の腐植質火山灰土層である。

### 3-3. 沿岸北部の基本層序

岩手県沿岸北部にある洋野町には、震災復興道路と位置づけられる三陸沿岸道路の建設に伴う調査で、数多くの縄文遺跡が見つかっている。その中の上のマッカ・宿戸・鹿糠浜Ⅰ・サンニヤⅠなどの遺跡とその近隣地域には、中振テフラや南部テフラなどの十和田火山起源のテフラ層が連続長く追跡できる。これらの鍵テフラ層と、これに挟まれる黒ボク土層や褐色火山灰土層との岩相対比により、沿岸北部の地層（土層）は8層に大別できる。これらを本地域の地名を冠して、例えば洋野〇層とよぶ。また、各遺跡の層序は、遺跡の地名を採って、例えば鹿糠浜〇層とよび分ける（註10）（図2）。

洋野1層は表土層の黒色（7.5YR2/1）（註11）シルト質の腐植質火山灰土層で、ササや樹木の根が張るとともに、それらが朽ちた痕跡が密に見られる。また、ミミズや昆虫の幼虫の糞である団粒構造が顕著に認められる。本層は下位層が擾乱された部分で、樹木の増加（植林）とこれに伴う土壤生物の交代などの生態環境の変化により、シルト分が増加したものとみられる（註12）。層厚は15～20cmであり、下限はシルト分の差で明瞭な部分もあるが、不明瞭な部分では、根の密な部分の下限で下位層と暫定的に区分する。

洋野2層は黒ボク土層の特徴であるボクボク感が強い黒色の腐植質火山灰土層であり、層厚は6～100

cmである。宿戸Ⅱ層や鹿糠浜2層、サンニヤ2層（註13）がこれにあたる。宿戸や鹿糠浜Ⅰの地層のなかでは最も黒く腐植にすこぶる富む。鹿糠浜Ⅰ遺跡では上下に2分できる（第2・3図）。

鹿糠浜2層上部は黒色（7.5YR1.7/1）の腐植質火山灰土層である。層厚は数～100cm程度で下位層とは比較的明瞭に区分できる。丘陵頂部の緩斜面や厚層の谷部斜面では、わずかな黒さの違いやシルト分の違いでさらに細分できる。その際、黒味とボクボク感は2層上部下半が最も強い。

鹿糠浜2層下部は黒褐色（10YR2/1.5）の腐植質火山灰土層である。層厚は数～50cmであり、下位層とは漸移している。2層上部より黒味が薄れ、一部でシルト質となり、締まりがよくなる。緩斜面や厚層の谷部斜面では上部と同様にさらに細分できる。2層下部上面が配石遺構の遺構面である。

洋野2層（鹿糠浜2層）からは、縄文時代後期の遺物のほか、縄文時代前期のものも多く出土している。前期のものは2層下部からと予想されるが、現場では掘り分けられていない。

洋野3層は中振テフラの降灰層準を中位に挟むやや明るい黒褐色の黒ボク土層である。宿戸Ⅲ層や鹿糠浜3層、サンニヤ3層がこれにあたる。しかし、上のマッカ遺跡からサンニヤⅠ遺跡までの広い範囲は、中振テフラを降下層として識別できず、漠然と中振テフラの粗粒火山灰が散在するゾーンが把握できる程度である。そのため、発掘の作業効率を考慮して、中振テフラの降灰層準を含み、生物擾乱により粗粒火山灰質で明るくなった上位・下位の黒ボク土層の範囲を含めて3層とする。そのため火山灰の上・下位への拡散が大きい上のマッカ遺跡では層厚が約40cmになるが、拡散の小さいサンニヤⅠ遺跡では8cm程度で、場所により見かけの層厚は甚だしく異なる。上下限とも漸移している。

一方、谷の斜面や谷底、遺構内では、中位に中振テフラを挟んで洋野3層は3分できる。

中振テフラ本体である洋野3層中部は、にぶい黄橙色（10YR7/4）の軽石質粗粒火山灰層であり、下限の堆積面は明瞭である。厚層で擾乱を被っていない谷底の鹿糠浜3層中部は、下部の明黄褐色（2.5YR7・6）粗粒～中粒砂サイズの軽石層（最大層厚8cm）と、これに漸移して正級化する暗灰黄色（10YR6/4）軽石質細粒火山灰層（最大層厚6cm）からなる。中振テフラを上・下に挟む鹿糠浜3層上部・下部はともに中振テフラ粒子混じりの腐植質火山灰土層である。上部は黒褐色（10YR2/2）で層厚は15cm前後、下部は黒褐色（7.5YR2/2）で層厚は10cm前後である。谷底の3層上部は粗粒火山灰と細粒火山灰の薄層が互層したり粗粒～中粒砂サイズの軽石が厚く再堆積する場所がある（註14）。

洋野4層は黒色（7.5YR1.7/1）の腐植質火山灰土層であり、少量の軽石を含む。宿戸Ⅳa・b層や鹿糠浜4層、サンニヤ4層がこれにあたる。宿戸Ⅳa・Ⅳb層の区分は軽石粒がⅣa層に極少ないことによる。宿戸・鹿糠浜Ⅰ遺跡では2層に次いで黒味が強い。層厚は15～25cm程度であり、下限は漸移している。縄文前期の遺物を包含する。

洋野5層は黒色（7.5YR2/1）の腐植質火山灰土層であり、軽石が散在する。宿戸Ⅴ層や鹿糠浜5層、サンニヤ5層がこれにあたる。含まれる軽石の量差で2層に岩相区分でき、下部が南部テフラの降下層準（宿戸Ⅴb層・鹿糠浜5層下部）である。鹿糠浜5層上部は黒色（7.5YR2/1）の腐植質火山灰土層であり、軽石は下部で散在し、上方で減少する。層厚は10～30cmで下限は漸移している。鹿糠浜5層下部は黒色（7.5YR2/1）の腐植質火山灰土層であり、軽石が散在～かなり密に分布する。層厚は10cm前後であり、下位層とは部分明瞭で、漸移するところもある。

鹿糠浜Ⅰ遺跡や上のマッカ遺跡では、この層準に南部テフラの軽石が擾乱を免れて分散せずに塊状の集合体として残存するところがある。宿戸遺跡でもひとつの竪穴建物の覆土にこの状況が認められた。鹿糠浜5層下部の軽石は黄橙色（10YR7/4）で最大粒径9mm、中粒中礫～粗粒砂サイズからなり細礫サイズが主体であり、厚さ数cm、長さ数cmから20cm程度の塊に集合している。

洋野6層は褐色火山灰土層を主体とし、宿戸Ⅵ層や鹿糠浜6層、サンニヤ6層がこれにあたる。腐植

と軽石の量の違いで2～3層に区分できる。6層上部は黒褐色（7.5YR3/2）腐植質火山灰土層であり、南部テフラの軽石粒を含む。暗褐色の地域もあり、層厚は10～15cm程度で、下限は漸移している。6層上面は南部テフラの堆積面であるが、5層下部と同様の著しい攪乱により堆積面が攪乱され、層中に軽石が混在したものである。6層下部は暗褐色（7.5YR3/3-10YR3/4）～褐色（10YR4/5）の火山灰土層である。層厚は40～50cmで、下限は概ね明瞭である。含有する軽石は上部と下部に多く、中部に少ない。上述の攪乱により、上部の軽石は黄橙色で5層に由来し、下部の軽石は浅黄橙色で7層に由来する。なお、宿戸Ⅵa層は洋野6層上部に、Ⅳb・Ⅳc層は上述の6層下部の上部・下部にあたる。

洋野7層は八戸降下テフラであり、黄褐～明黄褐色の軽石と軽石質火山灰の互層である。宿戸Ⅶ層や鹿糠浜7層がこれにあたる。最大層厚は60cmであり、粗粒相～細粒相のセットにより上位からa・b・c・dに4区分できる。

7a層は上部が黄褐色（10YR5/6）の軽石質火山灰層（層厚7cm）で、下部が軽石層の互層（層厚13cm）である。下部の軽石粒は浅黄橙色（10YR8/3）で細礫～中粒砂サイズが主体である。7b層は上部が明黄褐色（10YR6/6）軽石質火山ガラス質火山灰層（層厚10cm）で、下部が軽石層（層厚7cm）である。下部の軽石粒は浅黄橙色（10YR6/6）で大きく、最大径2.4cm、細粒中礫～細礫サイズが多い。7c層は階上町道仏でのみ確認できた層準である。上部が灰色細粒火山灰層（層厚3cm）と下部が灰白色軽石層（層厚2cm）で、軽石は細粒中礫サイズが主体で粗粒サイズが混じる。7d層は上部が明黄褐色（10YR6/6）軽石質火山ガラス質火山灰層（層厚7cm）で、下部が風化した火山灰薄層と軽石薄層の互層（層厚14cm）である。下部の軽石互層は明黄褐色（10YR6/8）で細粒中礫～中粒砂サイズの軽石が薄層をなす。最下部に層厚1cmの火山ガラス質細粒火山灰薄層を挟む。大池・中川（1979）や早川（1983a）の八戸降下テフラのユニット区分とは、7d層がHP1に、7b層下部がHP4に、7b層上部がHP5に、7a層がHP6に対比でき、7c層にあたるHP2・3は上述のようにサンニヤ以南には分布しない。

洋野8層は高館火山灰層であり、複数の降下テフラを挟在する黄褐色（10YR5/6）火山灰土層である。泥がち・軟質でボソボソ感がある。道仏では4m以上、宿戸遺跡では1.8m以上の層厚がある。最上部の層厚4cmでにぶい褐色～明褐色（7.5YR5.5）「ミルクチョコ層」は炭混じり泥が主体である。8層上面付近にはクリオタベーションによる大小の変形が随所で認められる。

## 4. 検討

### 4-1. 黒ボク土層の堆積性と、これにかかわる侵食と再堆積について

遺跡の調査では、テフラ層を挟まない黒ボク土層であっても、これに含まれる遺構や遺物が上位から下位へ、縄文時代晩期から前期・早期へと古くなり、累重の法則（註15）が成り立つことが知られている。しかし、土壌学では一般に、土壌は母材（土壌層位のC層）が生物活動や風化作用によって生じた化学物質が上から下に移動して分化し、土壌化層（A層・B層）が生成される、とする残積土壌の考え方の上に成り立っている。そこで、黒ボク土層の累重性は、たとえばテフラ層（C層）とその土壌化層（A層・B層）のセットを、次々と新しいテフラが被覆し、被覆層の堆積毎に残積土壌が積み重なるとする累積土壌の考えで説明される（たとえば、加藤、1987など）。

このような残積土壌の単純な累積の考え方を、三浦ほか（2009）は次のように修正している。すなわち、初生堆積のテフラと再堆積テフラやレス、風成塵などの「少量ずつ堆積する母材と地表環境の影響下で土壌生成が並行して、上方成長しながら形成されていく」とする堆積土壌の考え方である。Inoue et al.（2011）が古屋敷露頭の南部テフラと中振テフラ間にある層厚40cmの黒ボク土層で実施し



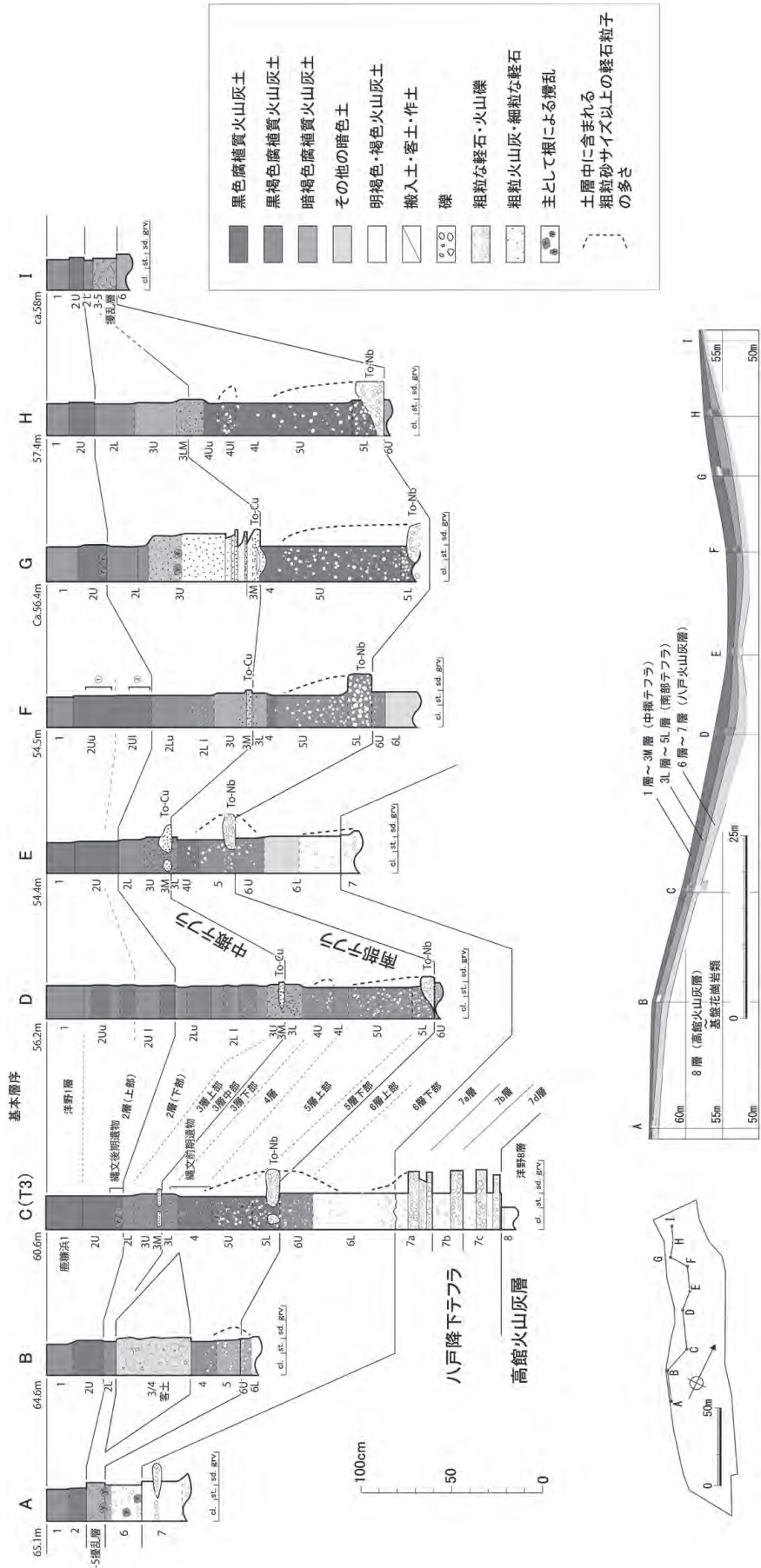


図3 鹿跡浜 I 遺跡の北谷部における層相変化

た8試料の放射性炭素による較正年代は、中央値で7625 cal yrs B.P.から6247 cal yrs B.P.へと1世紀ごとに約3cmずつ累積したことを明らかにし、堆積土層の考え方を補強した。

一方、植物や土中動物の活動、および凍結融解作用は、黒ボク土層を擾乱する。

草の根茎は粗鬆で空隙の大きい黒ボク土層内へ抵抗少なく成長し密生することにより、母材の堆積面を破壊し、根茎が朽ちた痕は、土壌から分離した化学物質の移動経路となる。

黒ボク土層中で活動するモグラやアリ、セミの幼虫、ヤスデ、ダニ、ミミズなどの土壌動物による落葉・落枝の粉碎、移動痕の孔隙形成、土壌の耕耘などは、腐植質火山灰土と緩慢に堆積する母材を攪拌する。なかでもミミズは植物遺体の分解と団粒（糞塊）の生産に大きな役割を担っていて、たとえば、京都市芦生の草地上でクソミミズが腸管を通して地上へ運び上げた団粒の土壌量は年間3.1mmの厚さに相当する（渡辺、1978）。これは黒ボク土の生成地域における母材の堆積量を遥かに超えている。

細粒で保水力の高い黒ボク土層の擾乱には、凍結融解作用も強く関与する。霜柱が礫や遺物（粒子）を持ち上げ下ろす際に粒子どうしはわずかながら垂直・水平の移動を伴い、その繰り返しが大きな移動距離となる。また、冬季の凍結は未凍結層中の水を凍結層側へ吸い上げ、凍結層直下はますます湿潤となり、凍結層を増厚させるが、春季の融解は凍結層中に含まれていた小さな粒子を相対的に沈降させ、大きな粒子を上昇させる（ビューテル、1985）。

ところで、南部テフラの降灰層準である黒ボク土層（洋野5層下部）とこれに連続する黒ボク土層（洋野5層上部～4層）は、確認できるいずれの地点でも、南部テフラの粗粒砂サイズ以上の軽石粒が混じるものの、下位から上位へ、密集から散在、点在へと漸減するのが認められる。この現象は、黒ボク土層が緩慢な母材供給により上方へ増厚していく過程で、動植物による攪乱や凍結融解作用により、軽石粒が徐々に上方に拡散した結果と考えられる。

図3に示すように、鹿糠浜5層下部の南部テフラから上位では、丘陵頂部の黒ボク土層と斜面～谷底の黒ボク土層を比較すると、丘陵頂部の地点A・Iでは2層～5層の黒ボク土層が薄く、かつ著しい攪乱を伴って収斂している。また、南部テフラの軽石粒をほとんど含まない。これに対して、斜面～谷底の地点C～Hでは、鹿糠浜2層～5層下部が相対的に厚く、また、2層上部・下部や3層上部・中部・下部、5層上部・下部など、各層が細かく区分できる。

この違いは丘陵頂部の土層が生成中に雨水や風で侵食され、斜面から谷底へ再堆積したのが原因と考えられる。これは黒ボク土層の堆積性を強く示唆する。図3-D地点の2層中で顕著に認められる黒色腐植質火山灰土層と黒褐色腐植質火山灰土層の互層のうち、ボクボク感の強い前者は上方成長した堆積性の土層で、ホクホク感が弱くわずかにシルト質で黒褐色の後者が再堆積の土層の主体であると考えられる。なお、谷底の地点D～Fだけではなく、斜面途中のCやG・Hでも厚層であるのは、植被により土壌粒子がトラップされたのに加えて、土壌粒子が単純な形状のテフラ粒子とは異なり、テフラの風化物と腐植が集積・重合して形成される複雑な形状であるため、これが絡み合って円滑な移動を妨げた所為でもあろう。

また、宿戸遺跡と鹿糠浜I遺跡では、黒ボク土層の厚さが南斜面で薄く、北斜面で厚い傾向が認められる。これは、日当たりのよい南斜面の凍結層が融解されやすかったことにより、侵食が促進したためと考えられる。融解の起こりやすい南斜面は、遺跡の拡がり（人間活動）にも影響するであろう。

#### 4-2. 降下テフラの攪乱と拡散

南部テフラや中振テフラは古屋敷から東の沿岸部へ、層厚と軽石の粒度を減じる傾向がある（図2）。

古屋敷で3層に区分できる南部テフラの下部の軽石層は、層厚が古屋敷65cm、軽米27cm、赤石峠25

cm、沿岸部約10cm（洋野5層下部の層厚）へと減じ、軽石の粒度は、古屋敷では最大粒度が小型大礫で極粗粒～粗粒中礫サイズが多く、基質は細礫～粗粒砂サイズの軽石と火山礫が埋める。軽米では最大粒径は粗粒中礫サイズで中粒中礫サイズが多くなり、基質は極粗粒～粗粒砂サイズである。赤石峠では細粒中礫サイズが主体となる。沿岸部では黒ボク土層に散在するものが多く、黒ボク土層中に塊状に残る本体は、鹿糠浜で細礫サイズが主体の細粒中礫～粗粒砂サイズである。南部テフラの上部の軽石層は、層厚が古屋敷12cm、軽米22cmであり、赤石峠から東では確認できない。古屋敷で極粗粒～中粒中礫サイズがあるものの細礫～粗粒砂サイズが多く、軽米では極粗粒～粗粒砂サイズが主体で中礫サイズが混じっている。

中振テフラは層厚が古屋敷52cm、軽米15cm、赤石峠18cm、鹿糠浜で最大14cmである。軽石の粒度は、古屋敷で中粒～細粒中礫サイズを含むものの粗粒～中粒砂サイズが主体である。軽米では粗粒～細粒砂サイズであり、赤石峠では砂サイズ以下の火山灰であり上・下限とも漸移して不明瞭である。沿岸部の鹿糠浜では下部（8cm）の粗粒～中粒砂サイズから上部（6cm）のシルトサイズ（細粒火山灰）へ漸移する。いずれの地点でも、弱い正級化成層が認められる。

南部テフラ・中振テフラとも、軽石粒子の上位黒ボク層への拡散と混在はどの地点でも認められ、古屋敷を除けば下位層にも混入している。上方への拡散と混在は、黒ボク土層の生成と緩慢な上方成長と並行して、上述の土壤耕耘をはじめとする生物擾乱と凍結融解作用によるものと考えられ、下方への混入は、主として生物擾乱によるものと考えられる。しかし、図3-G地点では鹿糠浜3層下部は分布しない。古屋敷と同様に、再堆積層を含む層厚60cmの中振テフラが一度期に堆積したことにより、生物擾乱がテフラの下方へ及ばなかったものと考えられる。

#### 4-3. 黒ボク土層の黒味の地域差と、その背景について

佐瀬ほか（1993）は、三戸町赤坂（図1・2の古屋敷露頭）と田子町川向における植物珪酸体分析と腐植の形態分析、炭素・窒素含量測定と比較から、黒ボク土層の生成開始は、森林から草原的環境へ植生が変化したことに対応し（註16）、その時期は赤坂では二の倉テフラ降下後に始まるのに対して、川向では南部テフラ降下後であり、地域差があることを明らかにした。

本調査地域における黒ボク土層について、腐植量の目安である黒味を比較すると、洋野6層上部とその相当層では、古屋敷では黒褐色で黒味が強いが、軽米や赤石峠の相当層は黒味が強い中にやや薄い部分が混在し、宿戸Ⅵa層と鹿糠浜6層上部は暗褐色～黒褐色で黒味がやや薄く、上のマッカ6層やサンニヤ6層は南部テフラ直下に明瞭な黒ボク土層が認められず、両6層上半で少し暗い褐色の腐植質火山灰土になる程度である。この層準は縄文時代早期の急激な湿潤温暖化により人間活動が活発化した時期（細野・佐野2015）の指標となるが、佐瀬ほか（1993）の指摘ように開始時期に地域差のあることを指摘できる。

洋野5～4層とその相当層では、宿戸Ⅴ～Ⅳ層と鹿糠浜5層～4層、軽米の南部テフラ上位で上方へ黒味が増し、ともにⅣ層・4層で2層に次いで黒味の強い黒色になる。これはサンニヤの県道20号線沿いでも同様であるが、サンニヤⅠ遺跡の5～4層は、5層が上方へ黒味を増し黒褐色になるが、4層では黒味が薄らぎ暗褐色になる。一般に、植被密度が低く生物の物質生産量が小さい場合や母材の堆積速度が速く腐植が希釈される場合にも黒味が薄らぎ褐色火山灰土層が生成する。しかし、サンニヤ5～4層で母材の増加を示す厚層化は認められないので、植被の少ない環境か、逆に森林に近い環境で形成された可能性がある。

洋野3層上部～2層とその相当層では、宿戸Ⅱ層と鹿糠浜2層上部の黒味が極強く、マンセル表色系

地質年代と水期の区分	層序										地層の変位・変形	遺跡・特記事項(土器型式など)	時代*****	
	十和田火山		火山周辺		北上山地北部		沿岸北部(洋野町～階上町)							基本層序
	年代****	テフラ層序	噴火エピソード	三戸町	軽米町	洋野町	階上町	宿戸	鹿糠浜I	サンニヤ				
後完新世	*AD915 **2.8ka ***6.2ka ****7.5ka ****8.2ka ***9.2ka ***10.2ka ***11ka ****11.7ka ****14.3ka *****15.5ka *****15.5ka	後カルデラ期テフラ層	表土	表土	I	1	1	洋野1層	①大館市片貝家ノ下遺跡:AD915年噴火直後のシラス泥流 十和田a降下テフラ	2.4ka 縄文晩期 3.2ka 縄文後期 4.4ka 縄文中期 5.5ka				
			A	十和田a	II	2上部	2	2層	②旧鷹巣町(現北秋田市)胡桃館遺跡:平安時代中～末期 ③二戸市堀野遺跡:AD810頃					
			B	十和田b					④新郷村咽煙遺跡(晩期の全土器型式)					
			C	中振テフラ	3中部	3層中部	3層下部	4層	4層		⑤五戸町中ノ沢西強遺跡(十腰内I式) ⑥大湯中野堂環状列石(大湯式)			
											⑦三内丸山遺跡:～中期末 ⑧泉山遺跡(円筒上層a式) ⑨十和田市明戸遺跡(円筒上層a式)			
			D'	D	IVa	4	4	5層上部	⑩十和田市明戸遺跡(円筒下層d式) ⑪三内丸山遺跡:前期中葉～ ⑫煙内遺跡(円筒下層a式)					
			E	南部テフラ	Va	5上部	5	5層下部	⑬二戸市中曾根遺跡(テフラ直下から大木1式相当土器・同2b式) ⑭六ヶ所村表館遺跡(表館式) ⑮三沢市早稲田貝塚(早稲田6種) ⑯中泊町深畑田遺跡(深畑田式) ⑰階上町白座遺跡(白座式,円筒式以前)					
			F	G	Vb	5下部	5	6層上部	⑱現おいらせ町(旧百石町)日ヶ久保貝塚:縄文早期末葉(貝層中に赤御室式が共存) ⑲三戸町館遺跡(子母口式)					
			H	K	Vc	6上部	6	6層下部	⑳二戸市長瀬B遺跡(テフラ下の住居址から白浜式相当) ㉑三戸町寺ノ沢遺跡(田戸下層式) ㉒二戸市米沢遺跡(寺の沢式) ㉓八戸市館平遺跡:住居内に堆積(テフラ下から寺の沢式) ㉔八戸市田向遺跡:住居内に堆積(寺の沢式) ㉕八戸市平ヶ沢(4)遺跡:住居内に堆積(寺の沢式)					
			H~K	二の倉テフラ	VIa	6下部	6	7a層	㉖二戸市鴨平遺跡(爪型土器) ㉗八戸市柳引遺跡(多縄文土器)					
L	八戸火砕流	VIb	7b層	7b層	7c層	㉘階上町編織遺跡(無文土器)								
HP6	HP6	VIc	7c層	7c層	7d層	㉙八戸火砕流								
HP5	HP5	HP6	7a層	7a層	7b層	㉚八戸降下テフラ								
HP4	HP4	HP5	7b層	7b層	7c層	㉛凍結擾乱								
HP3	HP3	HP6	7c層	7c層	7d層	㉜②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙								
HP2	HP2	HP4	7d層	7d層	8層	㉚②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙								
HP1	HP1	HP3	8層	8層	8層	㉚②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙								
高館火山灰層M~	高館火山灰層M~	HP1	8層	8層	8層	㉚②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙								

層序と縄文時代の年代は以下による。\*町田ほか(1981)、\*\*工藤・佐々木(2007)、\*\*\*工藤(2008)、\*\*\*\*工藤(2008)・八戸市埋蔵文化財センター-是川縄文館・東京大学大学院新領域創成科学研究科環境史研究室(2014)、\*\*\*\*\*Horiuchi et al.(2007)、\*\*\*\*\*小林(2008)。地層の変位の引用は以下による。\*\*\*\*\*岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1999)。遺跡の引用は以下による。①:秋田県埋蔵文化財センター(online)、②:秋田県教育委員会(1986)、③:草間(1965)、④:亀ヶ岡文化研究会(1979)、⑤:青森県教育委員会(1976)、⑥:文化財保護委員会(1953)・渡辺(1966)、⑦:岡田(2014)、⑧:青森県教育委員会(1976)、⑨:十和田県教育委員会(1984)、⑩:十和田県教育委員会(1984)、⑪:⑦に同じ、⑫:青森県教育委員会(1997)、⑬:二戸市教育委員会(1981)、⑭⑮⑯⑰:八戸市埋蔵文化財センター-是川縄文館・東京大学大学院新領域創成科学研究科環境史研究室(2014)、⑱:大池・松山(1974)、⑲:名久井(1972)、⑳:岩手県埋蔵文化財センター(1972)、㉑:⑱に同じ、㉒:岩手県埋蔵文化財センター(2002)、㉓④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙に同じ、㉔:青森県教育委員会(1983)、㉕:青森県教育委員会(1999)、㉖:栗村・春日(1983)、㉗:青森県教育委員会(1998)、㉘:山之内・佐藤(1967)、㉙:八戸市史編纂委員会編(2009)。

図4 十和田火山周辺～沿岸北部の層序対比と年代、遺跡の編年

では1.7/1で最も黒い区分に入る。しかし、サンニヤ2層は4層に比べれば黒味を増すが黒褐色～暗褐色である。サンニヤI遺跡では、顕著な草原的環境が推定される宿戸や鹿糠浜ほどは、草原的環境が発達しなかったのであろうか。腐植、花粉、植物珪酸体の分析により植生環境の比較検討が望まれる。また、腐植の希釈は降下堆積時の層厚が薄いテフラでも生物擾乱などによる拡散によっても起こりうるので、今後のより詳細な観察が求められる。

北東北を南北に伸びる上北平野から北上低地帯北部の山間部には多くの縄文遺跡が分布する(岩手県立博物館、2005)。この地域は古屋敷の南部テフラ直下を見るように洋野6層・5層相当の黒ボク土層の発達が発著である。しかし、西の山地部の自然林が成立している地域では、現在でも黒ボク土層の生成が見られないように、黒ボク土層の生成が大幅に遅れている地域もある(細野ほか1994)。沿岸部の諸遺跡でも、初期の黒ボク土層の生成はまだらであり、山間部ほど顕著とはいえない。土色・

土質から推定する人間活動について、上述の腐植の希釈も考慮しつつ、沿岸部への縄文人の侵入（人間活動の活発化）と山間部へのその違いは、今後の興味ある問題である。

#### 4-4. テフラと遺跡の編年

テフラ層序と遺跡層序、および遺跡の編年を総括して図4に示す。テフラ間の遺跡の新旧は暫定的であり、今後の精査でより確実な資料が増加することを期待したい。

#### 5. まとめ

本稿では、十和田火山近隣のテフラ層序と岩手県沿岸北部の遺跡層序を追跡比較して、沿岸北部の基本層序を洋野1～8層として記載した。また、黒ボク土層の堆積性と、擾乱と侵食・再堆積について、南部テフラと中振テフラの層厚と軽石粒度の減少傾向、および上位・下位層への拡散と混入について、それぞれ検討した。さらに、黒ボク土層の地域差から植生環境の違いを推測した。

沿岸北部には小規模地すべりやテフラ物質の高館火山灰層から八戸火山灰層への貫入現象などの変位・変形が見つかっている（表2）。隆起地域にある沿岸北部では、テフラ粒子の黒ボク土層への拡散は、火山灰土の液状化・流動化現象ともかかわって、古地震との関連が注目されるが、今回は検討できなかった。その他の未解決の問題も含めて、今後の課題とする。

本稿をまとめるにあたって、細野衛氏と河本純一氏には、現地の討論に参加していただき、有益な意見をいただいた。小野賢二氏には古屋敷露頭を観察する機会を与えていただいた。杉沢昭太郎・福島正和・八木勝枝の3氏からは、調査担当遺跡の観察に便宜を図っていただいた。千田政博氏からは洋野町内のテフラについて、高木晃氏からは久慈市大芦 I 遺跡のテフラについてそれぞれご教示いただいた。以上の方々に、厚くお礼申し上げます。

#### 註

- (1)本稿における各遺跡の層序区分は、今後の検討により、本報告で変更される場合があり得ることをお断りしておく。
- (2)「二の倉」の地名は、大池・中川（1979）では当時の国土地理院5万分の1地形図「田子」に記された「二ノ倉」であるが、2.5万分の1「戸来岳」ではダム名称として「二の倉」が使われている。本稿では、最近の用例が多い「二の倉」を用いる。
- (3)従来、噴火エピソード K～A のテフラは「完新世テフラ」（東北地方第四紀研究グループ、1969 など）と呼ばれてきたが、基底の二の倉テフラの較正年代が更新世末に入ることから、「完新世…」の呼称は適当ではない。後カルデラ期テフラ層と呼ぶのが望ましい。
- (4)表3に示すように、噴火エピソード B・C・D'・D の噴出年代を工藤・佐々木（2007）から引用した工藤（2008）は、1ka 若く、2.7ka・6.1ka・7.5ka・8.2ka としている。その理由は明記されていない。
- (5)中振テフラは給源が十和田湖中湖と推定される早川（1983）の「中振テフラ層」にあたるもので、模式地の青森県新郷村金ヶ沢では下位から「中振軽石」（層厚 91cm）、「金ヶ沢軽石」（層厚 25cm）、「字樽部火山灰」（層厚 9cm）が構成するという。分布範囲は大池（1972）では最大でも東方 65km であったが、菊池ほか（1981）は早池峰山など北上山地に分布する「安家火山灰」が中振テフラであり、南方へ広域に分布することを明らかにしたのをはじめとして、福島県南部の会津駒ヶ岳（蒔田ほか、2016）や、長野県青木湖（石村ほか、2017）などでも分布が確認されている。
- (6)噴火エピソード E（南部テフラ）の暦年代は、その他に、細野・佐瀬（2017）は大池・高橋（1970）の  $8600 \pm 250$  yr B.P. (GakK-2513) を較正して得た 9633 yrs cal B.P. から 9.6ka と推定している。
- (7)この噴火エピソード H～K（二ノ倉テフラ）の暦年代は、下限（古い）年代を、二の倉テフラの直下にあり、八戸火山灰層を不整合に覆う泥炭層から得た  $12286 \pm 40$  yr B.P. (PLD-24105) の較正年代 14.3ka とした辻（2014）に、上限（若い）年代を、工藤・佐々木（2007）が青木・新井（2000）の年代や噴火エピソード G の年代に基づき 11-15ka とした年代値を、堆積速度の再計算から 11.7ka とした工藤（2008）に基づいている。
- (8)松山・大池（1986）によれば、八戸降下テフラの沿岸部における HP1・2・3・5 の中心軸は馬淵川河口にある八戸港方向、HP4 は八戸港の北寄り、HP6 は八戸港の南の鮫町方向をそれぞれ示し、分布の南限は HP1 が久慈湾、HP2・3 が洋野町種市と角浜の間の平内付近、HP4・5・6 が八木港の南の小子内付近である。
- (9)噴火エピソード L の暦年代は、その他に、酸素同位体編年から求めた青木・新井（2000）は 14.9～15.3ka、工藤・佐々木（2007）

は青木・新井（2000）や他の較正歴年代から 15ka としている。

- (10)各層の攪乱が甚だしく、層準認定が難しところでは、不正確に層名をつけて引き起こす誤認と誤解を避けるため、たとえば「3～6層擾乱層」のように、集約して呼ぶことがある。
- (11)土色は鹿糠浜 I 遺跡の T3 グリッドでの色である。以下、同様である。
- (12)シルト分の増加は、腐植含量の減少ではなく、腐植の質（より黒味の乏しい腐植へ）の変化の可能性もある。
- (13)サンニヤ I 遺跡の層序区分は、本格調査前に行った予備調査における区分であり、県教育委員会による調査地中央北側での試掘トレンチ壁面での観察にもとづく。また、後述する上のマッカ遺跡の層序区分も視察時のものである。
- (14)上方細粒化する沿岸部での中振テフラと給源付近との対応は不明である。分厚く粗粒な再堆積層との関係も含めて、今後の課題である。
- (15)「相重なる 2 つの地層のうち、本来、上位にある地層は、下位にある地層より新しい」という地質学の根本法則のひとつ。
- (16)草原的植生とは草原という狭い枠に限定しないで疎林なども含め日光が十分に地表に届き土壌温度が上昇しうる開放的な環境として捉えられ（三浦ほか 2009）、人為的生態系では伐採が繰り返される二次林的環境や植栽（栽培）林も含まれる（佐瀬ほか、2008）。

#### 引用文献

- 青森県教育委員会（1976）五戸町中ノ沢西張遺跡・中街道長根遺跡。青森県埋蔵文化財調査報告書、29、154p.
- 青森県教育委員会（1976）泉山遺跡発掘調査報告書。青森県埋蔵文化財調査報告書、昭和 50 年度、260p.
- 青森県教育委員会（1983）鴨平（2）遺跡。青森県埋蔵文化財調査報告書、73、314p.
- 青森県教育委員会（1997）畑内遺跡Ⅳ。青森県埋蔵文化財調査報告書、211、191p.
- 青森県教育委員会（1997）水吉遺跡。青森県埋蔵文化財調査報告書、245、132p.
- 青森県教育委員会（1999）櫛引遺跡。青森県埋蔵文化財調査報告書、263、366p.
- 青森県教育委員会（2003）畑内遺跡Ⅸ。青森県埋蔵文化財調査報告書、345、18-19p.
- 秋田県教育委員会（1968）胡桃館埋没建物発掘調査概要。秋田県文化財調査報告、14、46p.
- 秋田県埋蔵文化財センター [http://www.pref.akita.jp/gakusyuu/maibun\\_hp/pdf/h27pdf/kkinssiryoo.pdf](http://www.pref.akita.jp/gakusyuu/maibun_hp/pdf/h27pdf/kkinssiryoo.pdf)（2017 年 12 月 31 日）
- 岩手県埋蔵文化財センター（1972）二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 二戸市 長瀬 B 遺跡。岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書、36、17p.
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）大芦 I 遺跡発掘調査報告書、306、332p.
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）米沢遺跡発掘調査報告書。376、17p
- 岩手県立博物館（2005）縄文北緯 40°。第 54 回企画展示図録、61p.
- 青木かおり・新井房夫（2000）三陸沖海底コア KH94-3LM-8 の後期更新世テフラ層序。第四紀研究、39、107-120.
- 石村大輔・山田圭太郎・宮内崇裕・早瀬亮介（2014）三陸海岸の完新統に挟在するテフラの特徴。地学雑誌、123、671-697.
- 石村大輔・吉永佑一・山田圭太郎・原口 強・遠田晋次（2017）長野県、青木湖の湖成堆積物中に新たに見出された十和田－中振テフラ。第四紀研究、56、265-270.
- 大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年。第四紀研究、11、228-235.
- 大池昭二（1973）十和田火山東麓の火山灰。東北の土壌と農業、日本土壌肥科学会、170-177.
- 大池昭二・高橋一（1970）南部浮石の 14C 年代。地球科学、26、232-233.
- 大池昭二・中川久夫（1979）三戸地域広域農業開発基本調査 地形並びに表層地質調査報告書。日本土壌協会、20p.
- 大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究、5、29-35.
- 大池昭二・中川久夫・松山力・七崎修・石田琢二（1971）十和田火山東麓の火山灰と段丘（演旨）。火山、第 2 集、15、142.
- 大池昭二・松山力（1974）青森県日ヶ久保貝塚の 14 C 年代。地球科学、28、64-65.
- 岡田康博（2014）三内丸山遺跡。日本の遺跡、48、同成社、170p.
- 加藤芳朗（1987）古環境解明のために土壌学は何を寄与しうるか。土壌学と考古学、博友社、7-31.
- 亀ヶ岡文化研究会（1979）新郷村咽畑遺跡の調査。亀ヶ岡文化研究会調査研究報告書、1、60p.
- 荻谷愛彦・青木かおり・高岡貞夫（2016）東北地方南部、会津駒ヶ岳と月山火山で発見された完新世中期の十和田 - 中振テフラ。第四紀研究、55、237-246.
- 菊池強一・桧垣大助・吉永秀一郎（1981）北上山地東部に分布する縄文前期火山灰について（演旨）。東北地理、33、57-58.
- 木村真人（1997）土壌の生物性。最新土壌学、朝倉書店、54-72.
- 草間俊一（1965）岩手県福岡町堀野遺跡。福岡町教委、1-61.
- 工藤崇（2008）十和田火山、噴火エピソード E 及び G 噴出物の放射性炭素年代。火山、53、193 - 199.
- 工藤崇（2010）十和田火山、御倉山溶岩ドームの形成時期と噴火推移。火山、55、89-107.
- 工藤崇・奥野充・中村俊夫（2003）北八甲田火山群における最近 6000 年間の噴火活動史。地質学雑誌、109、151-165.
- 工藤崇・小林淳（2013）十和田火山、先カルデラ期～カルデラ形成期テフラの放射性年代測定。地質調査報告書。64.
- 工藤崇・佐々木寿（2007）十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年。地学雑誌、116、653-663.

- 栗村知弘・春日信興（1983）青森県蝙蝠遺跡出土の無文土器. 考古風土記、8、75-90p.
- 黒川勝己（2005）テフラ学入門—野外観察から地球環境史の復元まで—. 地学双書、36. 地学団体研究会、205p.
- 久馬一剛ほか編（1993）土壌の事典、朝倉書店、566p.
- 小林謙一（2008）縄文時代の暦年代. 縄文時代の考古学、2、257-269.
- 佐瀬隆・細野衛・青木潔行・木村準（1993）指標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定と火山灰土壌生成に関する一考察—十和田湖火山テフラ分布域川向、赤坂両地区を例にして—. 地球科学、47、391 - 408.
- 佐瀬隆・細野衛・高地セリア好美（2008）三内丸山遺跡の土壌生成履歴—植生環境、人の活動および黒ボク土層の関係—. 植生史研究、16、37-47.
- 地学団体研究会・新版地学事典編集委員会編（1996）新版地学事典、平凡社、1443p.
- 地形学連合編（2017）地形の辞典、朝倉書店、1302p.
- 趙哲済・佐瀬隆・濱田宏（2016）沿岸北部における南部浮石の黒ボク土中の層準について. 平成28年度埋蔵文化財発掘調査技術講習会事例紹介資料、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、2p.
- 辻誠一郎（2014）十和田二の倉火山灰の放射性炭素年代とその意義. 八戸埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要、3、1-4.
- 東北地方第四紀研究グループ（1969）東北地方における第四紀海水準変化. 日本の第四系、地団研専報、15、37-83.
- 十和田市教育委員会（1984）明戸遺跡発掘調査報告書. 十和田市埋蔵文化財発掘調査報告、3、141p.
- 中川久夫（1963）青森県の第四系. 青森県地質説明書、第2部、青森県、65-92.
- 長橋良隆・片岡香子（2014）テフラ学（第1回）：用語法. 第四紀研究、53、103-109.
- 名久井文明（1972）東北北部における縄文式早期の新型式二例. 青森県三戸高校研究紀要、2、17-20.
- 二戸市教育委員会（1981）中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書（本文編）. 117-126
- 日本地質学会誌編（2001）国際層序ガイド—層序区分・用語法・手順へのガイド—. 日本地質学会、238p. 共立出版.
- 日本ベドロロジー学会編（1997）土壌調査ハンドブック改訂版. 博友社、169p.
- 八戸市史編纂委員会編（2009）新編八戸市史考古資料編. 八戸市史編纂委員会.
- 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館・東京大学大学院新領域創成科学研究科環境史研究室（2014）海と火山と縄文人. 平成26年度秋季企画展図録、49p.
- 早川由紀夫（1983a）火山豆石として降下堆積した十和田八戸火山灰. 火山、第2集、28、25-40.
- 早川由紀夫（1983b）十和田火山中振テフラ層の分布、粒度組成、年代. 火山、第2集、28、263-273.
- ビューテル J.（1985）気候地形学、平川一臣訳、古今書院、392p.
- フリッツ W・ムーア J（1999）層序学と堆積学の基礎. 原田憲一訳、愛知出版、386p.
- 文化財保護委員会（1953）大湯町環状列石. 埋蔵文化財発掘調査報告、2、1-237.
- 細野衛・佐瀬隆（2015）黒ボク土層の生成史：人為生態系の観点からの試論. 第四紀研究、54、323-339.
- 細野衛・佐瀬隆（2017）コラム9 植物珪酸体から分かる土層累積断面における植生履歴—十和田火山テフラ分布域事例として—. 日本の沖積層—未来と過去を結ぶ最新の地層—改訂版、(株)富山房インターナショナル、393 - 397.
- 細野衛・佐瀬隆・青木潔行・木村準（1994）指標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定—十和田火山テフラ分布域葛沼地区を例として—. 地球科学、48、477-486
- 細野衛・佐瀬隆・溝田智俊・青木潔行・木村準、1994、十和田火山テフラ分布域における最終氷期最寒冷期後半の土壌生成と植生履歴. 第四紀学会講演要旨集、no.24、172 - 173.
- 町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺、東京大学出版、336p.
- 町田洋・新井房夫・森脇広（1981）日本海を渡ってきたテフラ. 科学、51、562-569.
- 松井健（1988）土壌地理学序説. 築地書館、316p.
- 松山力・大池昭二（1986）十和田火山噴出物と火山活動. 十和田科学博物館、4、64p
- 丸山俊明・松山力（1989）三戸-八戸地域. 新第三系・第四系、日本の地質2東北地方、共立出版、140-148.
- 三浦英樹・佐瀬隆・細野衛・荻谷愛彦（2009）第四紀土壌と環境変動—特徴的土層の生成と形成史—. デジタルブック最新第四紀学. 日本第四紀学会、CD-ROM および概説集、30p.
- 山内清男・佐藤達夫（1967）下北の無土器文化—青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告. 下北—自然・文化・社会、九学会連合下北調査会、平凡社、98-109p.
- 渡辺弘之（1978）土壌動物の世界. 東海大学出版、170p.
- 渡辺直径（1966）縄文および弥生時代の14C年代. 第四紀研究、5、157-168.
- Hayakawa,Y.（1985）Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of the Earthquake Research Institute University of Tokyo、60、507-592.
- Horiuchi,K., Sonoda,S., Matsuzaki,H. and Ohyama,M.（2007）Radiocarbon analysis of tree ring from a 15.5ka-cal kyr BP pyroclastically buried borest: a pilot study. Radiocarbon、49、1123-1132.
- Inoue,Y., Hiradate,S., Sase,T., Hosono,M., Morita,S. and Matsuzaki,H.（2011）Using 14C dating of stable humin fractions to assess upbuilding pedogenesis of a buried Holocene humic soil horizon, Towada volcano, Japan. Geoderma、167-168、2011、85-90.

# 竪穴建物に伴う外延溝（2） —古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡域の在り方—

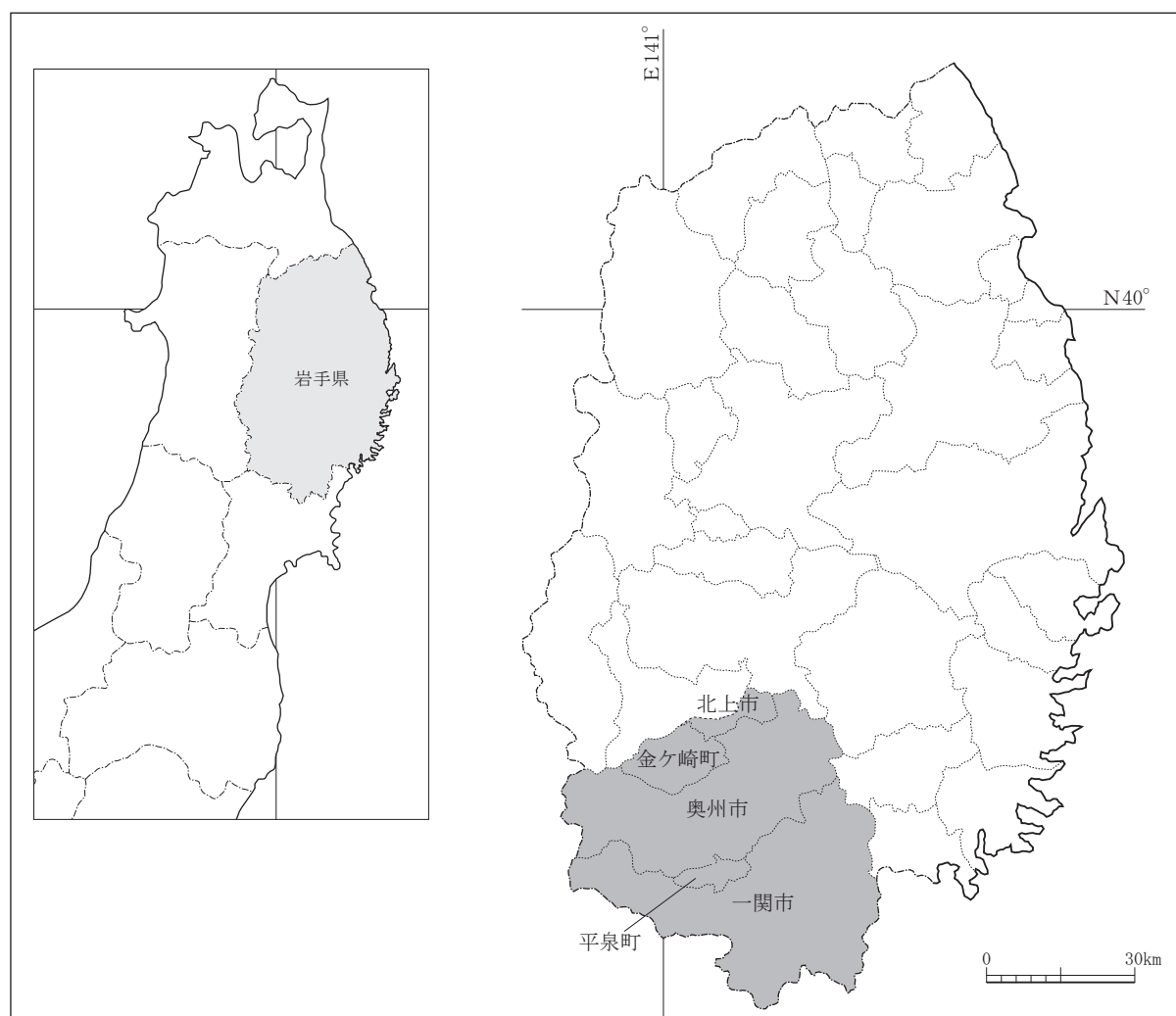
山 川 純 一

古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡域で調査された竪穴建物に伴う外延溝の集成を行い、属性（竪穴建物の時期・規模・構造、外延溝の構造など）ごとにまとめた。9世紀代の集落に伴う例が、全体の6割以上を占める。

## 1. はじめに

古代多賀城周辺域の竪穴建物に伴う外延溝を集成・検討した前稿（山川2007）では、確認されている遺跡は丘陵に立地するもの、外延溝が竪穴建物の一隅から建物外に延びるもの、8世紀（奈良時代）・9世紀（平安時代前期）のものが多くを明らかにした。また、自然水（雨水・湧水）だけでなく、日常生活排水あるいは（漆生産や鍛冶に関わる）工房からの産業排水も流下させていた可能性があることを述べた。

本稿では、古代陸奥国磐井・胆沢・江刺三郡における竪穴建物に伴う外延溝を集成し、若干の検討を加える。現在の行政区分で、岩手県一関市（いわゆる平成の大合併以前の花泉町・千厩町・東山町・



第1図 本稿の対象とした地域



大東町・室根村・川崎村および藤沢町を含む)、平泉町、奥州市前沢区(生母)が古代磐井郡域、奥州市衣川区・前沢区(生母を除く)・水沢区(羽田町を除く)・胆沢区、金ヶ崎町(永栄)が古代胆沢郡域、奥州市水沢区(羽田町)・江刺区、金ヶ崎町(永栄を除く)、北上市(相去町・大堤東・大堤西・大堤南・大堤北・稲瀬町・口内町)が古代江刺郡域にあたるものと考え、3市2町(ただし北上市は一部のみ)を対象とした(第1図)。

古代磐井郡に南接する古代栗原郡には、神護景雲元(767)年、律令政府による征夷の拠点である伊治(此治)城が築かれ、その北側にあたる今回取り上げた三郡は、宝亀五(774)年から弘仁二(811)年に亘って争われたいわゆる「三十八年戦争」の主要な舞台となった。その戦乱終結とほぼ時を同じくして、延暦21(802)年、胆沢郡に胆沢城が造営された。そのことを契機に建郡されたと考えられる地域である。



第2図 古代磐井郡・胆沢郡・江刺郡の領域と主要な遺跡(本稿で扱った遺跡○、数字は遺構平面図・一覧表に対応)

## 2. 竪穴建物に伴う外延溝の構造

今回集成したのは、14遺跡(第2図、第1表)18棟(第3~13図、第2・3表)である。

北東北古代集落遺跡研究会により刊行された『9~11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』によれば、今回の集成範囲から128遺跡981棟の竪穴建物が確認されて

いる。そのうち、外延溝を伴うものは（本集成の7・8世紀の4棟を除いた）14棟ということになり、僅か約1.8%を占めるにすぎない。

18棟のうち15棟（約83%）が外延溝が竪穴建物の一隅から建物外に延びるもの、3棟（約17%）が外延溝が竪穴建物の一辺の途中から建物外に延びるものである。また、外延溝に瓦や土器片を敷設・架構して暗渠状施設としているものはみとめられない。

遺跡名	所在地		立地	種別	時代	古代の郡域		
五輪堂遺跡	一関市	花泉町涌津字五輪堂		集落・祭祀	縄文・平安～近世	磐井郡		
泥田廃寺跡B		山目字泥田		集落・寺院	縄文・平安			
堀切遺跡		舞川字堀切		集落	縄文・平安			
志羅山遺跡	平泉町	平泉字志羅山		集落・都市・窯	平安～近世			
古城方八町遺跡	奥州市	前沢区古城字宿ノ前	段丘	集落	縄文・弥生・古代・近世	胆沢郡		
古城林遺跡		前沢区古城字林後		集落・狩猟場	縄文・古代～近世			
下植田遺跡		水沢区真城字下植田		集落	縄文・平安・近世			
林前Ⅱ遺跡		水沢区姉体町字林前		集落	縄文・平安～近世			
林前Ⅰ遺跡		水沢区真城字迎畑		集落	縄文・平安			
作屋敷遺跡		胆沢区南都田字作屋敷・独光		集落・祭祀	縄文・古代～近世			
矢中Ⅰ遺跡		水沢区佐倉河字矢中		集落	平安			
西大畑遺跡		水沢区佐倉河字西大畑		集落	縄文・古墳・古代			
伯濟寺遺跡		水沢区佐倉河字葉師堂		集落・官衙	平安			
北鷲ノ木遺跡		水沢区羽田町字北鷲ノ木		丘陵	集落		縄文・平安	江刺郡

第1表 古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡域における竪穴建物に伴う外延溝が確認された遺跡の概要

### 3. 外延溝を伴う竪穴建物の規模・火処・性格・年代

規模：長辺2m台のもの1棟、3m台のもの6棟、4m台のもの5棟、5m台のもの4棟、6m台のもの1棟、8m台のもの1棟である。3～5m台にピークがある。

火処：カマド13棟（中央に炉を併せ持つ2棟を含む）、炉1棟、ないもの2棟、不明2棟である。

性格：壁柱穴を伴うもの7棟、竪穴・掘立柱併用建物1棟（矢中Ⅰ遺跡SD05+SX04+SB07：第9図13）、鍛冶工房1棟（作屋敷遺跡102号住居状遺構+101号焼土遺構+123号溝：第8図11）がある。

年代：三郡内での初源は、7世紀前半の西大畑遺跡Bj03住居+Bi53溝（第10図14）である。その後、空白期を挟み、8世紀後半では、北鷲ノ木遺跡SI01・02・03竪穴建物（第12・13図16～18）の3例がある（註1）。この時期（胆沢城造営以前）に、北上川東岸の江刺郡域に土塁と大溝に囲まれた窯業生産・漆生産が行われたと考えられる集落がみとめられることは注目に値する（註2）。

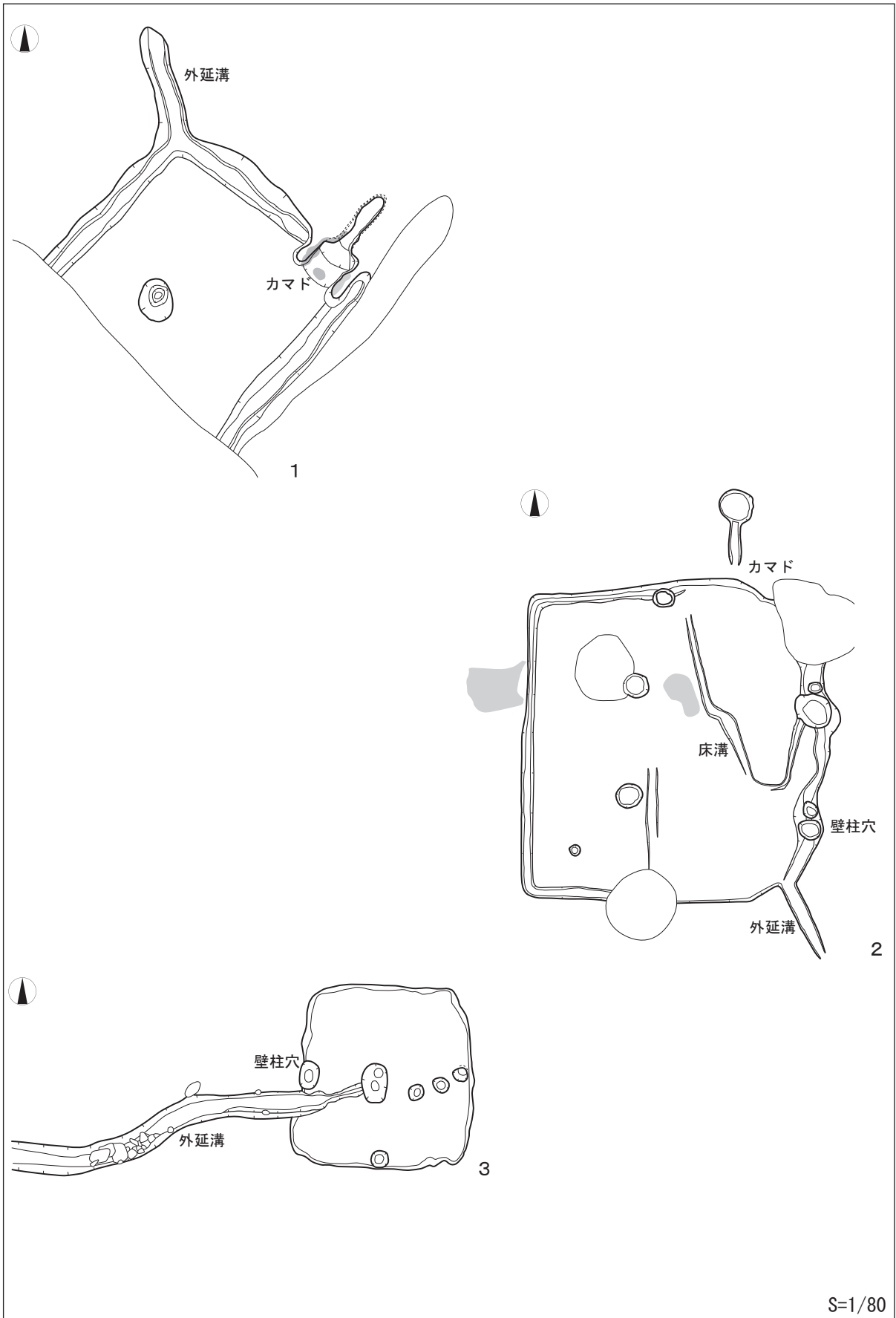
この4棟以外（14棟）の年代が、9世紀前半から10世紀前半に収まることは、胆沢城の造営にともなう集落の再編成（東国の工人集団の集約・移住も含む）に起因すると思われる。10世紀後半に胆沢城が機能を停止するとされることとも無関係ではなからう。

### 4. 今後の課題

引き続き周辺地域の資料の集成を進め、外延溝を伴う竪穴建物を集落遺跡の消長に位置付け、城柵・官衙遺跡の造営（新築、増・改築、改修、修理・修復）などに伴う画期と連動するのか、しないのか、また、陸奥国の竪穴建物に外延溝が導入された要因は何なのか、それはどこから導入されたのかを探っていきたい。

### 謝辞

本稿を草するにあたって、次の方々や関係機関から御指導・御協力を戴きました。記して感謝の意を

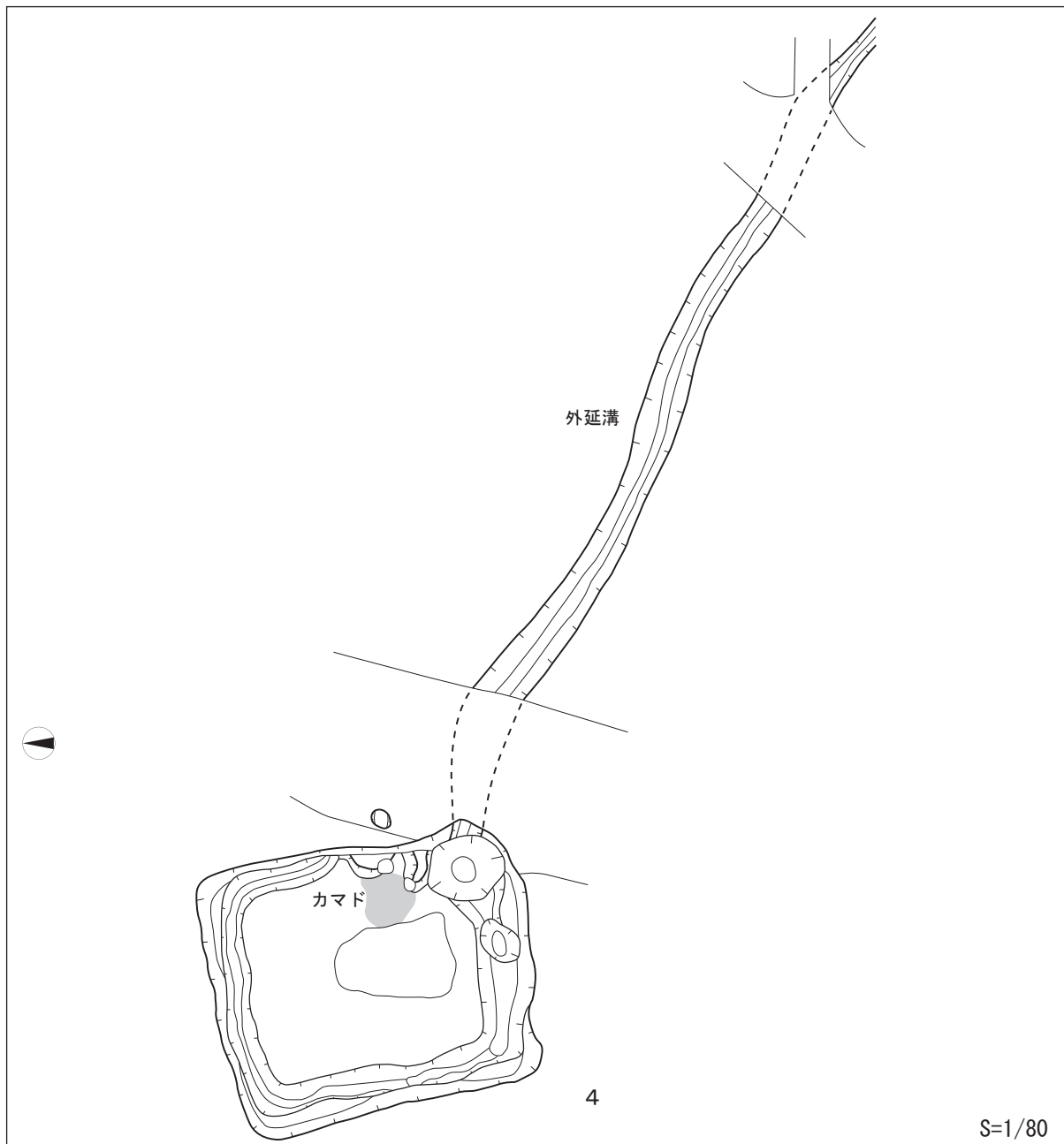


S=1/80

第3図 古代磐井郡における竪穴建物に伴う外延溝 (1)

表します（50音順・敬称略）。

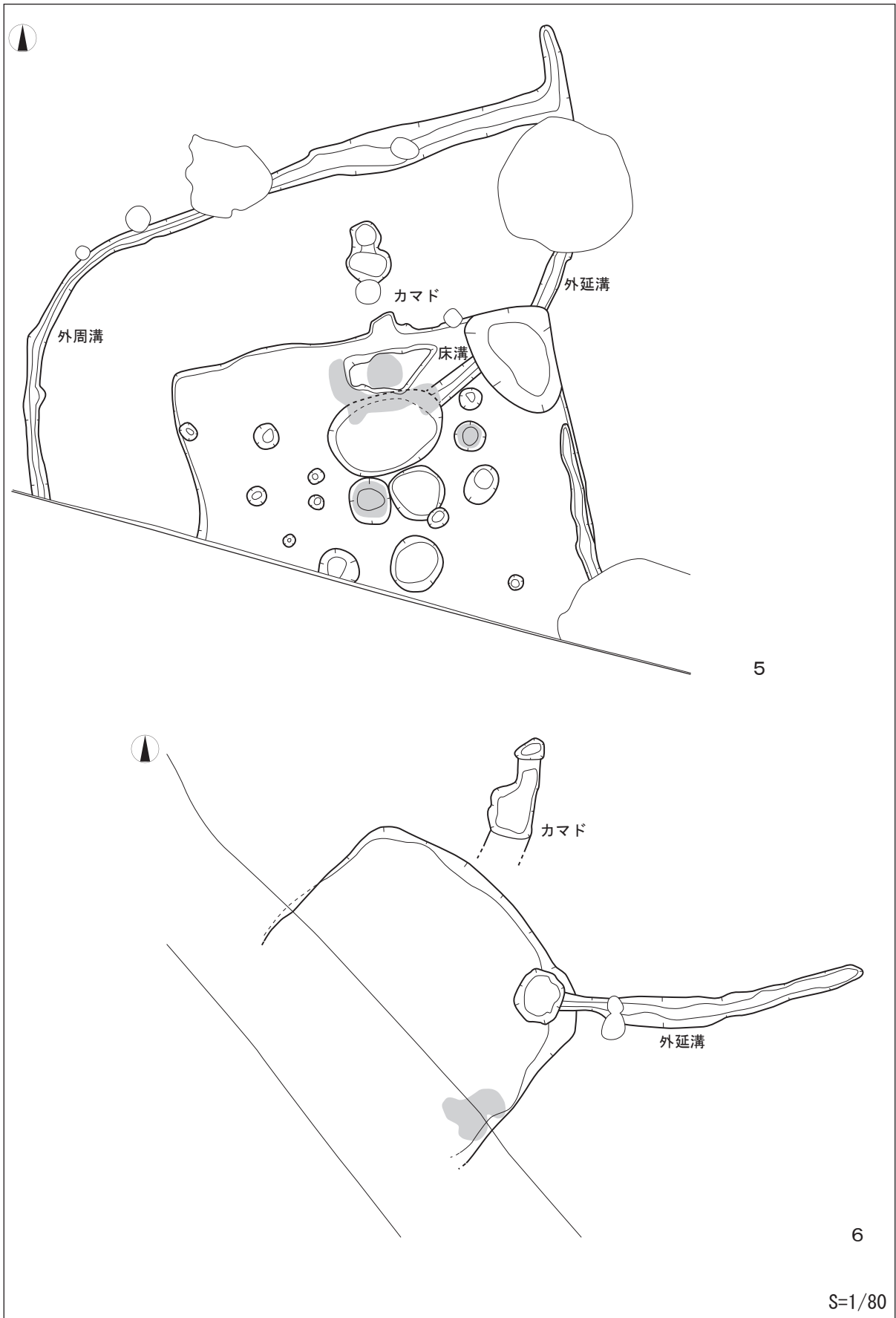
遠藤栄一 金子佐知子 小林弘卓 佐藤良和 島原弘征 高橋千晶 高橋 学 西澤正晴  
畠山篤雄 福島正和 深澤みどり 村木 敬 村田 淳 米田 寛 一関市教育委員会  
奥州市教育委員会 一般財団法人奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センター  
平泉町教育委員会



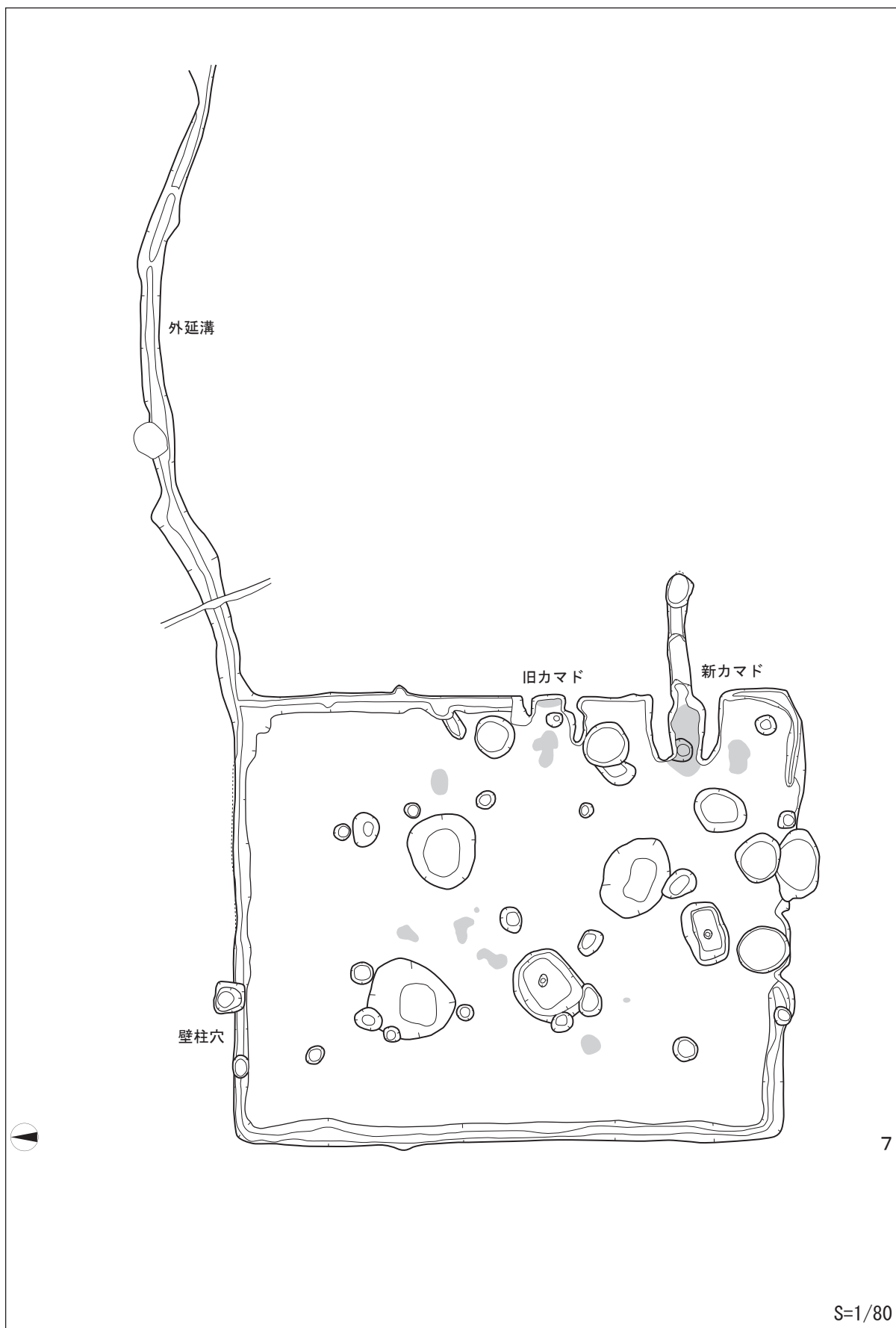
第4図 古代磐井郡における竪穴建物に伴う外延溝（2）

註

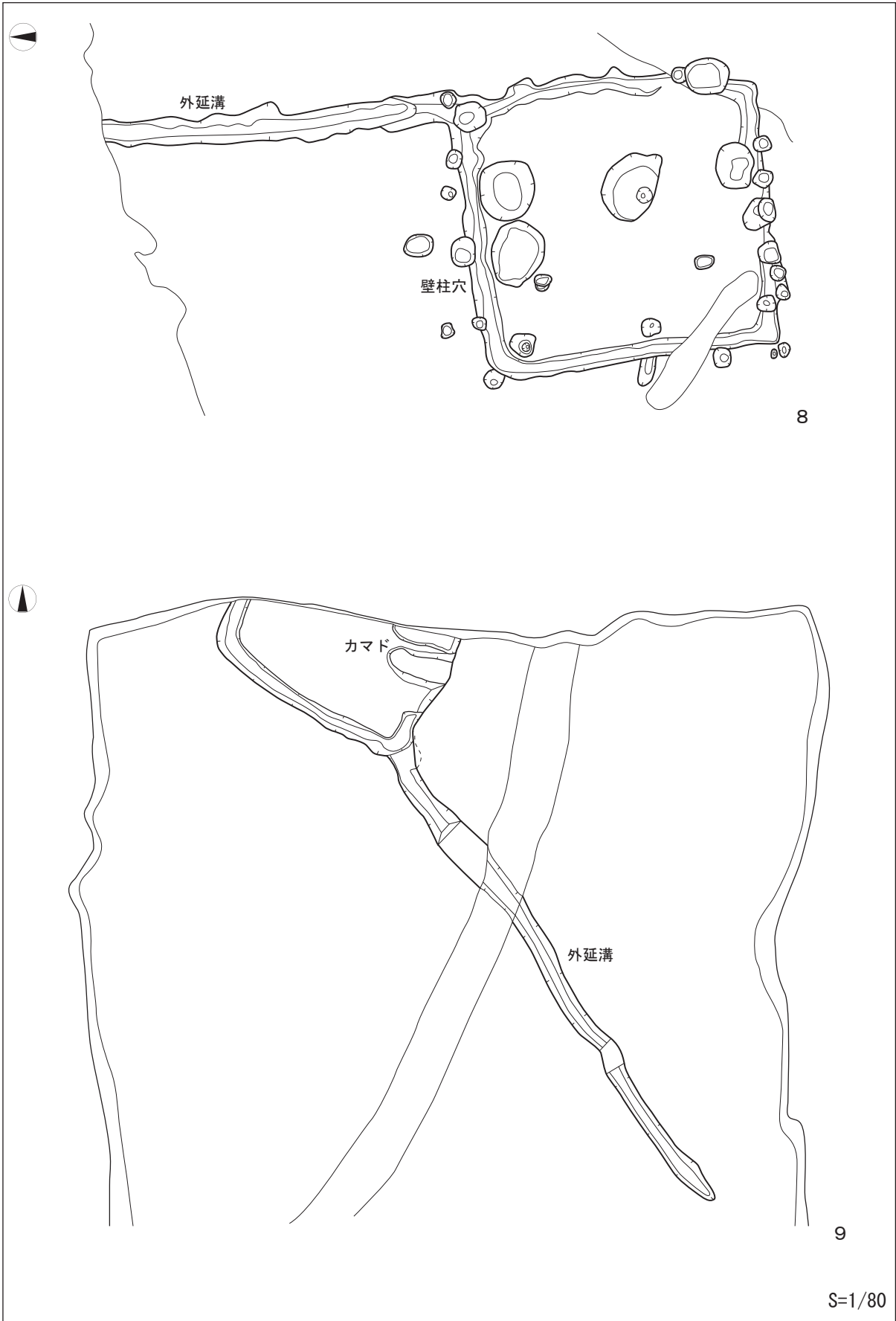
- (1)報文「まとめ」では竪穴建物出土遺物の年代観は詳細に言及されていない（奥州市埋文2016）。筆者は、体部下端および底面が手持ちヘラケズリされる須恵器坏および須恵器蓋のかえり・宝珠状のつまみの特徴から8世紀後半と判断した。
- (2)柵状施設を持つ竪穴建物（SI01）や出土した土師器甕の形態的特徴から関東、特に常陸との関係（奥州市埋文2016、高橋千



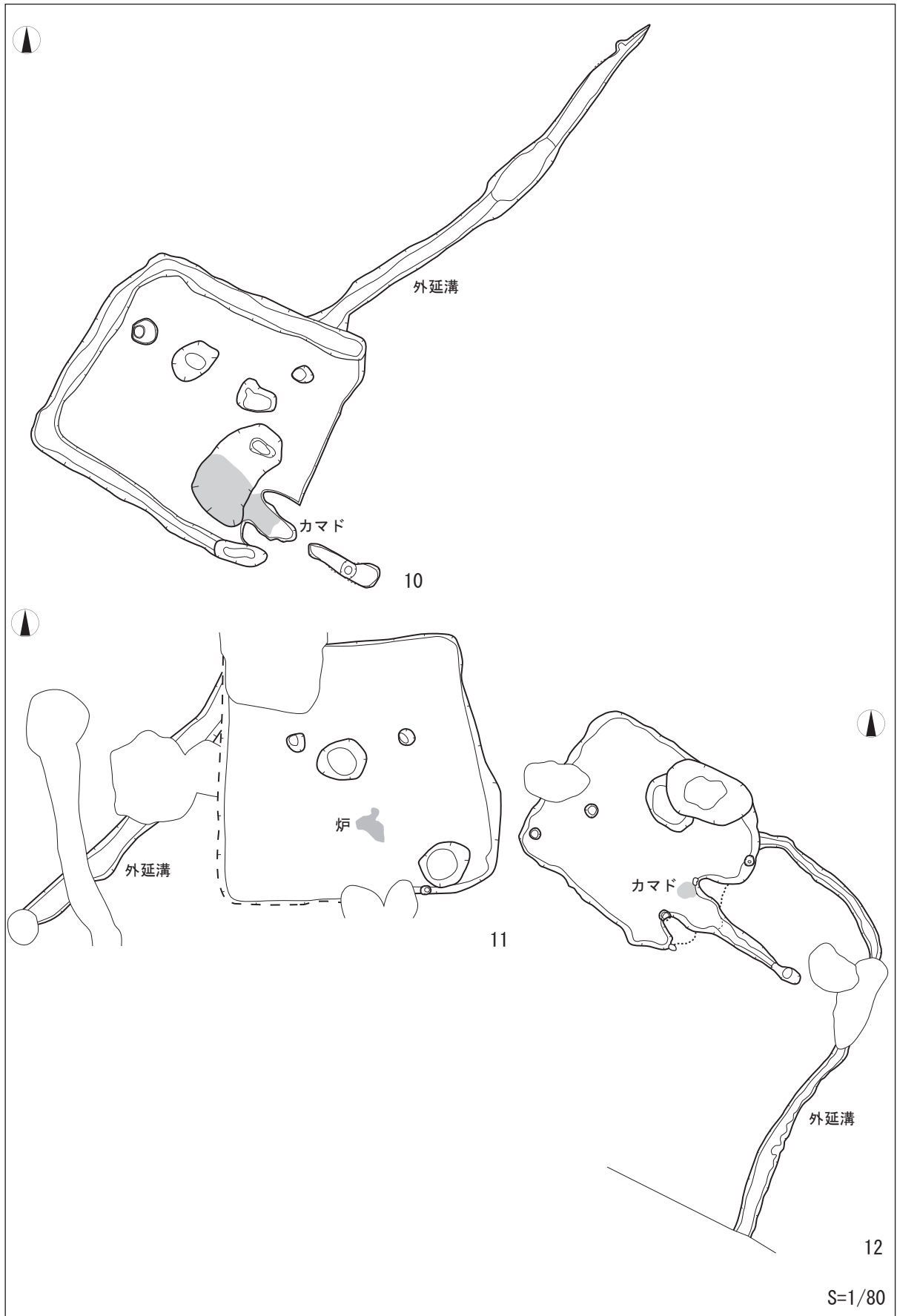
第5図 古代胆沢郡における竪穴建物に伴う外延溝（1）



第6図 古代胆沢郡における竪穴建物に伴う外延溝 (2)

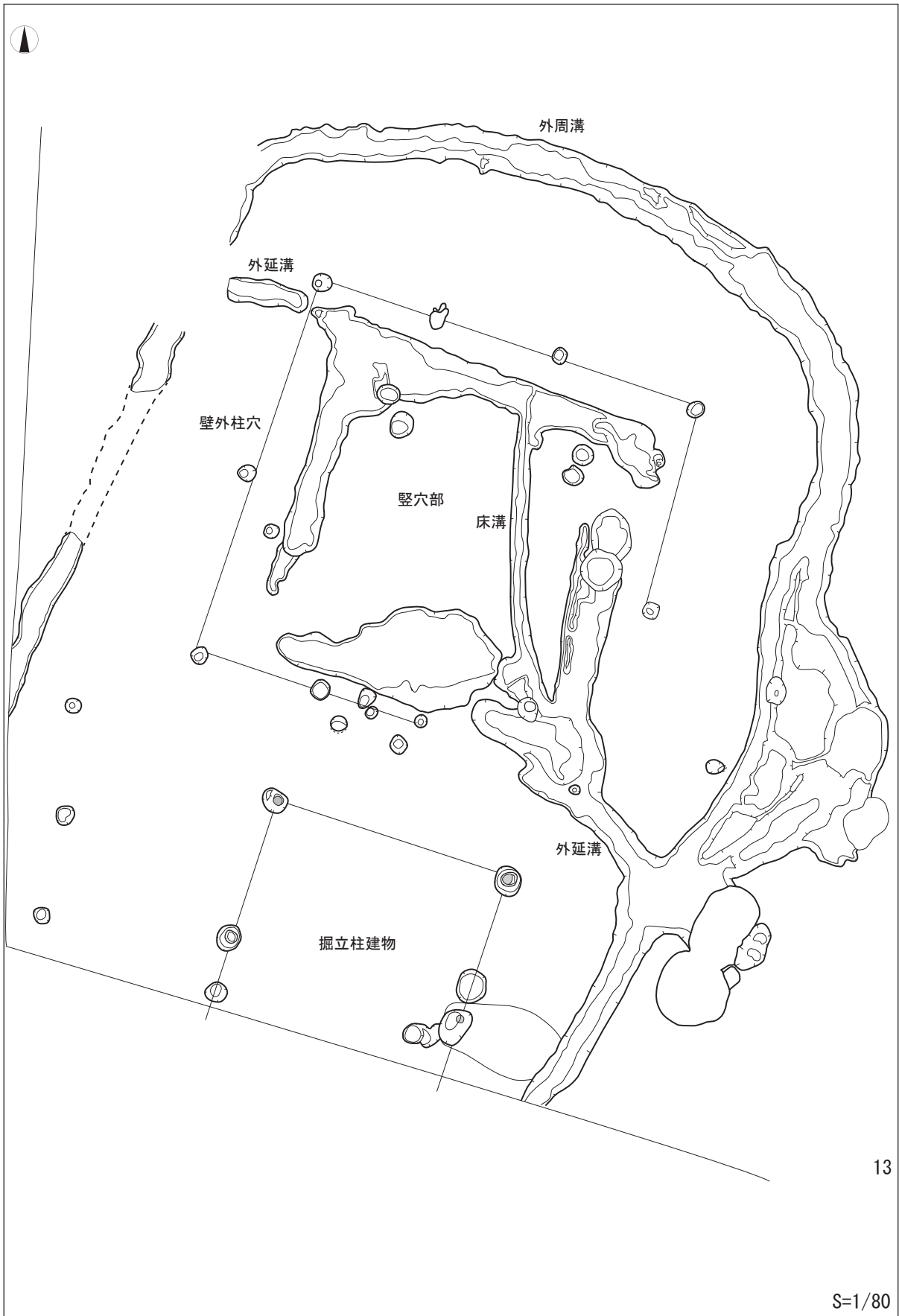


第7図 古代胆沢郡における竪穴建物に伴う外延溝 (3)



第8図 古代胆沢郡における竪穴建物に伴う外延溝（4）

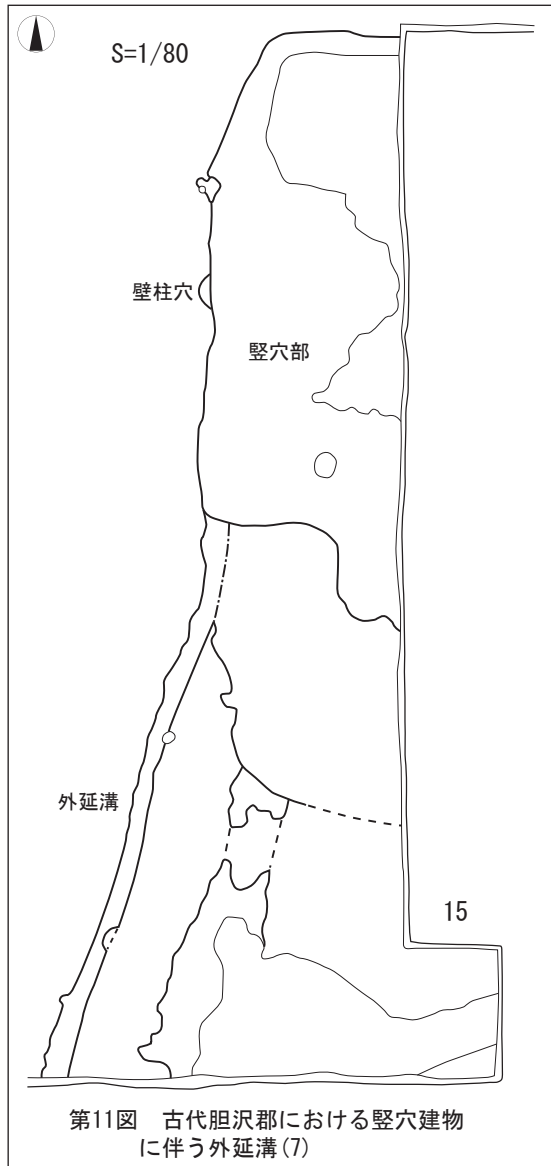




第9図 古代胆沢郡における縦穴建物に伴う外延溝 (5)



第10図 古代胆沢郡における竪穴建物に伴う外延溝 (6)



晶 2017) が指摘されている。外延溝を伴う竪穴建物の導入は、外部からの要因と考えられるが、管見では、少なくとも茨城県域の竪穴建物に伴う外延溝の類例を知らない。さらなる検討が必要である。

引用・参考文献

< 論文等 >

北東北古代集落遺跡研究会 2014 『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』

高橋千晶 2017 「岩手県における古代墓制の展開」『俘囚・夷俘』とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所研究成果公開シンポジウム資料集 帝京大学文化財研究所

高橋 学 2017 「米代川流域の埋没家屋から読み解く北東北の古代社会」『古代の竪穴建物跡』岩手考古学会第49回研究大会資料集 岩手考古学会

山川純一 2007 「竪穴建物に伴う外延溝—古代多賀城周辺域の在り方—」『土壁』第11号 考古学を楽しむ会

< 報告書 > ※埋蔵文化財(調査)センター:「埋文」教育委員会:「教委」と省略 報告書シリーズ名省略

一関市教委 2008 『泥田廃寺跡第1～3次発掘調査報告書』第6集  
岩手県教委 1981 「西大畑遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—XI—(水沢地区)』第60集

岩手県埋文 1999 『堀切遺跡発掘調査報告書』第364集

岩手県埋文 2001 『志羅山遺跡発掘調査報告書(第47・56・67・73・80次調査)』第352集

岩手県埋文 2004 『五輪堂遺跡発掘調査報告書』第447集

岩手県埋文 2011 『水尻遺跡・四反田Ⅰ遺跡・四反田Ⅱ遺跡・古城方八町遺跡発掘調査報告書』第587集

岩手県埋文 2013 『作屋敷遺跡発掘調査報告書』第616集

岩手県埋文 2014 『八反町・古城林遺跡発掘調査報告書』第627集

奥州市教委 2013 『伯濟寺遺跡発掘調査報告書 第11～13次調査及び総括編』第6集

奥州市埋文 2007 『矢中Ⅰ遺跡』第1集

奥州市埋文 2016 『北鵜ノ木遺跡 第1次～4次調査の報告』第13集

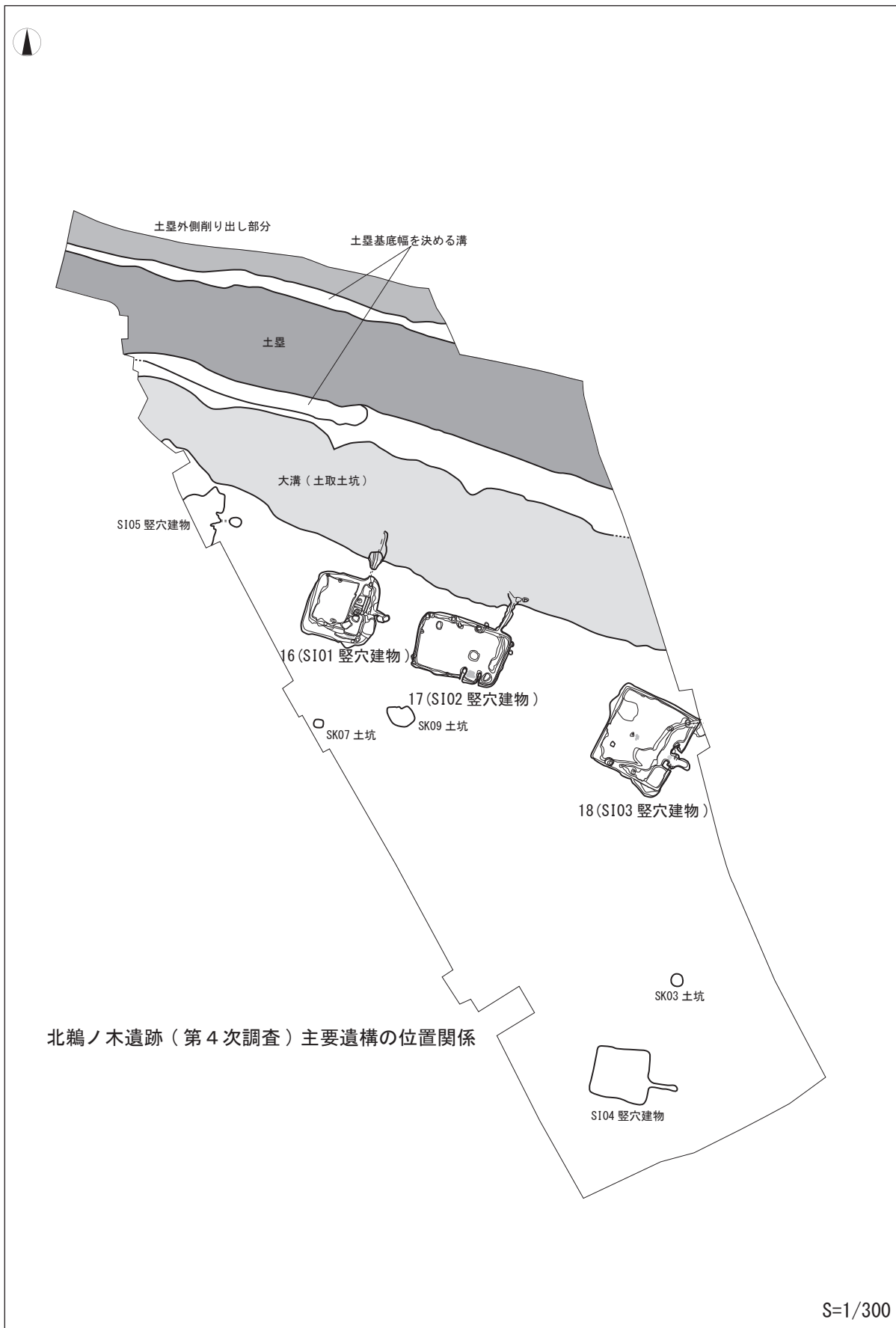
水沢市教委 1986 「林前遺跡」『水沢遺跡群範囲確認調査 昭和60年度発掘調査概報』第15集

水沢市教委 1996 「林前Ⅰ遺跡」『水沢遺跡群範囲確認調査 平成7年度発掘調査概報』第30集

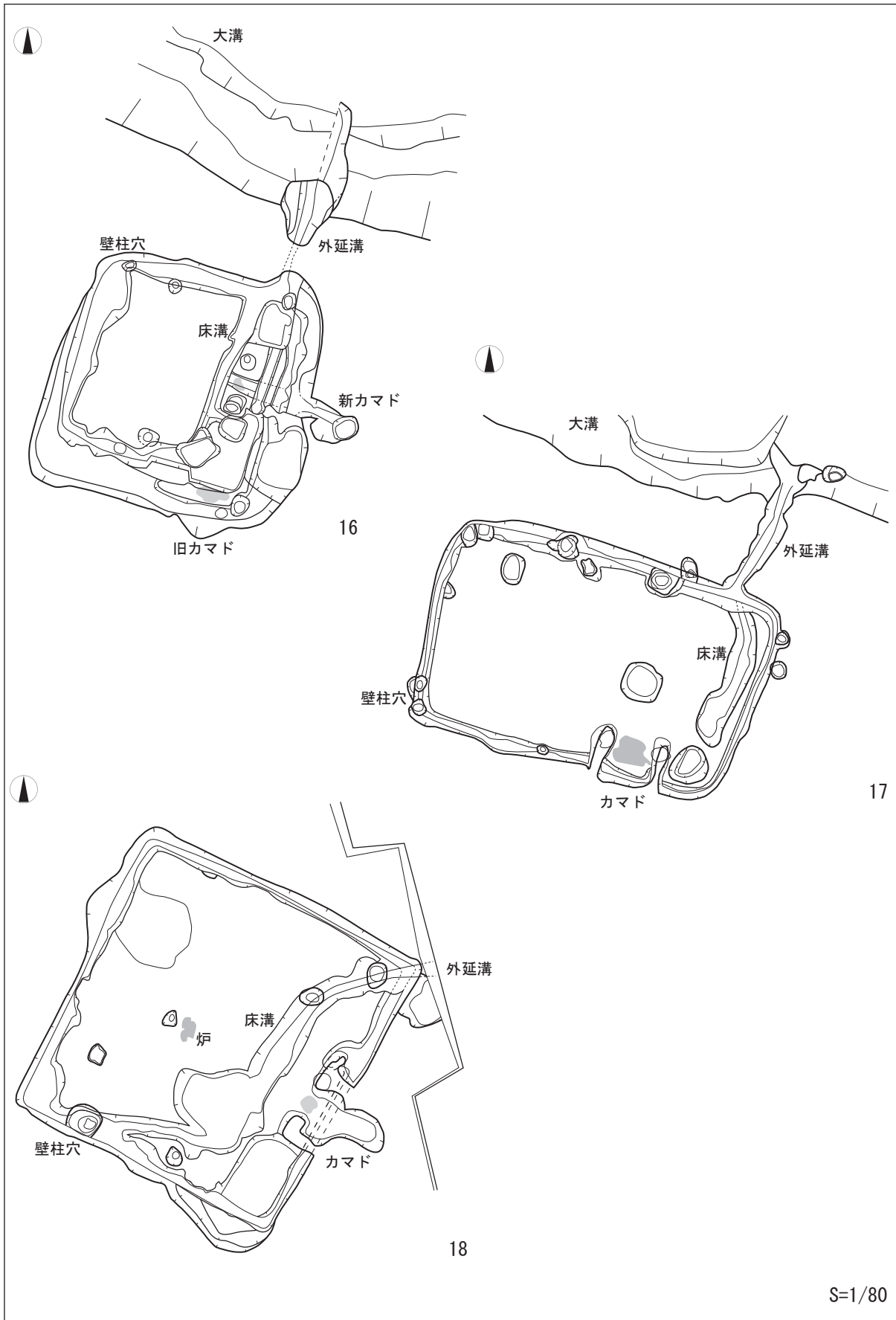
水沢市埋文 1999 『下植田遺跡Ⅰ』第14集

水沢市埋文 2003 『下植田遺跡Ⅱ』第17集

水沢市埋文 2006 『林前Ⅱ遺跡 寺ノ西遺跡』第19集



第12図 古代江刺郡における竪穴建物に伴う外延溝 (1) - 1



第13図 古代江刺郡における竪穴建物に伴う外延溝(1) - 2

掲載図番号	遺跡名	遺構名	長辺(約m)	短辺(約m)	平面形	高さ(約cm)	底面	柱穴・ピット	火処	周溝	外延溝	時期	備考	文献
1	五輪堂遺跡	SI01 惣穴住居	3.8	3.1 +	隅丸長方形もしくは隅丸方形	10～20	平垣で堅く締まる。全体に貼床あり。	1個(主柱穴)	カマド		北側から延びる。長さ約16m、幅40cm、周溝との最大高低差約45cm。	9世紀後半	外延溝埋土から土師器遺出。	岩手県理文 2004
2	肥田塚守跡B(第3次調査 A1地区)	SI06 惣穴住居	4.7	4.4	隅丸方形	—	ほぼ平垣だが全体的に前に傾斜。貼床なし。	8個(主柱穴2、壁柱穴5、その他1)	カマド	全周していたとみられる。幅25～40cm前後、深さ約10～15cm。南から北に向けて下り勾配(最大高低差約15cm)。カマド下は3個体分の土師器壺大破片を覆いかぶせ崩壊状にする。	南東隅から延びる。長さ約11m、幅20cm。	9世紀末～10世紀初頭	—	一関市教委 2008
3	堀切遺跡	1号住居 + 4号溝	2.5	2.4	隅丸方形	20	ほぼ平垣で堅く締まる。貼床なし。	5個(主柱穴<壁柱穴>3、その他2)	なし	なし。	4号溝：中央の浅い土坑から西に延びる。長さ約5.55m、幅10～45cm、深さ20～30cm程度。断面形開いたU字形状。	9世紀後半	北西部にまともって炭化物を確認。焼失家屋か。	岩手県理文 2000
4	志羅山遺跡(第80次調査)	1号住居 + 6号溝	3.9	3.4	隅丸長方形	40～50	ほぼ全面に厚さ約5～10cmの貼床あり。	なし	カマド	カマドの周周を除いてめぐる。幅30～55cm、深さ10～25cm。貼床と同様の土が充填されている部分が多い。	6号溝：南東隅から延びる。長さ9.7m、上幅約20～50cm、下幅約10～20cm、深さ約10～40cm、断面形U字状、底面の高低差約15cm。	9世紀後半～10世紀初頭	南東隅に土坑あり。	岩手県理文 2001
5	古城方人町遺跡	SI01 惣穴住居 + SI06溝 + SI03溝	5.5	4.8+	隅丸方形	10	カマド周辺にのみ貼床あり。	12個(主柱穴3、底面被熱赤変・焼土堆積1、その他8)	カマド	東壁中央付近から南側にめぐる。深さ5cm前後。土坑(SK25-26)間をつなぐ床溝あり。	SD06溝：北東隅の土坑(SK25)から延びる。長さ約1.7m、幅約25cm、深さ約5～10cm、断面形箱形～逆台形。	9世紀後半	SK23は焼土粒を含む、SK27は底面が部分的に黒熱赤変、焼土粒を含む	岩手県理文 2011
6	古城跡遺跡	SI01 惣穴住居 + SD29溝	4.3	3.0 +	隅丸方形	—	ほぼ平垣。全面に貼床(厚さ約5～10cm)あり。	なし	カマド	なし。	SD29溝：北東隅の土坑から延びる。長さ3.6m、幅40cm、深さ10cm前後。	9世紀後半～10世紀前半	細方の深さ5～10cm、底面やや凹凸あり。南東壁際90×80cmの範囲に焼土あり。	岩手県理文 2014
7	下瀬田遺跡	SI01 惣穴住居	8.5	7.0	隅丸長方形	10～20	—	23個(主柱穴3、その他20)	カマド	南壁中央付近を抜きめぐる。幅10～20cm、深さ5～10cm	北東隅から延びる。長さ5.2m以上、幅30～50cm、深さ50cm。	10世紀前半	土坑10基あり。	水沢市理文 1999、2003
8	林前丁遺跡	SI440 惣穴住居	4.5	4.3	隅丸方形	—	—	29個(壁柱穴多数)	なし	全周、幅20～30cm、深さ10～30cm。	北東隅から延びる。長さ5.2m以上、幅30～50cm、深さ50cm。	9世紀後半	土坑2基あり。	水沢市理文 2006
9	林前丁遺跡(昭和60年度)	SI01 惣穴住居 + SD10溝	3.2	2.0 +	隅丸方形	10～20	平垣で堅く締まる。なし	なし	カマド	南東隅から南辺・西辺にめぐる。深さ約20cm。	SD10溝：南東隅から延びる。長さ8.0m、上幅30cm前後、下幅20cm前後、深さ30cm前後、断面形U字状。底面の高低差はほとんどない。	9世紀前半	—	水沢市教委 1986
10	惣穴住居(平成7年度)	SI01 惣穴住居 + SD04溝	3.9	3.6	隅丸方形	5～10	堅く締まる。貼床なし。	3個	カマド	東辺を除きめぐる。	SD04溝：北東隅付近から延びる。長さ6.7m、上幅約30～35cm、下幅約15～20cm、深さ約15cm、断面形U字状。	9世紀前半	土坑3基あり。	水沢市教委 1996

第2表 古代磐井郡・胆沢郡・江刺郡における竪穴建物に伴う外延溝(1)

掲載図番号	遺跡名	遺構名	長さ(m)	短辺(m)	平面形	壁高(cm)	底面	柱穴・ピット	火処	周溝	外延溝	時期	備考	文献
11	作屋敷遺跡	102号住居状遺構 + 101号竪土遺構 + 123号溝	4.0	3.7	隅丸方形	10～15	全体に細かな凹凸、中央部が若干高い、中央から西側に段床あり。	4個(主柱穴2、あるいは4か)	伊(101号竪土遺構)	なし。	123号溝:北西隅から延びる。長さ45m、幅35～50cm、深さ10cm前後、断面形状血状。	9世紀後半～10世紀初頭	伊(101号竪土遺構):40×50cm程度の不整形、惣縁部の深さ10cm、断面形状血状、鉄滓出口、竪穴部の埋土からも羽根状土、土坑2基あり、鍛冶工房。	若手県理文2013
12	矢中1遺跡	S101 竪穴住居 + SD01 溝	3.0	2.6	隅丸方形	10	段床あり。	3個	カマド	なし。	北東隅から南東に延びた後、角度を南に変える。長さ70m以上、幅15～30cm、深さ10～20cm、断面形状血状。	9世紀中頃	土坑2基あり。	奥州市理文2007
13	〃	SD05 溝 + SX04 不明遺構 + SB07 独立柱遺構	5.0	4.8	隅丸方形	—	—	19個(竪外柱穴9個、その他10個)	不明	北東隅付近、南西隅付近のごく一部を除きめぐる。床溝は、北辺中央や東寄りから南東隅に延びる。外周溝は幅40～100cmで、南東に向かって深くなる。	9世紀前半	SD05溝(内側)とSX04不明遺構が、竪穴建物の周溝、床溝、外延溝、SD05溝(外側)が、外周溝となる。SB07:南北2間以上(32m以上)×東西1間(3.6m)および竪外柱穴と組み合わさり、竪穴・独立柱併用建物を構成する。	奥州市理文2007、高橋学2017	
14	西六畑遺跡	Bj03 住居 + B53 溝	5.0	4.6	隅丸方形	15	平坦、締りやや弱い。	9個(主柱穴4、その他5)	カマド	なし。床溝は、北東隅の外延溝からカマド前面を蛇行しながら南東隅の外延溝へと至る。途中、カマド樽道部・燃焼部を南下するものと合流する。	北東隅は、B56溝2:長さ7.3m、幅約25cm、深さ20cmで、北を緩やかな弧状にめぐるB56溝1(外周溝)と、南東隅は、長さ40m、幅45cm、深さ25cmで、東を蛇行しながら40mにわたって延びるBf15溝(一部外周溝を兼ねる)と連結する。	7世紀前半	北東隅付近に土坑1基あり。	若手県教委1981
15	伯濟寺遺跡 (13次調査)	SI155 竪穴建物 + SD157 溝	6.4	2.2+	隅丸長方形	未掘、未詳	未掘、未詳。	5個(西壁竪柱穴5)	未掘、未詳	西壁沿いに幅15～30cmの溝状の龍間があり、周溝とみられる。	南西隅から延びる。長さ6.5m以上、幅20～30cm。	10世紀前半	—	奥州市教委2013
16	北郷ノ水遺跡 (第4次調査)	S101 竪穴建物	3.9(古・新段階)、3.7(新段階)	—(古・新段階)	隅丸長方形	25～50	—	7個(竪柱穴7)	カマド	古段階:カマド前面の床溝のみか。新段階:カマド前面の床溝(東辺)とその他の辺が連結し全周。	カマド前面の床溝が北東隅に延び、さらに竪穴部外側の池山がトンネル状に掘削され、大溝と連結。長さ26m、幅40～80cm、深さ20～40cm。	8世紀後半	SD01大溝と重複する。埋土の観察からSD01大溝の埋没開始が若干早い。ほぼ同時期とみられる。新段階は、古段階の一部を明瞭施設として使用していた可能性あり。土坑2基あり。土師器非口クロコロのいゆる「赤彩球鬘」出土。	奥州市理文2016
17	〃	S102 竪穴建物	5.0	3.2	隅丸長方形	25～35	—	13個(竪柱穴12、その他1)	カマド	全周する。東辺のすぐ西に北側に向かつて床溝が掘られ、北東隅付近まで延び、周溝と連結。	北東隅付近から竪穴部外側に掘削され、大溝と連結。長さ22m、幅20～40cm、深さ10～20cm。	8世紀後半	S101 竪穴建物旧段階と同時期とみられる。土坑2基あり。	奥州市理文2016
18	〃	S103 竪穴建物	4.6	4.3	隅丸方形	25	ほぼ中央に地床状と考えられる。竪土の広がりがある。	9個(竪柱穴4、竪外柱穴2、その他3)	カマド	北東隅から竪穴部外側に掘削される。調査区外のため未詳だが、大溝と連結していたとみられる。	—	8世紀後半	K2(土坑)埋土上面に白色粘土が入る。S101 竪穴建物新段階と同時期とみられる。	奥州市理文2016

第3表 古代磐井郡・胆沢郡・江刺郡における竪穴建物に伴う外延溝(2)

書評 畠山 剛著『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ－』  
(彩流社 2003年)

阿部 勝 則

岩手の炭焼きに係る畠山 剛氏の一連の研究成果については、拙論で触れたことがある(註1)。本稿では、より理解を深めるため、書評という形で畠山氏の著書に向き合ってみたい。『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ－』(以下、『炭焼きの二十世紀』と記す。)は、2003年(畠山氏70歳)に刊行された。目次から本書の構成をみる。

はじめに

第一部 木炭の百年

第一章 明治三〇年代の炭焼き

第二章 商品としての木炭生産－改良製炭法以前

第三章 木炭生産地の拡大と県外移出－八戸炭－改良製炭法の導入

第四章 「木炭王国」への道程－全国初の移出木炭県営検査

第五章 窮乏製炭－重量一本化そして凶作

第六章 増産そして斜陽化－戦中・戦後の木炭

第二部 「岩手木炭の人々」

第一章 初代岩手県木炭教師－小野寺清七の生涯

第二章 炭焼き天狗－佐々木圭助伝

第三章 氏家玉喜の岩手木炭私史

第四章 『うた』で綴る木炭の昭和史

第三部 この貧しき人々

第一章 専業製炭者の住生活

第二章 県の『専業製炭の実態調査』

第四部 平成の炭焼き

おわりにかえて

あとがき

参考文献

まず、各章ごとに内容を概観する。

はじめにでは、本書の意図が提示される。炭焼きにとって、20世紀は、木炭が家庭用燃料として隆盛を極め、生産者である山村の人々が貧困からの脱出を願って炭焼きに取り組んだ世紀であり、木炭の無煙性、質の均一さ、火持ちの良さ、歩留まりの良さなどが究極まで探求され、製炭技術が確立された世紀であった。本書は、この木炭の近代化への歩みについて、全国第一位の生産量を誇る岩手県を中心に、製炭技術の向上や木炭の品質改善に取り組んだ技術者と生産者である炭焼き(木炭生産者)の生活に軸足を置いて、約百年に及ぶ岩手の炭焼きの記録をまとめたものである。

全体の構成は、おおむね時代順となっており、20世紀を前半・後半に分け、前半を第一部・第二



部、後半を第三部・第四部で扱っている。第一部では、約100年間の岩手木炭の推移を概観し、第二部で岩手木炭に係わった木炭教師や「炭焼き天狗」と呼ばれた人々を取り上げ、その生涯を追う。第三部で製炭者の貧しい生活の実態を記し、第四部で炭焼きの未来のあり方を展望する。

第一部では、改良製炭法とその導入前後の事情など、消費地優位の取引慣行の改善の歩み、戦中・戦後の木炭増産時代、斜陽化した時代など木炭王国岩手への道程とその盛衰を記す。岩手木炭のはじめの東京移出は、明治31（1898）年に江刺郡岩谷堂の小原善次郎によって行われた。そもそも木炭の用途は、家庭用と工業用があったとされ、家庭用木炭を生産した、いわゆる「昔がま」、宮古田地区の「田代がま」、工業用の「鉾山がま」・「たたら用大炭窯」を紹介している。

岩手県における改良製炭法の導入は、明治39（1906）年、広島県出身の榑崎圭三による製炭伝習であったという。岩手県では、ここに「榑崎がま」が登場する。「昔がま」と比べた「榑崎がま」の特徴として、6点が指摘される。①背が低い構造で、窯底に傾斜がつけられ、窯内部の温度差が縮小された。②同じ長さの炭材を立て、上げ木を使って、隙間を無くし、立て木上部の灰化を防いで、窯内部の熱循環を円滑にして作業効率を向上させた。③「昔がま」では、着火までに約一昼夜ほど口焚きしていたが、口焚きせずに「燐寸1本で直ちに火が移る」という特徴があった。④炭化末期に精錬を行い、室内温度を高めて、木炭から燃焼ガスを除き、硬さと光沢をつけることができた。⑤木炭の品質が改善され、炭質と収炭率が向上し、一かま当りの出炭量が三倍以上になった。⑥炭窯の各寸法は、奥行きを長さの基準とする割合で示され、条件に応じて、相似形の炭窯をつくることのできるようになった。

これらの特徴は、総じて、それまでの個人主観のカンやコツで行われていた岩手の製炭法に、商品としての木炭をつくるため、客観的に規格化した製炭法が導入されたことを意味する。「昔がま」から「榑崎がま」への変化は、個人主観の技の世界からの脱却を目指し、木炭の先進地帯から先端技術を導入して規格化することを狙ったものであり、これにより岩手木炭の生産量は大幅に増大する。一方、この「榑崎がま」は、広島県・山口県など中国地方におけるクヌギの効率的な利用を目的とした製炭法であったため、ナラの大木を使用していた岩手県では、現実に燐寸1本での着火は困難であったという側面もあった。このことが、その後の岩手県の炭焼きに際しての課題となる。

岩手木炭の歩みで忘れてならないのは、第五章で記された「3 凶作と木炭」での記載である。榑崎圭三が改良製炭法伝習を行った前年の明治38（1905）年は、平年作の66%も減ずる凶作で、木炭生産量の伸び率がもっとも大きかった大正2（1913）年も平年作を36%減ずる凶作であったという。貧しい山村生活は、凶作のたびに自家食糧の手当てがつかなくなり、食糧購入資金を木炭生産に求めざるを得なかったものであり、岩手県では、凶作のたびに製炭人口を拡大させてきた歴史がある。木炭王国は、冷涼な気候と山間の地形故に作物の安定的な供給に窮していたなかで生まれたものであった。畠山氏が木炭生産の隆盛のみに目を奪われず、その背景もしっかり見据えていたことがわかる。

第二部では、技術面から岩手木炭を牽引した二人の岩手出身の県職員と一人の木炭検査員について触れる。小野寺清七・佐々木圭助と氏家玉喜である。小野寺清七（1876～1933年）は、大正7（1918）年頃にそれまでの「榑崎がま」を改良した「小野寺がま」を考案する。この「小野寺がま」は、「榑崎がま」と比較して、細長く腰が低い構造で、窯口や煙道口の細かな調整をしなくても火のまわりが良い炭窯であった。半面、前へり（前部分が灰化する）が激しく、収炭率（木炭原木の重量に対する木炭の重量）が悪かったという。さらに、「榑崎がま」での着火作業は、補助煙道を操作するなどの調整が必要で、初心者には難しかったが、「小野寺がま」での着火作業は、調整が不要となり、容易になったことで、岩手県でつくられる炭窯として爆発的に普及する。昭和3（1928）年か

ら昭和6（1931）年頃の記録「県内各式炭窯の分布」（「小野寺家文書」）によると、県内炭窯数14,794枚のうち、13,380枚（91%）が黒炭窯で、その内訳は「檜崎がま」20枚に対して、「小野寺がま」は7,943枚（約60%）という状況であった。岩手県では、山口県のクヌギを木炭原木とする木炭の先進地帯でつくられていた「檜崎がま」の技術導入を経て、豊富なナラの原木を利用する岩手の風土により適するように改良された、岩手発祥の炭窯「小野寺がま」が誕生したのである。

佐々木圭助（1897～1987年）は、昭和23（1948）年に「岩手1号がま」を考案する。後の「岩手がま」の原型になった炭窯である。「岩手がま」の構造上の特徴は、窯底前部から外に開く穴を八の字状にして、窯の前に煙を出す穴を二本設けた全国初の炭窯であったという。そこには、着火までの時間をより短くするという、先の「小野寺がま」での課題を解決する狙いがあった。

また、木炭検査員であった氏家玉喜への調査結果から得た、岩手木炭に関わった人々、小野寺清七（「小野寺がま」：県奨励がま第1号の考案者）・石川亀吉（「石川式炭がま」の考案者）・浅沼久（「岩手がま」：県奨励がま第2号の考案者）の諸氏に功績についても記述する。

第三部では、昭和30年代前半（戦後）、木炭が家庭用燃料として主流になり、その後衰退していくまでの専業製炭者の生活について、貧しさの実態を記述する。当時の炭焼き専従者の生活は、炭焼きの作業と一体化したものであり、木炭を生産する施設としての炭窯と居住施設（掘立柱建物・風呂・トイレなど）は、同一の空間に設けられていたものであった。地下に痕跡を残す諸施設（不動産）の上部空間の具体的な様相が記されているのは興味深い。

第四部では、平成の炭焼きについて触れ、昭和の炭焼きと平成の炭焼きを比較し、貧困な生活が解消され、一定の収入が保証され、環境に優しい職業となったことを指摘する。ここでは、今後も炭焼きが継続されることへの期待と展望が、20世紀約100年間の炭焼きの盛衰を概観した畠山氏の想いとして伝えられる。

おわりにかえてでは、岩手山村からの報告として、木の実食、木炭生産、拡大造林、北上山系開発、ミズバショウなど多様な視点から、北上山地の住民の生活史として、二十世紀の変化を語る。そして、地球温暖化防止対策として、化石燃料を削減し、森林面積を増やしてバイオマス量を増やす、という提言に加えて、原子力発電については、「安全性に問題があるとして世界的には削減の方向にある」と警笛を鳴らす。平成23（2011）年に東日本大震災津波による東京電力福島第1原発事故が起こる8年も前のことである。畠山氏が地球環境の保全にも目を向けていたことがわかる。

次に畠山氏の研究手法を確認する。畠山氏の視点は、あくまで炭焼きという行為と炭焼きに関わった人々の生活の記録をまとめることにあった。その手法は、現役もしくはかつて炭焼きをしていた人々（木炭製炭者）、木炭検査員だった人々を訪ね歩いて木炭関係の資料を収集するという方法で進められた。言い換えると、過去のものではなく、現在進行形として行われていた作業を調査し、証言を記録した、民俗学的調査による成果といえる。畠山氏が調査を始めた昭和30年代は、木炭の生産量・移出量・価格など、いわば公的な数量的資料は後世に残されている一方で、製炭者の個々の労働・生活に関わる、いわば私的な資料の蓄積や調査研究は無かったという。

以上、見てきたように、すでに岩手木炭の実態をまとめた書として貴重な成果を提示している本書だが、ここでは、考古学的視点から読み解いてみたい。本書に学ぶことから、考古学的な炭窯跡の調査・報告が、これまでより先に進むことができるのではないかと、という率直な思いからである。この視点から、本書の内容を確認していく。

まず、岩手の炭窯について図解されている箇所を確認する。例示すると、改良製炭法以前の炭がまとして、岩泉町の土がま「昔がま」（pp18）・宮古田地区の土がま「田代がま」（pp21）・た

たら用「大炭がま」(pp24)・「鉦山がま」(pp27)。改良製炭法以後の炭窯として「檜崎がま」(pp37)・「小野寺がま」(pp106)・「岩手1号がま」(pp125)が図解される。これらは概ね年代順に並んでいるが、炭焼きに従事した人々とその生活を描くことを中心とした本書の構成から、それらは、個別に取り上げられており、その変化を読み解いていくことは容易ではない。炭窯の変遷という視点では、本書第二部・第三章の「12 改良がまの歴史」の項目で触れられている(pp149～151)。そこでは、岩手の炭窯の歴史を3期に分けて述べている。1期・2期は戦前、3期は戦後である。炭窯の形態の変化から見ると、1期は第1次木炭改良期で、明治39(1906)年の檜崎圭三による改良製炭法の伝習会が行われ、県内ではじめて本格的な改良窯「檜崎がま」が導入された時期である。2期は第2次木炭改良期で、奨励がまの第1段階と位置づけられ、大正7(1918)年の小野寺清七による「小野寺がま」をはじめ、浅沼久による「岩手がま」・水沢の「石川がま」・遠野の「今助がま」などが併存した時期である。3期は、奨励がまの第2段階で、戦後の佐々木圭助による「岩手1号がま」を経て、岩手県木炭協会による「岩手がま」が普及した時期である。この記述からも、炭窯の変遷は概ね辿れるわけだが、その内容は、炭焼きに関する記述に比べて、簡潔である。だが、簡潔に記すためには、その基礎となる理解が必要である。このことについて確認しておく。

本書第二部・第一章「初代岩手県木炭教師－小野寺清七の生涯」は、「初代岩手県製炭教師－小野寺清七の生涯」として『地域と大学研究紀要』No10(1988年)に掲載された論文(「以下、論文「初代岩手県製炭教師－小野寺清七の生涯」とする。)を取めたものである。両者を比較すると、内容が大幅に変更されている。雑誌掲載論文を論集としてまとめる際、全体構成などから内容を組み換え、加筆することは一般的に行われるが、ここで留意したいのは、論文「初代岩手県製炭教師－小野寺清七の生涯」に収められた「付表 岩手県の改良製炭法の系譜」が本書に収められなかったことである。「付表 岩手県の改良製炭法の系譜」には、炭窯の編年が表形式で簡潔にまとめられていた。同論文でも炭窯の変遷について詳述した箇所は見当たらないが、畠山氏は、すでに昭和63(1988)年に炭窯の系譜を整理されており、本書における「改良がまの歴史」の記述は、「付表 岩手県の改良製炭法の系譜」をもとに概要を記したものと判断される。同時に論文「初代岩手県製炭教師－小野寺清七の生涯」が、本書に編集されるなかで、何故「付表 岩手県の改良製炭法の系譜」が掲載されなかったのか、そのことが惜しまれる(註2)。

本書全体を見渡すと、炭焼きの行為を実態として余すことなく記しており、小野寺清七・佐々木圭助・氏家玉喜など「岩手木炭の人々」の生涯と、炭焼きに従事した「この貧しき人々」の生活の実態に畠山氏の視点は熱く注がれている。焼き子の居住施設について詳細に触れているのは、このことの表れでもある。一方で、取り上げた炭窯については詳述されているものの、その覆屋、出し小屋などの関連施設の構造・配置などについては詳細に触れていない。

このように、炭焼きに使用された炭窯跡などの諸施設(不動産)や諸道具(動産)については、体系的に整理された記述がないことの原因は何であったか(註3)。本書が炭焼きに従事して生きた人々の生活の記録を主にしたものであった故に過去のモノとなった炭窯跡は、掲載する情報としては優先順位が低かったのであろうか。視点が異なれば、必要とする情報は異なることもある。あるいは、炭窯の形態や変遷それ自体は、畠山氏にとって自明のことであり、副次的なことであったのかもしれない。ふりかえって、本書は、民俗学的視点で「炭焼き」をまとめたものである。それにもかかわらず、炭窯に関する記述は、考古学的資料を解釈するうえでも資する部分が多い。視点が異なる故の無い物ねだりの感があるが、モノを資料化する視点として、時間軸に基づいた記述があれば、読者の理解をより助けたのではないかと思う(註4)。そして、本書にまとめられた炭焼きの民俗学的成

果と炭窯跡の考古学的調査成果を合わせることで、より正確に岩手の炭焼きの実態を歴史的に位置づけることができると考える。今後の大切な課題である。

さて、畠山氏には、『炭焼きの二十世紀』に先行する二つの作品がある。畠山氏の一連の研究における本書の位置づけを考えるため、二つの作品の内容についても確認しておきたい。

1971年（畠山氏38歳）に『物語歴史文庫8 炭焼物語－この忘れられた人々の記録－』雄山閣出版株式会社（以下、『炭焼物語』と記す。）が刊行された。畠山氏のはじめての作品である。畠山氏は、「炭焼きとの出会い」のなかで、「木炭が私たちの前から完全に姿を消す日はそう遠くないと思いたったとき、だれかがこの消えゆく産業の記録を保存しておかなければならない、特に明治以降の炭焼きの生活の記録を、と考えたのです。」（pp17）と述べており、炭焼きを記録することへの畠山氏の思いが綴られる。それは、北上山系に所在する田野畑・有芸・箱石・釜津田などの各中学校で教鞭をとった畠山氏の経験のうえに芽生えた問題意識と密接に係わるもので、木炭生産地帯にある学校に勤務しながら痛感した、炭焼きの労働の厳しさ、生活の過酷さの実態を記録し、告発するという畠山氏にとっての重要な課題となった。そのため『炭焼物語』では、木炭関係者の生活、木炭生産地帯での子どもたち、專業製炭者たちの生活の記録に多くの紙幅が割かれている。後の作品となる『炭焼きの二十世紀』との関係を見ると、『炭焼物語』の「木炭関係者の生活史」は、『炭焼きの二十世紀』の「第二部 「岩手木炭の人々」」の基礎となった内容であり、『炭焼物語』の「木炭製炭地帯での記録Ⅰ・Ⅱ」「木炭生産地帯での聞き書」は、『炭焼きの二十世紀』の「第三部 この貧しき人々」の基礎となった内容である。『炭焼物語』が、畠山氏のその後の炭焼き研究の原点となっていることがわかる。巻末（pp254）には木炭関係年表が掲載されているが、炭窯に関する記載は、明治29（1906）年の檜崎圭三の改良製炭法の指導が行われた一件にとどまる。また、炭窯の形態については、「檜崎がま」・「石川がま」・「小野寺がま」の図（『炭窯百態』より）を掲載しているが、その系統について十分に整理が尽くされていない。

9年後の1980年（畠山氏47歳）に『岩手木炭－その近代のあゆみ－』日本経済評論社（以下、『岩手木炭』と記す。）が刊行された。畠山氏の二冊目の作品である。『岩手木炭』は、「序」に「岩手県の近代木炭発達の歩みを描こうとした」（pp10）と記されており、副題「－その近代のあゆみ－」のとおり、岩手木炭が盛衰した近代史の叙述に主眼があり、先の『炭焼物語』の「木炭その百年」を丁寧掘り下げて書かれたものであると推測する。『岩手木炭』がまとめられた目的は、『炭焼物語』の主題であった炭焼きの生活の実態の記録よりも、その社会的背景を把握することに向けられる。『炭焼物語』が木炭を供給する炭焼きの従事者の記録とすれば、『岩手木炭』は木炭を需要する側、木炭を必要とした社会の記録ともいえよう。木炭の増産の背景には、凶作民を救済するという政治的目的があり、木炭生産の斜陽化の背景には、日本の家庭用燃料としてのエネルギー源が、電気・石油・ガス等に移行したことに原因があったという。そのため、木炭関係者・製炭者の記録のみならず、殖産興業、木炭成金、県営検査、大凶作、増産、供出、飢えと民主化、などの多様な観点から、岩手木炭の盛衰について記述している。巻末の木炭関係年表（pp272～277）が、先の『炭焼物語』掲載の木炭関係年表と比べて、より詳細になり、県内事項と国内事項が併記されていることにも、畠山氏が木炭関係の情報を収集・蓄積し、岩手木炭の実態を把握するために広く国内情勢を見据えていた様子を読み取れる。また、「昔がま」と「檜崎がま」の関係が整理されていることも、継続された研究の成果である。そして、『岩手木炭』の内容は、『炭焼きの二十世紀』「第一部 「木炭の百年」」に引き継がれていく。

このように見てくると、『炭焼きの二十世紀』は、畠山氏の研究を総括したもので、各章の内容

は、先行する『炭焼物語』・『岩手木炭』の内容と密接に係わっていると推測する。『炭焼物語』・『岩手木炭』・『炭焼きの二十世紀』の三つの作品（以下、「炭焼き三部作」と記す。）の内容を概観すると、炭焼きに従事した人々の生活の実態を明らかにした『炭焼物語』、炭焼きに従事した人々の成果の結晶としての岩手木炭の盛衰の歩みを追いかけて、その社会的背景を追求した『岩手木炭』、生産地からの視点と消費地の側からの視点を併せて、より客観的に20世紀の炭焼きの記録をまとめた『炭焼きの二十世紀』と解釈することができるであろうか。畠山氏が精力的に調査を行った昭和30年～40年代は、家庭用燃料の変化、木材の輸入自由化などの社会の変化から、炭焼きが急速に減少した時期に当たる。炭焼きの隆盛の背景には、貧困と凶作への対策があり、炭焼きの衰退の背景には、日本のエネルギー源の急速な変化があった。そのことによって、炭焼きに従事した人々の生活は、翻弄される。このことが畠山氏をして炭焼きを調査し、記録として後世に残す必要に駆り立てたのであり、その結果、「炭焼き天狗」「焼き子」「木炭検査員」など様々な立場で炭焼きに係わった多くの人々の証言や記録が、基礎資料として提示され、炭焼きの実態が具体的に明らかにされた。畠山氏の仕事の魅力は、読者が畠山氏の使命感を共有し、調査の軌跡を追体験できることにある。そして、畠山氏の炭焼き三部作によって、岩手木炭は、岩手の近・現代史のなかに明確に位置づけられた（註5）。炭焼き三部作にまとめられた畠山氏の仕事は、今後、岩手の炭焼き・木炭研究を進めていくうえでの大切な出発点である。

さいごに、「調査は、多くの場合、日曜日でした。関係者を訪ねて話を120分テープに録音し、その再生はウィークデーの夜9時までには終え、次の日曜日に調査に出かけるというのが当時の一週間のリズムでした」（『炭焼きの二十世紀』「あとがき」pp279）との畠山氏の回想が印象的である。畠山氏の炭焼き三部作は、「地域の変貌を記録する」（『炭焼きの二十世紀』「あとがき」pp279）という目的でまとめられた。その基礎となった資料の収集にどれだけの時間を費やしたのか。収集した資料はどれほどであったのか。その全貌を知る術はないが、炭焼きに真摯に向き合った姿勢に敬意を表し、今後の炭焼き・炭窯跡の調査・研究に本書が広く活用されることを望みたい。

#### 註

- (1)炭焼きの歴史的背景と研究史については、阿部 2016 で触れた。そのなかで岩手の炭焼きは、畠山 剛氏の40年余に及ぶ息の長い精力的な研究により、実態が明らかにされ、その研究成果が岩手県の近・現代史に位置づけられたことを指摘した。
- (2)阿部 2016 の発表後、引き続き畠山氏の研究を確認する作業のなかで、初出誌に当たり、同論文に掲載された付表を確認した。そこには、『炭焼きの二十世紀』から容易に読み解けなかった炭窯の変遷が、表として簡潔に整理されており、その内容に惹かれた。同時に畠山氏の研究の内容は、『炭焼きの二十世紀』と『炭焼物語』・『岩手木炭』の三冊にすべて網羅されていると思い込んでいた自分に反省を迫るものであった。畠山氏には、上記三冊のほか雑誌に掲載された炭焼きに関する論考もあり、今後も引き続き確認作業を進めていきたい。なお、畠山氏が作成された「付表 岩手県の改良製炭法の系譜」をもとに、今後、考古学的調査事例による炭窯跡の年代観を位置づける炭窯の形態変遷の図・表を作成する必要性を感じる。
- (3)炭焼きに係る諸施設（不動産）・諸道具（動産）・炭窯の形態の変遷などについては、川井村文化財調査委員会 2004 などに整理された記述がある。考古学的調査において、施設の上屋構造や配置などを知ることのできる手掛かりは、重要である。
- (4)本書における時系列の情報整理がいま一つであると感じるのは、『炭焼物語』・『岩手木炭』で巻末に収められていた年表が、『炭焼きの二十世紀』には収められていないことにも表れていると思う。
- (5)岩手県の歴史の概説書における炭焼き・木炭の記述を確認する。『岩手県の歴史』1972 では、炭焼き・木炭に関する記述は確認できない。『図説 岩手県の歴史』1995 では「日本一の馬産と木炭」、『岩手県の歴史』1999 では「山の恵みと山訴訟」が立項され、炭焼き・木炭に触れられており、いずれも『岩手木炭』が参考文献として掲げられている。このことは、畠山氏の炭焼き・木炭の研究成果が、岩手県の近・現代史を語るうえで不可欠のものとして認識された結果であると考えられる。

#### 引用・参考文献

- 阿部勝則 2016 「岩手県における近・現代遺構の検討－炭窯跡について－」『紀要 35』（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 川井村文化財調査委員会 2004 『川井村北上山地民俗誌 上巻』
- 鈴木 宏 1995 「日本一の馬産と木炭」『図説 岩手県の歴史』河出書房新社
- 鈴木 宏 1999 「山の恵みと山訴訟」『岩手県の歴史』山川出版社
- 畠山 剛 1971 『物語歴史文庫 8 炭焼物語－この忘れられた人々の記録－』雄山閣出版株式会社
- 畠山 剛 1980 『岩手木炭－その近代のあゆみ－』日本経済評論社
- 畠山 剛 1988 「初代岩手県製炭教師－小野寺清七の生涯」『地域と大学研究紀要』No. 10
- 畠山 剛 2003 『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ－』彩流社
- 森 嘉兵衛 1972 『岩手県の歴史』山川出版社

執筆者（論稿掲載順）

金子 昭彦（かねこ あきひこ）	（公財）岩手県文化振興事業団博物館
米田 寛（よねた ひろし）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 花巻市博物館
高橋 静歩（たかはし しずほ）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター （（公財）大阪府文化財センターより派遣）
河本 純一（かわもと じゅんいち）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 八戸市博物館
中村 隼人（なかむら はやと）	三戸町教育委員会
滝尻 侑貴（たきじり ゆうき）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
野田 尚志（のだ たかし）	（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所
村木 敬（むらき たかし）	北方ファイトリス研究室
趙 哲済（ちょう ちよるぢえ）	（公財）岩手県文化振興事業団博物館
佐瀬 隆（させ たかし）	福島大学共生システム理工学類
濱田 宏（はまだ こう）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
長橋 良隆（ながはし よしたか）	
阿部 勝則（あべ かつのり）	

---

---

## 紀要 第37号

（平成29年度）

印刷 平成30年3月10日

発行 平成30年3月23日

発行 （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 有限会社ジロー印刷企画

〒020-0066 岩手県盛岡市上田2丁目17-4

電話 (019)651-6644

---

---



BULLETIN OF THE  
RESEARCH INSTITUTE  
FOR CULTURAL ARTIFACTS  
VOL. 37

---

CONTENTS

**Articles**

Artifacts in Relation to Clay Figurines in the Tohoku Region of the Final Jomon Period(3)  
KANeko, Akihiko

A Study of Red Colored Pottery from Kofun Period to Heian Period in Iwate Prefecture(2)  
-A Search Red Colored Pottery in North Tohoku Region-  
YONETA, Hiroshi TAKAHASHI, Shizuho KAWAMOTO, Junichi

Nanbuyashiki in Edo(1) -A Study of Morioka Clan Nanbu Family Edo Kamiyashiki-  
NAKAMURA, Hayato TAKIJIRI, Yuuki NODA, Takashi

**Notes**

A Study of Arakawadai Type Micro-Blade Technology  
MURAKI, Takashi

Pottery Paste of Jomon ware Excavated in Iwate Prefecture(4)  
KAWAMOTO, Junichi

Stratigraphic Study of Archaeological Sites in Northern Coast area of Iwate Prefecture  
CHO, Chuljae SASE, Takashi HAMADA, Kou NAGAHASHI, Yoshitaka

A Drain Connected Dwelling Pits(2)-On the Iwai, Isawa, Esashi County of Ancient Mutsu Province-  
YAMAKAWA, Junichi

**Review**

HATAKEYAMA, Tsuyoshi, Twenty Centuries of Charcoal Making, A Letter from History to Future  
(sairyuusha, 2003)  
ABE, Katsunori

---